

博士論文

石川達三研究

——新資料の発見による再構築——

鹿児島国際大学短期大学部

青木信雄

二〇一四年三月

目次

序章	本論文の目的および方法……………	4
第一章	石川達三の生長環境と中学校時代の文章…………… ——『旅行記 屋島懐古』『短歌』小論——	6
	第一節 二歳にして抱いた「疑問」	
	第二節 父祐助の影響	
	第三節 実母うんの影響	
	第四節 継母せいの影響	
	第五節 高梁の環境と賀川豊彦との出会い	
	第六節 『旅行記 屋島懐古』の文体	
	第七節 『短歌』の言説	
第二章	杉山栄との出会いによる〈文人〉石川達三の始動…………… ——『淋しかったイエスの死』『彼の出京』——	20
	第一節 杉山栄との出会い	
	第二節 「山陽新報」(「合同新聞」)文学年表 ——大正九年〜昭和二〇年——	
	第三節 杉山栄と『淋しかったイエスの死』	
	第四節 杉山栄と『彼の出京』	
第三章	早稲田への入学と〈社会派〉石川達三の形成…………… ——『放たれたる犬』——	48
第四章	早稲田退学を契機とした石川達三の変化…………… ——『幸福』『小品 春日』『新たなる風景』——	52
	第一節 「大阪朝日新聞」懸賞小説当選作『幸福』の意味	
	第二節 早稲田退学と『小品 春日』	
	第三節 早稲田退学と『新たなる風景』	

第五章	ゾラとの邂逅による石川達三の変化——『昏瞑』——……………63
第六章	石川達三にとつてのブラジル渡航の意味……………67 ——『若き都サン・パウロの戯歌』——
第七章	石川達三の転機としての「新早稲田文学」への参加……………72 ——『其の白き道を』『射撃する女』 「文芸の破壊性に就いて」——
第八章	石川達三における〈解放〉のさらなる内面化……………95 ——『非情都市』『戦争と舞踏』『襟を開く女性』『聖愛』 『石婦』『禁断』『秋の日の男達』—— 批判的リアリズム論
第九章	同人「星座」への参加と第一回芥川賞受賞作品の誕生……………126 ——『蒼氓』——
第一〇章	初期石川達三（作家史）の再構築……………169 ——その振れ幅をめぐって——
	第一節 戦前版と戦後版の相違点
	第二節 依拠テキストに影響される『蒼氓』観
	第三節 依拠テキストの相違による主題のぶれ

結語……………180

資料編……………182

資料1 『旅行記 屋島懷古』(『ミカド』大四七号、大正二年七月一五日、関西中学校丙申会)

資料2 『短歌』(『ミカド』大四七号、大正二年七月一五日、関西中学校丙申会)

資料3 「有終」(第一五号)

資料4 「有終」(第一六号)

資料5 「有終」(第一七号)

資料6 「有終」(第一九号)

資料7 「有終」(第二〇号)

資料8 『淋しかつたイエスの死』(『山陽新報』昭和二年一月二四日、三一日)

資料9 『彼の出京』

(『山陽新報』昭和二年三月一日、一二日、一三日、一六日、一七日、一八日、二〇日、二四日、二五日の夕刊に都合九回連載)

資料10 『放たれたる犬』(『山陽新報』昭和三年二月二七日)

資料11 『小品 春日』(『山陽新報』昭和三年四月三〇日)

資料12 『昏瞑』

(『山陽新報』昭和四年四月一〇日、一二日、一六日、一七日、一八日、二三日、二五日、二六日、二八日、五月一日、二日、七日、八日、九日の夕刊に都合一六回連載)

序 章 本論文の目的および方法

本論文は、これまであまり研究されていなかった石川達三の初期の歩みを明らかにすることを目的としている。とくに第一回芥川賞受賞作である『蒼氓』（昭和一〇年、石川三一歳）に至る道筋を解明する。

全体の構成としては、時系列に沿って石川の変化・変容を追ってゆくように配置してある。第一章で、石川の父祐助、実母うん、継母せい、杉山栄、賀川豊彦などが石川に与えた影響から説き起こし、横手、高梁、岡山、東京などの生長環境にも目配りする。第二章で、杉山栄との出会いによる石川の変化を窺う。第三章で、早稲田大学への入学による石川の成長をみる。第四章で、早稲田を退学して国民時論社に入社したことによる石川の自立を考える。第五章で、ゾラとの邂逅による石川の変貌を分析する。第六章で、ブラジル渡航による石川の内面的深化を追究する。第七章で、「新早稲田文学」への参加による石川の変貌を考察する。第八章で、戦時下における言論統制が石川に与えた影響を考える。第九章で、同人雑誌「星座」への参加による石川のさらなる変化と『蒼氓』の誕生を関連づけて考える。第一〇章は総括の章で、初期石川達三をあらためて概観し、プロレタリア文学など当時の文壇状況などにも触れながら、石川の振れ幅がどのような要因によるものなのかを総合的に考察する。

研究の方法としては、第一に、これまで知られていなかった新資料の発見があったので、それを軸にしつつ初期石川像を再構築する。副題にあるように、本論文の最大の特徴は、新資料の発見にある。具体的には、「ミカド」から二作品、「山陽新報」から四作品、「新早稲田文学」から一作品である。これ以外に、先行研究（久保田正文）の誤りを修正した論考が五本ある。これらを素材として、初期石川像を再構築する。

第二に、先行研究で目配りのなかったヴァリアント（異本）との比較を重視する。

第三に、「革命」と「社会改良」の相違、石川への「社会派」評の実際（さしたる根拠のないものであること）、「弾圧」の段階的変化などを解きほぐし、柔軟で丁寧な分析に基づいた初期石川像の再構築を目指す。

これに加えて、当時の社会的背景について、この序章で述べておく。

大正一三年（一九二四）、雑誌「文芸戦線」が創刊され、プロレタリア文学の中心的な雑誌となった。その同人の中心的存在であった青野季吉の「『調べた』芸術」論から、石川自身が影響を受けたことを吐露している。「文芸戦線」のもとに結集したかにみえた左翼的な動きは、わずか三年で崩壊した。革命も辞さないとする共産主義系と穏健派とでもいふべき社会民主主義系との対立がプロレタリア文学の内部にも影響を及ぼし、昭和二年（一九二七）には葉山嘉樹などの「労農芸術家連盟」、中野重治などの「日本プロレタリア芸術連盟」、蔵原惟人などの「前衛芸術家連盟」の三団体に分裂した。そのうち後二者は、

昭和三年（一九二八）に合流して、全日本無産者芸術連盟（ナップ）を結成した。この流れから、「『敗北』の文学」で「改造」の文芸評論に入選した宮本顕治も生まれたが、本論文第七章で注目する「文芸の破壊性に就いて」は、宮本の影響を受けているとみられる。石川が最初に影響を受けたのは、早稲田大学出身の杉山栄であったし、石川自身も岡山の関西中学校を出てから第二高等学院に進学し、そのまま早稲田大学に進学している（在籍は一年間）。よって、二二歳〜二四歳ごろの石川への早稲田の文壇の影響を考えないわけにはいかない。「早稲田文学」の第一次は、明治二十四年（一八九一）〜明治三十一年（一八九八）で、ここを舞台に坪内逍遙と森鷗外との没理想論争が起こった。以降、「早稲田文学」はリアリズムの牙城となり、島村抱月、広津柳浪らを輩出した。その二次は明治三十九年（一九〇六）〜昭和二年（一九二七）で、やはり自然主義文学の拠点になり、正宗白鳥らを生んだ。ここから昭和九年（一九三四）の第三次の活動開始まで休刊期間となる。本論文で検討する石川の初期とは、『蒼氓』の発表される昭和一〇年（一九三五）までのことなので、第二次「早稲田文学」の末期が石川の初期に与えた影響を考えるべきだということになる。「早稲田文学」の第二次が昭和二年で休止したのは、当然のことながら先述のプロレタリア文学各派の再編に呑み込まれたものだろう。

石川に自然主義文学の流れが影響しているとなれば、当然のことながらゾライズムのことも考えねばならない。フランスの作家エミール・ゾラの『ナナ』『居酒屋』などが英訳されて日本に入ってきたのは、明治後期のことで、大正末年からは日本語訳もされるようになり、日本の自然主義の形成に大きな影響を与えたとされている。ただし、ゾラは、人間の行動を、遺伝、環境から科学的、客観的に把握しようとしたのに対して、日本のそれは古来の因果論・宿命論と合流し日本化したとも言われている。石川の作品の中にも、権力に対する抵抗を見せつつも、一方で、『昏暝』などには無力感も窺える。石川のそのような「振れ幅」については第一〇章で述べるが、その「振れ幅」は石川の個性というよりも、当時の自然主義文学の潮流の中に胚胎していたとみることができる。自然主義は、一方では社会の洞察と権力への反抗を生み、もう一方では人間の宿命の自覚という相矛盾するような二つの方向性を生んだのである。

石川が変節も転向もしなかったのは、それをしなげなければならないほど、左翼的には活動しなかったからである。その意味で、第一章でも述べる賀川豊彦『死線を越えて』の影響は看過できない。石川がまだ関西中学校に在籍していたころの影響である。石川はこの作品から、社会的弱者へのまなざしとヒューマニズムを学んだ。権力や体制を批判する方向に向かう以前に、石川の原体験に、弱者をいっくしむ心情が植えつけられていたのである。初期石川達三は、彼の固有の成長環境と、彼を取り巻く当時の社会的環境との両面から位置づけなければならないことは明らかである。

第一章 石川達三の生長環境と中学校時代の文章
——『旅行記 屋島懐古』『短歌』 小論——

第一節 二歳にして抱いた「疑問」

石川の二歳のころの記憶から確認してゆく。

一つの記憶だけは鮮明に残っている。その露路は片側が私の家の生垣で、生垣の下に小溝があった。小溝のあたりで虫が鳴いていた。普通には地虫という、今から思えば螻蛄が鳴いていた。私はそれに気がついて、父の腕の中からふりかえり、あれは何が鳴いているのかと訊いた。

父は、

「石の下でな、みみずが鳴いているんだよ」と言った。

みみずはもう私の知識の中にあつた。そのみみずが、あんな声をして鳴くという事に、私は疑問を感じた。その時の会話と、その小さな疑問とだけが、なぜかはっきりと私の記憶に残った。そしてこの時から、伝説の時期をはなれて、私が私になった。いちばん古い私の記憶が一つの疑問につながっているということは、何かしら意味ふかい（われ疑う。故にわれ在り）……（「私ひとりの私」『石川達三作品集』第一八巻、昭和四八年一二月、新潮社）

「私ひとりの私」がはるか後に書かれたものであり、往々にして自伝において自らの幼少期を美化する点があることは差し引いて考えねばなるまい。しかし、石川自身が初めての記憶として語っているのはこの一件だけであり、この言説の周囲に作為性は感じられない。明瞭な「疑問」ではなかったにしても、二歳のころの石川が、なんらかの違和感を抱いたことは間違いないと受け止めてよいのではないだろうか。作家石川達三における原体験が「疑問」（違和感）にあつたことは重要である。「疑問」をもつことにより、石川達三は、「伝説の時期」の石川達三から、「私が私になった」と言っている。ここに作家石川達三のコアがおかれたとみることができる。

神戸の教会から著名な牧師が来たとき、その人の特別伝導演説を聞きに行ったこともあつた。私は終始熱心に聞いた。そしてひどく感動し、その場ですぐに洗礼を受ける人たちの中に進み入ろうかと思つたこともあつた。しかし私は軽率ではなかつた。洗礼はいつでも受けられる。私は本当に神を信じ得るだろうか。……その夜は枕の上で牧師の演説を思い出し、自分で検討してみるのだった。

その結果、私は幾つもの疑問を発見し、牧師の演説の中の怪しげな論理に気がつき、

その誇張された表現と誇張された結論とに反撥を感じ、要するに教会や牧師たちの通俗さに嫌気がさして来て、あくる朝になると、洗礼を受けなかった自分に安心したものだ。伝導演説を聞いた感激はたった一晚しか続かなかった。私は自分で信仰を求め、気持をもちながら、遂に教会に容れられなかった。……というよりは私の方が教会の通俗さを受け容れることが出来なかった。私はどちらかと言えば一途に物事を信じるたちではなくて、事ごとに先ず疑ってみる性質の人間であるらしかった。(「私ひとりの私」)

「神戸の教会」から「著名な牧師」が来て、「特別伝導演説」を開いた。それを聞きに行った石川達三は、「ひどく感動」した。しかし、「洗礼」は受けなかった。石川達三は「どちらかと言えば一途に物事を信じるたちではなくて、事ごとに先ず疑ってみる性質の人間である」からであった。これは石川達三「満二歳と数カ月」(「私ひとりの私」)時における蝮姑をめぐる父親への「疑問」(蝮姑の鳴き声を父親はみみずの鳴き声だといった)に出発している。「満二歳と数カ月」時に抱いた父親へのこの「疑問」が、「一途に物事を信じるたちではなくて事ごとに先ず疑ってみる性質の人間である」石川達三に成長させていた。

作家石川達三の原点は、この「疑問」から出発した。かかる意味において、「事ごとに先ず疑ってみる性質の人間」石川達三形成に決定的な影響を与えたのは父親の存在だったと言いうる。

第二節 父祐助の影響

石川達三は明治三十八年七月二日、秋田県平鹿郡横手町(現横手市幸町)で、父祐助、母ウンの三男として生まれた。生家は現存する。

父祐助は「伊庭想太郎(星亭を刺した剣客。音楽家伊庭孝の先代)の塾に学び、一時は伊庭姓を名のった。東京高等師範学校に学び、中学校の漢文及び英語教師資格をとり、横手町中学校教師に就任。俳句のたしなみも深かった」と久保田正文はその著『新・石川達三論』(昭和五四年一〇月、永田書房)に記している。

明治四五年九月、父祐助が岡山県立高梁中学校(現高梁高校)への転出にともない、一家は高梁市へ転居した。

高梁中学校における父祐助の英語教育の一端を示す英文が高梁中学校有終会事務所発行の「有終」第一五号(大正二年)、第一六号(大正三年)、第一七号(大正四年)、第一九号(大正六年)、第二〇号(大正七年)に掲載されている。石川達三は後年早稲田大学文学部英文科に進学することになるが、これには英語教師父祐助の影響が大きいと考えられる。

高梁中学校における父祐助の先生像については「有終」(第二三号、大正一一年一月、

高梁中学校有終会事務所)の「第四部◎先生方の異動：任期：趣味：隠芸：」の欄に、次のような記述がある。

石川祐助先生(十年)同(四月)岡山関西中学へ

石川先生、先生は大正元年九月の御赴任だから、八年八ヶ月の間終始英語教師として、又其の晩期を教頭として教務主任として高中の為に尽された、寡言沈着な忠実真摯な方、つまり徳望を以つて立つといふ流儀、学に忠に非常な勉強家であつた、従つて英語に於てホネチツクに於て御造詣も深く、教員室に於ける英語の疑問は先生に於て最後の解決を見出し得ることになつてゐた、広く文学趣味のたつぷり、有つた方、徒然草中の名文が御教授中すらく口を衝いて出るといふ流、従つて其の訳解もびつたり、当て嵌まつた妥当なもの、原文の口氣にほひ迄も巧みに訳し出された生きた訳だつたとの事、東京高師と早稲田の仕込、英語科に先生を有する事は本校の誇りの一として、卒業生にも在校生にも重く思はれて居た、先生御一身上の都合とはいへ、惜しい事であつた、先生は書に天稟の才あり、言ひしらぬ雅致風韻に富んだ御筆跡であつた、又新派の俳句もお得意であつたらしい、今一つ先生として意外な隠し芸は、ピンポンが十八番で、ボールは緩急自在なもの、今大阪北野中学に行つて居られる甲斐先生とは好取組で、正に機山不識庵の両雄相角逐するの概があつた、甲斐文学士は機山流で堅実に、どつちかといへば消極的であつた、所が石川先生のは不識庵の方で、往々意外な突撃、果敢な男性的なボールであつた、卒業生諸君中には先生の此の隠し芸を知らない人が多からう、若し夫れ先生の子福者であることと酒豪たる点とは、茲に紹介すべく餘りに渾身の事だが、其の酔態淋漓として御相好くづれ来る時、唸り出さるる「三つ違ひの兄さん」とか、「おらへの嬢」に至つては、天幾洩すべからず、強ひて個中の消息を知らんと欲する者は、先づ一升罈を先生の前に提供せざるべからず、(十・九・二・F生)

今見ることのできる石川達三のもっとも古い文学作品は『短歌』(「ミカド」大正一二年七月一五日、関西中学校丙申会)であるが、これも父祐助(「新派の俳句もお得意であつたらしい」)の影響が考えられる。幼少の頃から石川達三の近くには、俳句や英文があつたのだ。また、高梁中学校有終会事務所発行の「有終」(第二三号、大正一一年一月)には「・有終会役員」の欄に、「委員石川達三」とあり、はやくも、作家の片鱗がうかがえる。

大正一一年四月、石川達三は作家への夢を育んだ高梁を離れ、岡山市にある関西中学校

へ転校した。関西中学校では父祐助が英語教師をしていた。関西中学校での父祐助、及び石川達三は次のようであった。

敬愛する石川達三氏のような秀才（中略）当時すでに文名たかかった石川達三氏（中略）それに忘れられないのは、今にして思えば石川達三氏のお父様から英語を習ったことである。お酒がお好きであつたらしく、ときにはウイスキーの匂いがしたような記憶もあるが、らいらくで、明るく、少年たちにとっては、こわい先生というより、いいおじさまであつた。お子さんが多く、お母さまが中々の賢夫人と、子供のうわさ話に聞いていたことを思い出す。（帆足計「関中少年の日の思い出」「みかど」復刊第一九号、昭和四二年二月一五日、関西中学校丙申会）。

石川達三は関西中学では「秀才」であり、「文名たかかった」のである。その一端を示す『旅行記 屋島懐古』（「ミカド」第四七号、大正一二年七月一五日、関西中学校丙申会）と『短歌』（前掲誌）一五首が残されている。

なお同号に「雑誌部（文芸部）幹事石川達三」とある。

* * *

石川の父祐助を育てた祖父にあたる人物のことも、おおそわかっている。

祖父は南部藩につかえて祐筆という職を与えられていた。殿様の秘書のような役目であろうか。武士とは言いながら文筆の仕事についていた訳である。

藩制が廃止されてから祖父は職を失い、武家の商法にも失敗して上京し、大森のあたりで貧乏暮しをしていたようであつた。父は祖父の三男で、東京の伊庭塾に学んで神童のほまれ高く、文武両道に秀でていた。その為に見込まれて塾長伊庭氏の養子となり、数年のあいだは伊庭姓を名乗っていた。塾長伊庭想太郎は、後に東京市会議場で議長星亨を暗殺した人物であるが、その事件の前に、身辺を整理する意味であろうか、養子縁組を解除して、私の父を生家にもどしていた。

父はその後東京高等師範学校にまなび、漢文と英語の教師資格をとり、秋田県横手町の中学校に教鞭をとった。それから七、八年のち県立秋田中学に転じて英語の主任教師となり、やがて教頭になった。三十六、七歳の若い教頭であつた。私の記憶にある父の倅は、その頃から以後である。（私ひとりの私）

石川達三の父祐助は「文武両道に秀でていた」というが、具体的にはどうだったのだろうか。まず、「武」についてであるが、これについては次のような文章が残されている。

今一つ先生として意外な隠し芸は、ピンポンが十八番で、ボールは緩急自在なもの、今大阪北野中学に行って居られる甲斐先生とは好取組で、正に機山不識庵の両雄相角逐するの概があつた、甲斐文学士は機山流で堅実に、どっちかといへば消極的であつた、所が石川先生のは不識庵の方で、往々意外な突撃、果断な男性的なボールであつた、卒業生諸君中には先生の此の隠し芸を知らない人が多からう、

ここには、「武」の人父祐助が「ピンポン」の名手であることが紹介されている。しかも、「ピンポン」の試合はこびは「機山不識庵の両雄相角逐するの概があつた」という。父祐助は「不識庵」の方で、往々意外な突撃、果断な男性的なボールであつた」という。いかにも、「文武両道に秀でていた」にふさわしいうち方である。

それでは「文」における影響はどうか。

寡言沈着な忠実真摯な方、つまり徳望を以つて立つといふ流儀、学に忠に非常な勉強家であつた、従つて英語に於てホネチツクに於て御造詣も深く、教員室に於ける英語の疑問は先生に於て最後の解決を見出し得ることになつてゐた、広く文学趣味のたつぷり有つた方、徒然草中の名文が御教授中すらくと口を衝いて出るといふ流、従つて其の訳解もびつたり当て嵌まつた妥当なもの、原文の口氣にほひ迄も巧みに訳し出された生きた訳だつたとの事、東京高師と早稲田の仕込、英語科に先生を有する事は本校の誇りの一として、卒業生にも在校生にも重く思はれて居た、先生御一身上の都合とはいへ、惜しい事であつた、先生は書に天稟の才あり、言ひしらぬ雅致風韻に富んだ御筆跡であつた、又新派の俳句もお得意であつたらしい、「有終」大正一一年一月、高梁中学校有終会事務所）

この文章は、石川達三の父祐助の教えを受けた生徒の教師像である。この生徒によれば、「英語」の「造詣」が深く、「広く文学趣味のたつぷり有つた」教師であり、さらに、「先生は書に天稟の才あり、言ひしらぬ雅致風韻に富んだ御筆跡」であり、「又新派の俳句もお得意であつたらしい」。

父祐助の文学的な側面について、石川達三本人も次のように記している。

父の英語は、（こんな田舎の中学校には勿体ない）と言われるほど深い学殖を持っていた。（「私ひとりの私」）

父は俳句を能くし漢文学にくわしく、書齋には漱石全集や露伴全集を備えていた程に日本の文芸をも愛好し、若い頃には東京の寄席にかよい、娘義太夫に心酔したような経歴ももつていて、酒の席ではしばしばそうした短い名せりふを楽しそうに口に

たりして居た。(「私ひとりの私」)

句作三十年、父はひとかどの達人であると言う。万葉を誦し白楽天を語りセキスピアを論じながら自らは晩酌と句作三昧。(すいと来てひらりと帰る燕かな)の詩境に至っては豚児の能く解するところにあらず、(昔男ありけり羽子をつきにけり)に至っては黄嘴のよく評するところでない。不肖は門前の小僧、芭蕉を知らず歳時記を知らない。しかも厚顔、一日よく三十句をものし又は半歳一句をも成さぬ。俳句などは勉強したって無駄な事、浮世の苦勞が積み人間修行が積めば句境また自ら進むものである。

里の雨母は五十のひなまつり

七年ばかり前の句である。人間はひねくれ者であるが句は案外に素直である。内容は賞讃に値せずとも形だけを整えるのは何でもない。門前の小僧の証拠であろう。(『現代知性全集』「石川達三集」昭和三十五年一月、日本書房)

石川達三は父祐助について、「英語」の「学殖」深く、「俳句を能く」し、「漢文学にくわし」かったと言い、そのうえ、書齋には「漱石全集や露伴全集を備え」るほど、「日本の文芸を愛好し」ていたという。また、「句作三十年、父はひとかどの達人」であり、「万葉を誦し白楽天を語りセキスピアを論じ」る父祐助であったともいう。

石川達三は、「里の雨母は五十のひなまつり」の句をあげ、「門前の小僧の証拠」であるといい、父祐助からの影響を「証拠」だてている。

石川達三が早稲田大学の国文科に進まず、英文科に入学したのも英語教師父祐助の影響の一つであろう。父祐助の影響はこれだけにとどまらず、石川達三、一九歳関西中学校五年生時に書いた漢文書き下し文の「旅行記」、および、「短歌」の創作も父祐助の影響だとみて間違いない。石川達三は、父祐助のもと、「門前の小僧」として、習わぬ日本文学の素養をごく自然な形で身につけていった。

第三節 実母うんの影響

作家石川達三は、父祐助の影響下で文学的な素地を形成した。それでは、母親の存在はどうだったか。実母および継母について見てみたい。

まず、実母うんから見みたい。石川達三は、さまざまに実母像を描いているが、ここでは、作家石川達三の形成に係ることに限定して見てみたい。

二人の兄が学校へ行き、父が中学のつとめに行ってしまうと、私と母と二人きりになることが度々だった。幼い妹はとなりの部屋で静かに眠って居り、私は囲炉裏ばたに石盤と石筆とを持ち出して、母から文字を教えてもらった。勉強にあきると石盤に

絵をかいた。その絵は昔ばなしの英雄豪傑で、加藤清正の虎退治が一番多かった。
（「私ひとりの私」）

母は昔ばなしを無数に知っていた。二人きりの静かな時、私がせがむとぼつりぼつりと話をしてくれた。その頃の秋田地方では娯楽が少なかったので、お伽噺や民話の類が発達していたものであろうか。母に限らず、どこの小父さん小母さんでも、昔ばなしを良く暗記していた。私たちはそれを（むかし）と呼んでいた。どの話も（むかしむかしなア……）という所から始まるからであった。怪談と落しばなしのようなものが大部分であった。（「私ひとりの私」）

母は時間をかけて、私が面白さにじりじりするほどゆっくりした口調で、話して聞かせるのだった。（「私ひとりの私」）

こういう民話は誰が作ったものか私は知らない。しかし板びさしを打つ雨だれの音は、今でも私の耳にタタジタタジと聞えてくる。還暦を迎えようとする私の耳に、今もなお奇怪なリズムを帯びて、タタジタタジ……と聞えるのだ。それが私に何かを話しかけて来るような気がする。これほど迫力のある美しい表現を、いつの時代の誰が考えついたものか。恐らくその人は古い伝説をもった日本人の詩魂を、ゆたかにそなえ持った一人の野人であったに違いない。東北地方の深い雪に埋もれて、名もなく朽ち果てた詩人であったに違いないのだ。（「私ひとりの私」）

ここには、「めでたしめでたし」（「私ひとりの私」）で終る民話の「落しばなし」に対し、「（何だか変だなあ）」（「私ひとりの私」）と思う石川達三がいるが、一方では「身を乗り出して聞き入る」石川達三がいる。「還暦」を過ぎた石川達三の「耳」に「今もなお奇怪なリズムを帯びて、タタジタタジ……と聞えるのだ。それが私に何かを話しかけて来るような気がする」と言っている。実母の語る「民話」（「私ひとりの私」）の数々がどんなに大きな影響力をもっていたか、はかりしれない。かかる意味において、作家石川達三の文学的な出自は、その根底において、「東北地方の深い雪に埋もれて、名もなく朽ち果てた詩人」の血をひく作家だったのである。それはまた、「古い伝統をもった日本人の詩魂を、ゆたかにそなえ持った一人の野人」にも繋がるものでもあった。

第四節 継母せいの影響

次に、継母せいとの関係を見てみたい。

石川達三が、脳溢血で実母を亡くしたのは大正三年一二月、石川達三、一〇歳の時であった。石川達三が、後日継母になるせいに初めて会ったのが実母の亡くなったその夜だった。

た。

それから私と下の兄とは、また今井さんの提灯に送られて、暗い霜の道を校長先生の家まで泊まりに行った。

終始、私たちはひとことも言わず、自分の心のなかの不安と闘っていた。もう十時を過ぎていた。ふと道ですれ違った夫人が立ちどまって、

「あら、今井さん……」と呼びかけた。袴をはいた中年のひとで、女学校の先生らしかったが、私は見覚えが無かった。

「このひとたちのお母さまは、いかがでしたか」とそのひとは言った。

「はい。駄目でございました。つい先ほど……。お二人を御臨終にお連れしまして……」

すると婦人は私の肩に手を置いて、

「まあ、可哀そうにねえ、あんたたち。あんな良いお母さんを亡くして……」と言った。（「私ひとりの私」）

このせいが父祐助と再婚したのが石川達三、一一歳のときである。継母せいは「キリスト教徒」（「私ひとりの私」）であった。

私たちは母にすすめられて、教会の日曜学校に通った。私は遂に一度も信仰にはいなかったことは無かったが、教会に親しみ、キリスト教に関するいろいろな知識を得た。夜の集会で大人たちの祈りや告白や合唱を聞いたこともあったが、私は何かしら自分とは異質のものを感じ、共鳴するものは無かった。ずっと後になって、中学三年生のとき、或る心の渇きを感じて、幾度かこの教会を訪ねたことがあった。その時は信仰を求めるような気持があったけれども、私の渇きは癒されず、失望して教会をはなれた。宗教は私には無縁のもののようにであった。（「私ひとりの私」）

石川達三が継母せいによって、キリスト教へ導かれたことは重要である。たとえば、「宗教は私には無縁のもの」であったとしても、「キリスト教に関するいろいろな知識を得た」からである。

最初に印刷になったものは僕が二十二歳のとき、岡山の山陽新報に出した二十五枚くらいの短編「淋しかったイエスの死」である。僕は早稲田高等学院の二年で夏休休暇に岡山へ帰って書いたものであった。社会学の権威杉山栄氏が山陽新報の幹部で文学を愛する人であり一面識あったのでこの人に見て貰った。これはキリスト磔刑直前の世俗的または人間的な不幸を探ろうとしたもので、最後に十字架を負うて天を仰ぎ、

「主よ何故我を見棄て給うか」と嘆くところで終っていた。杉山氏は見るべき才能ありとして山陽新報に発表し、同時に僕に忠言を与えてくれた。

「これから先十年のあいだパンと水とで生きる決心をもって勉強するならば必ず世に出られるであろう」と。

石川達三の作品で「最初に印刷になったもの」は『淋しかったイエスの死』であった。活字になった石川達三の最初の作品がキリスト教に関するものだったということは、継母せいの影響といつてよい。石川達三は継母せいにはあまりなじまなかったようであるが、文学的にはしっかりと継母せいの影響を受けていたことになる。石川達三は『淋しかったイエスの死』によって、「社会学の権威杉山栄氏」から「見るべき才能あり」と認められ、『これから先十年のあいだパンと水とで生きる決心をもって勉強するならば必ず世に出られるであろう』と励まされる。「キリスト教に関するいろいろな知識」がなければ、『淋しかったイエスの死』は書かれなかったし、ましては杉山栄に認められることもなかったはずだ。かかる意味において、作家石川達三にとって、継母せいではなくてはならない存在だったのである。

第五節 高梁の環境と賀川豊彦との出会い

最後に、石川達三と高梁の関係について見てみたい。

石川達三は大正元年、父祐助の高梁中学校への転任にともない、高梁町へ移転。石川達三、八歳であった。大正一〇年父祐助が岡山市の私立関西中学校に転じ、家族も岡山市へ移転したが、石川達三だけ、継母せいの一方的なおしつけにより、一年間高梁町の菊楽家へ預けられた。正確には、醬油屋菊楽定太郎方に寄宿（久保田正文は「下宿した」（『新・石川達三論』）と記しているが、「菊楽家では部屋代や食費は受け取っていない」（菊楽治子談））したのである。「同家に中学の同級生（「同級生」ではなく、一級上というのが正しい。昭和一一年一月二〇日発行の「有終」創立四〇周年記念号に「菊楽倫治郎」、「第二五回大正一二年三月入会」とあり、「石川達三」は「第二六回大正一三年三月入会」となっているからだ。また、『私ひとりの私』には「菊村家の次男は私と同年で、小学校の時から同級生であった。私が叔父のはからいによって東京府立一中を受けたり、その為に中学入学が一年遅れたりした為に、友人の菊村は中学では私より一年上だった」とある。）がいて、彼と共に小説を書こうと話しあったりした」（久保田正文『新・石川達三論』）という。

菊楽家における石川達三の住居は蔵と蔵に挟まれた中二階のような造りの六畳間で、一階は土間になっていた。石川達三の部屋に行くには中庭からじかに二階へ通ずる八段ほどのやゝ狭い階段を登らなければならなかった。階段に接していた蔵のなまこ壁に「アトリエ 下関行 石川 下り口」（口絵参照）という落書きが残されていた。これは今見るこ

とのできる石川達三のもっとも若い時の字体であると同時に、石川達三が中二階の自室を「アトリエ」と呼び、創作のための仕事場と考えていたらしい様子などがうかがえて興味深い。高梁は作家石川達三にとって、第二の故郷であるばかりでなく、文学的故郷でもあったのだ。小京都といわれる美しい土地高梁は作家石川達三の揺籃の地となった。

この一年間にあって、もっとも重要な出来事は、ここで石川達三が「文学に開眼する一つのきっかけになった」（「私ひとりの私」）賀川豊彦の『死線を越えて』に遭遇したことである。この間のことを石川達三は次のように書いている。

三年生の一カ年間はまことに豊富だった。（中略）私は多くの経験を積み、いろいろな新しい世界を知った。（中略）何がきっかけであったかは覚えていないが、小説を書くことを思い立って原稿二十枚ばかりを書いてみたこともあった。しかしこの作品は完成しなかった。完成させるだけの思想がなかった。私はその意味では決して早熟ではなかった。むしろ熟し方の遅い方であった。

しかしこの頃から少しずつ読書の味を知った。菊村氏の書棚からトルストイの（復活）の完訳を見つけたらして通読したことも、私にとっては文学に開眼する一つのきっかけになった。（中略）

もう一つは賀川豊彦の（死線を越えて）だった。（中略）内容は異常であったが、（復活）よりは私にとって何倍も身近なものに感じられた。私が社会主義的な思想や行動に触れたのは、この本が最初だった。ひとりのキリスト教徒が、その信仰によって神戸の貧民窟に身を投じ、あらゆる苦難を超えて貧民の救済に当ろうとする、闘いの文学であり信仰の文学でもあった。ヒュマニズムという言葉を私はまだ知らなかったが、この本によって私は一種のヒュマニズムの実態に触れた思いがした。私は英雄豪傑の立志成功伝に動かされたことは一度もなかったが、この賀川豊彦の体験から生れた作品には強く動かされた。いわゆる世間の成功者の伝記などよりも、この作品の主人公の美しい犠牲と努力との生き方に心打たれた。

石川達三が『死線を越えて』を「身近なものに感じられた」のは、菊楽家における生活が大きく影響している。

当主菊村定吉氏は町でも人望の高い商人で、年の暮にはひそかに貧民に餅米を配ったりしているという話だった。醤油の醸造業をやりながら、片手間に質屋をも経営していた。質物を入れる土蔵が四棟、（中略）夜になると質草を風呂敷に包んだ町の小母さんの姿がたびたび見られた。質草の着物や帯を店の間にひろげて、客と主人とがひそひそと値段を決める相談をしているのを、私はたびたび見た。次の間の筆筒のひき出しには、紙札のついた質草の懐中時計や腕時計がぎっしり詰まっていた。質物のはいった倉の中の整理を手伝ったこともあった。これらの質草の山は、そのままに庶

民の貧しさの象徴でもあった。紙に包まれた着物や帯の一つ一つに、質入れた人たちの嘆きがこもっているようであった。

「菊村」家における生活のなかで、石川達三は、「年の暮」、「貧民」に「ひそかに」「餅米を配った」という「菊村定吉氏」と、「餅米」を施された「貧民」の存在を知った。それは「一人のキリスト教徒が、その信仰によって神戸の貧民窟に身を投じ、あらゆる苦難を越えて貧民の救済に当ろうとする」『死線を越えて』の主人公の原型であった。

さらに、石川達三は「菊村定吉氏」が、「醤油の醸造業をやりながら、片手間に質屋をも経営していた」ことから、「夜になると質草を風呂敷に包んだ町の小母さんの姿」を「たびたび」見た。「質草の着物や帯を店の間にひろげて、客と主人とがひそひそと値段を決める相談をしている」のを「たびたび」見た。「次の間の筆筒のひき出しには、紙札のついた質草の懐中時計や腕時計がぎっしり詰まっていた」。「質物を入れる土蔵が四棟」もあった。石川達三は質物のはいつた倉の中の整理を手伝ったこともあった。これらの質草の山は、そのままに庶民の貧しさの象徴でもあった。紙に包まれた着物や帯の一つ一つに、質入れた人たちの嘆きがこもっているようであった。石川達三は、「貧民」の「嘆き」を聞いていた。

したがって、「ひとりのキリスト教徒が、その信仰によって神戸の貧民窟に身を投じて、あらゆる苦難を越えて貧民の救済に当たろうとする」人物に「何倍も身近なものに感じ」たのは、石川達三にとって、自然なことであり、ここに作家石川達三のコアが形成された。

第六節 『旅行記 屋島懐古』の文体

『屋島懐古』は大正一二年七月発行の「ミカド」（関西中学校丙申会）に発表された。石川達三関西中学校五年生のときの文章である。石川達三のもっとも若い時の文章と思われる。

『屋島懐古』の内容は屋島山に登った石川達三が山嶺にある屋島寺において、「源平の昔を懐ふ」、というもの。

文体は漢文書き下し文に近く、言文一致とはほど遠い。しかし、ある意味では伝統的な文体であり、力強い。

屋島山は眼前に峙てり。密林の間なる急坂を、杖に倚りて左折右曲りて攀ぶ。古雅なる籠ありて、たくましき山男二人、旅客を乗せて終日こゝを上下せるを見る。

流汗淋漓として滴り、落ちては路上の岩塊をうるほす。此日曇天、梢風あり、登山

には最も好都合なりき

酔客数人、坂を下るあり。漫々として相語り、相笑つて行く。山嶺、一古刹あり、

屋島寺是也。石蹬を踏みて堂前に至り、瞑目して坐ろに源平の昔を懐ふに、松柏は、

さながらに昔を話らざるも、泉水は動て若武者の姿を写さんとせり。

このような調子で最後まで続く。格調の高い文章である。

「当時すでに文名たかかった石川達三氏」（帆足計「関中少年の日の思い出」「みかど」復刊第一九号、昭和四二年一月一日、関西中学校丙申会）、「石川君は当時から文章がうまかった。」（板野長八「佐藤校長と石川君」「みかど」復刊第一九号、昭和四二年一月一日、関西中学校丙申会）「我々は卒業式を明日に控えて教室を掃除し整頓した。この作業が終りに近づいた頃、彼は教室の後ろの白壁に鉛筆のようなもので、入学以来の自己を顧みつつ今將に卒業しようとするその感懐を、すらすらと書きなぐったのである。七五調の名文で我々は快哉を叫んだ。」（前掲誌）とある。

板野長八がいう「彼は教室の後ろの白壁に鉛筆のようなもので、入学以来の自己を顧みつつ今將に卒業しようとするその感懐を、すらすらと書きなぐったのである。七五調の名文で我々は快哉を叫んだ」、とあるのは石川達三と「中学生時代の同級生」（「高梁川」第三五号、昭和五三年九月、高梁川流域連盟）だった大森隆夫の「石川達三 中学生の頃の事」で、次のように記していることと重なる。

石川の右の作品（『恩給先生と不良学生』―筆者）のなかには、全然、書かれていないが、石川はその頃から、文学が好きで、短歌なども作っていた。私も文学に耽溺し、短歌なども作り、ひそかに、かくれて、小説などを読んでいた。立川文庫なども夢中になって読んだ。今の文壇の六十才位、以上の作家が読んで読んだ小型の小説本で、英雄、豪傑の物語である。その頃、学校に「ミカド」と云う機関誌があった。また部に、雑誌部と云うのがあり、今の文芸部と云うようなもので、四年の時も、五年の時も、石川も私も雑誌部の幹事に選ばれた。「ミカド」を編集した時など、石川はバナナ、私はてんぷらなどを買いこんできて、愉快に談笑しながら、ばくついたことなど、今も思い出して、懐かしい。それに、石川のことについて、あまり誰も知っていないことは、漫画がひどくうまかった事だ。石川は生来、器用な人である。今は東京のチャアチル会などに入って、油絵などを時々、描いているらしいが、石川は、漫画が上手などと言われている、権威を傷つけられるとも思っているのか、私は、その後、石川が漫画を描いたと云う話を聞いた事がない。

石川達三は関西中学校時代、「文学が好きで、短歌なども作っていた」のである。また、「四年の時も、五年の時も」「雑誌部（今の文芸部）」の幹事に選ばれ」てもいた。そのうえ「漫画が上手」だったのだ。たとえそれが風刺画のようなものであったにしても、この「漫画が上手」ということは社会や風景をよく観察するという意味において、石川達三

を形成する上で重要だろう。

石川の中学生生活のなかでも傑作と云うべきものは、その最後の一日に引きおこした落書事件であった。それは明日が卒業式という日で、全五年生が、教室の大掃除を命ぜられた時の事である。石川は卒業式の前日、中学生的な感傷のとりこになって、教室の壁に、落書をはじめた。

——告別の辞、大正十三年三月十日。卒業に当って、感慨無き能はず。思へば幾春秋。思師は鬢髪既に白く、吾等は希望多き出発の門に立つ。早春、草未だ萌えず、惜別の心に、風なほ寒し。

しかしこのような美文は長く続かなかった。書くことが無くなったのである。そこで、筆は予定以外の方向に迂りはじめた。

かくの如き不備なる学校に於て、不完全なる教育を受け、再び還らざる青春に悔を残して卒業するは、吾等の不幸と言はざるべからず、吾等は（同前）

ここでの石川達三の「——告別の辞」の文章は「美文」であり、漢文書き下しの文体である。

この『屋島懷古』は「ミカド」（復刊第一四号、創立七五周年記念特集号、昭和三八年三月一日）、「みかど」（復刊第二七号、昭和五一年三月一日）にそれぞれ再掲載されている。石川達三が作家として有名になったということもあるようだが、かなり名文と思われるていたことも事実のようだ。

しかし、いずれにしても、作家石川達三は漢文書き下し文に近い文体から出発したことだけは確認できたかと思う。

第七節 『短歌』の言説

『短歌』一五首は『屋島懷古』と同じく、大正一二年七月発行の「ミカド」（関西中学校丙申会）に発表されたものである。石川達三関西中学校五年生のときの短歌である。

清流に佇む夕うたかたの一つを乗せて走る冬の水

松並木に風吹き止みて此の夕下りの船の灯は赤きかも

赤き灯の水に映え行く下り舟笠着た月に影もうつらず

このような叙景歌を中心とした歌が最後まで続く。『旅行記 屋島懷古』が男性的だとすれば、こちらはやや女性的といふべきか。これも「広く文学趣味のたつぷり有った方、徒然草中の名文が御教授中すら」と口を衝いて出るといふ流、従って其の訳解もびつたり当て嵌まった妥当なもの、原文の口氣にほひ迄も巧みに訳し出された生きた訳だったとの

事、(中略)新派の俳句もお得意であつたらしい」(第四部◎先生方の異動：任期：趣味：隠芸：)「有終」第二三号、大正十一年一月、高梁中学校有終会事務所」という父祐助の影響だろう。「父は俳句を能くし漢文学にくわしく、書齋には漱石全集や露伴全集を備えていた程に日本の文芸をも愛好し、若い頃には東京の寄席にかよい、娘義太夫に心酔したような経歴ももっていて、酒の席ではしばしばそうした短い名せりふを楽しそうに口にしたりして居た」(『私ひとりの私』『石川達三作品集』第一八巻、昭和四八年一月、新潮社)、と石川達三も記していることから、俳句の影響には絶大なものがあつただろう。

石川達三と、「中学生時代の同級生」(「高梁川」第三五号、昭和五三年九月、高梁川流域連盟)であつた大森隆夫は「石川達三中学生の頃の事」で、次のように記している。

石川の右の作品(『恩給先生と不良学生』―筆者)のなかには、全然、書かれていないが、石川はその頃から、文学が好きで、短歌なども作っていた。私も文学に耽溺し、短歌なども作り、ひそかに、かくれて、小説などを読んでいた。立川文庫なども夢中になつて読んだ。今の文壇の六十才位、以上の作家が好んで読んだ小型の小説本で、英雄、豪傑の物語である。その頃、学校に「ミカド」と云う機関誌があつた。また部に、雑誌部と云うのがあり、今の文芸部と云うようなもので、四年の時も、五年の時も、石川も私も雑誌部の幹事に選ばれた。「ミカド」を編集した時など、石川はバナナ、私はてんぷらなどを買いこんできて、愉快に談笑しながら、ばくついたことなど、今も思い出して、懐かしい。それに、石川のことについて、あまり誰も知っていないことは、漫画がひどくうまかつた事だ。石川は生来、器用な人である。今は東京のチャアチル会などに入って、油絵などを時々、描いているらしいが、石川は、漫画が上手などと言われては、権威を傷つけられるとでも思っているのか、私は、その後、石川が漫画を描いたと云う話を聞いた事がない。

石川達三は関西中学校時代、「文学が好きで、短歌なども作っていた」のである。また、「四年の時も、五年の時も」「雑誌部(今の文芸部)の幹事に選ばれ」てもいた。『旅行記 屋島懐古』に見られたような漢文臭の強い文体(男性的)と、この『短歌』に見られたような和文的な言説(女性的)との両方の素養を身に着けていたのである。

第二章 杉山栄との出会いによる〈文人〉石川達三の始動 ——『淋しかったイエスの死』『彼の出京』——

第一節 杉山栄との出会い

石川達三文学で最初に活字になった作品は『淋しかったイエスの死』だった。昭和二年一月二四日、三〇日、「山陽新報」紙上でのことであった。時の編集長は杉山栄。石川達三は杉山栄によって作家デビューしたことになる。

杉山栄は作家石川達三を世に送り出したばかりでなく、日本の近代文学にとっても重要な存在である。大正末期から敗戦にいたる暗い期間、「山陽新報」における文学面を精彩あるものにしたのは編集長杉山栄によるところが大きいからだ。

「文名たかかった」石川達三は早稲田大学文学部英文科へ進学した。大学生になった石川達三は「山陽新報」編集長杉山栄と出会う。「私が深く彼と交り始めたのは彼の早大在学中のことで、拙宅と彼の家とが接近していた関係などから、互に訪れ訪れられ、フランス語の会話のことで論争めいた言葉のやりとりをした記憶もある」（「習作時代の石川達三氏」『昭和文学全集』第二巻、昭和三六年一〇月三〇日、角川書店）と杉山栄が記しているように、石川達三が早稲田大学に在学していた昭和二年、石川家は「岡山市二番町一九」（「ミカド」四七号、大正一二年七月一五日、関西中学校丙申会）にあり、杉山栄は「岡山市五番町」（「同窓会名簿」、昭和五年二月二五日、岡山県津山中学校同窓会）にあり、両家は「接近」していた。

そのうえ、石川達三の継母せいと杉山栄夫人千代は岡山女子師範学校の先輩、後輩の関係にあった。しかも、「一九〇五（明治三八）年女子師範学校に入学した」（藤田えり子「ひとりの女性」^{わたし}——杉山千代その生涯——）『女の新聞』復刻版、平成三年八月二〇日）稲岡千代（後の杉山栄夫人）は「厳しい校風になじめず自信を失い退学を思う日もあった。上級生の白神せい（後の石川達三の母堂の石川せい）は、思いとどまるように手紙で千代を励ます。信望厚い先輩に認められたことはうれしく、退学のこととは忘れた。以来死ぬまで二人は変らぬ友情で結ばれ」（前掲書）ていたという。こうしたことから石川達三は「山陽新報」編集長杉山栄の知遇を得るようになったのだ。

杉山栄は明治二五年岡山県久米南条郡稲岡南村（現久米郡久米南町）に生まれた。津山中学校から早稲田大学を経て、大正九年「山陽新報」社編集長となる。大正一一年から大正一三年まで、大原孫三郎の援助でベルリン大学に留学し、社会学・経済史・経済思想史を学んだ。

一九二六年（昭和元年）千代は四十才の時就実高女の教師となる。栄氏は山陽新報、合

同新聞の記者として活動し、人生の充実期をそれぞれの仕事に忙しく過ごす。栄氏の友人が訪れて議論が始まると、千代も加わり、談論風発、同感してははねかえし、また同感しユーモアもあって賑やかだった。津山中学時代の投稿仲間清原玉（ラグーザお玉）の研究者の木村毅や坪田譲治、石川達三、藤原審爾、山本遺太郎らがよく訪れた。（藤田えり子

「ひとりの女性―杉山千代その生涯―」『女の新聞』復刻版、平成三年八月二〇日）

藤田えり子は石川達三が杉山栄を「よく訪れた」のは「一九二六年（昭和元年）」（前掲書）だったと記しているが、杉山栄も次のように記している。

私が深く彼と交り始めたのは彼の早大在学中のことで、拙宅と彼の家とが接近していた関係などから、互に訪れ訪れられ、フランス語の会話のことで論争めいた言葉のやりとりをした記憶もある。（前掲文）

石川達三が早稲田大学に入ったのが昭和二年だから、石川達三が杉山栄の知遇を得、作家への足がかりを得たのはこの頃である。『淋しかったイエスの死』を初め、数編の短編が「山陽新報」へ掲載されていった。石川達三を世に送り出したのは杉山栄の見識であった。

杉山栄は石川達三に対し、『水とパンとでやる決意があれば、きつともになる』、『この調子で、図太く、社会性のある線の太いものをお書きなさい』と言ったことである。今にして思えば、これもまた無用且つ生意気なアドバイスであった（前掲文）と記しているが、石川達三文学の本質を早くも理解した上での「アドバイス」であった。ベルリン大学で社会学・経済史・経済思想史を学んだ杉山栄の見識の高さがうかがえる。

杉山栄はひとり石川達三を世に送り出しただけでなく、多くの作家、評論家に紙面を割いた。吉川英治の『地に盈つ春』、山岡荘八の『日本の母』、木村毅の『無敵空軍』そして、片岡鉄平の『大空へ』などは今回の調査の結果初めてその存在が判明した作品である。

評論では有島武郎「イブセンの野鴨」、内田魯庵「我国露文学の初期」、中條百合子「プロ文学の批評」など枚挙にいとまがない。これらはひとえに、「もともと文芸作品が好きで、中学時代には『文章世界』や『中学世界』などに投書し、笑止千万にも、一時、作家生活を夢見たことさえある。自然、文芸作品といえれば外国のものも日本のものも出来得るだけを集めて読み、月々の新刊雑誌もなるべく洩れなく眼を通すことに努めていた。かような有様であったので、新聞に載せる小説の選択や執筆依頼だけは私自身でやっていた。そして、この時代、地方紙の掲載小説といえ、通信社から共通の原稿を買うのが慣わしであったが、私はこれに不満で、清鮮な新進作家の新作を載せることに努めていた」（前掲文）

「山陽新報」編集長杉山栄に負うところが大きい。

第二節 「山陽新報」(「合同新聞」) 文学年表―大正九年〜昭和二〇年―

「山陽新報」紙上に掲載された文学作品・評論の年表(「山陽新報」(「合同新聞」) 文学年表―大正九年〜昭和二〇年―)を作成し、以って杉山栄が果たした文学的仕事の成果を明らかにしておきたいと思う。当時、地方新聞は中央新聞から新聞小説を二次的に購入するのが一般的だった中で、杉山は直接岡山から中央の家たちに働きかけ、これだけの錚々たる面々の原稿を集めたのである。石川に与えた影響は計り知れない。

大正		年号	月	日	氏名	題目
九年	一	一	二	江見水蔭	田家早梅	
一〇年	一	二	片上伸	民衆芸術の意義		
四	二八	有島武郎	一人の為に			
五	二	有島武郎	イプセンの野鴨			
八	二二	和辻哲郎	伝統に就て			
二九	二九	野口雨情	郷土文学と童話			
二九	二九	有島武郎	現代の結婚制度から妻の悩みは生る			
二九	二九	本間久雄	婦人の感情を解放せよ			
七	九	小川未明	人間の道			
九	二四	江馬修	婦人と芸術			
二四	二四	幸田露伴	日本婦人の行くべき道 光輝ある生活を開拓せよ			
八	一四	小牧近江	佛文壇の第一人者バルビュスの芸術			
〇	三〇	賀川豊彦	人間の為に吾が文化の為に軍備は撤廃されねばならぬ			
一	一三	川路柳虹	生の道			
二	二〇	片上伸	多角的の現壇			
二	四	田山花袋	私の眼に映る現代作家の作品			
一九	二〇〜二四	与謝野晶子	折々の感想から			
二五	二五	小川未明	天下一品			
二	一、三	馬場孤蝶	閑天地			
二	二	内田魯庵	我国露文学の初期			
二	二	菊地寛	演芸私議			
二	二	田山花袋	古くて新しい感じの吉野山			
三	三	鈴木三重吉	子供の読み物に就て			
三	三	小川未明	来る可き新人に我等は斯く望みたい			
三	三	上司小剣	将来の文学とは 文壇の中央集権を破れ			
七、八、一〇	七、八、一〇	上司小剣	梅にも春			
一六	一六	戸川秋骨	評論とアーノルド			
一六	一六	田山花袋	ゴシップ			
一六	一六	吉江孤雁	巴里の冬			
四	一、二、三、四	倉田百三	岡山劇場の「出家とその弟子」上演に就て観客に望む			
五	七、九	菊池寛	文芸の必要			
一〇	一〇	〃	文芸の利益			
三	一三	武者小路実篤	我等の生活と信仰			
一	一	昇曙夢	プロレタリア詩人の芸術運動			
二	二	厨川白村	純真なる恋愛に醒めよ			

一五年					一四年					一三年											
三	二	七	六	一	三	二	八	二	一	二	〇	九	八	七	六	五	四	三	一		
二二	一七、一九	三〇、三一 一二、一九	一	一、三	一四、二一	二四、三〇 二三、二四 九	一六、一七	二	八 三 二 一	一六	一九〇 一九〇 二四	一	一一	六 二〇、二二、二三〇 一四、一六	三〇 九	二二〇 一九	二五 二四 二三 二一	三	二八 八〇 三〇 三五		
(談) 中村 武羅夫	菊池 寛	佐藤 春夫 里見 淳	片岡 鉄平	木村 毅	江見 水蔭	岡本 綺堂 武者小路 実篤	昇 曙夢	久米 正雄	今 東光 野口 雨情 白鳥 省吾	中村 星湖 上司 小剣	芥川 龍之介	徳田 秋声	杉山 栄	豊島 与志雄	長与 善郎	小川 未明 賀川 豊彦	片上 伸 有島 生馬	北原 白秋	徳田 秋声 中條 百合子 川路 柳紅 平塚 らいてう	吉井 絃二郎	秋田 雨雀 中村 星湖 小川 未明
「明治大帝に咫尺し奉りて」を読む	思ひ出すまゝ	演劇 芝居は見るもの	独り者	大正十四年文壇の諸問題	紅葉山人を憶ふ	江戸時代の捕物 「新しき村」の話	革命後の露国美術―全く美術界の転換期― 文芸雑感	心境論	婦人の服装 民謡の社会化 自由詩の創始と発達	勝利 郷土文芸に就て	プロレタリア文学論	時代劇に就て	表現派の芸術	ロマンローランの世界	日本人のこと	陶酔文化の没落 二つの人形	芸術に対する自分の態度 文芸と時代	小笠原の話	都会から緑の国へ 懐かしい故郷の新緑(談) 現代的女性の縁切寺 愛なき結婚の継続 素朴な庭 外国文学に現れた日本文学の影響	芸術とは何ぞや	土地と文学 バラックの上を照らす太陽 秘密 童話 駒鳥と酒

										三年											二年	昭和							
〇	九	八		七	四		二	一			〇	八	五	四	三	二	一												
二九	三、一〇	二七	一三〇四年一月三十一日 一六六回連載	九	三〇	五、六	二七	六	一	一	一	三〇	一一	一一	一一	三二	二二	二〇、二二	一八	一一〇二五	七	二四、三一	一〇、一七	九	一、三	一			
賀川 豊彦	〃	江見 水蔭	坪田 讓治	藤原 敬二	石川 達三	昇 曙夢	石川 達三	〃	馬場 孤蝶	江見 水蔭	木村 毅	徳田 秋声	平林 初之輔	武者小路 実篤	中西 伊之助	大田 卯	中村 武羅夫	馬場 孤蝶	石川 達三	佐々木 信綱	石川 達三	前田河 広一郎	森田 草平	谷崎 精二					
善人になる工夫	〃	明治時代の新聞小説の挿絵	激流を渡る	正宗白鳥の印象	小品 春日	映画と文学	放たれたる犬	〃	年頭偶筆	拾ひ読み	岡山県と政治戦線	創作 幸福へ	大衆文学の侵入性	自殺について	関西では岡山青年	悠然として山を見る蛙	女性と文芸	瀬戸内の頌	彼の出京	奉悼歌	淋しかったイエスの死	悪い善人	馬どろぼう	創作 尾行	長谷川時雨	宇野浩二	広津和郎	久米正夫	卯蔵文士六歌撰 永井荷風 正宗白鳥

五年												四年														
二		一					三		二			九	八	七	六	五		四		三	二	一				
八 一六、一七、一八		一、三 一〇九月六日 二四七回連載 四、五					四 一三		六 八、九 八〇一〇 一三、一四 一九			一、四	一六、一七	六 一六	二	一、二 五 七〇九		二 一〇〇一二、一六〇一八、二 一〇二二、二五〇二六、二八		二 二九		三、四、八、九、一一	一〇八月三日 一八三回連載	一 一 三		
壺井 繁治 中村 星湖 新井 格 青野 季吉		片岡 鉄兵 中西 伊之助 青野 季吉 吉屋 信子 大宅 壮一 秋田 雨雀 昇 曙夢					馬場 孤蝶 小川 未明 平林 たい子 徳田 秋声		正宗 白鳥 倉田 百三 北原 白秋 平塚 らいてう 川端 康成 武者小路 実篤 貴司 山治 菊池 寛			中村 星湖	倉田 百三 佐藤 春夫	有島 生馬 三木 露風	金子 洋文	片岡 鉄兵 石川 達三		徳田 秋声 石川 達三		阿部 次郎 秋田 雨雀		新井 紀一	江見 水蔭 上 小剣 坪田 譲治			
戦線統一の問題 何をか農民文学といふか 総選挙の持つスポーツ性の弊害 文壇の新傾向		女工お吉 春扉を叩く 当来の文学に就いて 異国点影 一九三〇の文壇の動き 反動思想の骨格について ソビエトロシヤの構成派の芸術					中流階級の悩み 人間の否定か社会の肯定か 女流作家について 歳末閑話		我が文学小観 積極道に就て 民謡私論 晩秋断片語 宗教と私 文芸雑感 生活と芸術 最近の大衆文学 プロレタリアの文芸に対する疑問			ロマン・ロオラン会見記	社会制度改造と道徳的意識 詩の用語としての日本語	兄武郎の死につき 詩に就ての感想	民衆を中心とする演劇	清らかな思ひ出 昏瞑		若き女性に与ふ特に文芸に志す人へ 昏瞑		ロシアの文化的施設 薄幸の詩人石川啄木の娘 文学研究者は語学を勉強せよ		運命の戯れ	文武両道劣等 小説 花子の正月 森の中の塔			

三	四	五	六	七	八	九
<p>一 三 一八、一九 二四、三〇 二六</p>	<p>七、八 二〇、二三 二〇 二一 二八</p>	<p>一 九 一四、一五 一三 一一 二一</p>	<p>六、七 一四、一五 一四 二〇、二八、二九 二八 二九</p>	<p>一 四 七</p>	<p>一九 二七、三〇 三〇、三一 三一</p>	<p>二、三、五 四 二 七 七、一二月三二日 一一四 回連載 八 九、一〇 一一、一二、一四、一六 二〇</p>
<p>川端 康成 島崎 藤村 昇 曙夢 横光 利一 白柳 秀湖</p>	<p>花田 一重 山本 克己 新居 格 馬場 孤蝶 室生 犀星 菊池 寛 正宗 白鳥</p>	<p>中野 重治 千葉 亀雄 萩原 朔太郎 高見 順 室生 犀星 堀 辰雄 青野 季吉</p>	<p>谷崎 潤一郎 平林 初之輔 犬田 卯 大宅 壮一 千葉 亀雄 中村 武羅夫 板垣 直子 鹿地 亘</p>	<p>山本 克己 蔵原 惟人</p>	<p>大宅 壮一 萩原 朔太郎 川端 康成 吉行 エイスケ</p>	<p>川端 康成 吉行 エイスケ 中野 重治 山田 清三郎 龍膽寺 雄 吉行 エイスケ 坪田 譲治 高見 順 山本 克己 龍膽寺 雄 高見 順 鍵田 研一 堀口 大学</p>
<p>文壇人としての犬養健氏 前世紀を探究する心 近代都人の心理 新感覚派とコンミニズム文学 生物学と小説</p>	<p>歌人啄木の故郷を訪ねて 打倒芸術派宣言 現代日本の近代性とは何か 中国路の晩春 文芸趣味常識化 文壇混沌時代 演劇と通俗性</p>	<p>反動期の作家生活 新日本文学の母胎としてのロシア文学 先駆者と反対の者 表現技術の方向 芸術派主張と其批判 大衆作品の本体 超現実主義の疑問すこし独断的に！ 自然主義と無産者文学</p>	<p>現代国語文の欠点について 文芸の批評と政策 虚実と迷路 文学青年の社会的意義 自然主義と無産者文学 流行作家の敗亡 プロレタリア女流作家論 学芸消息 小林多喜二氏小樽市の自宅へ帰った 失業の取扱から芸術家を観る</p>	<p>雑誌漫評 芸術作品の芸術性と価値</p>	<p>ブル文学の攻勢Ⅱプロ文学の新展開 文明の情操性 人造人間讃 経済学に於るジャズの勝利 人造人間讃</p>	<p>人造人間讃 経済学に於るジャズの勝利 文学と言葉と 断想二つ モダン百貨店 待望 美しき仮面 活躍すべき新作家 赤色スポーツに於いて 新興芸術派の躍進 活躍すべき新作家 マルクス主義に於ける農業問題の展望 西班牙気質！</p>

六年											
八	七	六	五	四	三	二	一	三	二	一	
一 三、五 七 九 一九 二一、二二 二五 二八 二九、三〇 三〇	一九〇二年三月三十一日 一六 一回連載 二四	二五 二八	一〇 二、三	一四 二四、二五	二四、二五	三 六 二八	五 六 九	一 連載 一〇、一三、一四	四 八 二八、二九 二九 三〇	五、八 九 一〇 二六	二四
柳田 国男 延原 大川 小林 秀雄 馬場 孤蝶 萩原 朔太郎 昇 曙夢 鹿地 亘 堀口 大学 阿部 知二 中條 百合子	尾崎 士郎 林 芙美子	小林 多喜二 川端 康成	前田河 広一郎 伊藤 信吉	阿部 知二 千葉 亀雄 伊藤 信吉 新居 格	堀 辰雄	鹿地 亘 新居 格 平林 初之輔	直木 三十五 坪田 譲治 貴司 山治 阿部 知二	新井 紀一 新居 格 江見 水蔭 龍膽寺 雄	横光 利一 堀 辰雄 鹿地 亘 小林 秀雄 平林 たい子 中村 武羅夫 千葉 亀雄	高見 順 森山 啓 中野 重治 新井 紀一	新居 格
紀行文学の幣 社会思想家としての石川啄木に就いて 詩人の歌に就て 露佛の文学と明治文学の交渉 主智主義の文学論 ―主として詩について― プロークの都会讚美 創作上の方法論 村の肉屋 新文学を支配すべき精神 プロ文学の批評	詩によせて 青春街	階級としての農民とプロレタリアート 女性三題	ゴルキイの面影 プロ短歌の転化	小説に於ける類型的人物 断然尖端的な訪問結婚を説く プロ短歌の詩への転化 アメリカの文学	『超現実主義』其他	文学の面白さ 春の冷情 現代文学に於けるエロチシズムに就て	人生の曙 一九三一年の文芸動向に就いて 拙な自己宣伝 正月の追憶 羅漢を見たために 人類未来記 同志を拾ふ 感想	資本主義の尖端的思想 ウルトラ・モダニズム	女性と認識 パイプの話 映画の文学へ導入は可能か 性格の奇蹟 エロテック文学 読者心理に就いて 好色文学と社会	人間に関する感想 労働・詩歌・音楽 伏字に就いて 彦太は勝った	女性の新形態

八年				七年												
四	三	一	二	〇	九	七	五	四	三	二	一	三	二	〇	九	
一 一三 二二、二四、二七、二八 二四	九、一〇 三一	一	一四 一五、一六 二三	一三、一四	四	二二、二三	一五、一七	三 一六、一九	五、六 二九	二一 二七、二八 二九	一 六	七、八 二五	二 二〇、二二	五	七 一九 二〇 二一 二六、二七、二八 二七 二九、三〇	三一
前田 夕暮 近松 秋江 豊島 与志雄	阿部 知二 伊藤 整	新井 格 直木 三十五 林 芙美子 萩原 井泉水	亀井 勝一郎 秋田 雨雀 前田 夕暮	井伏 鱒二	相馬 御風	横瀬 夜雨	橋本 英吉 伊藤 整	窪川 鶴次郎 小林 多喜二	渡辺 順三 徳田 秋声	山田 清三郎 三宅 花圃	佐藤 春夫 徳田 秋声 小川 未明	阿部 知二 宮本 顕治	立野 信之 徳永 直	阿部 知二	直木 三十五 窪川 いね子 小川 未明 小林 秀雄 北川 冬彦 徳田 秋声 平林 たい子	細田 民樹
春の夕暮情景 西の京の寺々 私生活と作家的精神	文芸時評三月の創作を読み 川端康成素描 叙情・織鏡の作家	春の淡彩 壇の浦 原稿修業 海の正月	創作の不振に就て 文学者の属性 新日本詩の提唱に就いて	『途上』の作者	自信なき現代	童話たち	英文学界の明星 芸術派 — 題材の特異化プロ派 — 作品の概念的傾向	我々の文章は簡単に適確に 既成文学の一特色 最近のブルジョア文壇の動向	観念論と唯物論 文壇のファッション化	中條百合子さん結婚相手は少壮論客 宮本顕治 芸術的逃避と文壇のファッション化 学窓から家庭に帰へる	最後の一片 酒と煙草と 馬車と子供たち	我等を批判する者 三一年度の文壇を顧る	窓 近代学生気質	最近の文壇 或る種の感傷的傾向につき	大衆文芸への批評 プロ文学の世界 読物と社会 文学と風潮 現代フランス文学と苦悶 支那人のダンス プロレタリア作品その類型化について	心境的艺术とパンの無い芸術

九年														
七	六	五	四	三	二	一	三	二	一〇	九	八	七	六	五
八 一三、一四、一六 一五 二五	二三	二五 二七	二	一〇 一一、一二、二四、二七 一二 二二 二七 二九 三一	一九〇 一九一 二〇	三 三、四 九、一〇 一五 二二 二三	四	一一、一二	二	八、九 一一	三、四 六、七、一〇 一八	二 三 五 六、七 八 八、九 九 一〇	一	二五、二六、二七、三一
新居 格 木下 李太郎	川端 康成	龍膽寺 雄 新居 格	〃	新居 格 武者小路 実篤 井伏 鱒二 新居 格 馬場 孤蝶	新居 格 龍膽寺 雄	片岡 鉄兵 武者小路 実篤 久米 正雄 新居 格 馬場 孤蝶 井伏 鱒二 馬場 孤蝶	立野 信之	武者小路 実篤	馬場 孤蝶	近松 秋江 〃	徳田 秋声 江見 水蔭 新居 格 近松 秋江	与謝野 寛 与謝野 晶子 与謝野 寛 与謝野 晶子 近松 秋江 与謝野 晶子 与謝野 寛 与謝野 晶子	〃	江見 水蔭 石川 政雄
鷗外先生 南支の旅 国民の真意を問へ 新支那の農民文学	動物と吉凶	小説の評価基準 初夏の服装	〃	春日獨語 温泉と小学校 春の街を歩く 春雨	農村青年の問題 筑波根詩人 横瀬夜雨を悼む	農村の窮状にいふ言葉なし 新春随想 霽晴れて 文芸復興期か 元日の思山 炉辺夜話 マユといふ犬 〃 河童の話	怪我	大衆文学と純文学	仲秋の名月	新秋の随想 芭蕉翁の旧居 蓑蟲庵を訪ふ	文芸の社会性と個人性に就て 私の行脚 夏の夜 梅松竹	下津井に遊ぶ 〃 美作勝山に遊ぶ 〃 奥津に遊ぶ 夏の風景 奥津に遊ぶ 津山に遊ぶ	〃	挿絵入りの最初の連載小説 それは私が執筆した 啄木の再認識

												一〇年																																	
二	一〇				九			八				七			四	三	一				三	二〇		九		八																			
二	三一	二八	二二、二三	二一	一四	八	一	三〇	二七	二一	一四	二	三一	二八	二七	二二、二三	二一	一九、二〇	一六	八	三〇	二三	一〇、一一	一四	七	二八、八月一日	一三九	三〇	三	三、四	一	二三	二八	二	一	三〇	二六、二七	一六、一七	二、四、六、七						
大宅 壮一	松田 解子	窪川 鶴次郎	吉川 英治	海音寺 潮五郎	浅見 淵	浅見 淵	坪田 譲治	松田 解子	江口 渙	小牧 近江	浅見 淵	浅見 淵	松田 解子	青野 季吉	島木 健作	細田 民樹	三好 十郎	森山 啓	小林 秀雄	江口 渙	中野 重治	林 芙美子	島木 健作	黒島 伝治	島木 健作	橋本 英吉	板垣 直子	新居 格	徳田 秋声	新居 格	山本 有三	久米 正雄	野口 米次郎	青野 季吉	武者小路 実篤	尾崎 士郎	山口 誓子	阿部 知二	村山 知義	高見 順	長谷川 伸	長谷川 伸	川端 康成	杉山 栄	
未梢芸術の氾濫	寒鯉挿絵	新しき私小説	奥州秋の旅、石巻金華山へ	チヨコの話	文芸時評	文芸時評	天保銭	巷の宗教観	文芸賞の問題	バルビュスを語る — 私が逢った頃の思ひ出 —	秋声の裸像今月唯一の傑作か	石川の作品描写にコクが足らぬ	坂のある風景	色紙の禁	獄中の歌	十和田湖礼讃	新劇台所更生案	批評家不平あり	鎌倉組の夏	僕	作家と肉体	生活之歌ふ文学	読者の批評	白鳥と藤村	大衆の生きた姿を書きたい	倫理の一形式	プロレタリア文学の退潮について	嵐の中の日輪	海	戯曲と小説に就て	愛情の感激	梅花	社会と文学	農村雑感	農村雑感	坊ちゃん	元日のホテル	重量ある文学が欲しい	女優について	文芸時評	空想の空想	仕事に関して	不思議な話	夏	夏の布石

					二年							
五	四	三	二	一	三	二四	二二、二二二	二〇	一六	一四	一〇	六、七
一五、一七	九、一〇 六 一二 一四、一五	二九 二四 一一 四、五、六	二八 二六 二四、二五 二一 一七 一二 三	二九 二三、二四 二〇 一九 一〇 三、六	二七 二六、二七 二一 一六 一五 九、一〇 七 五 二	二四	二二、二二二	二〇	一六	一四	一〇	六、七
大宅 壮一 松田 解子	壺井 繁治 杉本 良吉 立野 信之 江口 渙	松田 解子 " " " " " " A・B・C 大宅 壮一	新居 格 大宅 壮一 新居 格 葉山 嘉樹 江口 渙 小川 未明	壺井 繁治 窪川 鶴次郎 舟橋 聖一 村山 知義 徳永 直 " " 新居 格 坪田 譲治 武者小路 実篤 中村 星湖 江口 渙 菊地 寛	村山 知義 坪田 譲治 青野 季吉 江口 渙 龍膽寺 雄 長田 秀雄 舟橋 聖一 松田 解子 小田 嶽夫 松田 解子	杉山 栄	遠地 輝武	高橋 新吉	村山 知義	新居 格	島木 健作	窪川 稲子
純文学の辿る道 ——作家の自殺が示唆するもの—— 仔猫のミイ子	詩人の仕事と年齢 演劇的空想 春の大島 那須の山々春雨に濡れた山の魅力	春 " " " " " " 知識階級と純文学について 人気女流作家素描 林芙美子 中條百合子 窪川稲子 平林たい子さん其他	塗りがへる 試験種々相 台湾土産 置いてかれたあ 漫画の墮落 町の福引 独立作家クラブの結成について	手に就ての感想 青酸加里 随想 正月の愚痴 一九三六年の新劇界展望 初釣日記 新年の手紙 文壇 人気論 武南倉太君 生き甲斐のある人生 冬から春へ——巴里生活—— お正月お菓子合戦 新婚生活	漱石死して二十年 文壇の過去一年 タコと小鳥 レイ子の秘密 わが宣言 奈良小々景 西湖の辺り ひよこ 徳ッサマスク 仙人掌と共に 文壇の過去一年	架前机辺 秋と啄木歌 秋風の中 新劇と音楽 晩秋雑感 文学志望者の二つのタイプ	僕の感動 近頃よんだ作品について 破れた海水着					

三年									
一	三	二	一〇	九	八	七	六		
一 四 一 一 一 五	九	八 一七、一八 二一 二六 二八 二九 三〇	四 五 六 八 一九、二五	一 二八 二四、二六 二九 二九 二九 七四回連載 三〇	二、三	三 一四 二九、三〇	六、七 一四、一五 一九 二七	一八、二一	
内田 百閒 近松 秋江 青野 季吉 新居 格 尾崎 士郎 萩原 朔太郎 窪川 鶴次郎 〃	秋声・白鳥・秋江	堀木 克二 伊藤 永之介 坪田 譲治 高浜 虚子 横光 利一 尾崎 一雄 高橋 新吉	金子 光晴 井伏 鱒二 外村 繁 〃 新居 格	深尾 須磨子 吉川 英治 新居 格 新井 紀一 新居 格 徳永 直	新居 格 青野 季吉 浅見 淵 新居 格 〃	細田 民樹 青野 季吉 林 芙美子 細田 民樹 青野 季吉	貴司 山治 新居 格 〃	坪田 讓治	
うぐひす 田家の雪・都会の雪 政治の現実と意識軍部が政党的鼻面を 文明批評の再考察 騎士の幻影 今年度の文壇思潮卑俗主義への抗争 依然たる脆弱性 一月の文芸時評 横光の作品 一月の文芸時評	ラヂオ小説 漱石の思出 名作をヴァラエテイ風に放送 P・C・L諸優出演	明治文学の残存者 ヒューマニズムの今後の発展性	十月の文芸時評 「習俗記」その他 作品の発展性 夜霧 御隠居さん 旅つれづれ	秋と自然 九月の文芸時評 高見順の作品 少年の日の夢 十月の文芸時評 現代のヒューマニズム文学 「新潮」十月号を読んで 創作三篇 地に盈つ春	島木氏の作品 八月の文芸時評 文芸時評 芥川賞の再評価 芥川賞の二作品	日食観測と国際的協力 文学雑感―更にふてぶてしく― 卓を囲みて文芸縦横談	成り損ねた鉄砲鍛冶 文壇的評論 ―時事を拾って― 東京の夏 処女性の尊重 過度に失しなかったか？	緑陰偶語	

一三年													
一	三	二	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
一	二八、二九 二五〇二七 二〇四	一一、一三	一五 八〇一〇 四 三	五、六 一	三〇、三一 一四 六 二、四	一七 六、七、八	一三、一五	二五 一九、二〇 二一、二二、二四、二五	二七、二八 六 五 三 二 一	二〇、二一、二三	二八 二七 二六 二四、二五 二三 二二、二三	一、二 三、四 一六 一七	三一 三〇 一八 一七
吉江 喬松 佐藤 春夫	中村 星湖 馬場 孤蝶	萩原 朔太郎	本多 顕彰 三好 達治 石川 達三	尾崎 一雄 新居 格	坪田 譲治 石川 達三 石川 淳	中村 星湖 "	伊藤 永之介	坪田 譲治 新居 格 武者小路 実篤 葉山 嘉樹	近松 秋江 中村 星湖 伊藤 整 "	坪田 譲治 "	青野 季吉 新居 格 武者小路 実篤 井伏 鱒二	高見 順 川崎 長太郎 徳田 秋声 徳田 秋声	小川 未明 高見 順 "
律気者 非常時局と文芸	ユウモアのある話 歳晚街景 文芸時評 追悼号から	日本文化への新たな途	戦争と文学停止 或る小さな町 女流作家の進出 報告文芸に就て	国民の覚悟 碁のはなし	九月の創作評 啞地藏縁起 中毒患者の文学 白鳥	涼窓雑筆 緑蔭随想釣り	極楽往生 島崎藤村氏の若葉集以前	深夜晩春 芸術家の資格文化勲章への一考察 健康な地方の新人出現の待望 萌芽を探る	花二題 花三題 洋画と日本画	「普賢」其他三月の文芸時評 ランプ芯織機	外国の動物園 早春の感情 時局と文芸 日本的な物	鶴田氏の屈折小説 小説の皮膚ヒューマニズム愛情に就いて 第四回芥川賞 石川、富沢両氏 文化勲章に就て 浅春随筆 外国の動物園	広津・中條・横光 一月の文芸時評 淳氏の「金」の話 一月の文芸時評 女作家の秘 芙美子と千代 柚子と兄さん

													一四年	
二	三	四	六	七	八	九	二	一	六	七	八	九		
九 一〇〇、一二	一七、一九、二〇 二一、二四	八、一〇 一一	一〇、一二 一三、一五 一六、一九、二〇	二一、二四	一〇、一二 一三、一五 一六、一九、二〇	一〇、一二 一三、一五 一六、一九、二〇	一三、一七	一	八、一〇、一一 一五、一七	尾崎 義秀 中山 一雄	尾崎 一雄	尾崎 一雄		
坪田 譲治 近松 秋江	西田 幾多郎 尾崎 一雄	馬場 孤蝶 川端 康成 井伏 鱒二 尾崎 一雄	岡本 かの子 葉山 嘉樹	松田 解子	小田 嶽夫 立野 信之 三好 達治	相馬 御風 近松 秋江	井伏 鱒二 新居 格	室生 犀星 岡本 かの子 横溝 正史 尾崎 一雄	伊藤 整 坪田 譲治 山岡 荘八	窪川 稲子	窪川 稲子	窪川 稲子		
お祖父さん 雪景色	学問的方法 旅行の夢	閑時小録 野鳥のおとづれ 感想一日集 長編ばやり 感想一日集 私の父とふるさとのない子供ら 感想一日集 感激尽せぬ物 感想一日集 自然に近い子供	はつ夏 水の価値	真珠湾の人々	燃岳登山 馬籠遊記―藤村氏の家― 新秋灯下言	子供の唄 糸魚川から 地方の常時生活 越後の糸魚川からの報告 バタバタ茶 糸魚川から 盲目の垣のぞき 高木さんと望月さん 盲目の垣のぞき 愛国と音楽	夜店の堀出し物 農民文学を語る	創作 結婚前 隨筆 国民的新春 探偵小説 桜草の鉢 ユーモア小説 紋章	北満の印象 阿片吸引者の治療所 郷里岡山 ―大嫌ひの言葉を訂正― 日本の母	ある訪問者	文学的な人生 “かつ消え、かつ結ぶ” 姿	八月芸芸批評 今月の印象 大陸作品と素人の問題 八月芸芸時評 中野、榊山氏ら 日本の山と文学 ―山の観念の変遷― 長編小説時評 保高と葉山の作品 長編小説時評 “石狩川”の弱点		
坪田 譲治	西田 幾多郎	馬場 孤蝶	岡本 かの子	松田 解子	小田 嶽夫	相馬 御風	井伏 鱒二	室生 犀星	伊藤 整	窪川 稲子	窪川 稲子	窪川 稲子		
文学論の低迷	鏡花文学のこと	世界大戦の感情 孟子の仁義と博徒のじんぎ 開拓地通信ペン持てぬ心境	勤勞奉仕の感 泉鏡花を悼む	映画館での感想 勤勞奉仕の感 泉鏡花を悼む	燃岳登山 馬籠遊記―藤村氏の家― 新秋灯下言	子供の唄 糸魚川から 地方の常時生活 越後の糸魚川からの報告 バタバタ茶 糸魚川から 盲目の垣のぞき 高木さんと望月さん 盲目の垣のぞき 愛国と音楽	夜店の堀出し物 農民文学を語る	創作 結婚前 隨筆 国民的新春 探偵小説 桜草の鉢 ユーモア小説 紋章	北満の印象 阿片吸引者の治療所 郷里岡山 ―大嫌ひの言葉を訂正― 日本の母	ある訪問者	文学的な人生 “かつ消え、かつ結ぶ” 姿	八月芸芸批評 今月の印象 大陸作品と素人の問題 八月芸芸時評 中野、榊山氏ら 日本の山と文学 ―山の観念の変遷― 長編小説時評 保高と葉山の作品 長編小説時評 “石狩川”の弱点		
九 一〇〇、一二	一七、一九、二〇 二一、二四	八、一〇 一一	一〇、一二 一三、一五 一六、一九、二〇	二一、二四	一〇、一二 一三、一五 一六、一九、二〇	一〇、一二 一三、一五 一六、一九、二〇	一三、一七	一	八、一〇、一一 一五、一七	尾崎 義秀 中山 一雄	尾崎 一雄	尾崎 一雄		
坪田 譲治	西田 幾多郎	馬場 孤蝶	岡本 かの子	松田 解子	小田 嶽夫	相馬 御風	井伏 鱒二	室生 犀星	伊藤 整	窪川 稲子	窪川 稲子	窪川 稲子		
お祖父さん 雪景色	学問的方法 旅行の夢	閑時小録 野鳥のおとづれ 感想一日集 長編ばやり 感想一日集 私の父とふるさとのない子供ら 感想一日集 感激尽せぬ物 感想一日集 自然に近い子供	はつ夏 水の価値	真珠湾の人々	燃岳登山 馬籠遊記―藤村氏の家― 新秋灯下言	子供の唄 糸魚川から 地方の常時生活 越後の糸魚川からの報告 バタバタ茶 糸魚川から 盲目の垣のぞき 高木さんと望月さん 盲目の垣のぞき 愛国と音楽	夜店の堀出し物 農民文学を語る	創作 結婚前 隨筆 国民的新春 探偵小説 桜草の鉢 ユーモア小説 紋章	北満の印象 阿片吸引者の治療所 郷里岡山 ―大嫌ひの言葉を訂正― 日本の母	ある訪問者	文学的な人生 “かつ消え、かつ結ぶ” 姿	八月芸芸批評 今月の印象 大陸作品と素人の問題 八月芸芸時評 中野、榊山氏ら 日本の山と文学 ―山の観念の変遷― 長編小説時評 保高と葉山の作品 長編小説時評 “石狩川”の弱点		

一八年										一七年																												
六	五	四		二	一	三	二〇		九	八	七		六	五	三	一			七	六		五																
一六、一七	七 五	二九	二二 三	二五、二六	一七 一四	一 載	一 一	二〇	二二 四	二六	二五	三〇	九 五	四	二九	七、八 連載	一 一	九 七	一〇	一 連載	一 一	二〇、二二、二三	二二	一、三、四 七、八、一〇 一二	三〇、三一													
伊藤 整	青野 季吉 "	中村 武羅夫	高見 順	小田 嶽夫	中村 武羅夫	新居 格	大仏 次郎	尾崎 士郎	青野 季吉	上司 小剣	小松 清	中村 武羅夫	岡田 三郎	中村 武羅夫 "	新居 格	上司 小剣	窪川 鶴次郎	河上 徹太郎	林 芙美子	新居 格	上林 暁	中村 武羅夫	新居 格	青野 季吉 "	新居 格	青野 季吉	齋藤 茂吉	板垣 直子	板垣 直子	青野 季吉	新居 格	廣津 和郎	打木 村治	青野 季吉	井上 友一郎	上林 暁	中野 重治	大鹿 卓
戦争小説の考察	戦う法隆寺 米英の人獣主義	火災防止	南方人の日本渴仰	女流文人の登龍門 樋口一葉賞創設	日本人 バーモ長官の印象	総力戦に重点主義	愛火	陣中正月元旦	信念と明識	軍人援護の意義	近代の超克について	大いに私学を興せ	不振の文学界を衝く	印度問題の牽引力	日本精神の昂揚	大行政区制	文学報国会の性格について	読者に対する指導性	田園日記	文化人論	国民生活の自粛	作家の才華と"旅愁"	翼賛選挙	文化生活と卑俗性	三月創作 評雑陣	一月論壇	精神の審判誤たず	女性と生活問題	新年頌	正月と神代精神	健康な春	馬山老人 ―旅で逢った人―	事変以来の文学 戦争文学から国民文学へ	文学の故郷 蘆花公園を訪ふの記	最近の長篇小説	わが文学雑談	国民娯楽と教養	

二〇年	一九年								
	七	六	三	二	一	三	八	七	
	二 一〇月二二日 八二 回連載(病気ゆえ中断) 二二	三〇 二八、三〇、七/二	一八、一九、二一	七、九 二〇、二二、二三、二五	一、二	七、八、一〇、一一 一一	二六、二七 二八 二九	二四 二三 三〇	一〇月三〇日 一五二 回連載 二〇
	武者小路 実篤 片岡 鉄兵 谷崎 潤一郎談	谷崎 潤一郎談 井伏 鱒二	間宮 茂輔	阿部 知二 片岡 鉄兵対談	山口 誓子 片岡 鉄兵	新居 格 大仏 次郎	阿部 知二 石川 達三 木村 毅 嶋中 雄作 久保田 万太郎	村松 正俊 円地 文子 新居 格	木村 毅
	お百姓 大空へ 老樹繁る	老樹繁る 私の菜園	生産と娯楽	支那のたたかひ 航空戦と設計上の苦心	海上日出 三人の小姐	緩急の弁 十二月八日前後のこと マラッカにて	大東亜文学者大会の印象 大東亜文学者大会の印象 大東亜文学者大会の印象 第二回大会に列席して	島崎藤村氏訃報 東亜文壇の哀惜 藤村翁葬儀は廿六日執行 逝ける島崎藤村翁を偲ぶ 「破戒」「春」「家」と机 芸術使徒の不滅の指標	無敵空軍 武力戦第一 日本の母の矜持 文化と風俗

第三節 杉山栄と『淋しかったイエスの死』

一

『淋しかったイエスの死』は石川達三文学中、活字になった最初の作品である。『淋しかったイエスの死』の発表は「山陽新報」（「山陽新聞」の前身で、明治一二年一月四日創刊）主筆の杉山栄の回想記「習作時代の石川達三氏」（『石川達三集』『昭和文学全集』第二巻、昭和三六年一〇月、角川書店）によれば、ほぼ次のようであった。

この時代、地方紙の掲載小説といえば、通信社から共通の原稿を買うのが慣わしであったが、私はこれに不満で、清鮮な新進作家の新作を載せることに努めていた。（中略）身边に新進作家を探し求めていた際、たまたま見つけたのが達三氏の短編小説の原稿であった。一読して「これは素晴らしい」と思い、早速、掲載を始めた。この時代、夕刊三面の頭には絵入りの大衆小説を載せ、一面の下段に純文芸作品を掲載するのが各紙共通の編集方式であったが、達三氏の短編は十一回ばかり一面の下二段に載せ、湧くような好評を博した。（中略）今はすっかり忘れてしまったが、キリストのことを書いたもので、非常に含蓄のある題目がつけられていた。

杉山氏の以上の記述を踏まえた上で、久保田正文も次のように記している。

大正十五・昭和一年（一九二六）二十二歳

春、『大阪朝日新聞』懸賞小説応募作「幸不幸」執筆。三十枚ほどの作品で二週間くらいかけて書いた。

小説

「寂（4.4）しかったイエスの死」——『山陽新報』（岡山市発行）に、夏頃十一回ほど連載。

活字になった最初の作品。同紙主筆杉山栄の推薦による。（「石川達三年譜」『新・石川達三論』昭和五四年一〇月、永田書房）

以上みてくると、『淋しかったイエスの死』がどのようにして活字になったかが、ほぼ判明する。杉山栄が石川達三と「深く（中略）交り始めたのは彼の早大在学中のこと」であった。杉山栄と石川達三の「家とが接近していた関係など」からである。早大を卒業し、「古い歴史を背負い、且つ比較的気品の高い『山陽新報』」の主筆になっていた杉山栄の新聞社へ、彼の手づるをたよって、石川達三が寄稿したものの「栄氏の嫁にあたる杉山善子さん（七〇）＝岡山市大和町＝は『石川さんは家が近かった関係で、養父あてによく原稿を持ってこ

られたり、郵送されていたことを養母（千代さん、故人）から聞いたことがあります。』（「デビュー作は昭和二年」「山陽新聞」平成五年三月二三日）」と想像される。それが、「身辺に新進作家を探し求めていた」当の杉山栄の意志と合致し、「たまたま見つかったのが達三氏の短編小説の原稿であった」のだ。

こうして『淋しかったイエスの死』は「山陽新報」に掲載された。

杉山栄は「十一回ばかり一面の下二段に載せ」たと記しているが、実際は「上」、「下」の二回連載であった。「十一回」連載で「下二段」ということになるのはほぼ六五枚になるが、実際は一九枚の作品である。これは主筆杉山栄の、記憶にたよった感じが（「今はすっかり忘れてしまった」とある）によるものと思われる。

また、発表時について、久保田正文は、「大正十五・昭和一年（一九二六）二十二歳」の「夏頃」と記しているが、これも事実と相違する。実際は昭和二年一月二四日に「上」が掲載され、「下」は同年同月の三二日である。「夏頃」ではなく冬である。

『淋しかったイエスの死』、一体この作品はどのような作品か、研究はまったくなされていない。

二

(一)

『淋しかったイエスの死』は次の一文から始まる。

イエスの禁欲の生活は随分と長いものだ。然し、それは今日迄のイエスに取つては大して苦痛ではなかった。そして自分から反省して見ても、又他から見ても、彼は布教に奉仕し没頭して居たと思はれた。彼はそれに付ては云ふべからざる満足を感じる事が出来るのだ。――

ここには一般的なイエス像が描写されているが、ただ一か所だけ従来のイエス像とはそぐわない描写がある。それは「禁欲の生活は随分と長いものだ」と、という一文である。『淋しかったイエスの死』はこの一文が伏線となって展開して行く。

「大して苦痛ではなかった」「禁欲の生活」も、「数日前に知った」「自分の最期」が迫るにつれて、「欲情」が「不満を感じ始め」出した。それは「ともすると彼の全身を唯一途な肉欲に胴ぶるひさせる」程、強烈だった。

「入日が真赤に白壁に照りつけ」る中、イエスは花園で、「倒れかゝつて居る矢車草に水をやって居た」マリヤ、マグダリーナのもとへ歩を進める。そして、「花の群の上から女の子を取らう」とする。しかし、マリヤは、「あなたはそんな風になさつちやいけませんわ――」、と拒否する。イエスは「女の去つた後の花園に目を光らせて立つて居た」。「恰も

さうするつもりであつたかのように台所で何かを取落したすさまじい音がしたので、「イエスは「元のイエス」に戻る。しかし、イエスの「情欲はまだ胸のあたりでむづむづして居た」。「『死にたくない——』」そう思うイエスの前に、銀三〇枚でイエスを「敵に売」ったユダが現れる。「恐怖、怒、軽蔑、無念、錯雑した感情がイエスの瞳の中でギラギラと白熱した」。ユダは「走つた」。ユダはイエスから逃れた。イエスは、「『マリヤ—マリヤ—死にたくないんだ、私は死にたくないんだマリヤ——』。彼は小太い□□の幹かんらんに両手でしっかりと抱き附いて、その疎い木の皮に頬をすりつけて泣いて居た——」。

(二)

最期の晩餐の食卓についたイエスとその弟子達はその席からユダを「追ひ出す」。つまり、イエスは「気味悪い程充血」した「瞳」で、「『ユダ！お前は仕事を皆して了ふがい、』」と言ひ放ち、弟子達も彼等の「目」でもって、「ユダとその金袋とを扉の外に追ひ出」したのである。ユダを「追ひ出すとさつとイエスの顔に返つて来た」。イエスは「じつと順々に皆の顔を眺めた」。

しかし、次の瞬間、イエスは、「憂へ」、「嘆い」て、「うるん」だ、そして、「イエスの罪を責めるやう」なマリヤの「瞳」に出会い、「タジタジとなつた」。「背後に控へた死、それがもたらす異常なる静寂、それすらも此の瞳の光にカツと搔き乱されて了つたのだ」。イエスは「扉を開いた」。イエスは「独りで居たかつた」。そして、「此の混乱した心を静めたかつた」。イエスは「黒い幹の間」を「奥へ奥へと歩いた」。

「ほとほとと足音が近づいた」。「マリヤだ」。イエスは、「『マリヤ！』」と言ひ、「ぐい」と「両手に力を罩めた。彼の童貞は彼の胸に、腹に、頭に、ぐらぐらと煮え上つた。真白い、若い、弾力に充ちた肉が声も立て得ずに彼の胸にぶつかつた」。マリヤは「『あ、先生、いえ——』」。『』とそれを拒否し、「『いえ、いけません、なぜそんな、先生！』」と必死に問う。イエスは、「『な、何をしたつてかまふものか、人間は人、人間は、人間らしくさへあれば、それで——それでいゝんだ、それで、マリヤ！』」、と言ひ、明確に「人間」として生きることを主張する。

マリヤは再度言う、「『いえ、あなたは神になる人です、その人がそんな。』」と。それに対し、イエスは、「『神？馬、馬鹿な、神が作つた人間が、その人間が、神にならうとするのは、神、神に背くんだ、私は、人間は、人、人間でいゝんだ』」、と言ひ放つ。そして、「女の手を捕へた。肉塊が再び彼の腕にまつはらうとした」その時、「『私をまた淫売婦になさるんですか！』」、というマリヤの「叫び」がイエスの「耳を貫く」。「水晶の様な鋭いその切先が男の胸を真一文字の切り下げた」のだ。イエスは「突如、現実の己が姿」が「頭に明瞭に閃いた」。

木の湿りの抜けない生々しい新木の十字架が群衆を従へて上つて来た。イエスの弱い肩は此の十字架の下で娘の様にあへいでゐた。環の様に作られた□の冠くわんがぐさとその真白い顔に食ひ込んでゐた。

颯！と皮の鞭が耳元で唸つた。然し、も早力の失せた眼は動かなかつた。唇がピクリと痙攣したのみである。

これは刑場、ゴルゴタの丘へ向かうイエスの姿である。

突如、天空を蔽ひ尽した雲の一角が破れると見るや、稲妻の如き日の光が颯とイエスの蒼白な頬を打つた。と、すつくと立ち上つた彼は、胸を張り、雙の拳を開いて山の腹に突つ立つた。その頬は見る見る紅潮し、熱し、その瞳は永遠の希望を秘めて真直に太陽を見つめた。

そして、イエスの「真紅の唇が突如ひらめく。」「『おゝ神よ！』」。しかし、イエスは「『おゝ神よ！』」とは「再び叫ばなかつた」。『神』への賛歌を「再び」口にしなかつたのだ。

*

「迫り来る死」を前にしたイエスは、それまでの自分を顧みて、「己にあまりにも不忠実であり」、「人間らしい所」が「ほとんど無かつた」と反省し、その反省の上に立つて、わずかに残された時間を「己」に「忠実」に、「人間らし」く生きようと決意する。もちろんそれは、「布教に奉仕」することではなく、「欲望」・「肉欲」に生きることである。その根底には、「人間は人、人間は、人間らしくさへあれば、それで——それでいゝんだ、それで」という思想があり、「神が作った人間が、その人間が、神にならうとするのは、神に背くんだ、私は、人間は、人、人間でいゝんだ」という思想（この思想を、日本の状況下においた場合、神権天皇制に対する一定の批判が含まれているように思われるが、今は触れない。）がある。つまり、それは「人間」として生きることであり、「神」になることへの拒否である。イエスは「人間」であつて、「神」ではない。

作者石川達三は、こうしたイエスの生を通して、イエス即「神」なるイエス像への変更を要求し、「神が作った人間」が「神にならうとする」のは「神に背く」こと、つまり、「人間」は「神」にはなれないことを言ったのだ。そして、イエスが「人間」として生きようと

するとき、「神」は否定されなければならない。「人間」と「神」は共生することが不可能なのだ。イエスは、「再び」「お、神よ！」と「叫ぶ」ことをしなかった。イエスは「人間」として、「淋しく、「死」んで行った。しかも「死にたくないんだ、私は死にたくないんだ」と激しく「泣きながら「死」んで行ったのだ。石川達三はこの「人間」イエスの不本意の「死」、「淋しい」「死」を通して、「神」の否定、もしくは、「神」を拒否したのだ。

三

『淋しかったイエスの死』の主題については「二」で見て来た。それは「神」の否定、もしくは、石川達三の側からする「神」への拒否にあった。この主題は、直接的には石川達三のキリスト教に対する彼自身の体験に支えられている。

石川達三は大正三年、一〇歳の時、母を喪い、大正四年一歳の時継母を迎えるが、その継母が「キリスト教徒」（『私ひとりの私』、『石川達三作品集』第一八巻、昭和四八年一月、新潮社）であったことから、キリスト教のすぐ近くに居た。

私たちは母にすすめられて、教会の日曜学校に通った。私は遂に一度も信仰にはいったことは無かったが、教会に親しみ、キリスト教に関するいろいろな知識を得た。夜の集会で大人たちの祈りや告白や合唱を聞いたこともあったが、私は何かしら自分とは異質のものを感じ、共鳴するものは無かった。ずっと後になって、中学三年生のとき、或る心の渇きを感じて、幾度かこの教会を訪ねたことがあった。その時は信仰を求めような気持があったけれども、私の渇きは癒されず、失望して教会をはなれた。宗教は私には無縁のものようであった。

この冬、私は何回か町のキリスト教会へ通った。子供の頃その教会の日曜学校に通った町と違って、今度は私ひとりだった。友達も誰も居なかった。私は救いを求めているというのではなく、ただ何か人生のより深い真実を知りたいような気持になっていた。神を信じ、信仰にはいることが出来るならば、そうしたいという願いをも持っていた。私はまじめだった。聖書を読み、その深い意味に打たれたこともあった。神戸の教会から著名な牧師が来たとき、その人の特別伝道演説を聞きに行ったこともあった。私は終始熱心に聞いた。そしてひどく感動し、その場ですぐに洗礼を受ける人たちの中に進み入ろうかと思ったこともあった。しかし私は軽率ではなかった。洗礼はいつでも受けられる。私は本当に神を信じ得るだろうか。……その夜は枕の上で牧師の演説を思い出し、自分で検討してみたのだった。

その結果、私は幾つもの疑問を発見し、牧師の演説の中の怪しげな論理に気がつき、その誇張された表現と誇張された結論とに反撥を感じ、要するに教会や牧師たちの通俗

さに嫌気がさして来て、あくる朝になると、洗礼を受けなかった自分に安心したものだ。伝道演説を聞いた感激はたった一晩しか続かなかった。私は自分で信仰を求め、気持をもちながら、遂に教会に容れられなかった。……というよりは私の方が教会の通俗さを受け容れることが出来なかった。私はどちらかと言えば一途に物事を信じるた、ではなくて、事ごとに先ず疑ってみる性質の人間であるらしかった。結局私はキリスト教を知識として受け容れただけであって、宗教として受け容れることは出来なかった。私は信仰とは縁の遠い人間であった。（『私ひとりの私』）

ここには、「教会や牧師たちの通俗さ」に対する批判者、「一途に物事を信じるたち」ではない、「事ごとに先ず疑ってみる性質の人間」がいる。

『淋しかったイエスの死』の基底にはこうした石川達三がいるのだ。

*

『淋しかったイエスの死』以後、「信仰とは縁の遠い人間」石川達三は、「先ず疑ってみる」ことを武器に、その作家活動を確立・展開していくことになる。かかる意味において、この『淋しかったイエスの死』は、石川達三文学の出版を告げる記念碑的作品であると同時に、どうしても一度は書かれなければならない作品であったのだ。

『淋しかったイエスの死』は、女性にたいするイエスの情欲を描いた作品でもあり、継母の導きによりキリスト教の洗礼を受けようとして思いとどまった石川達三の体験と通じている。絶対者（神やイエス）を絶対視することなく、その内部に人間的なものを見出し、絶対者をも相対化する姿勢を示したものである。そこに、杉山栄（早稲田大学の在野精神、社会派、批判精神）の影響が考えられる。

第四節 杉山栄と『彼の出京』

『彼の出京』は昭和二年三月一日から二五日まで、都合九回にわたり、「山陽新報」(「山陽新聞」の前身、明治二十二年一月四日創刊)紙上の「創作」欄に連載された作品である。『彼の出京』は石川達三初期作品の一つであり、これまで、その存在が知られていなかった。以下、作品の展開に沿って読んでみよう。

一

(一)

次の文章は『彼の出京』の冒頭である。

荷車は重さうに砂利を噛んでガラガラと門口を離れた。これで家の中はすっかり空になつたのだ。

『彼の出京』は「家の中」が「すっかり空になつた」ところから始まる。「彼」は「大学を卒業」して「ほゞ四年」、「その間、彼は田舎の中学教師として生計を立て、かたはら文芸の研究を為しとげやう」としていた。しかし、「二度田舎へ引込んで了ふと、生活の安易さが彼に何も考へさせなくなつて了つた」のだった。「けれども奥底にひそんでゐる文芸への志はともすると彼の安易な心をいら立たせるのだった。それに耐へかねて勉強に志したのが今度の事になつたのである。文壇には知人も居る。上京すれば何とかならなくはあるまい、さうした、言はゞ漠然たる前途であつた」のだが、「友人からのすゝめもあり、一寸した謀反気も手伝つて、妻と子は一時郷里の親元へあづけておいて、二三年後に引取る事、上京して郊外の兄の許に一時身をよせる事」にした。

「全部をうちあけ」られた妻は「退嬰を主張した」。「人から尊敬されて納まつて居る田舎教師で彼女には満足だつた」からである。

(二)

「彼」は「不安ではあるけれども希望」のある「以前に久しく住んだあの帝都の地」をめぐらして出発した。車中、「彼」は「食堂車」で「ゆつくりと熱い味噌汁」をすゝりながら、「一人つきりの俺だ」——彼は愉快だつた久しぶりに週圀マヤのくびきからすっかり脱し去つた彼は身体中に学生の血が復活するのを感じた」のである。

(三)

「『よう、唯今——。』」「彼は「兄」の家に着いた。「兄」は「嫂」と二人きりで此の目黒在にずみ分と貧しい暮しをして居た。「彼」は、「才はあり乍ら不遇な兄にひそかに同情の念」をもっていた。「彼」は「『散歩して来る。』と言ひ残して、夕食がすむと直に兄の家を出た」。「浅草へ行つて見やう——さう思つた」。「此の五六日の心を誤魔化す為に、何処かしら賑やかな所へ行つて我を忘れたかつた」のである。

(四)

浅草で「どうした拍子か、ポイと群衆から投げ出され」、「ふと吾に返つてあたりを見廻した」所、「こゝには来た事がある——ふとさう思つた。すると、過去と言ふ蓋が急にポコリと開いて、何もかもが一度に目の前にガバツとはね出された」。すると、「苦いとも甘いともつかぬ曲んだ微笑が斜に彼の唇をかすめた」のである。「彼」は「(栄子に逢つたんだ——)」、「(さうだ、どうして居るかなあ)」、と思う。そして、学生のところ「ほゞ半ばかりもの間、二三日目位にはきつと紅茶のみに行つた」ことのある栄子のところへ、「(行つて見やうかな——)」、「(だが、もう居ないだらう)」。さうは考へたが、ビールでも飲んででもいゝと思つて、彼は栄子の事を考へ乍ち少しづゝ人波のうすい方へ外れて行つた。

町角を曲つて、もう無くなつたかなと思つた裝飾電灯がやはり前の通りに輝いてゐるのを見ると、一時、航海の後の母国の様な、帰るべき所へ歸つた様な氣になつた」。

「栄子がまだ居た——それがより大きな期待のよろこびを彼に与へた。どう變つて居るか自分を覚えて居るかどうか。それが異常な興味だつた。

然し、忘れて居ればいゝに——と、さうも思つた」。その上、「うすぎたなく汚れた繻帯が女の左眼をボツタリと蔽うて居る」。「最初に浴せやうとしたほゞゑみがギユツと口元で消えて了つた」。「彼」は「此処に来た事をくやんだ。こんな栄子を見る為に、わざわざ幻滅を感じる為に出かける必要がどこにあつたらう」。

(五)

「帰ると兄達はもう寝支度をして居た」。「兄」は「嫂」に新聞社を「止めた」ことを「しつこく」責められている。「一人の兄と一人の弟、その妙に侘しい運命が、細雨の中をたゆたひ乍ら動いて行く白い煙の様にしみじみと泣きたかつた」。

翌日の午後「妻」にあてて手紙を書く。「悔」と「妻」を「恋しく」思う内容であつた。

※

『彼の出京』を以上のようなものとして読むならば、それは「文芸への志」、作家へのやみがたい決意を描いたものとして理解できる。しかもそれは「中学教師」を止め、妻子を実家へあづけ、新聞社を「止めた」兄のもとへという形での出発であった。

二

『彼の出京』における「彼」の作家への出発は苦渋に満ちたものだ。

ところが、久保田正文『新・石川達三論』（昭和五四年一〇月、永田書房）所収「石川達三年譜」によれば、石川達三の作家への出発時は次のようであつたらしい。

昭和二年（一九二七）

二十三歳

三月 早稲田大学第二高等学院卒業。学費がつづかず、大学を断念してフィリッピンへ渡ろうとかんがえているところへ、『大阪朝日新聞』応募の短篇小説入選がきまり、二百円の賞金が入つたので、思いなおして、四月英文科へすすんだが、一年で中退せざるをえなかつた。

八月 東京市外長崎村（現在の豊島区长崎町）で、友人二人と自炊生活をはじめた。

昭和三年（一九二八）

二十四歳

五月 電気業界に関係のある雑誌社、国民時論社（社長、竹内氏）に入り、『国民時論』編集記者になる、初任給四十円。才腕を認められ、二か月続けて十円ずつ昇給。『国民新聞』に勤めていた次兄悌次郎夫妻の家に同居して、緊張した文学修業の時期であった。ゾラをよみあさり、ワイニンゲルの『性と性格』の思想に学んだ。小説を書いて、『改造』や『中央公論』へ持って行ったが、なかなか採用されなかつた。

つまり、出発時（昭二、三年）における石川達三は国民時論社（久保田正文は「電気業界」に関係のある雑誌社」と記しているが、「国民時論」第一巻第一号（大正一五年七月一日）の「本誌の主張」をみると次のようにある。「産児無制限、国民人格、国民信仰、国民致富、国民経済、国民産業、国民教育、国民文芸、国民美術及美術工芸、国民園芸を徹底的に向上改革することを期す」。したがって、「電気業界」とは、あまり、「関係」ないようである。）の編集記者であり、石川達三が「同居」していた次兄悌次郎は「『国民新聞』に勤めていた」。しかも、石川達三は二三、四歳の独身だったのだ。これは『彼の出京』の彼と齟齬する。したがって『彼の出京』において、「彼」に世帯を持たせ、安定した生活を否定させ、失業中の兄の家へ居候させたことには作者石川達三の確固とした思想が込められていたと考えられる。

彼が大学を卒業してからもうほゞ四年になるのだが、その間、彼は田舎の中学教師として生計を立て、かたはら文芸の研究を為しとげやうとしたのだった。けれども、一度田舎へ引込んで了ふと、生活の安易さが彼に何も考へさせなくなつて了つた。

石川達三は「生活の安易さ」が、「何も考へさせなく」させてしまうことを知っていたのだ。「安易」な「生活」が「文芸への志」を殺してしまうことを知っていたのだ。

『彼の出京』発表直後、親交を深めたという「山陽新報」主筆杉山栄が「水とパンとでやる決意があれば、きつともものになる」と激励したというが、『彼の出京』は杉山栄の助言と一脈相通ずるところがある。このときすでに石川達三は「水とパンとでやる決意」を固めていたのだ。『彼の出京』は、安定しつつも希望のない田舎の生活を捨て、不安定ながらも希望のある東京の生活を選択する主人公を描いている。主人公に社会的なまなざしをもたせ、中央で活動する志をもたせたのは、杉山栄の影響を受けていたことによるものと考えられる。かかる意味において、『彼の出京』は作家石川達三の誕生にとって記念すべき作品であった。

第三章 早稲田への入学と〈社会派〉石川達三の形成 ——『放たれたる犬』——

早稲田に入学してから、石川が周囲からどんな影響を受けたのかは明らかになってはいない。ただ、かつての自然主義の牙城であった早稲田の存在を考えると（その対極に「三田文学」の慶応や「白樺」の学習院）、社会的な意識を強くもった者が石川の周囲に多く存在していたであろうことは想像に難くない。また、石川が早稲田に入学した昭和二年は、プロレタリア文学が内部分裂を起こしていた時期でもある。周囲にそのような論争がある中で、石川がひとり無関心でいるはずもない。

この時期の石川も、故郷の「山陽新報」に小説を投稿し続けた。『放たれたる犬』は「山陽新報」（「山陽新聞」の前身、明治一二年一月四日創刊）昭和三年二月二七日に発表された作品なので、石川が早稲田に入学してからほぼ一年たとうとしているころに発表された作品である。これも青木による新たな発掘作品である。

石川達三における昭和三年は、久保田正文の「石川達三年譜」（『新・石川達三論』昭和四年一〇月、永田書房）によれば「小説を書いて、『改造』や『中央公論』へ持って行ったが、なかなか採用されなかった」時だったらしい。たしかに、「『改造』や『中央公論』」には「採用」されなかった。したがって、この昭和三年、石川達三に文学活動が全然無かったかという点、そうではない。地方紙だが発表する機会には恵まれていた。それが「山陽新報」だったのである。石川達三の『放たれたる犬』が発見された今、久保田正文の「石川達三年譜」における「昭和三年（一九二八）」の空白部分は補われなければならない。

ところで、『放たれたる犬』はいかなる作品か。まず、その辺をあきらかにしながら、出版期における石川文学の本質に迫ってみたいと思う。

一

次の文章は『放たれたる犬』の冒頭である。

彼は法律に依つて保護されて居ない、故に法律に依つて縛られて居ない一匹の野犬であつた。野犬であるからには親も分らなければ産れた場所も分らなかつた。

主人公は「野犬」。その「野犬」が「法律」とのかかわりで描写されている。つまり、主人公「野犬」は「法律」に「保護」されていないが故に、「法律」にも「縛られ」ず、「親も分らなければ産れた場所も分ら」ない、一匹狼なのである。これは何を物語るか。それはこの『放たれたる犬』が寓意小説だということだ。まず、こここのところを確認し、以下、作品の展開にしたがつて読んでみたい。

「法律」によつて「保護」されていない主人公の「野犬」は「法律」によつて「縛られて」もいない。

この「野犬」は「何歳であるか分らない」が「立派に生長」した「大形の雄犬」である。そして「野獣の獐猛さと野獣の賢さと野獣の健康さ」をもち、「思ふが儘に山野を馳つて腹を満たして居た。落葉の上、叢の陰に眠つた」。

この「野犬」が「雪の積つた風の寒い」「或日」、「郊外のある家の庭に、食物を探しに歩いて捕へられ」てしまう。「主人は会社員」。「細引で首から胸迄縛りあげて、扱縁の柱につなぐれ」てしまう。

「野犬」は「野の食物から考へれば決してよりうまくはない」と思うが、「食物を探す事も要らない」し、「唯反抗さへしなければいゝ」ので、「此の家は住み良い」所であつた。主人は「野犬」の「頭を暇つぶしに叩いては、支配者的法悦に浸つた」。

「野犬」は「其後一ヶ月半と言ふものつながれて居た」。

ところが、「或日」、一つのドラマが起こる。「小形」で「美しい犬」が「自分の庭に駆け込んで来た」時、いつもの「野犬」ならば、「猛然として飛びかゝるべき」なのに、「立ち上る事」にも「吠える事」にも、何らの「興味も気力も感じなかつた」のである。「野犬」の「心は乱れ」た。「小形」で「美しい犬」は「野犬」の「形の大きさ」に押されて、出て行つてしまつた。

—自分は林の王だつた。自分は自分の天地を自由に走り、食物を捕へて居た。今自分はさうした何等の労働をも要しない。だが今日の自分の態度は何だ！自分の力は、昔林を駆け廻つた自分の力は今衰へやうとして居るんだ！

「食物を探す事も要らない」、「唯反抗さへしなければいゝ」生活から来る「気力」、「力」の衰えを自覚するや否や、また、一つのドラマが生じる。

「下女」が「野犬」にあげる「飯を皿に入れて持つて来た」。そしてその時、「下女」は言う、「『お待ち！待つといで！』」と。「いつも言はれる此の言葉が、其の日に限つて彼の頭にびんと響いた」。「野犬」は「待つ」ことを拒否し、「縁の下にもぐつて了つた」。「すると下女が又呼んだ」。「腹がへつては仕方がない」ので「野犬」は「又縁の下から這ひ出して食べやうとした」。「下女」が「再び」、「『御待ち！おまちつたら！』」と言ひ、「野犬」の「頭を一つ叩いた」。「—わん！」。「野犬」は「何と言ふ久しぶり」に「腹の

底から怒りに燃えて叫んだ事か。「野犬」は「怒り」を取りもどし、そして、「考へ」た。

一体自分はこんな所で何をして居るんだ。飢える事は無いだらう。だがそれだけで自分は満足出来るだらうか。どこに生活の面白さがある。どこに生き甲斐がある。自分の力は、歯は、足は、そして此の大きな体は、此処に居て一体何の役目を果して居るんだ！すると彼の目には嘗て走った林が浮んで来た。嘗て眠った草陰が浮んで来た。美しい小川が流れて居た。幅四五尺の川には清水が流れて居て、いつでも喉をうるほす事が出来た。

林には鳥が居た。兎が居た。木の下には厚い苔が蒸して居て、木の葉を洩れる日光を浴びて一眠りするのには恰好の場所だった。天気の良い日には毎日の午後をそこで暮して居た。林の外れの岡には季節毎に花が咲いて居た。

さうだ、あの小川に向ふに狐が居るのを見つけた時、疾風のように小川を躍り越えると忽ち前足である黄色い横腹を押へつけて、噛み締めた顎の間で首の骨ががくがくと折れた。

自分は一体此処で何の為の惰眠を貪るんだ！自分は生れた時からもう自分で働いて自分で食ふべき野の獣だったではないか！此処は自分の住むべき所ではない！

「野犬」は現実の生活を「飢える事は無いだらう」としながら、「それだけで自分は満足出来る」か、「どこに生活の面白さがある」、「どこに生き甲斐がある」、と問う。そして、「此処で何の為の惰眠を貪るんだ」、「自分は生れた時からもう自分で働いて自分で食ふべき野の獣だった」、「此処は自分の住むべき所ではない」という結論に達する。そして、「立ち上らう」としたが、「何と言ふ足のだるい事か！何と言ふ気力のない事か！」

そこで、「野犬」は再び「考へる事」にする。

「結局かうして居る方がいゝのかも知れない」と「考へ」る一方、「自分の生活は此のままで終るのか、さうした淋しさがふと胸に迫つて来た」のである。

此の黒褐の毛の中にうごめいて居る活動力をどうしたらいゝのか。それが彼には分らなかつた。

力あり勇氣あり健康なる者に取つて、その力を外界に向つて出す事の出来ない生活を与ふる事は天理に反く。

天理は兎もあれ自己の意志に反く。(中略)——あゝ活躍！野の生活！自分は元来野の獣なんだ！闘ひつゝ生きる者なんだ！

「野犬」はようやくよく本来の自分をとりもどす。

「野犬」が野性をとりもどした「その夕方」、会社から帰った主人が「妙にここにこしなから彼に近づいて、ステツキの先でコツコツと彼の頭を叩いた」。「野犬」は「憤然として縁の下に潜った」。主人は「『おい。出て来い』」、と言いつつ、「綱を手ぐつて彼を縁の下から引き出した」。「『こいつしぶとい奴だ！』」、と言いつつ、「ステツキでいやと言ふ程彼の頭を叩いた」。

「野犬」は「野の獣」である。「保護即ち束縛たる法律の手を放れた野の獣」である。「憤激は彼の胸を打ち彼の四肢は勇躍した」。「『わん！』」、「腹の底から彼は吠えて飛びかゝった」。「綱はふつりと切れて彼は野に放たれた」。「ステツキを振り上げた男の手首に彼は勇躍して噛みついた」。

「忽ち彼は身を翻して生垣を躍り越えろと野の道を目散に走った」。

——今こそ自分の力を振ふべき時が来た！自分は野の獣だ！あゝ天地の広さよ、野の美しさよ！今こそ俺は俺の力を信ずる！

「野犬」は「首を上げて西に落つる夕日を望み、扱故郷の林へと一散に走った」。

※

人間に捕えられ、一度は安易な生活に甘えようとした一匹の「野犬」が、かつての野性・かつての自由をとりもどすべく、自らの意志と力で「反抗」し、「解放」を勝ち取っていくこの物語は石川達三文学を考える上で大変興味深い。「放たれたる犬」の結末部、「首を上げて西に落つる夕日を望み、扱故郷の林へと一散に走った」という一文、何と美しいことか。石川達三の視線は「一散に走つて行く「林」へそそがれている。そこは「力」によって勝ち取られた、支配も被支配もない、自由な世界なのである。

この作品は、「力」によって勝ち取られた支配も被支配もない、絶対自由な世界を主題としている。人間にとらえられ、一度は安易な生活に甘えようとした一匹の野犬が、へかつての野生・かつての自由を取り戻すべく自らの意志と力で「解放」を勝ち取っていく物語（主人にとびかかり、噛み付く）。自由・解放の主題は、広い意味でプロレタリア文学に近い作品である。しかも、解放するにあたって武力闘争をも肯定していると考えられるふしがある。早稲田に入学して、石川の立場が一時は急進的な社会派に傾斜したとみられる作品で、石川の生涯を通してみると、この作品がもっとも急進的なものであると位置づけられる。後世、石川は「社会派」と評されることが多くなるが、じつはそのような側面がみられるのは早稲田に在籍していたごく一時期のことと考えられる。

第四章 早稲田退学を契機とした石川達三の変化

——『幸福』『小品 春日』『新たなる風景』——

懸賞金を学資として早稲田に入学した石川であったが、学資が續かず結局一年で早稲田を中退することになった。昭和三年二月に早稲田を中退し、同年五月に国民時論社に入社した。その早稲田中退の直前、昭和三年三月二十五日発行の「ミカド評論」に発表された四編の文学論がある。「文芸雑論」「芸術の変遷」「階級・芸術・其他の雑感」「人間衰亡論序説」である。これらは、青木による新たな発掘論文である。

そのなかでも、文学論「文芸雑論」はこの時期の石川の思想をよく表している。「現今のプロレタリア文学は面白くないものばかりだ。目的意識が強すぎる。まるで、思想論文を讀んでいるようだ」と批判している。一方では、過渡期の作品として多少許容すべきであると擁護する。プロレタリア文学に対する石川達三の微妙な姿勢がうかがえる。

学資不足により早稲田を中退したのだが、心理的にも石川は早稲田から離れはじめていたと考えてよい。石川が早稲田を一年で中退したこと、プロレタリア文学と距離を置き始めた文章を書いていること（石川の急進性が鳴りを潜めたこと）とは軌を一にするとみてよい。この時期に発表された石川の作品に、『幸福』『小品 春日』『新たなる風景』がある。このうち『幸福』は『幸不幸』の原題で早稲田入学前に執筆したものである。早稲田退学を契機とした石川の変化を窺いうる作品としては、『小品 春日』『新たなる風景』に注目すべきだろう。

第一節 「大阪朝日新聞」懸賞小説当選作『幸福』の意味

一

石川達三の初期作品『幸福』の成立について、久保田正文は「石川達三年譜」（『新・石川達三論』昭五四年一〇月、永田書房）で次のように記している。

大正十五・昭和一年（一九二六）二十二歳

春、『大阪朝日新聞』懸賞小説応募作「幸不幸」執筆。三十枚ほどの作品で二週間くらいかけて書いた。

昭和二年（一九二七）二十三歳

三月 早稲田大学第二高等学院卒業。

学費がつづかず、大学を断念してフィリッピンへ渡ろうとかがえているところへ、『大阪朝日新聞』応募の短篇小説入選がきまり、二百円の賞金が入った

ので、思いなおして、四月英文科へすすんだが、一年で中退せざるをえなかった。

小説

『幸福』——原題「幸不幸」が改題され、春の『大阪朝日新聞』懸賞小説当選。のち『群青』という題名の単行本に他の当選作とあわせて集録され、同新聞社から刊行された。平林たい子、川上喜久子、秋山正香らも当選者であった。（『朝日ジャーナル』昭和四三年八月二五日号参照）。川上喜久子の作品は『或る醜き美顔術師』であることを、任展慧が「川上喜久子と朝鮮」（『海峡』五号、昭和五二年一月刊）で報告している。

ここで事実関係を確認しておきたい。久保田正文は『幸福』の枚数を「三十枚ほど」と言っているが、事実は一〇枚前後の短編である。さらに、久保田正文は、『幸福』の発刊年月について、「昭和二年（一九二七）二十三歳」のこととした上で、「のち『群青』という題名の単行本に他の当選作とあわせて集録」されたと記しているが、これは昭和三年の誤りである。なぜならば、『幸福』が活字になったのは『群青』が最初であり、その『群青』は昭和三年四月、朝日新聞社から刊行されているからである。

『群青』「はしがき」に次のような記述がある。

◇朝日新聞社が、昨年二千円（一篇二百円づゝ男子部五篇、女子部五篇、計十篇）の賞を懸けて創作短篇小説を募集したところ、応募総計千九百二十八篇といふ素晴らしい数に達した。この中で男性の手になったものが千五百九篇、女性の作品四百十九篇。本社に於いて厳密な審査を遂げた結果、本書に収められてゐる男子部五篇、女子部五篇、計十篇の作品が選ばれたのである。

◇これ等十篇の作品中、六篇は大阪朝日新聞紙上に連載されて、多数の読者から愛読されたのであったが、あとの四篇は、本書によつて初めて世に発表されるのである。尤もこれは単に新聞紙面の都合上であつて、作品の価値の上には何等差別のあつた訳ではない。

「はしがき」における「これ等十篇の作品中、六篇は大阪朝日新聞紙上に連載されて、多数の読者から愛読されたのであったが、あとの四篇は、本書によつて初めて世に発表されるのである」という記述は、『幸福』の初出が『群青』ではなく「大阪朝日新聞」紙上ではなかったかという疑問を起こさせるが、調査（「大阪朝日新聞」文芸部）の結果、『幸福』は「大阪朝日新聞紙上に連載」された「六篇」の中には含まれていなかった。したがって、『幸福』が最初に活字になったのは、『群青』が発表された昭和三年四月と断定してよい。

ところで、石川達三文学の中、活字になった二番目（一番目は『淋しかったイエスの死』

昭和二年一月、山陽新報の作品『幸福』はどういう作品なのか、以下、発表された時代性を意識しつつ読んでみたいと思う。

二

(一)

次は『幸福』の冒頭、およびそれに近い部分である。

軽い綿の一ぱいに入つたモスリンの蒲団が、彼女の丸勝ちな頤の上で、やはらか相にふくらんで居た。近頃になつて漸く冬の間のあれが直つた彼女の頸から頬あたりの肌が、その蒲団に気持ちよく触れるのだつた。

美知江は、近頃味はつた事の無かつた程に気持ち好い此の朝をしみくと味はつて居たかつた。

彼女は独りで微笑みたくなる程な幸福を感じた。つい先月末迄のあの苦しい立場が、今は雄々しくも打ち勝ち得た一つの難関として、追憶の或る苦しみは幾分はあるとしても、それが今になつてはむしろ、操つたい程なよろこびに変つて彼女の胸の中を踊りまはるのであつた。

ここには、「微笑みたくなる程な幸福」を感じている主人公美知江がいる。しかもこの「幸福」は「つい先月末迄のあの苦しい立場」に「雄々しくも打ち勝ち得た」結果としてもたらされたものである。「つい先月末迄のあの苦しい立場」とは何か。まず、そのへんから見よう。

(二)

美知江は「一度人に嫁し」ている。しかし、それは「彼女が決して自ら、明るい理智の判断によつて進んで結んだ物ではなかつた」が故に、「その生活には自然興味が無かつた」。

それ故、美知江は「前からの友人である秀郎を恋ふる様」になつてしまふ。しかし、「今度の断然たる行動に出る迄には、夫の愛を裏切る事の、忍び得ない苦難」があつた。「嘗て彼女は、毒を盛つた器を乾さうとした。大連の沖で汽船の甲板を彷徨ふた」こともあつた。しかし、こうした「危い時」、「いつも彼女の行動を再考させたのは秀郎の愛」であつた。美知江は秀郎の「愛」によつて、「漸く渦から脱出し得た」のである。

(三)

秀郎は美知江が「夫から離れる事に付ての総べての指図を手紙」で行った。そして、「つい先月の中頃」、秀郎は「両親の前に正坐して、きつぱりと彼等の決心を話して、両親を説得」した。そこで美知江は「自由な御判断を待つといふ風にして置いて、若し御許し下さるならば、美知江の籍を送つて下さい」という手紙を「夫」に出すが、「夫」からの返事は「四月の十日頃になつても来なかつた。それで、十三日頃に彼女が又手紙を出したのだが、未だに何の便りも無い」。美知江は「妙な心細さ、不安さ」の中にいる。

(四)

「産後（子どもは出産後「三日目に亡くなった」）病気になつてから身体がすっかり弱くなつた」美知江は、「『お前のからだがよくなるかと思つてさ。』』と秀郎に連れられて、城の崎温泉へ行く（「『四日も五日も居て良いでせうかねえ』」）。「多忙な家庭の生活から離れて来た」美知江にとって、「此の静かな時間は瞑想の時間だつた」。「遠い海の彼方で独り淋しく眠るであらう前の夫が、何とはなしに可哀想に思はれた」り、「前の夫」が「彼女の帰宅を望んでむしろ哀願して寄来した手紙の事等」が思い出されて来た。

——貴女が三年過した古巢を一度去つたからとて決して忘れる事はないと信じます。貴女はきつと私の手に帰つて来るでせう。それを信ぜずには居られないのです。私は其の後毎日の様に教会に通つて居ます。私の様な頑固な男の心に宗教心が芽を出して来ました。あなたなしに暮す事のさびしさに私は神に頼らねばならなくなつたのです——。

「前の夫」が「教会へ行く様になつた」。このことが美知江の「心を暗く」し、「罪の自覚が強く彼女の胸を叩いた」。そして、秀郎との「此の幸福も行先長いとは思はれない様な気」がしてくるのであつた。

(五)

美知江は「自己の運命を考へて見たかつた。此の静かな夜をたつた二人きりで静かに静かに自己の爲して来た事、為さねばならぬ事を考へて見たかつた。そして考へて行けば行く程自らが作つた罪は許されさうには思はれなかつた」。「さうする事（「今その夫を去つて秀郎の手に継ぐ事」）が「『新らしき女』であるかの様にすら考へて、自己を心一ぱいに愛して呉れた夫の許を去つた事、それが悲しくてならなかつた」。「（一人の男を殺した！、恩を仇で返した！、クリストは私を許して下さるまい。夫は神の御許へ走つて行つた！、それに私は神に見放される事をしたのだ！）（恐ろしい女だ！、恐ろしい女だ！）」とつぶやき、

「深い強い良心の苛責の前に泣いた」。「涙は音をたて、トランプの上に落ちた」。そして、つくづくと思う、「人の幸福と云ふものは総べて他人の不幸の上に立つて居るものなのだ——彼女はその言葉を思ひ出した」。

「外では細い雨」が降り出し、夜中なのに「また鶏が鳴き」はじめる。「鶏」の「鳴き」声を聞きながら、「『何だか気持ちの悪いもんですねえ』」と言う美知江の言葉で作品は終る。

※

『幸福』は「『新らしき女』」美知江（「夫を去つて秀郎の手に縋る事」、つまり、「明るい理智の判断によつて進んで結んだ物ではなかった」結婚を破棄し、「痛い程の熱情と情熱」を寄せる「前からの友人」秀郎を「恋ふる」が故、彼の許へと嫁そうとしていること）が、「前の夫」に対し「深い強い良心の苛責」を覚え、「罪」におののくことを通して、「『新らしき女』」の、いわばエゴイステイック（「人の幸福と云ふものは総べて他人の不幸の上に立つて居るものなのだ」という「言葉」を美知江は己の行為を通して、「思ひ出し」ている）な生を批判したのだ。『幸福』の最後は、「細い雨」が降る夜半、「気持ちの悪い」「鶏」が鳴くところで終り、「前の夫」の「不幸」のうえに成立している秀郎と美知江の「幸福」が、やがて崩れていく予兆になっている。

この時期に発表された石川の作品に、『幸福』『不品』『春日』新たな風景』があるが、このうち『幸福』は『不品』の原題で早稲田入学前に執筆したものである。早稲田退学を契機とした石川の変化を窺いうる作品としては、『不品』『春日』新たな風景』に注目すべきだろう。

第二節 早稲田退学と『不品』『春日』

『不品』『春日』は昭和三年四月三〇日「山陽新報」（「山陽新聞」の前身、明治一二年一月四日創刊）に掲載された。石川達三初期作品の一つであり、これまでその存在が知られていなかった。

一

(一)

次は『不品』『春日』の冒頭文である。

子供連れの女客が帰ると夫婦二人丈けの家の中は急にがらんとした。細君が暇に委せて磨き上げた縁に桜草の花が満開だった。

ここにはそれまで元気よく、にぎやかに遊びまわっていたらう「子供」が帰って行ったところからくる「がらん」とした寂しい「夫婦二人丈けの家」がある。時は春、「桜草の花が満開」である。こうしたある日の「夕方」、「夫」が「ぼつとりと口を利いた」。「『あの子は幾つだ?』」。「妻」は「『五つでせう』」と答える。「『いゝ子だねえ』」と「夫」が言い、「『えゝ』」と「妻」がうなずく。そして、「夫」はさらに言う。「『お前子供が欲しくないか?』」。「妻」は「『えゝ、さうね』」と「気のない返事」をする。

(二)

「夫」は「去年の暮に産れた雄犬を貰つて飼つて居るのが近頃めつきり毛色が良くなつた」と思い、「春になるとかうもなるのか」とつくづく見つめる。ちやうどそのとき、「ふ」と「花の香ひ」がする。「沈丁花」である。「夫」は「春の空気を花の香りと一緒にしみじみと呼吸」した。そして、「夫」は「又言ひ出した」。「『お前ほんとに子供が欲しくないか?』」と。「妻」は言う、「『さうね、欲しくなくもないわ』」、「いくら欲しくたつて駄目なんですもの』」と。「夫」は言う、「『だからさ、病院に行つて見て貰つたら良いぢやないか?』」。「妻」は反論する。「『いや。病院へ行く位なら離縁された方がいい位よ』」と。

(三)

「翌朝」、「夫」は「床の下から異様な鳴き声」を聞く。「夫」は「そつと縁から下をのぞき込んだ。そこには黒や斑の四五匹の生れた計りの小犬がクーンと鼻を鳴らして居た」。「夫」は「『おいおい、来て御覧』」と「妻」を呼ぶ。「妻」は「『まあ！ホーシヤの子でせうか?』」と驚く。

春たけなわ、「ホーシヤ」が「子」を生んだのをみた「妻」は「話の口火を見つけた様と言ひ出した」。「『あたし——行つて見やうかと思ふの』」、「『子供が欲しくなつたの——』」と。「夫」は「『何でもいゝから早く行つといでよ』」とと言う。「妻」は「『いゝわよ。行くから。もう黙つてゝ頂戴よいらいらしちやふから——』」とと言う。「夫」は「やがて産れるであらう子供の為に、男の名と女の名を一つづゝ考へて居た」。

二

『小品 春日』には、子どもの出来ないことを悩む夫婦が登場する。夫は妻に病院に行く

ことを勧めるが、妻は「病院へ行く位なら離縁された方がいい位よ」という。古い恥の意識をもつ女性として、この妻は形象されている。その妻が、雌の飼い犬が出産したことをきっかけにして、自分も病院に行ってみると言い出す。この作品は、古い因習を打破し乗り越えてゆく人物に焦点を当てている。『放たれたる犬』にみられたような社会性はすでになく、石川にとつての〈束縛〉からの〈解放〉が早くもこの昭和三年の段階で内面的なものに向かい始めていることを窺わせる作品である。

第三節 早稲田退学と『新たなる風景』

『新たなる風景』は、昭和三年五月二五日「ミカド評論」（ミカド評論社）誌上に発表された、ある夫婦の物語である。これも、青木による新たな発掘作品である。

石川達三の作品が最初に発表されたのが昭和二年一月の「山陽新報」紙上の『淋しかったイエスの死』であったから、『新たなる風景』は最初期の作品ということになる。以下、『新たなる風景』を読んでみたい。

一

次は、『新たなる風景』の冒頭である。

新たなる風景は新たなる朝に初まり、新たなる感情は又新たなる肉体から湧き出してきた。それは科学的に言つても極く当然ななり行きであつたかも知れない。何は兎もあれ彼は久しぶりに爽快な気持を懐に一杯に充たして、川べりの草原を歩き乍ら籐のクリーム色のステツキをピユウツと振つた。すると川端の小石の上から鶺鴒が飛び立ち、杖に触れた枯芦が発止と叩き折られたのである彼はこれに勢いを得て、その辺りに群れ立つた枯芦を、一步毎に拍子を取り乍ら飛ばして行つた。

ここには、「新たなる風景」が「新たなる朝に初ま」るように、「新たなる感情」は「新たなる肉体から湧き出して来た」とある。そして、「彼は久しぶりに爽快な気持を懐に一杯に充たして、川べりの草原を歩き乍ら籐のクリーム色のステツキをピユウツと振つた」。「すると川端の小石の上から鶺鴒が飛び立ち、杖に触れた枯芦が発止と叩き折られ」、「彼はこれに勢いを得て、その辺りに群れ立つた枯芦を、一步毎に拍子を取り乍ら飛ばして行つた」。何とも、潑刺たる主人公の「彼」であることか。

彼はこれから帰る事の味気なさを知つて居た。立ち上がると再び川手に向つて歩き出

した。彼の胸の中で、幽かなる解放と、捕へ難き憂愁とが徂徠した。彼は黙々として煙草に火をつけて町の中に歩み入った。

『新たな風景は新たな朝に初まり——』
彼はつぶやいた。然しその言葉は今は彼にとつて何の意味をも持たなかった。

この文章は『新たな風景』の末尾である。ここには、『新たな風景』冒頭部における澁刺たる主人公「彼」の姿はない。あるのは、『新たな風景は新たな朝に初まり——』といった澁刺たるフレーズを、「今」は「何の意味をも持たない」と否定する「彼」がいる。

二

「新たな風景は新たな朝に初まり」という「言葉」が、「今」の「彼にとつて何の意味をも持た」なくなったのはなぜか。『新たな風景』の主題はこの解明にある。

(一)

まず、「妻」の生前における「彼」との生活からみていこう。
妻は彼を肉体的に苛んだ。彼は此の苛みを享受して来た。

妻が健康で居た間、結婚後二年の間、彼は肉体的に妻から苛まれ続けた。そして妻が病気になるると精神的に苛まれ初めた。妻は彼に取つて愛すべき苛酷な行為の貯蔵場であった。妻は彼に取つては大きな束縛であった。彼は此の束縛から逃れやうと努力した。然し彼は一方に於て妻の心を愛し妻の肉体を愛して居た。そして此の愛情が続く間は妻は彼に取つては永遠の束縛である事を考へねばならなかった。彼の心はボヘミアンでバガボンドであったが彼の肉体は此の束縛の中に在つてはピウリタンでサンチマンタルであつた。彼はせめて自分の心のみには自由なる旅を許し度かつたが、それは殆んど失敗であつた。妻は彼の心持をよく知つて居た。

『ね。私が死んだらあなたも解放される訳だわね。』と妻は言つた。

『うん。』

『長い間あなたを束縛したのね、あたし。』

『うん。』

『御免なさい。私、結婚が束縛だつてことを知らなかつたのよ。』彼女の眼の中に彼は涙の前兆を見た。

『さうだ。独身者は結婚を解放の様に考へ度がるものだ。』

『ね。御免なさいね。』彼女は繰り返した。

「彼」は「自由」を欲しながらも、「肉体的」にも「精神的」にも「妻」の「束縛」のもとにあつた。これが「彼」の結婚生活、夫婦生活の実態だつた。

(二)

彼の心の中には、やがて来るべき革命のある事を知つて居た。それは束縛から解放への革命である。然し今になつて彼は、今迄の束縛を続けたい様な漠然とした要求を感じた。

「彼」は、「束縛から解放への革命」が、「妻」の死によつてもたらされることを予感している。しかし、「今」になつて、「彼」は「今迄の束縛を続けたい様」な、これまでどちがつた気持ちも持つようになつた。

「妻」は「口の中で幾度も『あなた！』とつぶやき乍ら冷たくなつて行つた」。「彼」は「大きな束縛が一度に無くなつて了つたのがたまらなく淋しかった。」

然し直ぐその後で、死んで了つた妻が矢張り以前と同じ様に彼を束縛して居ると考へねばならなかつた。女は死んでも、然し嘗て生きて居た彼女は、彼の生きて居る間中彼を束縛して居るに違ひなかつた。彼は此の奇異な現象に驚くと共に、此の束縛から逃れたくも思ひ、又、此の束縛を享樂し度くも思つた。だが彼女は既に一抹の白い灰に過ぎない。そして彼は猶三十に満たぬ若さを持つて居た。

『お静かに——』と彼は自分に向つて言ひ聞かせた。『唯じつとして事の成行きに委せるが良いよ。万事は結局最もさうであり易い結末に行くものであつて、徒らな憂苦は無くて良いものなんだ。死んだ妻は死んだ妻だ。そして俺は生きた俺だ。万事は此の事実を基本としてその進路を進むのみなんだ。』

「彼」は「妻」の死後、「束縛」と「解放」のはざままで揺れ動くが、「彼」はこうして、「彼女」の死に、一応の区切りをつけた。つまり「唯じつとして事の成行きに委せるが良いよ。万事は結局最もさうであり易い結末に行くもの」であるという結論にたどりつく。

(三)

「五日」たつた「今日」、「彼」は「漠然とした憂鬱から逃れて川岸に出て来た。川は早春の風景の中に静寂な流れを続けて居た。それは冬と言ふ暗い穴から解放された、新らしく潑刺たる風景であつた」。

「『新たな風景は新たな朝に初まり——』と、「口の中で繰り返し乍ら彼は土手に上つた」。

そこで、「廿四五の、美しい耳朶を持った彼女」を見る。「彼女」は「××全集の一冊を胸に抱いて、フェルト草履で蓬や嫁菜をほとほと踏み乍ら彼の傍を通つて行つた。「彼」は「女が遠ざかるのに気がつく」と新しい空気を無くする様な取り止めの無い不安を感じて、女の後について歩き出した」。

「彼」は『あの——』と「女」に声をかけた。そして、つづけて「失礼ですが——停車場へほどの道を行つたら良いんですか?」と尋ねる。

「女」は「ふり返りもせず」に、「私についていらつしやい分かりますわ。』」と、答える。「彼」は「『どの方角なんですか?』」と問う。「『どつちだつて良いでせう。その中分るわ。』」と、「女」は答える。「彼」はとりつくしまもない。

「『春は良いですね。』」と、「彼」は言うが、「女」は「『さうですか。私、つまりませんわ。』」と、言う。「『はあ。あなたの御年で春がつまらなくちや困りますね。』」と、「彼」は言う。「『まあ!いくつに見えて?私——おばあさんですよ。』」と、女は答えて「くすりと笑つた」。「『いゝえ。少なくとも僕より若い。』」と、男は朗らかに風景の中で大きく呼吸した」。さらに、会話はつづく。「彼」が何を聞いても、「女」は「秘密よ」を連発、とうとう「彼」は「『女は自分を秘密の中に埋めて、秘密を食つて生きて居る!』」と言う。

「『奥さんもさう?』と女はずばりと言つた」。「『奥さんは死にました。妻の死と言ふものは朗らかなものですね』」と、「彼」が答えたのに対し、「女」は、「『夫の死は悲痛なものですわ。』」と言う。「彼」は「『なぜ?』」と問い、「女」は「『妻の生活に根が無くなるから。』」と答える。

「彼」は「此の女の言ふ事が段々気に入つて来た」。「彼」は「妻」の死が、「束縛」からの「解放」や「自由」をもたらすものでない事を知る。「妻の死と言ふもの」が「朗らかなもの」でないことも知る。「妻」の死は、「生活に根が無くなる」ことを意味していたのだ。

したがつて、「彼はこれから帰る事の味気なさを知つて居た。立ち上がると再び川手に向つて歩き出した。彼の胸の中で、幽かなる解放と、捕へ難き憂愁とが徂徠した」。「『新たな風景は新たな朝に初まり——』彼はつぶやいた」。「然しその言葉は今彼に取つて何の意味をも持たなかつた」のだ。『新たな風景』一編の主題は、「妻」の死が「自由」や「解放」をもたらすものではなく、「生活に根が無くなる」事を意味していたのだ。

『新たな風景』が書かれた昭和三年といえは、三月に全日本無産者芸術連盟が結成され、その機関誌「戦旗」が五月から刊行され始めた年である。その中心人物は小林多喜二や徳永直であった。これに先立って大正一三年に「文芸戦線」が創刊されており、プロレタリア文学は、確実に文壇の一角を占めるようになっていた。この状況下で石川達三の『新たな風景』を読むと、石川達三の意図していたところがよく見えてくる。すなわち、「束縛」か「自由」かの二項対立で捉えがちなプロレタリア文学の価値観から一歩離れ、本当の意味で「解放」とは何かを問いかけたものである。石川達三が社会派と言われながら、プロレタリア文

学の中核に身を置かなかった立場が、如実に表れている。石川達三は一方で、プロレタリア文学を相対化し、距離を置いていたのだ。それは、常に目の前のことを「疑う」という幼少期からの石川達三らしさが貫かれたものとみることができる。そして、『新たな風景』から三年後の「文芸の破壊性に就いて」を契機としてますます石川達三は社会派としての面目を施してゆくが、それはプロレタリア文学とは違う意味での社会派を指向したものとみることができ、その意味で、「文芸の破壊性に就いて」に先立つ三年前の『新たな風景』においてすでに「束縛」と「自由」という二項対立的概念を突き放している点は、注目すべきことである。また、同じ昭和三年二月（『新たな風景』の三か月前）に『放たれたる犬』が発表されているわけだが、ここでも「解放」がテーマに据えられており、昭和三年ごろの石川達三にとって、プロレタリア文学者の渦中に巻き込まれないところで独立自尊の立場で「解放」とは何かを追求しようとした姿を見てとることができる。

第五章 ゾラとの邂逅による石川達三の変化

——『昏瞑』——

ゾラは、明治の末年から日本でもフランス語や英語訳で読まれていたが、大正一〇年ごろから日本語訳が数多く出版されるようになった。石川自身、のちに『経験的小説論』（昭和四五年五月、文芸春秋）においてゾラから影響を受けたことを告白している。その影響を受けた時期についての言及はないが、石川の作品『昏瞑』の内容から見て、昭和三年の後半から昭和四年の前半にかけてのことであつたろうと推測される。ただし、ヨーロッパにおけるゾライズムが自然科学的な決定論（ネガでもポジでもなくニュートラル）であつたのに対して、それが日本に輸入されると日本的な過去・現在・未来の宿命論（ネガティブなもの）へと傾斜していったと指摘されている。

『昏瞑』は、昭和四年四月から五月にかけて一六回にわたつて「山陽新報」紙上に連載されたもので、これも青木による新発掘の作品である。

久保田正文『新・石川達三論』（昭和五四年一〇月、永田書房）の「石川達三年譜」によれば昭和四年の石川達三の文学活動は皆無ということになっている。しかし、実際にはここで論じる『昏瞑』の発表があつたのである。したがつて、ここで「石川達三年譜」は訂正補充されなければならない。

以下『昏瞑』を読んでみたい。

あれは何だ、あの船の中の事は——。彼はそれを思つて居た。帰つて見れば矢張り元の家だつた。元の真暗な生活だつた。そして今度の暗さは、夏子の去つた後の一層濃い闇なのであつた。むしろ帰つて来なければよかつたのだ。徒に腹立たしい氣になつたり、苦しんだり悲しんだりし乍ら、こんな無価値な家庭の犠牲になつて居る必要がどこにあらう。然し彼は又考へた。結局是が与へられた運命なんだ。泣き乍らもがき乍ら逃れられない此の昏瞑、是が与へられた運命なんだ。（中略）いゝんだ。此のまゝでいゝんだ彼はさう考へた。此のまゝでいゝではないか。吾々に与へられた運命を甘んじて受けるがいゝんだ。負ふべき物は潔く負はねばならないんだ。吾々にはいつかは又立ち上るべき時も来るだらう。それ迄はゆつくりと待つがいゝ。たとひ永久に来ないとしても、それをどうする事も出来はしない。そして、それが運命と云ふものなんだ——。

この文章は『昏瞑』の結末部分である。ここには、「昏瞑」を「運命」ととらえ、「甘んじて受ける」心境が示されている。したがつて、『昏瞑』を読む場合、この「昏瞑」を解明すれば『昏瞑』の主題はおのずから明確になつてくるはずである。

『昏瞑』における「昏瞑」は三つのエレメントからなつている。生活苦、知的障害児修の存在、それから、愛する二人の娘の死、とりわけ、夏子の死である。

まず、生活苦からみていこう。

二

仙助の嫁業は八百屋。ただし、店を構えての八百屋ではなく、「荷車」を引いての八百屋である。

白つぼく乾いた町と家々と空と、さうした慰めない風景の中を、彼は又がらがらと野菜車を曳いた。四つ五つ並べた木箱の中には密柑とか馬鈴薯とか青菜とかど積んであって、それ等の上は無雑作に筥を一枚引かけた車を彼は馴れた手つきで曳いた。彼はもう二十年近くもこの商売をやつて来た。彼が裸一貫で此の町へ来てからの事を考へれば、近頃の彼は一と頃よりは余程裕な暮しも出来る様になつて来たのだ。彼が現在の妻を娶り、修が生れ、その直翌年に女の児が生れた頃は彼も貧のどん底であつた。

「近頃の彼は一と頃よりは余程裕な暮しも出来る様になつて来た」とはいえ、「いくら働いても、いくら憔悴しても遂に突破し得ない堅い大きな昏暝が彼を全く閉して居るのを感じ」、あいかかわらず、「貧しい生計が立てられて」いたことに変わりはない。「貧乏からどうしても抜け得ないで、その為に二人の子供迄も失つて了つた」と思い、「二十年近くも八百屋商売の貧しさに埋もれて、真暗な生活に自分の家族を沈めて来た」と思つて居る。

三

「貧しい生計」を立てている仙助に修という「長男」がいる。

長男はもう二十歳にもなるのだが高等小学を卒業する時分から気が変になつて行つた。修は、母親に似て躰は大きかつたし、長男らしい穏和な所もあつたので、一時は仙助もこれからは少しは楽が出来るかとも思つたのだが、もう半年もたつたら卒業と云ふ時になつてから原因はよくは解らないが、撃剣に凝つてあまり頭を叩かれた為だつたのか、それとも何か先天的なものだつたか、段々気が変になつて行つた。その癖、身体は丈夫で、人並以上に食べもして居たが、此処一年ばかり前からは段々身体の自由が利かなくなつて、暗い室の隅に坐つた切りで、殆ど一口も物を言はずに、唯眼を光らせて居るのだつた。食べさせて置きさへすればいゝのだから、修は別に手のかゝると云ふ程の事もなかつたがそれでも修の存在は彼の一家を全く暗くして居た。夏子と三郎と、それに仙助に妻の四人が平和な夕餉の膳に向ふ時でさへも、室の隅に坐つたきりで、目を光らせ乍らもぐもぐと独りで食べて居る修を見ると、どうしても明るい気持で笑ふ事は出来なかつた。

修がさうした風になつてからは、彼等に取つてはほんたうに長い闇だった。仙助は町内での物知りで、よく手紙の代筆を頼まれたり、祭りに招かれたり、橋を架けかへるので寄附金を集めてまはつて呉れと頼まれる等で、町内での正直者でもあり多少の人望ももつて居たが、修があんな風になつてからは、人中へ出るのも肩身の狭い思ひだった。時折何かの会合で一本も呑めば直酔ふくせに好きな酒も御馳走になつて帰つて来て、もう皆が寝て居る室の電灯を点けると、室の隅に厳然と坐つて彼を凝視する、何かしら怨みを含んだ様な光を放つ修の両眼を見つけて慄然とする事もあつた。その時以来仙助は夜を嫌ふ様にさへなつた。自分の子である修の眼を見る事が彼には恐ろしかったのだ。殊に夜それを見るのが恐ろしかったのだ。ある時はそれは猫の様に光つた。ある時は蛇の様に光つた。

仙助の一家に取つて、修の存在は何と云ふ大きな暗黒であつたのか、そして又何と云ふ大きな恐怖であつたのか、其暗黒、その恐怖はずる分と長い間ではなかつたか。

仙助が夏子の風邪の看病のため「濡れた手拭を娘の胸から外し」た時、「若い、弾力に充ちた胸が熱をもつて喘いで居た」。「広げたまゝの胸」を見ていた修が「濁つた、と切れと切れな『えへえへ……えへえへ……』と云ふ笑声」を立てる。「うす暗い隅に坐つて居る彼が、ゆるくたまらなさうに身を揺つて弱い微かな声ではあるが満悦さうな微笑で顔を曲めていた。「冷たい、恐ろしく静かで単調な地下の世界から来る笑ひ」だった。

「『えへえへ——』彼はゆつとりと身をゆすつた。彼は夏子の広げたまゝの胸に見入つて居るのだ」。

四

仙助には一七歳になる夏子という娘がいる。この夏子が「流行感冒」にかかつてしまう。最初は「寝やうかと思つてるんだけど……」という程の軽いものだった。しかし、ごはんも「一ぜんきり」しか食べられない程、だんだんと重症になつていく。医者による「診察」の結果は「肺炎」だった。医者は言う、「此処二三日は余程大事にしないと——危い病気ですからなあ」と。医者の言うごとく、「麗らかな春が此の町の上に遂々やつて来た」時、「最後の苦悶」が夏子にやつて来る。「『駄目です』」と医者は言う。夏子は「十七」の生を閉じたのだ。仙助は「夏子の去つた後の一層濃い闇」を味わう。

五

生活苦、知的障害者修の存在、愛娘夏子の死これらを「暗黒」ととらえる仙助は「それ等が何だ。自分で自分の周囲を暗黒だと思ひ、その暗黒の中にいつ迄も身を沈めて居る必要がどこにあらう。明るみを求めるがいゝではないか。総ての周囲の軛を脱して雄々しく強く立

ち上るがいゝではないか」と思う。さらに、「もうこれ以上自ら苦しみを求めて身を亡す必要がどこに有らう。それよりはむしろ彼は歌ひ度かつた。その小さな身体を船の欄によせて、彼の血潮の中に残つて居る若さの最後の一滴に火を注いで、過去の暗黒の総てを忘れつくして未来の幸福の為に歌ひ度かつた」。「彼は完全にひとりだつた。そしてその独りを享樂し度い様にさへ思つた。妻子が苦しんで居る家へ歸つて行つたとてそれが何にならう。暗黒を求めて家庭に歸る必要がどこにあらう」、と思う。しかし、仙助は「やはり元の家庭に歸つて行つた」。

そして、「結局是が与へられた運命なんだ。泣き乍らもがき乍ら逃れられない此の昏瞑、是が与へられた運命なんだ——」、「いゝんだ。此のまゝでいゝんだ彼はさう考へた。此のまゝでいゝではないか。吾々に与へられた運命を甘んじて受けるがいゝんだ。負ふべき物は潔く負はねばならないんだ。吾々にはいつかは又立ち上るべき時も来るだらう。それ迄はゆつくりと待つがいゝ。たとひ永久に来ないとしても、それをどうする事も出来はしない。そして、それが運命と云ふものなんだ——」と思う。

※

「生活苦」「障害者修の存在」「夏子の死」等を「昏瞑」ととらえ、そこから逃避を考へるが、結局はそれを「運命」とみて、あきらめ、「甘受」するという作品である。どうすることもできない底辺の人間の生活を描いている。その人間描写（障害者修に対する過酷なあつかい）においてゾラの影響がみてとれる。

この考えは、人間が遁れがたい宿命を背負っていると見做すものであるがゆえに、閉塞感や息苦しさを伴うものであったと考えられる。石川がブラジルへの渡航を決断したのは、そこからの脱出を希求したものであった可能性がある。

第六章 石川達三にとつてのブラジル渡航の意味

——『若き都サン・パウロの戯歌』——

前章までに述べたように、昭和三年の後半にゾラの影響を受け（推定）、昭和四年四月に『昏瞑』を発表した石川は、おそらく人間の宿命というものにあえぎ始めたのではないかと考えられる。昭和五年三月に国民時論社を退職し、退職金六百円を受け取って、ブラジルのサン・パウロへの渡航を決断したのは、そのような閉塞感から脱出したかったからではないだろうか。しかし、ブラジルでもあまりいい思いをしたわけではないらしく、わずか半年の移民暮らしを体験しただけで、結婚を理由に日本に戻っている。

『若き都サン・パウロの戯歌』は、石川達三がブラジル、サン・パウロに滞在した昭和五年三月から八月までの五か月間のことを題材にした作品である。その年の十一月にこの体験を執筆し、発表されたのは昭和六年七月の「新早稲田文学」誌上であった。

当時、ブラジル移民には政府から渡航費補助金が出ていたが、それを貰うには家族を構成していることが条件であった。そこを特別に話を付けてもらい、独身者ながら二百円の補助をもらった。ブラジルでは一年間を指定の農場で働くことが条件になっていた、サン・パウロから汽車で一五時間ほど入った奥地のサント・アントニオ農場の日本人の家で一か月ほど滞在。結婚のためという口実で帰国の途についた。八月の末には帰国し、国民時論社の勤めにもどった。

以下、「旅人」石川達三の目に映ったブラジル、サン・パウロはどのようなものであったか。また、ブラジル、サン・パウロ体験は石川達三にどのような影響を与えたか、以下、見てみたい。

一

石川達三はまず、第一章「ぶろろうぐ」で、サン・パウロを「忘れられた、南の果」と位置づけ、「北方文明を風の便り」に聞く、遠く離れた地と位置づける。ただし、「恋と青春と、夜」とに「革命が起る時」、その「策源地」はサン・パウロだという。作者石川達三はこうしたサン・パウロに対し、「夢と憧憬」をつのらせる。

第二章「名誉の失恋」では革命批判を試みる。

「一九二四年の革命」を「懐しの都サン・パウロの今日を築く為の重大な革命」、つまり、たいへん有意義な「革命」ととらえた上で、その「革命」に参加した一人の青年に対し、「その時男は勇敢なる十九歳の兵士」、「若く、美しく、花の如き兵士」、「十六の少女を恋せしめるに足る少年兵士」などと最大限に称賛する。しかし、「一九三〇年」、「革命」が終わった時、青年はこの「革命」によって「跛」になっていた。

彼は、日中と、夜の明るい街とを嫌った。一步毎に上り下りする帽子と肩と、そして曲んだ足の影が、平らな舗道に正確に映るからだ。彼が真直に立ち上れば、美しき街サン・パウロは傾いてゐる。彼が肩の上に正しく頭をのせてゐれば、目の前で大きなビルとビルとが、昔のポンペイの悲しい日の様にゆらめく。

恋人は、「——あの、革命さへなかつたらねえ！」と言いながらも、「——あなたの足いつまでも、治りつこないわねえ。」と言う。女は「男の肩を支へる事に疲れて、暗い所のみを選んで歩くのに飽きて、あの華やかな灯のついた街々を、貴婦人の様に歩いて見たくなり、そして無情」にもそう言つてしまつたのだ。青年は失恋した。作者石川達三はそれを「名誉の失恋」という。「名誉の失恋」を通して、作者石川達三は「革命」を批判したのだ。つまり、「革命」によつて国の隆盛はあつても、「革命」に参加し、傷ついた兵士は救われないのだ。「革命」成就のための犠牲者、傷ついた兵士を通して、「革命」を批判しているのだ。人間すべてが幸福になる「革命」が人間の不幸を作り出している「革命」への批判なのだ。

第三章「ろてりや（富籤）」ではブラジル人の「ろてりや（富籤）」好みや、「夢と現実との区別を知らない」国民性を指摘する。「ろてりや（富籤）」の売り子が「せによる！ どうです、一枚。二ニル、たつた二ニル（五十銭）ですよ。その二ニルに、五万円どせんごこんとすが当るんですよ。」という呼びかけに対し、「（それを売子が自分で買はない訳がどうしても私には分らない。）」と思ひ、次には「（解つた。売子が自分で買はない所を見ると、ろてりやと言ふものは当らないものであるに違ひない。）」と思ふ。しかし、「（ぶらじる人は夢と現実との区別を知らない）」のだと断定し、「ろてりや」好きの「ブラジル人」の国民性を揶揄する。それはまさに揶揄なのであつて、批判ではない。

第四章「かると・で・かな」（「冷した、砂糖黍の搾り汁」で、「白いうす濁りのした、縁色の甘い液」）ではより添う男女の姿が美しく描かれる。

「てれさ」は恋人「じえらるどう」に「わたし、かると・で・かな（冷した、砂糖黍の搾り汁）がほしいの。あなたは？」と問う。「じえらるどう」は「僕はもつと他に欲しいものがある。」と言ひ、それは「そるべち（あいすくりいむ）」だと言ひ。しかし、「てれさ」が「（わたし、此のひとつと結婚して見やうかしら……）」と思ひ、「おだやかな良い声で男の胸の中で言つた」。「わたし、やつぱり、かると・で・かながほしいの。」と。「じえらるどう」は、「今は、あの冷い、甘い、葉緑素の香ひのする飲物を、この女と一緒に飲んで見やうと思つた」。「じえらるどう」は「てれさ」のかると・で・かなが飲みたいという希望をかなえてやる。これは「じえらるどう」の「てれさ」へのやさしさのあらわれだ。恋人たちの愛の美しさをうたつたのだ。

第五章 「日本人街の朝」^{ルア・コンデ}では「ブラジル」における日本人街の様子や望郷の念にかられる日本人の姿が描かれる。

東南に向つて、どこ迄も傾斜したルア・コンデは、理髪店やまもとの角から、日用品直輸入大矢商店の店先の「清酒忠勇」「福神漬」「海苔」「味噌」「山サ醤油」を過ぎて、珍らしくも、“Kani-Shokudo”と言ふ看板を見つける。その隣りが料理店青柳で、そばでも豆腐でもすきやきでも喰へる。

「ブラジル」の「日本人街」は日本と変わらない。「日本人街」の朝、「旅人」は「朝日旅館」^{ベンソン}の窓を開ける。「乾燥季」で「六十日も雨がなない」通りを「十匹の山羊が横に一列に並んで、首の鈴もちやらちやらと、一人の大男の先に立つて、物々しい角をふり、滑稽な鬚をゆるがしながら上つて来る。口笛を吹いて呼び止めれば、新鮮な乳を日向で搾つて呉れて、又、ちやらちやらと坂を上つて行く」。「ブラジル」らしい、のどかな生活風景だ。

また、「山奥の農場の日本人が、久しぶりでさん・ぱうろに出て来て、カーキ色の労働服で、よちよちと坂を下りて来て、古ぼけたトランクを朝日^{ルア・コンデ}の前に下して日本人街を上から下迄眺める。その彼の背に、彼が渡航後何年になるか知らないが、どうしても消し得ぬ、『日章旗』の影を、ちらと見た、と私は思った」のだった。

ここにはブラジルの自然と生活、その中に融け込む日本人移民の姿がある。望郷の念にかられる日本人移民が日本人街を訪ね、抑えることの出来ない祖国日本への思いをわずかに慰めている姿がある。何とも寂しい光景だ。なるうことなら、移民にはならず、日本にいたかったのだ。何とも痛々しい。

第六章 「いびらんが」。「いびらんが」とは私娼窟のことである。

O・S・Kの船が明後日さんとすを立つ。それに乗る為明日はさん・ぱうろを出て、さんとすへ行くと言う男Nが、彼にいびらんがを案内してほしいと言ふので、それでは日本へ帰つての語り草にも、と、その最後の夜、歐洲大戦で本国から逃げて来た、或るべるぎい女の素晴らしい美人の所へ案内した。そして応接間で茶をのんで半時も経つたが、N君、一向に話もなくて、もじもじしてゐた。どうも、此の女の白い美しさに負けたものらしかった。彼、品行方正で、白人を知らなかつたのだ。しびれを

切らして彼はN君に、

——さ、あつちの室へ行き給へよ。

——いや。とN君は、不動の姿勢を取つて言つたのである。

——僕、やめました。僕、やはり、黒人の方が、いゝです。は、明日、さんとすへ行つて、黒人を買ひます。は。

ここには、日本人移民の白人コンプレックスが描かれている。そのコンプレックスは「いびらんが」に対してさえそうなのだから、日常の生活においては言うに及ばないだろう。

また、「自動車で来ないお客は御断り」する「独逸女」がいる一方、「いたりい女の蓮

葉もの」が「——日本人！^{お・じやぽん} チヨットアナタ！」と声をかける。「此の街にゐる日本人の

生活」、つまり、「いたりい女の蓮葉もの」が、「かたこと、の日本語」で話しかける「彼

女の日本語の影に、此の街にゐる日本人ジヤポネーズの生活」がみえる。日本人移民は貧しいのだ。

第七章「大本教」。「窓の外にはおれんじが実つて、その向ふの赤土道を、あゝ、幾組の、幾組の、白い娘達黒い若者達が恋の散歩をしてゐると言ふのに——」、「知識的な美しい顔に、静かな表情をたゞへて、大本の真意を説く」「大本教ぶらじる支部」の「宣教師さま」がいる。「理解し難き不可思議の人と世界」を逃れ、「再び華やかな歓楽の俗世間さん・ぱうろの空気を大きく呼吸」する。ブラジルの国情になじまない大本教が点描されている。

第八章「るあ・きんぜ・で・のぶえんぶろ」では「誰一人、二度と日本に帰らうとは言はない」現実が描かれている。

「日本人街ベシンの旅館ペンシの夜が九時」を過ぎる頃、「日本から来た新聞や雑誌」の「母国批評」に疲れ、「らるご・だ・せ広場の華やかさにひたりに行く」。「大きく扉を開いたかふえの卓に坐つて、苦い苦い、かふえのどろりと濃い味」を味わいながら、「さつきの母国批評の結論が侘しく思ひ出され」、「誰一人、二度と日本に帰らうとは言はないんだ」。

「取り残された一人」は「しねまの前の看板」に見入っている。「北米の資本がどしどし注ぎ込まれて、南米資本家はいじめつけ」られているのを見る。「——若し日米戦争が起るなら、勿論日本の味方をする。等と言ふけれど、（あゝ、貧乏なるが故に同情される日本！）を、思ひ出さずにはゐられない」。「私」はと言えば「遠い地球の果の遊子の身を思ひ出す」。

第九章 「登音（えびろうぐ）」

空には冷たい大陸の風が静かに高い夜空を過ぎていった。「私」はこの暗い大通りを音もなく歩いていった。しかし、「唯一軒の、赤々と灯をつけた大きな宝石屋のしよう・ういんどの前を通った時」、「その光の池の中で、私は冴えた登音をはつきりと聞く。それはあたかも、「私の姿が此の光の池の中に浮び出たと同じ様に、光の中に浮び出た登音」であった。

※

「一九二四年の革命」を「サン・パウロを築く為の重大な革命」と捉えたうえで、「一九三〇年」の「革命」が終わったとき、「革命」に参加した美しい青年は「跛」になっていた。それが原因で失恋する。「革命」によって国の隆盛はあつても、「革命」に参加し、傷ついた兵士は救われない。

この作品の中には、日本への望郷の念を捨てきれない日本人移民の姿、日本を離れても日本人であることは離れられないことを示す白人コンプレックスのエピソードなどを語ったうえで、作品の末尾を、「光」ある未来を感じつつブラジルを離れる（日本に向かう）と結ぶ。すなわち、息苦しさゆえに脱出したはずの日本を肯定的に再評価する方向へ向かう。

第七章 石川達三の転機としての「新早稲田文学」への参加
——『其の白き道を』『射撃する女』『文芸の破壊性に就いて』——

帰国後、石川は国民時論社に戻り、翌昭和六年六月には「新早稲田文学」の同人となっている。この時期に書かれたのが、『其の白き道を』『射撃する女』『文芸の破壊性に就いて』である。

第一節 「新早稲田文学」と『其の白き道を』

一

『其の白き道を』は昭和六年六月「新早稲田文学」に発表された。石川達三が昭和五年一〇月に創刊された「新早稲田文学」の同人になったのが昭和六年六月。したがって、『其の白き道を』は「新早稲田文学」同人石川達三の最初の作品ということになる。久保正文の『新・石川達三論』（昭五四年一〇月、永田書房）の「石川達三年譜」には記載されていない。

以下、作品の展開にしたがって読んでみよう。

二

(一)

『其の白き道を』は四二枚の短編小説である。全体は「墓」、「肺臓の独立」、「反逆」、「老若」、「埋もれて」、「其の白き道を」の六章から構成されている。最初の章「墓」で問題提起、最終章で結論という作品展開になっている。

(二)

まず第一章「墓」では死んだ妻の「墓標」を立てて一週間が経過したことが記される。そして、「十五年の結婚生活」を振り返った時、「五歳の男の子」が「唯一つの証拠」で、それ以外は何の形跡もとどめていないことに気づく。そこで、私は「一体妻とは何であつたか」、「結婚生活とは何であつたか」、「殆んど総ての若い人達が絶大なる希望を抱く」結婚とは、「果して私の為の何であつたらう」と問いはじめ、過去へとさかのぼっていく。

(三)

まず「一体妻とは何であつたか。そして、結婚生活とは何であつたか」という疑問から説明しよう。

私は「新しく吾々の生活が始まつた時」、「独身時代の幻を現実に作り上げ」、「妻と二人つぎりの二人三脚の中」に、「完全なる飽和と融合とを求め」たが、それは実現しなかつた。

私は、「私とお前とはまだ別々に呼吸して居る」と言うが、妻には私の言う「意味」は理解できなかつた。そして、妻は「満足し私は満足」しなかつた。この図式は「最後迄続くのではあるまいか」、と心配し、「夫婦とは私が考へた程強いそして絶対的な約束ではないのだらうか」と思う。

しばらくの間、「満足」について私と妻の間に論議がかわされる。

私は、「『私の一番欲しい物が何だか分るか』」と妻に問う。妻は、「『知つて居るわ。あなたは淋しいのよ』」と答え、私を納得させる。「早く偉くならうと思ふから淋しいんでせう」、「そんなに迄して偉くなつて下さつても私は別に嬉しいとは思はないわ。私は今の儘で一生過せたらと思ふの」と言い、現実肯定の姿勢をくずさない。さらに「私、満足していけないんだつたら、一生不幸で暮せばいいの？ 厭！ 私そんな事分らないわ」という。私はひそかに次のように思う。

（やめた。もうやめた。何も言はない。然し、女とは何と言ふ単純で頑固で馬鹿な代物なんだ！ お前は他の人の考を少しも取り入れる事が出来ない。他の人の生活を少しも見ることが出来ない。さうだ、女と言ふ者は生れた時の儘で墓へ行くんだ。粗悪極まる野性の儘だ。そして私は一生此の野性の暴力に苦しめられるんだ。いや。もう何も言ふまい。結婚とは斯うしたものなんだ。）

(四)

現状維持の妻に失望しながらも、夜ごと「淡紅色のシエードを蔽ふた寢室の灯影で、私は限り無く妻を愛した。（中略）そして其の美しい感情を愛する事は出来たが、遂に其の感情の内容を愛する事は出来なかつたのだ。（思想？ 然し、女には思想は無いのだ。女が思想だと思つて居る事は、実は其の感情に過ぎなかつたのだ。）だから私は常に間隔を感じた」。そして、その「間隔」はうずめられなかつた。それ故、「私は此の欲情の為にあらゆる外界との交渉に背いた。青年時代の勃々たる野心も計画も乃至は主義も（さうだ。その為には幾度か私の理性と理論とすらも枉げたのであつたが。）即ち私の全部を妻に与へ尽して此の世界に全生涯の意義を擲まうとしたのだ。そして妻からも其の全部を奪つた。其の過去と現在と未来と、その肉体と精神と迄も奪ひ尽した。吾々はその家庭の中に閉ぢ籠つて相互に与へ乍ら、丁度小さな箱の中に植えた二つの種の様に、外界と別れた儘で互

にからみ合ひ抱き合つて生きて居た。世界が吾々二人丈けの物であつたかの様に。而も猶吾々の肺臓は、遂に最後迄別々に呼吸して居たのであつた。さればこそ私は、此の融合と飽和とを求むる欲情の世界から、数年ならずして反逆の戦を起さねばならなかつた」のであつた。

(五)

「私は三十を過ぎて居た」。浅猿間しくも自己の欲情を追ふて跪く三十男の髭の生えた面を見つけた。此の一塊の女の肉の中に身を没して、五十の生涯を忘却しやうとする男の姿」、「濁れる本能の中に腐り行く自己」をみつける。

しかし、「妻が言ふ様に、吾々は不幸ではないのだ」と思つたりもする。「十分に幸福なのだ、と思はれもした」。

「俺は幸福が恐ろしいよ。」

「変ね。私は幸福がそりや幸福よ。」

「幸福が俺を蝕む様な気がする。」

「又傑くなりたくなつたのね。」

「結婚と言ふものが私を殺す様だ。」

「あなたは若いのね。」

「俺は独身の時にはもつとたくさんの希望を持つて居た。」

「子供が生れゝば直にそんな事は考へなくなるわ。」妻は微笑して言つた。

「厭だ。子供が生れたらと思ふと俺は死ぬ様な気がする。」

「私、とても子供がほしいの。あなたが不幸な顔をして居て、私の事を考へて下さらない時には、そりや子供、がほしいのよ。」

(女は子供の中に自分の逃げ場を見つける。)と私は思つた。かうした女の生活を私は軽蔑した。然し一方にはそれを羨む心もあつた。完全に世界が忘れられるものなら、私とてもその忘却を望むのだが——。(中略)

(結局——)(中略)

(私の反抗と言ふのは、お菓子を買へなかつた子供の駄々の様に、目的はやはりそれを求める事にあるので、反抗も亦一つの手段に過ぎなかつたのではあるまいか——。)此の考へに答へる様に妻は言つた。

「さうよ。あなたは求め過ぎるのよ。求め得られる物丈けを求めて居ればいゝのに。」

「さうだよ。さうなんだよ。」と私は素直に答へた。今はもう甲斐も無き反抗をやめて、結婚生活の束縛の下に、沼の底の田螺の幸福にあまんで行かうと思つた。

(六)

私が妻に同化した時、「厭だ。子供が生れたらと思ふと俺は死ぬ様な気がする」と「恐れ」ていたことがやって来た。「私は父となり妻は母となつた」のである。「『父』と言ふ名に驚いて私は身の廻りを見まはした」。

「私の皮膚にはひそやかなたるみがやつて来た。(中略) 都会は絶えざる変化の渦であつた。

此の渦の中を悠然として歩む私が居た。あらゆる変化と進歩とに忘れられて、あらゆる社会の動きに置き去りにされて。(父——)(中略) すると私は身のまはりに堅

い鎧を感じた私の自由を束縛する血縁の糸の強さを感じた。

私は失望して、此の鎧を透して外界を眺めた。多くの男達が、多くの仕事に向つてひた走つて居た。多くの事業が日々に進みつゝあつた。

反逆が再び目醒めて来た。束縛に向つて華々しい宣戦を声明しやうとする心が群り起つて来た。妻と子との軛を脱却して、渦巻く社会の闘争と協調との波の中に、一つの事集を目指して此の身を犠牲の祭壇に供しやうとする心が起つて来た。(兎も角も、世の中は欲情丈けではないんだ。濁つた肉欲よりは此の社会への挑戦の方が俺にはずつと良いんだ。)

私はカフェに入つて自分の転換を祝して盃を上げた。(明日からは——)と私は言つた。(此の俺の生活は二倍三倍に広く且つ有意義になるんだ。)

私はそれまでどつぷりとつかつていた「肉欲」を否定して、つまり、妻から離れて、「独身時代」の私をとりもどし、「社会への挑戦」を開始しようとする。

(七)

「社会への挑戦」を開始しようとしたちやうどその時、「子供が急に病氣」になつて「死んでしまう。「今は限り無く子供の生命が惜しまれた」。「『子供が欲しい。どうしても子供が欲しい』」。「『ね、頼むからもう一人子供を産んで呉れ。逆も淋しくて堪らない』」。「『早くもう一人子供を産んでお呉れ。さうしたら又幸福になれるんだから』」。しかし子供はすぐには出来なかつた。「淋しかつたので私は夜の町に出て行つた」。「私は酒を飲んだ」。「暗い辻に立つてゐる売笑婦の誘惑する微笑」に出会つた。しかし、売笑婦は「『あなたは、お爺さんねえ。』」と言つて相手にしてくれなかつた。ダンスホールでも「『厭な事! あんなお爺さん。』」と言つて、踊るのをことわられる。そして、「左翼

政党的演説会」に行つたが、そこでも「『おい！ 押すなよ爺！』」と言われる。三度爺と言われ、私は「もう、明らかに、私の時代ではなかつた」ことをさとする。「其の夜私は寢室で泣き乍ら妻に言つた。『私はもう何処へも行かないよ。決して世の中へ出て行かうとも若くなりたいたとも思はないよ。だから、どうかもう一人子供を産んでお呉れ』」と頼む。

(八)

「埋もれて、家庭を唯一の世界として、其の中に埋もれて、静かに此の生活を続けやう——私は何時の間にかさうした考へを抱く様」になつた。「一人の男の子が五月の花の咲き満ちた日に産れた。私は此の子供を抱いて黄昏の庭を歩いた」。「斯うして、眠るが如き平和の時間が五年も続いた」。私は「唯一たすらに此の輝ける若き生命を愛撫」した。「子供は日毎に大きくなつて行つた。そして妻は次第に衰へて行つた」。「私は「以前の様に妻を求めなくなつた」。反対に「子供への輝く愛情に燃えた」。妻は「結局何時迄も別々に呼吸して居る者」であつた。ついに同化しなかつたのだ。

(九)

私は子供を抱いて私の幼時を思ひ出した。(中略)今私の若い日を、幼い日を、此の子供が繰り返さうとしてゐるのだ。私の生命の続いて居る此の子供が、私が昔の若さに帰る代りに、再び私の為に若い日を繰り返さうとするのだ。(中略)過ぎ去つた長い時間に対する絶ち難い愛着と希望と悔との涙を、此の幼き者に托して言伝しやうとするのだ。いや要するに此の子供の中に融滅し了せて私の過去と現在と未来との境界線を見えなくして了はうと言ふのだ。そしてこれこそ、これこそ永遠に続く陶酔の生活を築く事だ。斯くてこそ私は絶対に満足し絶対に美しくある事が出来るのだ。輝ける本能！(中略)常に無批判に陶酔し、満足するのだ。これこそ真の本能だ。

妻は「常に子供の向ふ」にいて、私は子供と同化した。とうとう妻とは「融滅」できず、子供と「融滅」できたのだ。

(一〇)

妻は「死んだ」。「(母ちやんが居なくなつて淋しいだらう。)」と子供に聞くと、「叢から跳ね上るいなごに向つて澁漑たる好奇心を放ち驚愕して父親に言つたのだ。『父ちやん、虫が、虫が！』」と。私は思う「(母親にわづらはされなないんだね。お前は自分丈け

で生きて居る。未知の未来に向つて轟々と伸びて行く。さうだ。伸びるがいゝ。然しお父さんはもう母さんとの幸福に老ひて疲れて了つた！」。妻の死後二日目、私は次のように考える。

此の子供の為に、私の生命がどの位大事なものであるかを泌々と考へた。此の子供の為に、出来るだけ長く生きて居てやらうと思つた。私の命を受け継いで今後の長い年月を私の代りに生きやうとする此の子供の為に、今は此の古ぼけた私を犠牲の祭壇に供しやう。(中略)今迄の永い家庭に埋もれた生活に依つて、社会からは遠ざかり、今更私の出世も栄達も望めないし又望みもしないからには、せめて此の澆濁たる幼き者の為に此の身を下僕とし踏み台としてやらう——。

こう思つたとき、私は「ふと涙ぐ」む。この「涙は私の過去と現在とを完然に区画」した。

(一一)

妻が死に、老いてしまった私は人生の分岐点に立っている。私は「昨日迄の生活」を次のように言っている。

それは要するに逃避の生活であつた。世の中の動き行く流れから外れて、ひそかに安逸を偷む生活だつた。愛の為に——。然し、愛とは一体何だ。美しき欺瞞。互に、自分をも相手をも欺瞞して、その欺瞞に酔ふ——それが愛ではないか。そして、如何に努力しても、さうだ、十五年の努力を経ても猶澄み切らぬ本能の為に悩みつゝ、別々に独立した肺臓を抱き乍ら、結局互に互を老いさせたわけではなかつたか。互の伸びべき才能も、理性も、それ等を犠牲にして欺瞞しあつた、それが結婚生活と言ふものではなかつたらうか。(中略)永い間の、重心の傾いた生活、自分では正しい位置に立つて居ると信じ乍ら、実は片足に、妻の居る方角の片足にのみ重心を置いた生活から出来るだけ早く逃れて、より重大な目的に向つて進まなければならぬ。その目的と言ふのは此の子供である。(中略)此の子供の養育である。(中略)妻への愛には幾多の条件があつた。(中略)子供に対する愛は無条件だ。(中略)私は妻を要求した。然し子供を要求しない私自身であるからだ。私は妻に要求した。然し子供には要求しない。愛せねばならぬ理由の無い愛だからだ。これこそ明澄極まり無き本能。絶對の真理。生存の意義だ。

私は妻を離れ、子供と同化した。そして、次の決意をする。

一日も早く妻の記憶から逃れやうと願った。そして今日からは此の子供の為に、迷ふ事無き大道を、枉げられる事無き心念^{マユ}を以て歩むのだ。此の道こそは、大真理たる本能の道、純白の大理石を敷きつめて、真一文字に広野の果に続く、明るく美しい日光のかざやいた楽しき道だ。其の道の真中を、私は此の子供の手を引いて歩いて行くのだ。道は何処迄続くか分らない。然しそんな事はどうであつてもかまはないのだ。私は常に平和に、常に正しく、常に良き父となつて其の白き道を行くのだ。道の果には一つの関門がある事を私は知つて居る。即ち此の道は死に続く大道であるのだ。私は其處迄しか行かない。(中略)私の道の窮まる所、其處から始めて新らしき大道が白々と美しく此の子供の為に開けて行くのだ。して見れば私は是が非でも此の子の為に、私の死の門に向つて進まねばならない。そこで私の命は終る。然しそれが此の子供——私の生命の継承者の伸びて行く為とあらば、その死こそは又なく美しいものはなからうか。

三

(一)

『其の白き道を』を以上のように読んでくれば主題はおのずからあきらかになつてくる。つまり、『其の白き道を』の主題は結婚によつて生まれた子供(「十五年の結婚生活」の「証拠」は「五歳の男の子」)を通して永生(ようしよう)の生命を得るところにあつた。結婚し、子供を生み、そして死んでいく。しかし、それは死ではなく「生命の継承者」としての子供の中に生きることの意味する。つまり、永生の生命を得たのだ。そういう意味で、結婚とは永生の生命を得ることを意味する。

(二)

『其の白き道を』の主題は三の(一)の通りであつた。永生の生命をえるということと同時に、一方では女性のあり様が現実的だということも描かれる。

妻は「『そんなに迄して偉くなつて下さつても私は別に嬉しいとは思はないわ。私は今の儘で一生過せたらと思ふの。さうでせう。早く偉くならうと思ふから淋しいんでせう。男つて不親切なものね。女の気持を壊す事ばかり考へて居るのね。』」と言ひ、現状維持を願う。

子供が「死」に、私が「『ね、頼むからもう一人子供を産んで呉れ。逆も淋しくて堪らない。』」と言つた時、妻は「『えゝ。でも私、もう少しの間あの子の事を考へて居てや

りたいの。死んだからつて直に忘れては可愛さうですわ。』」と言い、私をして「（お前は美しい感情を持つて居る！）」と思わせる。ところが、その同じ妻が次の子供が生まれた時、私が「『此の子と前の子とどつちが可愛い？』」と聞くと、「『此の子。』」と答える。「『前の子がほしかつたつて言つて居たね。』」と言ったのに対し、「『だつて——もう死んぢやつたんですもの。』」と言う。ここでも現実肯定の姿勢は貫かれる。「私の肺臓と妻の肺臓とは独立の呼吸を続けて居た。だから私は猶一層の努力を以て、狂ふ様に融合を求めた」。その時、妻は「『あなたは満足するつて事のない人ね。何故さうなんぞでせう。私どうしたらいゝの？』」と言ひ、「満足して目を閉ぢた」。ここにも満足しきつて居る妻がいる。つまり、妻は現実には満足し、そこから一步も出ようとしなないのだ。現実にとつぷりと浸つて、てこでも動かないのだ。

さらに、男は結婚に多くを望み、結婚により多くを失ひ、そして、「若い」さらばえていくということになる。

私は「独身時代の幻を現実に作り上げやうと企んだ」。「完全なる飽和と融合」とを求めた。しかし、「まだ完全でない。私とお前とはまだ別々に呼吸して居る」と言ひ、そうした状態が、「最後」まで続くことになる。

その間、私は「青年時代の勃々たる野心も計画も乃至は主義も（さうだ。その為には幾度か私の理性と理論とすらも枉げたのであつたが。）即ち私の全部を妻に与へ尽して此の世界に全生涯の意義を擱まうとしたのだ。そして妻からも其の全部を奪つた。其の過去と現在と未来と、その肉体と精神と迄も奪ひ尽した。吾々は其の家庭の中に閉ぢ籠つて相互に与へ乍ら、丁度小さな箱の中に植えた二つの種の様に、外界と別れた儘で互にからみ合ひ抱き合つて生きて居た」。それでも「猶吾々の肺臓は、遂に最後迄別々に呼吸して居た」のである。「だから私は猶一層の努力を以て、狂ふ様に融合を求めた」。「此の時私は自分の姿を見つけた。浅猿間しくも自己の欲情を追ふて腕く三十男の髭の生えた面を見つけた。此の一塊の女の肉の中に身を没して、五十の生涯を忘却しやうとする男の姿を見た」。昨日迄の生活。それは要するに逃避の生活であつた。世の中の動き行く流れから外れて、ひそかに安逸を偷む生活だつた。愛の為に——。然し、愛とは一体何だ。美しき欺瞞。互に、自分をも相手をも欺瞞して、その欺瞞に酔ふ——それが愛ではないか。そして、如何に努力しても、さうだ、十五年の努力を経ても猶澄み切らぬ本能の為に悩みつゝ、別々に独立した肺臓を抱き乍ら、結局互に互を老いさせたわけではなかつたか。互の伸ぶべき才能も、理性も、それ等を犠牲にして欺瞞しあつた、それが結婚生活と言ふものではなかつたらうか。」と言う。結婚は男と女を「融合」させることではなく、「融合」を望む男は「融合」できないことから何とか「融合」しようとして、「情欲」にのめりこむが、それでも「融合」できず、「老ひて疲れて」しまう。

『其の白き道を』は、石川が「新早稲田文学」の同人になって初めて発表した作品である。妻を失った夫が、「十五年の結婚生活」の意味を振り返るといふ内容で、夫婦間の認識のずれや価値観の差を描き、子どもと同化することはありません。妻とはそれを望みえないとしている。結婚とは「私の生命の継承者」（子ども）を得るためのものであって、夫婦はそれ以上には接近しえないのかという結婚への諦観が窺える作品である。家庭を（束縛）と捉えていた夫が、その（束縛）の意味を考えているという点において、この作品にもやはりゾライズム（日本的）の影響がみられ、また石川の（束縛）論、（解放）論が社会的なそれだけでなく内面的なものへと向いていることを示すものとみてよい。

第二節 「新早稲田文学」と『射撃する女』

石川達三『射撃する女』は昭和六年八月一日「新早稲田文学」に掲載された。『射撃する女』は、なめし革の狩猟服に惹かれる女が主人公である。それを着ていた元夫は、今はもういない。女はなめし革の狩猟服を着た元夫に「魅惑」され、どんなに「嫌はう」「憎まう」と思っても、「反抗しきれない」のだった。その狩猟服に女は「怨み」が「籠つてゐる」という。女は「現在の彼」を冷遇しがちだったが、「現在の彼」がなめし革の狩猟服を着て空気銃を撃つと「性欲的」な刺激を感じて泣くのであった。

彼女に呪はれて死んだ男はいつもなめし革の狩猟服を着て二連銃を肩にかついでゐた。彼女は彼の、ラ・デアボロの様子に颯爽たる姿を思ひ出す度に、氷の様に磨き澄ました鏡に向つて丹念に化粧した。そして鏡に映る自分の白い細い美しい顎から首にかけて白粉のパツフを叩いた。彼は喉仏の上にかすかに紅をさすのが好きだった。だから彼女は今でも喉仏にかすかな紅をはいた。化粧が終ると鏡蔽ひの花模様をパサリと落して、（ふん！ あんなやつ。）と死んだ彼を呪つて断髪のを振った。そんな時には現在の彼の訪問を心待ちに待った。然し、現在の彼は馬鹿町で臆病で誠実ぶつて聖人づらをして礼儀正しかったから、彼女が昔の彼を思ひ出さない時には、訪ねて来ても冷遇されねばならなかった。

この文章は『射撃する女』の冒頭である。ここには三人の人物が登場する。主人公の位置に居る「彼女」と、その「彼女」の元夫の「死んだ男」、それから「彼女」の愛を得ようとしている「現在の彼」である。いわば『射撃する女』は三角関係の物語なのである。

「死んだ男」はいつも「なめし革の狩猟服を着て二連銃」を肩にかついでいた。「彼女」は「死んだ男」の「フラ・デアポロの様に颯爽たる姿を思ひ出す度」に、「丹念に化粧」をした。「死んだ男」が「喉仏の上にかすかに紅をさす」のが好きだったからである。しかし一方では「(ふん！ あんなやつ。)」と「死んだ男」を「呪つ」たりもする。ただし、「死んだ男」を「呪」い殺したことはこの小説ではそれ程重要ではない。「昔の幻想の男」にひきつけられていることの方が重要なのである。

一方、「現在の彼」に対しては、「死んだ男」を「呪つ」ている時には「訪問を心待ち」にしていたが、「死んだ男」を「思ひ出さない時」には冷遇した。つまり、「現在の彼」は「死んだ男」の代理、もしくは当座の間にあわせの男としての位置でしかないのだ。「現在の彼」は「馬鹿丁寧に臆病で誠実ぶつて聖人づらをして礼儀正し」いだけの男だった。「死んだ男」とは反対のタイプだったため、「死んだ男」にひかれて「彼女」にとつて、どだい愛の対象にはなりえなかった人物だったのである。

そうした「現在の彼」は「此の女が昔の彼を忘れない中は決して自分を愛する事はあるまい」と思い、「暗然」とする。

そして、「何とかして此の女から狩猟の趣味を奪はなければならない。その次には彼女の死んだ子供の写真を奪ふ事だ。もう一つの方法は、彼がこれから狩猟を覚えて、昔の彼のように、フラ・デアポロの様に勇敢な颯爽たる姿を示す事」だと考える。「彼女の現在描いてある昔の幻想の男を自分に於て再現する事だ」と思ったのだ。ところが「現在の彼」

には「狩猟」に対する自信は皆目なかった。また、「死んだ彼の様になめし革の猟服を着て、一匹の山鳥を射落す様に女を射落す事」は「趣味」ではなかった。したがって、「彼女」から「その幻想を奪ふ努力の方が取るべき道であると思はれた」。

「現在の彼」は「直接に銃猟趣味を彼への愛に変更する事は困難である」ことを知り、「趣味の転換が必要だ」と思う。「他のスポーツとか音楽とかマジジャンとかダンスとかに彼女を誘ひ込んで、自然に鉄砲を忘れさせる。これが即ち昔の彼を忘れる事になる。そこで、始めて彼女の心が自分の方へ向き直る準備が出来るのだ」と考える。

「こんな風に、同じパイが二つ揃つてゐる時に他の人が同じパイを棄てたら、それを貰つて三枚揃へる事が出来るんです。此の時にはポンと言ふんです。」

「ポン？ 鉄砲打つみたいね。」

彼はマジジャンは断じて不適當である事を覚った。

次に試みたのがゴルフ。「彼女は器用に腰をひねつてクラブを肩に振り上げた。ぐんぐ

ん上達した。そして鉄砲の話が少し度数が減った。彼は今度こそと思つて熱心に教授した。ところがある日、「彼女」は「わたし、球を追つて歩いて行くのが逆も億劫なの」、「だからね、ルールを変更してね、球を唯打つんぢやなく、向ふの的に当てる様にするのよ。鉄砲みたいに」。『現在の彼』は言う、「ば、ばかな事——そりやゴルフぢやありませんよ」、と。「ゴルフでなくたっていいわ。私、とつても面白いと思ふわ。ね、あんたあの辺に何か的を作つて呉れない？」と「彼女」は言い放つ。ゴルフも失敗。

ある日、「彼女」は「銀色の鍵をひねつて思ひ出の扉」を開いた。「秋の風が窓外のコスモスを傾けて吹いてみたし、丘の林から櫟の葉がばらばらと飛んで来たから、今は昔の幻想をそのまま幻想にして置く訳には行かなかつた」。

「彼女」は「思ひ出の扉の中」から「叮嚀に出したものは一着のなめし革の狩猟服であつた」。「彼女」は「此の服を抱いて居間に待つてゐる男の前に現はれた」。「その彼女の姿を見ると彼は真蒼になつて立ち上つた。（気が狂つたんだ！）」。しかし、「彼女」は言う。

「あいつ！ 此の服で以て私を魅惑したの。私、此の服にだけはどうしても反抗し切れなかつた。だから、これには、私の怨みがすっかり籠つてゐるのよ……。あの人が此の服を着て、威丈高になつて私の前に立つと、どんなに嫌はうと思つても、どんなに憎まうと思つても、（わたしの英雄！）に会つた様な気がしたわ。はつはつは、馬鹿ねわたし。あの人はそれを知つてゐたのよ。だから、死ぬ時になつて此の服を手にとつて、ベッドの上で、斯う言ふのよ。……俺の歴史の半分は此の服が支配した……。」

「現在の彼」は「室の中に残つた彼女の香ひの中に魔女の息使ひを感じた。自分の身を内部から蝕んで来る奇妙な窒息性の魔女の息使ひであつた。やがては彼の命が彼女の為に破滅に引き込まれるだらう。彼はどこ迄も女の趣味に反抗しなかつた」。

しかし、「現在の彼」は「なめし皮のねつとりとした感触に手を触れて見た」。「彼女が真黒の狩猟服に長靴を穿いて出て来た時には、可愛相な心を持つたフラ・デアポロが上着の釦をはめながら鏡の前に青ざめて立つてゐた」のだ。

そんな「現在の彼」に「良いものを見せるわ」と言つて、「彼女」は「二つの石膏の人形」をもつて来て見せた。「これ、あいつに逆も似てゐるのよ。」と言つて「指した人形は岩に腰をかけた登山者の姿をしてゐた。もう一つの方は斜に上を見上げた半身像で、（どこかしら、とてもあんたに似てるわ。）」と説明した。

その夜、「彼女」は一挺の空気銃を買つて来た。「現在の彼」は「あなたはこれから先、いつ迄もこんな思ひ出ばかりで生活して行く気ですか」と問いただし、鉄砲、及び空気銃を捨ててしまえと迫る。しかし「彼女」は「さうは行かないわ」、「買ったばかり」で「撃

つて見なくちや気が済まない」という。そこで、「現在の彼」は「隣の室から昔の彼に似たと云ふ石膏像を持つて来て室の隅の棚にのせた」。「撃てるなら撃つて見給へ。」「俄然、烈しい音、反響、碎ける音。石膏像はばらに碎け落ちた」。「現在の彼」は「此の室の中に揺曳する魔女の息使ひを、あの窒息性の、心臓を圧迫する息使ひを感じた」。「彼女」はいう、「ほゝ。随分あつさり壊れちやつたわね。あいつの事だからハネ返すかと思つたのに。……………いゝわ。明日また買つて来よう」。

「彼女から昔の男の幻想を追ひ出す事が絶望である事が判つたからには、彼自身が彼女の幻想の再現になるより他に途は無い」ことから、「現在の彼」は「なめし革の獵服を着て秋風の吹き過ぎる林の中へフラ・デアポロの様に勇ましく分け入つた」。「彼女」は「空銃を脇にかゝへて幻を追うて微笑してゐた」。そして、「彼女」は「真赤なマンジュシヤゲの咲きひろがつた中に坐つてハンカチで顔を掩うて泣いてゐた」。それを見た「現在の彼」は「昔の彼に似た真似をしても、その真似が成功すればする程、女は彼から遠距つて行く様に思はれた。(中略)真紅なマンジュシヤゲの花の輪の中で真黒の獵服の女は墮落したイヴの様に美しく見えた。風が林の中を通ると真紅な花輪は彼女の腰のまはりで性的に波を打つた」。

「其の夜」、「現在の彼」は「彼女」の「家で一緒に晩餐」をとつた。そして、「黄金の鍵をひねつて彼女の寢室の扉を八文字に押し開いた。男は、女の純白のベッドの枕許に、昔の、恋人でなかつた男の形見の鉄砲がない事を確めた。又、化粧鏡の前の棚に、彼にどこか似てゐる石膏の半身像が一つだけある事を確めた」。

「翌朝」「女は憂鬱に起き上つて頭を振つた。腕椅子に肱を突いて煙草を吸ひ始めた。彼女は鉄砲の無くなつた枕許をじつと凝視した」。

「現在の彼」は「彼女はやはり、昔の呪ひ殺した男の颯爽たる姿を幻想しながら自分で窓を開くのが一番良かったのだと言ふ事が判つた。彼がどんなに努力しても、此の女を完全に自分のものにする事は出来ないと言ふ事が判つた。彼は、元の通りに単調な自分の独身生活に帰るのが一番良いのだ」と思う。そして、「『君は、私を、呪ひ出したんでせう』」(「彼女」は言う「私のからだに触れる者は私はきつと呪ふの。そして、私に呪はれる者は皆死ぬの!」)と。「現在の彼」は「物置きに入ると、昔の彼の形見の鉄砲を持つて来て、彼女のベッドの枕許に置くと、帽子を取つて室を出て行つた」。

「彼女」は「台尻を右肩に当て、引金に指をかけた」。「一陣の風が彼女の断髪を吹き乱した。引金がじりじりと引かれた。そして突如として爆発が起つた。物凄いい音に続いて、物の碎ける音がした。どこかしら彼に似た石膏の半身像が五十の散弾を喰つて煙の様に飛散した。その白い石膏の煙の中で、彼女は鉄砲をかゝへたまゝほろほろと泣き始めた」。

「現在の彼」は「彼女」の下から去つた。「現在の彼」は「昔の幻想の男」を「自分に於て再現」することにも、「彼女」の「銃獵趣味」を奪うことにも失敗しての別れだった。この別れはまた、「彼女」の「呪い」(「私のからだに触れる者は私はきつと呪ふの」。

そして、私に呪はれる者は皆死ぬの！」による死、「自分の身を内部から蝕んで来る奇妙な窒息性の魔女の息使ひ」、あるいは、「やがては彼の命が彼女の為に破滅に引き込まれるだらう」ことからの生還でもあった。

※

『射撃する女』を以上のようなものとして読んでくれば、それは「彼女」の、あるいは女性のフェティシズム (fetishism—異性の身につける衣類や装身具に異常な執着を示し、それらによって性欲を刺激されたり性的満足を得たりすること) を描いたとみることができさる。

彼はなめし革の獵服を着て秋風の吹き過ぎる林の中へフラ・デアポロの様に勇ましく分け入った。彼女から昔の男の幻想を追ひ出す事が絶望である事が判ったからには、彼自身が彼女の幻想の再現になるより他に途は無いのだ。(中略)

「ね、私は空気銃は撃つた事が無いんです。鉄砲より六ヶ敷いでせう。丸が一つだからな。」

彼は高い青空を背景にして黄色くなつてゐる渋柿を撃つた。柿は短距離選手の様に不意に高い空でスタートを切ると石ころの様に真直に落ちて来た。ポインターが駆け出した。

彼はもう完全に女の心を掴んだ様に良い気持になつてふり向いた。すると、女は真赤なマンジュシヤゲの咲きひろがつた中に坐つてハンカチで顔を掩うて泣いてゐた。

(中略)彼は渋柿のへたをむしりながら、泣いてゐる女の背中のリズムに悩まされた。真紅なマンジュシヤゲの花の輪の中で真黒の獵服の女は墮落したイヴの様に美しく見えた。風が林の中を通ると真紅な花輪は彼女の腰のまはりで性欲的に波を打つた。

「現在の彼」が着た「なめし革の獵服」に性的な刺激をうけ、「マンジュシヤゲの咲きひろがつた中に坐つてハンカチで顔を掩うて泣い」ているのだ。それは「真紅なマンジュシヤゲの花の輪の中で真黒の獵服の女は墮落したイヴの様に美しく」、「風が林の中を通ると真紅な花輪は彼女の腰のまはりで性欲的に波を打つ」のであった。そして、「彼女」は言う、「もしかしたら、わたし、あなたを呪ふ様になるかも知れないわ」と。つまり、「彼女」は「現在の彼」が「彼女」の「からだに触れる」ことを受け入れたのだ。

「なめし革」によって性欲を刺激された「彼女」はその結果として「現在の彼」が「か

らだに触れる」ことを受け入れたのだ。しかし、これは「彼女」が「現在の彼」を愛することとはちがう。あくまでも「なめし革」による性的刺激であり、性的満足なのである。それは「現在の彼」が「彼女」と「昔の彼」の関係について、「『亭主の好きな赤烏帽子ですか。』」と聞いたのに対し、「彼女」は「『亭主ぢやなかつたのよ』と答え、さらに、「現在の彼」が「『恋人の好きな赤烏帽子。』」と言いなおすと、「彼女」は「『恋人でもなかつたのよ、生きてる中はね。』」と言う。つまり、「彼女」は「なめし革」によって性的満足を得ていたのであって、男性は「恋人」にはなれないのだ。だから、「昔の彼」が「なめし革」の「服を着て、威丈高になつて私の前に立つと、どんなに嫌はうと思つても、どんなに憎まうと思つても、（わたしの英雄！）に会つた様な気がした」のであつたが、その「なめし革」の「服」を脱ぎ、「からだに触れ」た後には「呪い殺すことになつてしまふのだ。

『射撃する女』は、なめし革の狩猟服という物質に〈束縛〉される女の心理を描いている。女自身がそのことを忌避しているのに、心底突き放し切れないのである。他の誰でもない自らの心のうちに〈束縛〉されるものがあることを決り出している。そのことは、社会的な運動として〈束縛〉からの〈解放〉を叫び続ける人々を揶揄しているものともいえる。そのことのみ翻弄される人間の愚かさを指摘してもいるだろう。石川の思考が深化していることが窺える。

第三節 「文芸の破壊性に就いて」にうかがえる批判的リアリズム論

石川達三の「文芸の破壊性に就いて」は昭和六年九月、「新早稲田文学」誌上に発表された。

石川達三の小説が初めて活字になったのが『淋しかったイエスの死』で、それは昭和二年のことであった「ただし、石川達三は「自作について」『新日本文学全集』第二〇巻、『石川達三集』昭和一六年七月、改造社）で、「作品を新聞雑誌に発表するやうになったのは昭和十年からである」、と語っている。「昭和十年」は石川達三が『蒼氓』を発表した年である」。

したがって、石川達三の「文芸の破壊性に就いて」は最初の小説発表から四年後ということになる。

出発期における作家石川達三の「文芸の破壊性に就いて」は石川達三文学の本質を理解するうえで看過し得ない重要な文学論である。

しかし、この論文は不幸にも、これまで何ら顧みられることがなかった。久保田正文の『新・石川達三論』（昭和五四年一〇月、永田書房）の「石川達三年譜」にさえ記載されなかった。

「浅学狭識」にして「評論を書くべき者」でないという作家石川達三がやむにやまれずに筆を執った「文芸の破壊性に就いて」とはいったいどのような文学論だったのか。

以下、論の展開に沿って読んでみたい。

一

石川達三はまず、「文芸の破壊性」について、次のように規定する。

文芸の創作された時代のあらゆる環境に対する否定乃至反抗の意味である。

「環境に対する否定乃至反抗」、すなわち「文芸の破壊性」は「建設性」に「先行」するという。「建設」を「予想」しない「破壊性」は「凶暴性」であり、それは結局「文芸の娯楽性」へ「帰着」する。

さらに「文芸の破壊性」は「環境」の「正視」から始まる。「環境」「正視」の「結果」は「肯定」と「否定」にわかれる。「環境」「肯定」の立場に立って創作されたものを「肯定の文学」といい、「趣味」と「娯楽」の「文芸」「以外」のものでないと批判。しかも、この「環境」「肯定」は「環境」への「正視」を「拒否」し、「否定的要素」を「避けて見ない傾向」をもっている」と批判。「芭蕉以後に栄えた俳句は其の最適の例であらう。此種の文芸は退嬰的懐古的逃避的であつて、社会の進展に対して何等の関心をも持たぬ。従つ

て価値考察の範疇以外に置かれると言つても過言でない。今日俳句（旧派の。……新派のそれも略々同様であると考へられるが、こゝでは新派には触れない。）が社会生活から完全に葬り去られてゐるのはその為である。肯定の文学は端的に言へば芸術至上主義的立場に立ち象牙の塔を守る文芸である」、といつてゐる。

次に、「環境否定」の「傾向」をもつ「文芸」は「創作者の立場に於ける環境への正視」から出発するが、その「創作者」の「態度」は「社会科学的分析」と「総合」とを「基本」とする。すなわち、「文芸の破壊性」は「現在の環境を否定し之に反抗すると共に明日の環境を肯定し創造しようとする」。これを「文芸の建設性」という。ゆえに、「文芸の破壊性」は「肯定の文学」に比して、「急進的創造的活動的な文芸傾向」をもち、「無産派文芸」はその「最適の例」であるとされる。

石川達三はこうした観点から、「文芸に於ける破壊性の有無に依つて、其の作品は俳句的文芸ともなり無産派文芸的文芸ともなり得る」と結論する。

「文芸に於ける破壊性は而く重大な役割を演ずるものである」が「文芸作品に於ける此の種の傾向について、創作者の側から、その、文芸主潮との関係を考察せられた事は今日迄殆んど無かつた様に思ふ」として、その「関係」解明へと向かう。

二

石川達三は「環境否定」の「傾向」、すなわち、「文芸の破壊性」は「環境」への「正視」から出発し、その「態度」は「社会科学的分析と総合とを基本とする」、としたうえで、「文芸の破壊性に関する第一の結論」を次のように規定する。

文芸主潮が新鮮な破壊性を失つた時は直ちに主潮に革命が起つて来る。そして新しい破壊性を持った新興の芸術一派が次の主潮を形作る。

つまり、「文芸」の「主潮」は「破壊性」の有無によつて交替を繰り返すというのだ。石川達三はそのことを「無産派文芸」・「自然主義」・「浪漫派」の隆盛と「既成文壇」の衰退のうえにみる。

大正末から昭和にかけて無産派文芸の擡頭して来た時、それは文芸作品として極めて幼稚な、未だ形態も整つてゐないものであつた。当時の文芸評論家の一部と既成文壇とは是に対して猛烈な非難を浴せた。而も其後数年ならずして文芸主潮は完全に無産派文芸に占領され、既成大作家は僅かに婦人雑誌と娯楽雑誌と新聞の通俗小説とに逃れ住むに至つた。これは如何なる原因に依るものであらうか。其の芸術的技術に就いて見ても、その過去に獲得して当時迄継続されてゐた彼等のジャアナリズム上の名声に於ても、乃至は作品自体の整然たる体型から言つても、既成文壇の作品と無産派

のそれとは全く比較にならないものであつた。而も無産派が文芸主潮を形作るに至つた理由は何処にあるであらうか。それは決して単なる読書階級の好奇心、新物食ひに因るものとして看過する事は出来ない。又、同派の作品が其の頃から急激に社会の表面に現はれて来た無産階級の闘争に取材した為であるとのみ断ずる事も出来ない、何となれば読書階級は当時は今日以上に無産者ではなくして中産以上の階級であり、無産者の為の文芸の擡頭に関しては不安と反対とを意識したものであつて、決して歓迎すべき意識を持つては居なかつたからである。然らば無産派文芸が文芸の主潮となつた理由は何であるか。それは既成文壇の作家達と其作品とが破壊性を失つてゐたからであると私は断定する。

破壊性を失つてゐた当時の文壇は、環境への正視、社会科学的な分析と綜合との努力を認めずして、環境肯定乃至は諦観と、それを原因とする頹廢の傾向を辿りつゝあつた。当然その作品は活気を失ひ技巧の末に流れ、歌舞伎劇の様に社会より一步後れて骨董的地位に在り、謡曲の名調子を聞く様な一種の道楽乃至は高尚なる趣味の為の文芸以外のものではなかつた。

つまり、石川達三は「無産派文芸が文芸の主潮となつた理由」は「既成文壇の作家達と其作品とが破壊性を失つてゐた」からだとして「断定」する。「破壊性」を失つた「当時の文壇」は「環境への正視、社会科学的な分析と綜合との努力を認めずして、環境肯定乃至は諦観と、それを原因とする頹廢の傾向」をたどつたとする。作品は「活気」を失ひ、「技巧の末に流れ」、「社会より一步後れ」、「一種の道楽乃至は高尚なる趣味の為の文芸」になつてしまつたという。

さらに、石川達三は「当時の代表的な作家」として、芥川龍之介、菊池寛をあげ、次のようにいう。

芥川龍之介と菊池寛とは当時の代表的な作家であつた。芥川は所謂「箱庭師的技術者」であつて、其の作品の枯淡な而も磨き上げた名玉を見る思ひは当時の批評界から超然としてゐたかの觀があつた。その作品の芸術的雰囲気乃至技巧の点に於ては今日彼に比すべき者を見出し得ない。而も彼は遂に「箱庭師的技術者」に過ぎず、その作品は決して社会の進展に一步を先んじる事が出来なかつた。(中略) 菊池寛に就いても同様な事が言ひ得られよう。唯彼は其の技術の種類傾向に於て前者と異り、今日では少しく妥協的に創作してゐると言ふだけである。

このように、石川達三は「既成作家」芥川龍之介、菊池寛が「社会の進展に一步を先ん

じる事が出来なかつた」という。つまり、「既成文壇の作家達と其作品とが破壊性」をなくし、「環境への正視、社会科学的な分析と総合との努力を認めずして、環境肯定乃至は諦観と、それを原因とする頹廢の傾向」を強めたからだというのだ。

いっぽう、「無産派文芸」の「擡頭」については、次のようにいう。

最も多量の破壊性と建設性を持った、と言ふよりもむしろそのみしか持たなかつた同派の作品は、形式も技巧も芸術的美も、一切が整つてゐなかつたにも拘らず、其の活氣充滿してゐた事と当時の社会に緊密に即してゐた事とあらゆる隠蔽せられたものへの暴露、鬭争意識等々に依つて、忽ちにして当時の社会に多過ぎる程の問題を提出した。(中略) 問題を提出し得ると言ふ事は作品が社会よりも一歩前に進んでゐる事の証明ではなからうか。又、文芸は社会よりも一歩進んで始めて文芸としての価値を考へられるのであつて、社会よりも遅れてゐる文芸は今更創作される必要が無いと言ひ得るのである、(中略) 従つて何等の問題をも提出し得ない、換言すれば何等の破壊性も建設性も有しない文芸が其の技術的完成を目標としての努力を続ける事は、恰もスポーツマンが百メートルを走る時間の短縮を目標として努力するに等しき無用の道楽であり、其の文芸技巧の完成を讚賞する読者は、スポーツ・ファンと同様に、贅沢な遊興を楽しんでゐるに過ぎない。して見れば斯うした無力な自慰的な当時の文壇が新興無産派文芸の前に立つて、猶も文芸の主潮であり得よう筈が無かつた。

同様の例を吾々は過去に見出す事が出来る。即ち自然主義勃興当時の欧州文壇及び同派誘入当時の日本文壇は、自然主義作家と其の作品との投じた極めて大きな問題即ちその破壊性の為に、文芸の主潮を其の方に奪ひ取られて、旧文壇は忽ち時代に取り残されたかたちになつた。今一つの例は擬古典派に取つて代つた浪漫派である。自然主義の場合には余りに美しく粉飾された社会と人生とへの反抗、現実暴露と言ふ破壊性であり、浪漫派の場合には法則に対する自由の要求、悟性過重に対する情意の擡頭、虚偽の文明に対する Return to Nature と言ふ破壊性であり、そして無産派文芸に於てはブルジョア文明の偽瞞マヤに対する無産者の反抗と言ふ破壊性を持つてゐたのである。

石川達三は「浪漫派」にしる、「自然主義」にしる、「無産派文芸」にしる、それらが「文芸主潮」を形成できたのは、それらの文芸が「新しい破壊性」をもっていたからだという。

「新しい破壊性を持った新興の芸術一派が次の主潮を形作る」ということが具体的な例をもつて実証された。

次に、石川達三は「文芸の破壊性の種類と文芸主潮との関係を考察」するとし、「實際社会生活に即した破壊性、要求せられたる破壊性を有する文芸傾向のみが其の時代の文芸主潮を代表し得る」と結論づける。

まず、石川達三は「破壊性を其の性質に依つて分類すれば大体二つに分け得る」とし、「その一は芸術に関するそれであり、他は社会に関するそれである。前者の例は十九世紀の高踏派、新感覺派等であり、後者の例は自然主義、無産派等である」とする。

過去の、乃至同時代の芸術に向つて破壊と反抗とを企て、新しき芸術を産まうとしたものについて見ると、是等各派の文芸は当時の文芸の主潮を成さず、文芸界の一方に偏在したに過ぎない。(中略) 日本に於ける新感覺派は恰も好適の例であらう。「文学時代」創刊後暫くの間は同派は一時大きな新興勢力を予想されたけれども決して「主潮」を形作るには至らず、今日では僅かに文芸界の一隅に存在するに過ぎない。是は如何なる原因によるものであらうか。その理由は明らかである。是等の文芸が實際社会から遊離してゐるからである、^マ芸術至上主義に立脚したからである。

文芸はそれ自身が生活でなければならぬ。文芸の進路はどこ迄も文明の進路を指さねばならぬ。従つて一つの文芸は必ず一つの時代にのみ妥当であつて他の時代には妥当でない事を必要とする。一時代の文芸主潮は決して他の時代の文芸主潮ではあり得ない筈である。然るに芸術至上主義に立脚した前掲各派は、其の時代から遊離してあらゆる時代に妥当ならんと企てた。茲に最も大きな認識不足があつた。従つてその時代の文芸主潮を代表する事は本質的に不可能であつた。

「過去の、乃至同時代の芸術に向つて破壊と反抗とを企て、新しき芸術を産まうとした」「日本に於ける新感覺派」は「實際社会から遊離」し、「其の時代から遊離」し、「あらゆる時代に妥当ならんと企てた」が故に、「その時代の文芸主潮を代表する事は本質的に不可能であつた」と断ずる。

一方、「是に反して社会に関する破壊性の強い傾向を有したものは屢々その時代の文芸主潮を代表した」という。

その具体的な例として、「因襲を打破して社会に自由を与へた」「浪漫派」、「科学的な視野を開いて現実の社会の赤裸々な姿を示し人生の為の芸術を標榜した」「自然主義」、「資本主義社会のあらゆる悪を暴露してより真実な社会を導き出さう」とした「無産派文芸」などがあげられるという。

そして、「是等各派が文芸を代表した理由は、その破壊性が現実社会に即した、『要求せられたる破壊性』を有する『要求せられたる文学』であつた」からだという。

石川達三はこうして、「實際社会生活に即した破壊性、要求せられたる破壊性を有する文芸傾向のみが其の時代の文芸主潮を代表し得る」と結論する。

四

石川達三は「文芸の破壊性が如何に本質的に必要であるかを確認」したうえで、「無産派文芸と言ふ今日の主潮の代表者の現代に対する妥当性も認める事が出来る」として、「無産派文芸」擁護の立場を鮮明にする。さらに、「既成作家群が如何に妥当しないかを知り得るであらうし其の将来に望み無き事も明瞭」である。「新興勢力として明らかな存在を示してゐる新興芸術に就いても、文芸の享楽性とも言ふべき方角に余りに傾き過ぎてゐる為に、現在のまゝでは到底無産派文芸に対抗して将来の文芸主潮を代表し得るとは考へられない。たとひ無産派文芸に終末が来るとしても、次の主潮を代表し得るものは今日の新興芸術派以外のものであらう」といい、「新興芸術派」に将来のないことを指摘し、

「文芸」にとつて、「破壊性が如何に本質的に必要であるか」を再度「確認」する。その「確認」のうえにたつて、石川達三はさらに、「社会」は「国家から国際社会に迄進み、国境は急激に低くなりつゝあり、又一方では翻訳の發達等によつて文芸主潮は世界的なものになつて来た。無産派文芸は既に此の事を立証してゐる。して見れば今後の文芸主潮を代表し得るものは此の国際社会に関する破壊性を有するものであるであらう。(中略)無産派文芸は此の社会的芸術に向つて努力しつゝある。けれども同派は現在猶未完成である。其の芸術としての完成の為に未だ破壊せねばならぬ多くの環境を有し建設せねばならぬ多くの目標を有する。無産派は今後猶或る期間の間は文芸主潮を代表しつゝ、その周囲に向つて、及びその内部に向つて多くの破壊を続けるであらう」として、「無産派文芸」に「文芸」の将来を見ている。そして、最後にいう、

社会は決して文芸技巧の天才の出現を期待しては居ない。あらゆる社会生活の中から多くの必要なる破壊を發見し得る天才をのみ待望してゐるのである。

批判的リアリズムは現実生活の否定的な諸現象をとりあつかい、社会主義リアリズムは前途への見通しをもち、労働によつて新しい社会を建設しつつある社会主義的個性の典型を描くとされている。こうした観点から、石川達三の「文芸の破壊性に就いて」をみるならば、それは批判的リアリズム論と理解するのが妥当であらう。もちろん、社会主義リアリズムへの崩芽、展望をもつた批判的リアリズム論ととらえてもよい。

かかる意味において、石川達三こそは「あらゆる社会生活の中から多くの必要なる破壊

を「発見し得る天才」だったのである。社会に対する批判性を生涯にわたって貫いた石川達三文学の核は、すでにここに誕生していた。以後、石川達三は「建設性」をにらみつつ、「環境」（時代状況）を「正視」し、「破壊」・「否定」へとむかっていく。

五

石川達三は「自作について」（『石川達三集』『新日本文学全集』昭和一六年七月、改造社）で、「作品を新聞雑誌に発表するやうになつたのは昭和十年からである。その以前に約十年の勉強期間があつた。（中略）昭和六年同人雑誌新早稲田文学に加はり、その後しばらく経つてから星座に加入するまで、ほとん十年であつた」と記している。「文芸の破壊性に就いて」が発表されたのが昭和六年、したがって、石川達三の本格的な文学活動、つまり「新聞雑誌に発表するやうになつた」「昭和十年」をさかのぼること四年には明確な文学観が形成されていたことになる。もっとも、同じ「自作について」で、「早稲田高等学院に入学した頃から作家にならうと決心」していたとある。石川達三が早稲田高等学院へ入学したのは大正一四年だから、「作家にならうと決心」して六年の後には明確な文学観が形成されていたことになる。批判的リアリスト石川達三は「文芸の破壊性に就いて」以後、「文芸の破壊性に就いて」の文学観を堅持しつつ、力強く創作の世界へと向かった。

私は自分で大別して二つの傾向の作品を辿つてみると思ふ。一つは「蒼氓」や「日蔭の村」のコースであり、これには長篇が多い。第二は「流離」や「深海魚」のコースであつて、これには短篇が多い。（中略）短篇では文章がかなり重大な役割りをするが、長篇では文章でなくて豊富な内容、思想といふ風なものが重大な位置を占めると思ふ。（中略）「日蔭の村」は昭和十二年の夏、新潮に発表した。ずいぶん荒っぽい小説であるが、私は書いてよかつたと思つてゐる。本当に書きたい情熱を感じた場合には、自分の力量などを考へて逡巡することなく、とにかく力一杯に書くべきだと思ふ。（中略）「ころ」、「調べた文学」と言ふ言葉である種の作品が軽蔑的に分類されたことがあつた。しかし私は反対である。逆説的な言ひ方をすれば、素材について十分に調べるだけの熱情があつてはじめて作品は書かれるのだ。勿論借りものの知識で作品を胡摩化すことは不純であるが、調べることによつて借りものでない確かな見解が生ずる、この点を重要に思はなければならぬ。要は作家の節操と芸術意識との問題である。私は今後も大いに調べて書きたいと思つてゐる。（自作について）

石川達三は青野季吉の初期プロレタリア文学理論『調べた』芸術への共感を明確にした。つまり、「環境」を「正視」し、「破壊」と「否定」を重視する石川達三、「ころ」、「調べた文学」と言ふ言葉である種の作品が軽蔑的に分類されたことがあつた。しかし私

は反対である」、「調べることによつて借りものでない確かな見解が生ずる」、「文章でなくして豊富な内容、思想といふ風なものが重大な位置を占める」とする石川達三にとつて当然のことであつた。さらに、昭和一二年一月に刊行された『飼ひ難き鷹』「跋」（新英社）では、次のように記している。

小説を書くからには傑作を書きたいと思はない訳には行かない。然し私には傑作への一つの疑惑も無いではない。

文学に身を入れてから、年月は永い。傑作を書く為の條件、秘訣と云つた様なものもいくらかは心得た様に思ふ。然しながら、傑作にも二種類あると思ふのだ。その一は対人生的な意味の高い傑作でありその二は純粹に文学としての傑作である。

後者に対しても、文句はない。それはそれ自身が立派である。けれども如何にも小さい気がするのだ。社会より遊離した洞穴暮しの様な気がするのだ。一つの才能と一つの真卒な熱情とが有りさへすればこの意味の傑作を書く事はさして難くはない様に思はれてならない。

こゝに納めたもの、四篇、何れも傑作と云ふには遠いけれども、何等かの意義を求めて書いて来たのであつた。傑作は敢て作らなくともいゝとさへ思ふのだ。たとひ生涯に一つだけであつてもいゝ。唯、生涯の労作のすべてが人生への或る意義を求める事に終始してありたいと望む。それは駄作であつても猶、そのまゝで葬り去られる事はないと思ふ。

これは文学への功利的な考へである。然しながらこの功利的な考へは、文学を犠牲にして人生を築かうと志すのであつて、そこに自ら文学の生きる世界があると信ずるのだ。且つ、私自身の生きる世界も亦たそこにあると考へるのである。

石川達三が力強く文学に求めたのは「人生への或る意義」だつた。これは「文芸の破壊性に就いて」の中の言葉、「社会は決して文芸技巧の天才の出現を期待しては居ない。あらゆる社会生活の中から多くの必要なる破壊を發見し得る天才をのみ待望してゐるのである」、あるいは「自作について」の中の言葉、「長篇では文章でなくて豊富な内容、思想といふ風なものが重大な位置を占める」などに通じる。

「環境」（時代状況）を「正視」し、「否定」と「破壊」を重視する批判的リアリスト石川達三は、こうした文学觀を堅持しつつ、創作へと力強く歩みだした。

*

「文芸の破壊性に就いて」は、石川が「新早稲田文学」同人になつて三か月後の論文で

ある。ここには、この当時の石川の文学観があまりなく披歴されている。

「文芸の破壊性」とは「環境に対する否定」をいう。「環境」とは自らの周囲のことである。「環境否定」は「環境への正視から出発」すると石川は言う。「現在の環境を否定し」、「明日の環境を肯定し創造」しようとすることを「文芸の建設性」だと石川は主張する。ゆえに、「文芸の破壊性」とは「急進的創造的活動的な文芸傾向を辿る」ことになる。「無産派文芸はその意味で最適の例である」と石川は位置づける。この論文によって石川達三の「無産派文芸」への肯定的な見方があきらかになるとともに、一方で、浪漫派にも建設性があるとする。

石川達三は「文芸の破壊性に就いて」を土台にして、昭和十二年九月青野季吉の『調べた』芸術』の手法によって『日陰の村』を書き、創作上の自信を得ていくことになる。

戦後、石川は「社会派」として評価されてゆくことになるが、じつは「社会派」からも距離を置き、内面化し、浪漫派の建設性をも認めようとしているところにこそ注目すべきである。すなわち、石川を「社会派」と規定するところについても再考されなければならない。

付 石川達三には「文芸の破壊性に就いて」に先行する文学論として、「文芸雑論」（『ミカド評論』昭和三年三月、ミカド評論社）、「芸術の変遷―主として小説滅亡論について―」（『ミカド評論』昭和三年七月、ミカド評論社）、「階級・芸術・其他の雑感」（『ミカド評論』昭和三年八月、ミカド評論社）、「人間衰亡論序説」（『ミカド評論』昭和三年十一月、ミカド評論社）がある。

第八章 石川達三における〈解放〉のさらなる内面化

——『非情都市』『戦争と舞踏』『襟を開く女性』『聖愛』
『石婦』『禁断』『秋の日の男達』——

昭和六年九月、満州事変が勃発した。関東軍の暴走によるものだが、当時はそのことを知る由もなく、軍部を支援する風潮が国民の中にも広がっていった。昭和六年よりも七年、七年よりも八年と、徐々に言論への統制が厳しくなっていたのである。そのように、弾圧により社会運動に限界の出ているころ、文壇には、束縛からの〈解放〉の意味を、社会的なそれではなく心の問題として捉え返そうとする動きがますます一般化しつつあった。〈解放〉の内面化である。

第一節 『非情都市』の〈解放〉

『非情都市』は昭和六年一二月「新早稲田文学」に発表された。

構成は「・A」「・B」「・C」の三場面からなる。

「・A」の場面は「銀座・ペエヴメント」。「午後八時頃」、「平凡な彼と平凡な彼女」が登場する。

彼は「歩いてばかりみたつて仕様がなないね」と言い、彼女は「ね、どこかでゆつくり休ませようよ」と答える。そこで彼は「ね、公園へ行かう。此の前の池の畔のベンチね、あそこがやはり一番落ついて話が出るよ」と提案。彼女は「えゝ……でも、あそこ、淋し過ぎるわ。誰かにおどかされやしない?」、と心配する。

場面は「・B」。「日比谷公園、池の近く、木陰のベンチ」。「午後八時半。行人時折」。彼女は「わたしね、昨日ね……兄さんに言つちやつたのよ」、「わたし達のこと」、「少し心配なのよ。兄さんが昨晚お父さんに言つたらしいの。今晚帰つたらきつと何か言はれると思ふの」、と彼に言う。彼は「仕方が無いさ。どうせ一度は言はれなけりやならないんだからね」、と言う。

二人が自分達の将来について話し合っている時、「公園勤務巡查」が「不意に木陰から歩み出してぬつと立つた」。

巡查は問う、「おいおい。君達は此処で何をしてゐるんだ」。彼は「は? 別に、何も……話をしてゐるだけです」、と答える。さらに巡查は問う、「その女は君の何だ? え?

兄妹ぢやあるまい」。彼は、「僕の……知りあひです」、と答える。巡查また問う、「う

む。何だつてこんな暗いところにゐるんだ。「何て……別に訳はありませんけれど」、と彼は答える。「それぢやもつと明るい所へ行き給へ。え？　こんな暗い所に居ると疑はれるよ」と巡査は命令し、去る。彼は彼女を抱いて短い接吻をする。

場面は「・C」。日比谷公園の花壇。「アークランプが皎々と花壇を照してゐる」。彼は言う、「いやこれはどうだい！　素晴しく明るいねえ！」。彼女、「ほゝゝゝ。これなら叱られつこないわね」。

ところが、「別の巡査」が来る。彼は「大丈夫だ。叱らうにも叱れまい」、とたかをくくる。

ところが、巡査は「君達は又何だつてこんな明るいところに居るんだね？」という。彼はあきれて「はつはゝゝゝ。別に何もしてゐませんよ。だつてこんな明るいんぢや何も出来る訳はありませんし……」。

「うむ。悪い事は出来ないだらうが……然しこんな明るいところに居ない方がいゝね。余り誰の眼にもつき過ぎるぢやないか」、と巡査は言う。彼は、「すると、僕達みたいに都会の真中に居る者は一体どこで、その……恋……恋をするんでせうな？」と問う。すると巡査は「さうさね。まあ、歩きながら恋をするんだね！」と答える。

石川達三はこうした市民生活に恣意的に干渉してくる権力（巡査）に対し、「非情」なものとして抗議している。男女二人が公園の内を一緒に歩くことさえままならないほど権力（巡査）の支配がゆきとどいているのだ。まさに、「非情都市」なのである。ここにも石川達三の社会批判の目が光っている。

第二節 『戦争と舞踏』の〈解放〉

『戦争と舞踏』は昭和七年一月「新早稲田文学」誌上に発表（久保田正文『新・石川達三論』「石川達三年譜」不記載）された。

石川達三は『生きてゐる兵隊』（昭和一三年「中央公論」）『武漢作戦』（昭和一四年「中央公論」）など、戦争に関する一連の作品を書いて来た。『戦争と舞踏』は石川達三のそうした戦争文学の先駆をなす作品であり、大変興味深い。とりわけ、石川達三の戦争文学『生きてゐる兵隊』、『武漢作戦』などで描かれた戦争目的と『戦争と舞踏』で描かれた戦争目的とをあわせ考えるとき、石川達三の戦争文学の全体像がみえてくる。

したがって、石川達三の戦争文学の全体像をとらえる上で、『戦争と舞踏』は欠かすことのできない作品である。

昭和二年三月一四日、片岡蔵相の「渡辺銀行が破綻する」との国会での失言に端を発し、台湾銀行、十五銀行など一流を含むいくつかの銀行が休業、倒産するという金融恐慌が起きた。

昭和四年秋アメリカを発端とした世界恐慌は昭和五年の春、日本に波及した。貿易激減、企業合理化により、中小企業は倒産し、失業者が増大した。

昭和二年五月、田中義一内閣は、居留民保護を目的に陸軍を中国山東省に派遣し、昭和三年五月には済南事件を起こした。

昭和六年には満州事変をひき起こし、昭和七年には上海事変へと飛び火する。

『戦争と舞踏』はこうした時代状況の下で描かれた。したがって、『戦争と舞踏』はこうした状況とのかかわりで読まなければならない。

二

(一)

まず最初に、戦争目的から見てゆこう。

財界は嵐である。銀行も会社も商店も、一斉にぐらぐらと傾いて行く嵐である。切り抜け策は戦争だ！と政界財界の巨頭は言っている。

ここには戦争目的が明確に描かれている。つまり、「戦争」は「一斉にぐらぐらと傾いて行く」「銀行」「会社」「商店」の「切り抜け策」だということである。これは「政界」「財界」側からする戦争目的だが、一方、国民は次のように考えている。

だつて、仕掛けられた戦争をどうするんです。

これは、戦争には「ち！ 行かねえよ、俺は。」と言う兄の中岡に対し、弟が反論している言葉であるが、ここには「仕掛けられた戦争」という観点がある。作者石川達三の戦争目的観は「政界」「財界」の「巨頭」の戦争観に重なる。何故ならば、戦争体制は「財界」「政界」にとって焦眉最大の「策」だからである。

(二)

次の文章は『戦争と舞踏』の冒頭である。

鈴は冴えてりんりんと、冴え切つてりんりんと鳴り続けて止まなかつた。東京の屋

根は今朝も亦、燠銀に光る冷たい霜の未明から、鈴は鳴り続けて黄昏までもやまなかつた。或時はガードの下に魂消える程に鋭く反響し、或時はビルの谷底に遠くかすかに消え、或時は石の欄干のある橋の上から、灰色の冬空に向つて果しなく遠く高く響いて行つた。

「りんりん」と鳴る鈴の音は最初から最後まで、全編に渡つて鳴り響いていて、止むことがない。

「号外」の鈴の音、「午後一時」には三機の飛行機の爆音が「一緒になつて不思議に市民の感情を乱す行進曲」になつた。その行進曲につられて、「午後二時」にはどこからともなく、市民が公園に集まり、旗が立ち、幟が立つて、ついには「帝国国歌」が歌われた。「六万の市民が一斉に歌ふ」「帝国国歌」は「あの冴えた鈴の音と飛行機の爆音とを一緒にして、不思議に市民の感情を湧き立たせる大行進曲」となつたのである。この「大行進曲のリズム」によつて、「国家は凄惨な剣の舞を舞はう」としている。ここには「行進曲」が「大行進曲」になり、それが人々を戦争へとかりたてていく道すがら明確に記され、戦争そのものも、作者石川達三によつて、「凄惨な剣の舞」として批判的にとらえられていることがわかる。

(三)

息子を満州にやっている「左官」は「二間の高さの足場の上」で壁を塗っていた。その足場の下を「鈴の音がりんりと冴え」、「白い号外が舞ひ上つ」た。

——最後通……此の字、知らねえや。……発せられん。

——うん。

——それから、知らねえ字か四つあらあ。領、事、館、包、囲さる。守備隊第〇中隊救助に向ふ。あんちゃん、此の中に居る？

——居るかも知れねえ。あんちゃんは守備隊だからな。

その息子から「軍事郵便」が届く。

——寒い。外套の襟が凍つてる。俺は今機関銃をカチカチに凍つた土堤の上に据ゑて休んである所だ。今朝からまだ敵は見えない。昨晩は徹夜で八里の道をこゝ迄来た。暗い道で、敵兵の屍体に十遍もつまづいた。明日あたり此の辺で大戦闘があるらしい。決して負けない。だが、きつと死ぬ様な気がする。死んだら、お父さんをよく助けてあげて呉れ。この便りが最後になるかも知れん。生きてゐたら又書く。

息子は満州の戦場で「死」を賭して戦っている。

妹の武子は兄を「兵隊に出して以来、髪を切つてダンサー」になり、「家計」を助けた。

(四)

武子の恋人である銀行員の中岡は「預金額が一分毎に減つて行く」さまを見て居る。「引き出す人引き出す人。やがて今年も暮れようとしてゐる。預金の急激な減少。銀行は傾き始めてゐる」のだ。

中岡は「例の電気会社の、何とか言ふ重役」が借金の申し込みに来たのに対し、「ひでえんだ。潰れるよ。助からないね。」と言ひ、「あすこばかりぢやないよ。随分潰れるぜ此の暮は。：：ね、暮にね、うちでも首切りがあるぜ！」と言ひ。

まさに「財界は嵐である。銀行も会社も商店も、一斉にぐらぐらと傾いて行く嵐である。切り抜け策は戦争だ！」と政界財界の巨頭は言つてゐる」。

(五)

中岡は恋人の武子に対し「何時会つて見ても、何を話して見ても何かしら別の事を考へてゐる様な娘」であると思つてゐる。兄を満州の戦場に送り出しているからだが中岡にはわからない。今日のデートでも「少し踊つて見ようかなあ」、というが「えゝゝゝ。わたし、踊るのがつまなくなつたわ」、と言つてことわる。そして、「あなたは兵隊においてにならないの、戦争になつても」。中岡は言ひ、「召集されるかも知れないんだ」、と。武子は「ぢや、行くのね」、と言ひ、中岡は「僕あ戦争はいやだよ」、と言ひ。

銀座の夜の舗道に、又しても消魂ましい鈴の音である。純白のボーイは無関心に皿を操る。食事の人達は雑談を続け、フォークを止めはしない。カウンターの娘は銀貨を数へる顔を上げはしない。シャンデリヤは平和であり、ストオヴは温い。然し召集令状は来るかも知れない。最後通牒は明朝発せられるであらう。宣戦は数日の中に布告されるであらう。僕は〇〇〇〇〇〇する！

けれども召集令状は来るかも知れない。応じなければ、罪人である。応ずれば、銃弾の的である。満洲の凍つた土の上に僕の胸から血が流れるだらう。流れた血は直ぐに凍つて、二度と脈打つ事はあるまい。

中岡は「僕あ戦争はいやだよ」と言ひながらも「召集令状」が来た場合、「応ずれば、銃弾の的」、「応じなければ、罪人」になるとして、迷つてゐる。しかも「最後通牒は明

朝発せられるであらう。宣戦は数日の中に布告されるであらう」という緊迫した状況下である。しかし、「戦争。野蛮時代の遺物だ。人類の恥辱だ。〇〇〇〇〇〇〇〇。莫迦な！僕はどこまでも〇〇〇〇〇〇する！」と、あくまでも戦争に対する批判的な考えと主体的な反対の意志を鮮明にする。

(六)

中岡の郷里は「深雪に閉ぢられた真白な村」である。父母と二人の弟がいる。「遠く日本海の潮鳴りの聞える朝」、「黒いはつびの男」は「未明の村に林に凍る程冴えた鈴の音を反響させて、雪の上に号外を撒きつゝ走り去つた」。松葉杖の弟は村の役場へ急ぎ、父は「老いた妻と小学生の子供とに、昔の彼の軍功を話し」て聞かせる。そして、「あれが足が悪くなければ、兄弟二人揃つて出征出来るんだがなあ」と言い、母は「だつてあなた……」。 「思はず言つたが、思ひ返して、——さうですね。……と低く答へた」。父は好戦的であるのに母は厭戦的なのである。

役場は在郷軍人と若い農夫で一杯になつていた。弟は「兄一人でも御役に立てばと思つて、えゝ、それを伺ひに来たんです」、と言ひ、役場は「あゝ、そりや大丈夫ですよ。兄さんにさう言つて喜ばしてあげて下さい。」と言う。弟は「戦争だ。兄は名誉の軍功を立てるであらう。帝国の国威は益々輝くであらう！」と思う。

(七)

中岡の銀行。「預金の急激な減少は日を追うて激しい。底無しの不景気だ」。銀行は「貸付けの回収不能で傾きつゝある。最早遠くない倒壊である」。「ボーナスは去年より十日も遅れてもまだ呉れない。餓首は本当かも知れない」といつた状態である。「切り抜け策は戦争だ！」という「政界財界の巨頭」の発言が力をもつて来る。

中岡の乗つたバスの窓外には次のような光景が展開する。

旗を立てた行列であつた。先頭は在郷軍人旗、カーキ色の一群。次で、朱を入れたは

つびの一群は消防夫である。白い数本の幟に、明治神宮祈願、と読んだ、国難打開祈願、と読んだ。その後が続く老人、町家の中年の女達、洋服の男達、幾本も幾本もの幟の白いはためき。やがて先頭は桜田門にさしかゝる。二重橋前に向つて白壁の門を入らうとする。その時、先頭の在郷軍人団から、唳々として起る喇叭、国の鎮めの莊重な喇叭であつた。

乗合自動車は走り出した。窓に倚つて中岡は、じつくりと涙が湧いた。国難は彼の上にも襲ひかゝつて来てゐる事を知つた。自動車は走つても走つても、国難打開祈願の群と白い幟とは、蜿蜒と続いて車窓の外を進んでゐた。

此の国難！ 内憂外患、真に内憂外患である。しつとりと涙が湧いた。けれども、車窓に暮れて行く濠の薄氷を眺めながら、猶も（七十三字削除）僕は生きる権利を持つてゐる。

中岡は「国難」が「彼の上にも襲ひかゝつて来てゐる事」を知つた。この認識は「僕あ戦争はいやだよ」、「戦争。野蛮時代の遺物だ。人類の恥辱だ。○○○○○○○○。莫迦な！ 僕はどこまでも○○○○○○する！」と言つていたこれまでの中岡とは根本的に違う。「国難」という、いわば被害者意識にとらわれたのだ。しかしまだ、「僕は生きる権利を持つてゐる」として、二律背反に悩んでいる状況ではある。

二人は「テイ・ホール」に入る。武子は「——どこかの師団に動員令が下つたんですつて。とうとう戦争ですわ」と中岡に言う。「動員令か。又何千人か○○○○○○んだね。貧乏人の息子達は可愛さうだ」と中岡はいう。戦争の犠牲者が「貧乏人の息子達」であることを知っているのだ。武子と別れて「カフェ」に入つた中岡はそこで「臨時ニュース」を聞く。

——…派遣軍は今朝六時奉天駅に到着しましたが、到着前に一気に勝敗を決せんとした敵の約三個大隊は昨夜十一時突如我が右翼に向つて攻撃を開始し一斉に砲火をあげせ、又一方吾軍の左背に居た一部隊は鉄道警備の手薄に乗じて俄然密集隊を組織して突撃し来り、吾が五十名の守備隊は極力防戦しましたが敵の大勢力に如何とも為す能はず、遂に鉄道は大破せられ、大興以北の吾軍は全く孤立無援の危険に曝されるに至りました。

中岡は聞いてゐた。（中略）今日の夕方桜田門で見た国難打開祈願の群、あの時と同じ様に胸のいたむものがあつた。孤立無援のカーキ色の兵隊が、走つては伏し走つては伏し、耳をつんざく巨弾の爆発、砲煙を真横に吹き散らす北滿の寒風。伏せば、大地は凍結、仰げば、大空は飛雪。風は斜に翻る連隊旗の下に、傷いて行く、死んで行くカーキ色の兵士達…彼等の屍の上に国家がある。無惨にも斃れゝば忽ち凍つて行く此の屍を土台にして、国家がある。けれども中岡は立ち上つた。帰りませう。戦況報告に興味はありません。

中岡は「屍を土台」にして「国家」があると見ている。しかしまだ、「戦況報告に興味はありません」としている。

「夜半過ぎたアパートの室に帰つて見る」と、弟が訪ねて来ていた。兄弟の間に次のよ

うな会話がかわされる。

「兄さん、喜んで下さい、召集令状が来たんです」と弟は言う。中岡は「ち！ 行かねえよ、俺は」と言う。「行かねえ？ ……召集に応じないんですか？」と反問する弟。「さうさ。死にたくねえからね。」と兄は答える。「行かないや罪人ですよ」と弟は戒める。「その罪人は死刑かい？ 死刑でなけりや生きてゐられるからね。その方がいゝぜ」と中岡は徴兵忌避の姿勢を明確にする。弟はさらに言う、「だつて、仕掛けられた戦争をどうするんです」と。中岡は「戦争に行くばかりが忠義ぢやないんだからね。え？ さうだらう？ 銀行づとめも忠義のうちさ。だけど、俺の銀行は半分潰れたよ。そのうち忠義も出来なくなりさうだよ。失業したら召集に応ずるかな。第一兵隊は食はして貰へるからね。はつは！」、と言いながら笑う。弟は「此の不忠な兄」のため「郷里の人達」に対し「顔向け」ができないと悩む。

(八)

翌朝、中岡は「アスアサカヘル、ヨウイタノム」の電報を父あてに打つ。「死んで行く兵隊達は、〇〇〇〇〇〇〇〇の為めばかりに死ぬのではない、俺の為に死んで行くのだ。(中略)やはり生きてゐなければならぬ。此の国家を生かして置かねばならない。国家を生かして置く為には、兵隊は死なねばならない」。中岡はここでも「死んで行く兵隊達は、〇〇〇〇〇〇の為めばかりに死ぬのではない、俺の為に死んで行くのだ」、「国家を生かして置かねばならない。国家を生かして置く為には、兵隊は死なねばならない」と考える。この考えの根底にはこの戦争を「国難」とみる被害者意識が働いている。中岡は「最後のビジネスとして、銀行に宛てて辞表」(「私事今回召集令状を受け従軍致す事と相成候間 ……」)を書いた。

そして、思う。

「僕は〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇！ けれども〇〇〇〇するにはそれだけの社会状態の準備が必要だ。その否定し得る社会の来るまでは、戦争は矢張り肯定されなければなるまい。そして、数々の戦争の惨禍を土台にして、その上にこそ始めて戦争を否定し得る良い社会が出来るのであるかも知れない。つまり、膿が出て腫物が治る。膿のある中は腫物は時々痛むに違ひあるまい」と。中岡は戦争を必要悪ととらえる。

中岡は「腕時計を見る」。「五時になれば、ホールの中は華やかなライトがつく。恋と命とを同時に終る、その最後の踊りを踊りに行かう、思ひつきり踊つて、その足で真紅な召集令状一枚を持って汽車に乗らう。だが、あゝ！ 俺も死ぬのか。一生、何一つ碌な仕事もしないで、二十八才、戦争に行つて、敵のたまにあたつて ……」

死を覚悟する中岡。中岡の「耳」は「殷々として窓外に響く鈴の音の、りんりんと冴えて、今宵は絶え間なくりんりんと冴え続ける音を聞いた。戦争。今、彼は、出征する事を、死に行く事を、恐ろしいとは思はない。決して恐ろしいとは思はなかつた」。中岡は武

子に「宣戦詔勅！」という「号外」を見せ、「真赤な紙」を見せた。そして言う「今晚発つんです」、と。

「窓の外に、殷々と、宣戦詔勅の号外は鳴り響き、帝国は戈を取つて立つた！ 踊らう！戦争だ、此の戦争を踊り抜かう。男の胸の血を湧き立たせる、火を吹いて燃え上らせる、此の戦争と舞踏と。同じ事だ、戦争は帝国が命懸けの舞踏だ、舞踏は俺達の歓喜の戦争だ！」レコードが止む。中岡は「僕は今から戦争に行く」と武子に告げる。武子は「わたし、永い間、それを待つてみましたの」と言う。そして、さらに言う、「わたし、今日限りホールを廃しますわ。そして、従軍看護婦になります。もう手続きはしてありますの」。中岡は「解つた。有難う。」と言い残し、ホールを出て行く。「命をすて、恋を得た、これは喜劇なのか悲劇なのか」。

舗道の上に、響き亘る宣戦の号外の鈴の音、軍隊慰問基金募集を叫ぶ角帽の大学生の一群、殺気立つて走る電車の響き、それ等の音はやがて合して大きな行進曲となつた。不思議に胸をゆるがす宣戦の大行進曲となつた。此の行進曲に歩調を揃へて、此の雑踏の中を進む一群の行列は、挙国一致国難打開の大旗をかざした市民有志であつた。先頭に喇叭を吹く在郷軍人の四列縦隊、次に朱を入れたはつぴの消防夫の一群、此の群の真先に立つて幟を揚げて進む丈の高い中年の男は、カーキ色の埃にまみれた武子の父であつた。中岡はさうとは知らなかつたが、幟を目あてに行列に割り込むと、此の左官の腕にがつしりと腕を組んだ。そして、不思議な大行進曲のリズムにステツプを合せて、恋人の父と共に国難打開の行進を続けた――。

中岡は、とうとう恋人武子の父と「がつしりと腕を組んだ」のだ。

※

「財界は嵐である。銀行も会社も商店も、一斉にぐらぐらと傾いて行く嵐である。切り抜け策は戦争だ！ と政界財界の巨頭は言つてゐる」。この「政界財界の巨頭」の「言つてゐる」ことの具体化が「最後通牒」であり、「宣戦詔勅」なのである。つまり、この戦争は大不況の「切り抜け策」、すなわち、他国に対する侵略戦争なのである。このことはしつかりと理解、把握して置かなければならない。作家石川達三は、このことを知つていたので。だからこそ、石川達三は「国家は凄惨な剣の舞を舞はう」としてゐるとしたので。

しかも、石川達三は一般の人々が「政界財界の巨頭」の「言つてゐる」こととは別次元で戦争をとらえていることも知つていた。つまり、一般の市民は中岡の弟が言つているように、「仕掛けられた戦争」というとらえ方をしているのだ。だからこそ『戦争と舞踏』は、「鈴は冴えてりんりんと、冴え切つてりんりんと鳴り続けて止まなかつた」から始まつたのだ。つまり、市民の一人である左官をかりたてたのは「最後通…」（中略）発せら

れん。」「領、事、館、包、囲さる。守備隊第〇中隊救助に向ふ」とかかれた「号外」だったのだ。「領、事、館、」が敵国に「包、囲」されたから「守備隊第〇中隊」が「救助」に向かったのである。その「守備隊」の中に左官の「あんちゃん」も居たことから、この左官は「国難打開祈願の群の、朱を入れたはつびの消防夫の先頭に、白い幟を捧げて進ん」ただのである。あくまでも、敵国から「仕掛けられた戦争」なのであつて、こちらから侵略したわけではない。そういう意味では中岡も同じ範疇に入つて居る。「僕あ戦争はいやだよ」と言つていた中岡は「死んで行く兵隊達は（中略）俺の為に死んで行くのだ」と思う。つまり、「仕掛けられた戦争」のために出ていった兵隊が「俺の為に死んで行く」ということになる。

さらに、「仕掛けられた戦争」の立場をとる中岡は「けれども〇〇するにはそれだけの社会状態の準備が必要だ。その否定し得る社会の来るまでは、戦争は矢張り肯定されなければなるまい。そして、数々の戦争の惨禍を土台にして、その上にこそ始めて戦争を否定し得る良い社会が出来るのであるかも知れない」、として、戦争容認の姿勢をとる。つまり、「仕掛けられた戦争」を必要悪としてではあるが認めているのだ。以後中岡は「宣戦詔勅の号外は鳴り響き、帝国は戈を取つて立つた！ 踊らう！ 戦争だ、此の戦争を踊り抜かう。男の胸の血を湧き立たせる、火を吹いて燃え上らせる、此の戦争と舞踏と。同じ事だ、戦争は帝国が命懸けの舞踏だ、舞踏は俺達の歓喜の戦争だ！」と言ひ、「挙国一致国難打開」の渦の中にまきこまれて行く。

翌日には召集令状に応じ、戦地へと赴くことになる。

したがつて、『戦争と舞踏』は「戦争はいやだ」と言う中岡が参戦していく過程を描くことにより、戦争に対し批判的な市民が戦争をどう受け入れ、召集に応じるようになっていくかをあきらかにした。

中岡の恋人の武子は「私の兄さんは、満州に居るのよ。戦争で一寸負傷して、今野戦病院に居ますの。今朝手紙が来て。でも、もう三日もすれば又戦線に出るんですつて」、と言ひ、彼女自身もそうしたことから「今日限りホールを廃し」、「従軍看護婦」になるという。武子の父は「挙国一致国難打開の大旗をかざし」た「一群」の「真先に立つて」行進している。

中岡の弟は「足が悪く」て「御役」に立つことができないことから、「兄一人でも御役に立てば」と思い、兄への召集令状を東京まで届ける（「兄さん、喜んで下さい、召集令状が来たんです。だから早速持つて来たんですよ」）。しかし兄は「ち！ 行かねえよ、俺は」と言ひ、「召集に応じない」態度をとる。弟は「郷里の人達にどうして顔向けが出来よう！」と思ひ、体面を気にする。つまり、世間体からすすんで応召していかざるを得ない形がここにある。

『戦争と舞踏』は「政界財界の巨頭」と一般市民の戦争観のちがいを鮮明にしながら、戦争へとかりたてられていくさまざまな市民像を描いた。

*

昭和六年一二月の『非情都市』は権力の〈束縛〉に翻弄される民を描いているという点で、あるいは昭和七年一月の『戦争と舞踏』は国家の論理と個人の心情とのずれを描いているという点で、それぞれ社会的なまなざしを保持しえていたのだが、これ以降しばらく、石川は社会そのものを小説の題材とはしなくなる。それが、『襟を開く女性』『聖愛』『石婦』『禁断』『秋の日の男達』である。

第三節 『襟を開く女性』の〈解放〉

『襟を開く女性』は昭和七年二月（久保田正文『新・石川達三論』では昭和六年になっているが、これは間違いである）『新早稲田文学』誌上に発表された三八枚の短編小説である。

『襟を開く女性』は神からの解放と自我の確立という、いわば普遍的な人間のありようを問うた作品であり、石川達三の初期作品の代表作の一つであるばかりでなく、宗教学史上でも注目されてよい作品である。

一

次の文章は『襟を開く女性』の結末部である。

今は一切の束縛に負けない強い自分の心を見つけた彼女であつた。（中略）自分には用の無い死人達、用のない患者達。健康な社会へ行かう広い力強い大きな社会へ！肺病人は勝手に死ね、恋ばかり探してゐる男達にも用は無い、もつと他の世界もつともつと他の世界へ行かう。

——先生、私、廃めさせて戴きますわ。言ひ棄て、室を出て行く女性（中略）

今は心ひろびろとして星を見上げる女性、自由の喜びに満ちて銀河を見上げる女性、頬に堪へられぬ微笑すら洩して今こそ堅苦しい純白の服の襟を思ふがまゝに広々とひろびろと開く事の出来た女性であつた。——

ここには「先生、私、廃めさせて戴きますわ」と言い棄て、未来へと力強く歩み出して行く主人公の「女性」の姿がある。「今は一切の束縛に負けない強い自分の心」をもって、「健康な社会」、「広い力強い大きな社会」へと歩み出そうとしているのだ。

したがって、『襟を開く女性』の主題はこの女性における否定と再生のドラマと見てよ

い。「先生、私、廃めさせて戴きますわ」という言葉は再生へのスタートであり、過去への決別を意味する。

以下、こうした観点から『襟を聞く女性』を読んでみよう。

二

「女性」は自分を訪ねて来た東京の学生に向かって、「私、生活を、すっかり変へたいと思ひますの、すつかり」と心のうちをあかす。この言葉は結果的には、「先生、私、廃めさせて戴きますわ」という言葉に直接重なる。したがって、「生活を、すつかり変へたい」という言葉が意味する「変へ」る前の「生活」が問われなければならない。

「女性」は「一生の仕事」として、「病人の為に尽してもいゝ」と考えていた。病院では看護師として、「肺病人の看護」に追われている。

三

甲南病院の看護師は「患者から恋される事は極力避けねばならない。殊に患者に恋する事は避けねばならない」とされている。

ところが、この「女性」は同僚の看護師から、「こゝはあなたの様な奇麗な若い人の来る所ぢやないわ」と言われるように、一人の患者と一人の学生から「恋され」ている。

患者のRは「女性」の「最後の訪問」を待たずに死んでいく。Rは「彼女に取つて良い病人」ではなかった。Rは「彼女を待ちながら死んだに違ひない」からだ。つまり、Rは「女性」にまぢががなく「恋」していたのだ。「女性」は学生に、「もう私、ぢきにこゝを止しますわ。でも、迎も続きませんもの。（患者に恋をされて、駄目なんです、苦しくて…）」と告げ、さらに、「私、生活を、すつかり変へたいと思ひますの、すつかり」と言う。その結果、Rが「書き遺した手紙」、「死んだ人からの恋文」に対し「女性」は「手紙は見ず」、「縦に二つ」、「横に三つに裂い」てしまう。そして、「（Rさん、気の毒な方！けれども、もう、私には、恋…出来ませんのよ。それに、死んだあなたに恋を言ふ資格があるでせうか、肉体を無くして了つたあなたに。いゝえ！死んだ人にさへ私は束縛されなければならないんでせうか。）」と思ひ、「手紙」を「床に叩きつけ」たのである。「いやだ！あゝいやだ私の首にまきつき首を締めつける死人の手クリストの手患者の手」、「自分には用の無い死人達」と言い、「今は一切の束縛に負けない強い自分の心」をもつて、「健康な社会へ行かう広い力強い大きな社会へ！（中略）もつと他の世界もつともつと他の世界へ行かう」と決意する。そして、「先生、私、廃めさせて戴きますわ」と言い棄て、「余りに胸と襟とを締め過ぎ」ていた「堅苦しい純白の服の襟を思ふがまゝに広々とひろびると開く事」ができたのである。

四

東京の学生は「一度」「拒まれた恋を求めようとして訪れたが、女性は身も心も決心の看護婦服の純白」で身をかためていた。「女性」は「決して此の学生に心を許すまい」と思っていたのだ。学生と再会した「女性」は学生と「別れると、ほつと」する。「誠実な彼の心は知つてゐたがその誠実さに首を締められる、肩を疲れさせられる」のだった。

それ故、「女性」は「旅を！ 誰も知らぬ土地、神様さへも知らぬ土地、束縛する男達の居ないところ、束縛する恋の無いところ、そこでは、思ふさまに此の襟を開く事が出来るかも知れない！」と思う。そして、「いやだ！ あゝいやだ私の首にまきつき首を締めつける死人の手クリストの手患者の手恋人の手」と思う。改めて「今は一切の束縛に負けない強い自分の心を見つけた」「女性」は決意する、「健康な社会へ行かう広い力強い大きな社会へ！（中略）もつと他の世界もつともつと他の世界へ行かう」と。そして、「先生、私、廃めさせて戴きますわ」と言い、「今は心ひろびろとして星を見上げ」、「自由の喜びに満ちて銀河を見上げ」、「頬に堪へられぬ微笑すら洩して今こそ堅苦しい純白の服の襟を思ふがまゝに広々とひろびろと開く事」ができたのである。

五

この「女性」は「朝夕のチャペルの御つとめ」に「追はれ」ながらも、「随分信仰」もして来たと言ひ、「今迄は、余り周囲にわづらはされてゐました。他人の為に生きて来た様な……」とも言ふ。キリスト教徒として「あらゆる享樂を斥けて、あらゆる苦難のみを求めて来た」生であつたのだ。

この「女性」が「病身」の「夫人」のいる男性を愛してしまふ。「女性」は「若し夫人が死んだ」ならば自分はその男性と「結婚する」だろうと思う。そして、男性も「それを望む」だろうと考える。もしそうならば「夫人が早く死ぬ事こそ最も望ましい事」なのである。「女性」は「それを待つてゐる」のだ。「夫人よ、早く死んで下さい！」。

「女性」は「此の浅猿間しい自分の呪はしい心」と「悪魔に魂を売つた此の身の懺悔」のため、「礼拝堂」へ走つた。しかし、あまりにも「大きな苦しみ」だったため、「信仰では慰められ」なかつた。「女性」の「信仰は恋と一緒に消えた」。そして、「恋の痛み」の沈んで行くと共に、彼女の心は神から自分に帰つて来た」のである。神は人間の大きな悲しみの前でその無力さを露呈したのだ。「女性」は次のように言う。

私もう、誰の為にも、自分の為にも、祈る気持になれないの。いけない事ですけど。でも、私、もつと強くなりたい、もつと強く！ 神様に頼らなくても生きて行ける程、自分の力で生きて行ける程。今迄は、私、随分信仰したわ。そして慰められてゐたけ

れど、信仰で慰められる事は、信仰しなくても慰められる道がある様に思へるの。そして、信仰では慰められない、もつと大きな苦しみだつて、あるわ。そんな時、どうしても、自分の力がほしいと思ふの。

ここには、神否定と「自分の力」の発見がある。「神」に「頼」るのではなく、「自分の力」で生きるのだ。「今迄は、余り周囲にわづらはされておました。他人の為に生きて来た様な……。もつと、自分に強く生きたいと思ひますの。広く、自由な」、「信仰は弱いものですわ。最後には自分の力に帰つて来なくては」という。

そして、「卓上のバイブルと聖母額」を「床」に「叩きつけ」、「いやだ！ あゝいやだ私の首にまきつき首を締めつける（中略）クリストの手」と叫ぶ。

「旅を！ 誰も知らぬ土地、神様さへも知らぬ土地、（中略）そこでは、思ふさまに此の襟を開く事が出来るかも知れない！」「東京へ行かう！」

「今は一切の束縛に負けない強い自分の心を見つけた」「女性」は「自分には用の無い死人達、用のない患者達。健康な社会へ行かう広い力強い大きな社会へ！ 肺病人は勝手に死ぬ、恋ばかり探してゐる男達にも用は無い、もつと他の世界もつともつと他の世界へ行かう」、と決意し、「先生、私、廃めさせて戴きますわ」と「言ひ棄て、室を出て行く」のである。

「今は心ひろびろとして星を見上げ」、「自由の喜びに満ちて銀河を見上げ」、「頬に堪へられぬ微笑すら洩して今こそ堅苦しい純白の服の襟を思ふがまゝに広々とひろびろと開く事」が出来たのである。

※

『襟を開く女性』を以上のように読んでくるならばその主題はおのずから明らかになつてくる。すなわちそれは人の死を願うというあつてはならない「大きな苦しみ」をかかえこんだ時、「信仰では慰められない」ことを知った主人公の「女性」が神を棄て、「自分の力」に自覚め、「自由の喜び」を謳いあげた作品なのである。つまり神を否定し、自我の確立の喜びを謳いあげたのだ。さらに言うなら、「束縛する男達」、「束縛する恋」、「首にまきつき首を締めつける死人の手」、「クリストの手」、「患者の手」、「純白の服の襟のかたさ」などからの解放でもあつた。

『襟を開く女性』は、看護師であつた主人公の女性がその仕事を捨て、「一切の束縛に負けない強い自分の心」、すなわち主体性を持って「広い力強い大きな社会」へと歩み出す話である。この女性に恋をする男（患者）がいる。女性にとつては、それも〈束縛〉なのである。もつといえ、自分の思いどおりにならないという意味で、この作品では〈束縛〉を広く捉えている。その際の〈解放〉とは、誰かに救出してもらふことではなく、自ら主体的に意思を貫くものだとする石川のメッセージが窺える。しかしこれも、内面の問

題である。

第四節 『聖愛』の〈解放〉

『聖愛』は昭和七年三月一日、「新早稲田文学」四月号に掲載された。同号の「編輯後記」には「石川の小説は彼近来の快作であらう。此の作品に於ては、明かに独自の境地への完成に近いことを想はせるものがあると信ずる」とあり、高い評価が与えられている。何をもって「快作」と言い、何をもって「独自の境地への完成に近い」と言うのか、今一つはつきりしないが、作者石川達三が女性の内面に潜む現実性重視、もしくは現実偏重の姿勢の性向を「マドンナ」の概念、もしくは「竹」のイメージに重ねて理解し、発見したところに面白さがある。

一

(一)

画家の私は「彼女の画像を描いて見よう」と思う。彼女の「出来る事ならば表情は冴え冴えとした悲しみの色」を湛えていて欲しいと思う。

そこで、「出来るだけ悲しさうな顔をして御覧」と彼女に言うと、「出来ないわ」と彼女は答える。私は「君の悲しみの表情をモデルにして一枚描きたい」、「だから僕は君が失恋するのを待つてゐる」んだと言う。しかし、彼女は恋人の白木が「死」んでも「失恋」はしないと云う。私は「恋人が死んだら誰だつて失恋するもの」だと言うが、彼女は反論する。「恋人が死んだから恋愛は終りよ。電車の終点の様に、そこから先は恋愛の軌道は無いのよ。だつたら、失恋でなくて、恋愛の消滅でせう」と。さらに彼女は言う、「過去の事は皆忘れる事にしてゐるの。覚えてゐたつて、重荷になるだけ」、「居なくなつた人に対してなら薄情だつて構はない」。「だつて、過去の愛情なんか仕様が無いでせう?」。 「その代りわたし、現在の愛情にはそれは忠実なの」。「だから、何度目に恋をしても、自分では何時でも初恋だと思ふ」と言う。

私は「これは神聖だ」と思う。「竹」が「何年経つてもまるで今年生れた竹の様に新鮮な表情をしてゐる」ように、彼女も「竹」と同じだと思つたからだ。

(二)

「恋人が死ん」だら「恋愛は終り」と言う彼女、その彼女の恋人白木が死んでしまう。

彼女はそつと婚約者の手に触れて見た。けれども此の愛人は彼女の手を握つては呉れなかつた。死んだのかしら、と彼女は思った。彼の顔をのぞき込んで、小声で、白木さん！と呼んで見た。

：倚りかゝつてみた壁を失つた様にぼつつりと孤独になつて彼女は立ち上つた。すると、ついさき迄と現在との間に実に大きな扉が下されたのを感じた。白木との愛情が過去になり始めたのだ。取り残された。裏切られた。……彼女は一本の杭の様に孤独になつた。けれども、孤独は彼女に取つて恐ろしい事ではなかつた。新しい生活が又これから始るのだ、と思つた。

(三)

「新しい生活が又これから始る」と思う彼女は、「君は、又、独りつきりになつたね」と私が言うと、「えゝ。又出直すの」と「軽々」と答える。「悲しくない？」と私は聞くが「悲しくないわ。何だか、さうね、迎も綺麗な気持よ。澄んで……」と彼女は言う。私は、次のように思う。

不思議に澄んだものに触れた様に思つた。此の女は其の瞬間毎に生れ變つてゐるのだ。過去の殻を持たない。追憶の重い荷物をもたない。過去は総て他人のその様に見える。吾々は過去の無数の経験によつて心の中に無数の疵を受けてゐる。その傷の痛みに苦しんでゐる。然るに彼女は全然疵を受けて居ないのだ。如何なる経験も彼女を傷ける事が出来なかつた。彼女は忽然として此の瞬間に生れたばかりの嬰兒の様に清浄なのかも知れない。

そこで、私はまた聞く「君は白木を愛してはゐなかつたんだね」と。「愛してゐたわ。と彼女は平静に言つた。随分深く愛して来たつもりよ。愛するに足る人でしたもの」と答え、そして、「明日から、また、すつかり新しい生活が始まるの！」と言う。

(四)

「春が来る」気配を感じながら、「盗んだ肖像を金椽に嵌めて壁にかけた」。彼女が訪ねて来た時、私は「白木から盗んだ」ことを告げた。彼女は「さう？あの頃からもう、私を愛してゐて下さつたのね！私知つてたわ。あの頃は私、白木さんを愛してゐたの。御免なさい。でも、仕方が無い事ですもの」と言う。それを聞いた私は、次のように思う。

何と言ふ単純な心であらう。私の卑怯な行為が彼女に取つては何でもない事なのだ。彼を愛した事すらも何でもない事なのだ。私はイエツの詩を思ひ出す。Take Love easy, as the leaves grow on the tree:.....だが、瞬時も躊躇せず恋から恋を追うて行き、而も平然として以前の恋を語る此の女が、何故に斯うも清らかに純真に見えるのであらうか。

(五)

私は「葬式」に行くが、「君も行かう」と彼女を誘う。彼女は「行かない」と言う。「どうして？ 葬式位ゐ行き給へ」と重ねて言うが、彼女は「憂鬱よ。悲しくなるわ。だつて、その為に死んだ人がどうなる訳でも無いし……」と言う。「君は礼儀を尽すと言ふ事を知らない」と批判するが、彼女は「さうね。でも私、礼儀を尽すのだつたら生きてる人に尽すわ」、と言つてのける。

(六)

私は次のように思う。

白木が彼女を妻と呼ぶ事が出来なかつたのは誰が悪いのでもない。今、彼女は私を愛すると言ふ。私は白木の為に、今直ぐに彼女の愛情を肯定する事は出来ない。けれどもやがては心から彼女を愛する事が出来るであらう。私は彼女の傍に立つて彼女の肩に手を置いた。其時彼女の表情は白々と不思議な輝きをもつて、壁の画像と全く一致して行く様に思はれた。さうだ、是は彼女の愛の表情であるに違ひない。彼女は白木を愛した時にあの輝かしい表情を示した。今私を愛する時になつて全く同一の表情を示してゐる。彼女に取つては白木を愛する事とは全然別のものではないに違ひない。彼女は以前に初恋を経験した。白木に対しても初恋であつた。今私に対してもその通りであるに違ひない。彼女は永遠に神聖なる初恋を続けて行くのかも知れない。私はレオナルド・ダ・ヴィンチの描いたマドンナを思ひ出す。マドンナの馥郁たる表情の中にはどこか此の画像に似たものがある様に思はれた。そして永遠に初恋を続けて行くであらう彼女は、永遠の処女であるマドンナに一脈相通ずるものが有る様に思はれた。(中略)此の考へに答へる様に彼女はおだやかな瞳をあげて私に言ふのであつた。——私、何だか、あの絵が、マドンナに似てゐる様に思ふの。

※

『聖愛』を以上のようなものとして読んでくれば、主題は自ずからあきらかになつて来

る。つまり、彼女のマドンナ性を発見したことである。マドンナ性とは「永遠の処女」の意で、「永遠に初恋を続けて行く」彼女、「以前に初恋を経験」し、「白木に対しても初恋」、そして、「私に対してもその通り（注「初恋」）」である彼女のことである。つまり、「居なくなつた人に対してなら薄情だつて構はない」、「過去の愛情なんか仕様が無い」、「その代りわたし、現在の愛情にはそれは忠実なの」、「だから、何度目に恋をしても、自分では何時でも初恋だと思ふ」という、女性の処女観をいう。作者石川達三は『聖愛』に於いて、女性のマドンナ性（「処女」性）を発見したのだ。これは封建的な家族制度下における処女性尊重の否定を意味すると同時に、女性達にのしかかる処女尊重の呪縛からの解放をも意味する。女性のもつ現実尊重志向が処女崇拜思想を打ち破る一つの原動力なのだ。

これはまた、今死にゆく彼女の恋人白木が「僕が、死んだら、君はどうするんだ」、「僕が死んだら君は高山と結婚するだらうね」と言ったのに対し、「——さうね。するかも知れないわ」と彼女ははつきりと言つて了つた。そして彼を憎いと思つた。死の前になつて、死後に起るかも知れない事に向つて嫉妬する男の気持を、貧欲な獣の様に思つた。汚ない、呪はしいものと思つた」とあるように、「死の前になつて、死後に起るかも知れない事に向つて嫉妬する男」は「貧欲な獣の様」とまで嫌悪し、批判している。これは現実に対し、前向きな姿勢をとる彼女と反対の生き方なのである。したがつて、『聖愛』における彼女の生のありようは処女崇拜、貞操観念に呻吟する女性達に、そこからの解放の一つの生き方を示唆するということで、高く評価されてよい。

『聖愛』は、「過去の愛情なんか仕様が無い」、「その代りわたし、現在の愛情にはそれは忠実なの」、だから「何度目に恋をしても、自分では何時でも初恋だと思ふ」という女性が主人公。石川達三は「永遠に神聖なる初恋を続けて行く」女性を通して処女崇拜、貞操観念に呻吟する女性たちに、そこからの解放の一つの生き方、考え方を示した。すでに〈解放〉の内面化が始まっている時期の石川作品らしく、過去の思い出さえ〈束縛〉であるとする観念的な〈解放〉論である。

第五節 『石婦』の〈解放〉

『石婦』（久保田正文『新・石川達三論』の「石川達三年譜」では『石女』と記されている）は昭和七年六月、「新早稲田文学」に発表された二七枚の短編小説である。

この作品は作者石川達三が子供に恵まれなかった女性の悲しみの根源に迫つた作品である。

以下、作品の展開に従つて読んでみよう。

(一) 『石婦』は「美貌であつた先妻」が「胎児と共にインフルエンザで急死」したあと、「後妻」に迎えられた叔母が、「永い間叔父の表情を眺めては心を痛め」、「程無く心臓を悪く」して死んでいった物語である。

(二) 「後妻」に迎えられた叔母敬子は「死ぬ迄少女の佛」を残していた女性であつた。叔父は叔母の「若い心」を愛した。しかし、叔父は叔母を「家に迎へ」入れた後、「美貌であつた先妻の幻に満ちた夜の室」で、「不思議に淋しいもの」を感じだした。つまり、「後妻」を「家に迎へ」入れることによって、「先妻」への愛に目覚めたのだ。その結果、叔父は「後妻」敬子を遠ざけることになる。

(三) 叔母は「『ね、私、幸福でせうか？』」と叔父に聞く。彼は「『知らないよ。自分で幸福だと思つたら幸福なんぞせう』」と答え、とんととりあわない。これは「美貌であつた先妻の幻に満ちた夜の室」で「不思議に淋しいもの」を感じ、「一体夫婦とは何である」と問うた結果である。

叔母は、今度は「『ね、私、断髪して見ようかと思ふの。』」と言う。叔父はまたもや、「『うむ。いゝでせう。』」と答える。叔母は再度、「『似合ふでせうか。そして洋装して見ようかと思ふの。いけない？』」と問う。叔父はやはり「『いゝでせう。』」とにべもなく答える。叔父は一方で、「美しい一匹の犬」を飼い、次に「五六羽の真白な鶏」を飼い出す。そして、「出勤の暇々に広い花園を耕しては黙々として一心に草花」を育て、一層叔母を遠ざけるようになる。叔父は「自分独り」で生き、叔母は犬や鶏や花より「淋しく置き去りにされて行く」ことになる。叔父の愛情は花や犬や鶏へと移つたかの観がある。叔父は「先妻がその胎児と共に急死」して以来、「心境は氷の様に冴えて冷やか」になつてしまう。叔母はひとり「取り残されて独り花園を彷徨ひ夫の愛犬の首を撫でゝ暮し」ている。そして、「孤独を慰める方法として歌をうたふ」ことを始めた。

(四)

「結婚して数年後」子供の生まれない叔母は「始めて医師の診察」を受ける。

「診察」の結果は「開腹手術をしなければ一子子供は産れない」ということであつた。叔母は夫に聞く「あなたは子供がほしい？」と。その時すでに、叔父は「子供はうるさいと考へる程孤独な心」になつてしまつていた。叔母は「『さう。ぢや私も止すわ』」と寂しく言い、子供を生むことを断念する。つまり、叔母は「開腹手術」をするのが「怖」かつたのである。この「子供」を断念したことが叔母の「其の後の生活を根本的に貫く一つの動機となつた」。叔母は「断固としていつ迄も若くあらうとした」。また、「髪を切つて洋装した。若い友達をしきりにほしがる様になつた。誰とでも愉快地遊ぶ様になつた」。

(五)

叔父は「孤独を愛し孤独を享樂」してゐた。叔母の方は「『私、字を習ひたいと思ふの。どう？』」などとあいかわらず、移り気なことを言う。叔父は「『いゝでせう。』」と、この時も「気の無い返事」を繰り返す。次に叔母は、「『ヴァイオリンを習つて見ようかしら。』」などと言ひ出す。叔父はまたもや、「『中々多趣味だね』」などと軽くからかい、認める。

叔父はこうした叔母の「若い心のめまぐるしい変化を愛してゐた。けれども唯遠くから眺めて愛してゐるだけであつた。彼は叔母に対して何の牽制もしなかつた。叔母はその為に却つて中心を失つて放浪する」のであつた。

「放浪」はまだ続く。

叔母は言う、「油絵を習はうかしら。子供の時に少しやつた事があるのよ。学校中で一番巧かつたの」と。叔父は「『何をやつても巧いんだね』」と気のない返事をする。叔母はさらに「『二階の八畳を畳を取つてアトリエにしてもいゝ？』」と問い、叔父は「『いゝよ。あの室は使はないんだから』」と言ひ、部屋を与える。

「やがて叔母は文化学院美術科の学生」になる。そして「洋服を着て二十歳前後の娘達と一緒に絵」を習ひ始める。「若い娘達と同じに扱はれる学校での時間は叔母に取つて最も活気に満ちた生活」になつていく。叔母は「自分の子供を甘やかして育てる様に自分を甘やかし」、「自分に我儘を言つてはその我儘を自分で許してやつた。さうする事に依つて夫から置き去りにされた孤独の生活を賑やかにする事」が出来たのである。

(六)

叔母は「家庭の仕事から次第に興味」を失つていく。それ故、叔父は「裾の破れた袴を着たり綻びた寝間着を着たり」してゐた。この「夫婦は決してお互ひに束縛しない事を暗黙の中に約束してゐる様」私（同居している大学生）には見えた。

(七)

叔母の「心臓病が少しづつ悪く」なつて行く。そこで、叔母は「ねえ、私、学校の近所に下宿しちやいけない？」と言ひ、叔父は「ちや行つたらいゝでせう」と言う。

叔母は「完全に叔父の手から解放されて下宿した。それ故に叔母は淋しがつて一週間に二度も三度も帰つて来た。女に取つて男の圧力を失つた生活の中に幸福は望めないものゝ様」であつた。

叔母が文化学院を卒業し、家に帰つて来た時、「心臓病は養生を怠る事の出来ない程」進んでしまつていた。叔母は「不健康地帯なのね此の辺は。此の家へ来てから病氣になつたと思ふのよ」と言ひ出す。

そして、叔母は「変りませうよ何処かへ。東京は寒いから鶴沼とか鎌倉とか」と言ひ出す。さらに「ね、鎌倉へ家を建てませうよ。でなきや、わたし、死ぬわよ」などと言うが、叔父は「一人養はなくてもいゝから私は工合が良いね」と平然と言つてのける。

「其の年の秋の末になつて、逗子に新しい家」が建てられた。「逗子の家には叔母の註文で大きなアトリエが付いてゐた。けれども移つて行くと程無く心臓病はどんどん悪くなつて、二階の寢室に上る階段さへも耐えられなくて下の室に独りで眠る様」にまでなつてしまふ。

「一進一退の病勢のまゝで夏を越して秋に入る」。「病は冬の近づくにつれて再び昨年の危篤状態に近づいて行つた。十二月に入つてふと風邪にかゝつた。是が彼女の最後の命を縮めるものであつた。弁膜閉鎖不全が頻発」しだした。

「昨日は本当に死ぬかと思つたわ」と叔母はゆつくりと言つた。叔父は「今度は本当に死ぬだらうね」と「新聞をひろげながら事も無げ」に言つてのけた。叔母は「死なないわ。これからうんと養生するの。医者と言ふ通りにして、きつと丈夫になるわ。そして又銀座なんかへ散歩に行くの」と、言ひ返す。叔父は「病みやつれた妻の心がすつかり變つて来た事を知ると、何故か涙が沁んで来てならなかつた。彼女はきつと死ぬに違ひない」と思つた。

「その日の午後、俄然病勢は急変した。冬の落日が海の向ふに薄れて行つて海風がさわさわと松林に鳴る黄昏、心臓に逆流する血液の為に齒を喰ひしぼり枕を擱んで苦しみ悶えながら敬子は死んで行つた。死顔は最後の苦悶をまざまざと現はしたまゝで凝固して行つた」のだ。

(八)

叔母の死に際し、「最初にかけて来たのは寡婦である叔父の兄嫂」であつた。彼女は言う「『私はねえ、敬さんが亡くなられても、涙一滴こぼれませんわ。まあ敬さんの様に仕合はせな方つて無かつたんですものねえ。此の方の望んだ事は何一つ叶へられないつ

て事が無かつたんですもの。あゝ！良い御生涯を終られたと思ひますのよ。安らかに成仏なさるでせうよ」と言い、何の不自由もなかつた生活をふり返る。

一方、叔母の妹は「看病に疲れ」、「目をうるませ」ながら、「姉はね、私にこんな事を言つたのよ。きつともう一度丈夫になつて、そして開腹手術をしたいつて。段々年を取ると子供がほしくなつたのね。その為にこれからは養生するんだなんて言つたのよ」と言い、姉の寂しかつた心を察している。

「葬式の終つた翌日」、叔母の妹は「遺物の整理に忙しかつた。一つ一つの片見の品が出て来る毎に心をふるはせながら調べて行つたが、やがて叔母の簞笥の一番底に、思ひも^{ママ}うけず華々しい色をした産衣が一揃ひ、まだ手も通されずに畳まれてあるのを見つけると、此の赤い産衣を胸に抱いて取り散した衣類の中に身を投げて泣ききくずれる。妹は姉が子供に恵まれなかつたことの悲しみを理解した。

※

『石婦』を以上のようなものとして読んでくれば、主題はおのずからあきらかになつてくる。つまり、『石婦』の主題は、子どもを生めなかつた女性の悲しみ（他者には「まあ敬さんの様に仕合はせな方つて無かつたんですものねえ。此の方の望んだ事は何一つ叶へられないつて事が無かつたんですもの。」と言われている。）を描いたものと理解してよい。

『石婦』は、子どもに恵まれなかつた女性の悲しみを描いた作品である。後妻敬子の死後、簞笥の一番底に思いもかけず、産衣一揃ひを発見し、子どもに恵まれなかつた敬子の悲しみを夫が知る。夫は生前けつて妻を〈束縛〉しないことを良しと考え、子どもを産むことさえ望まなかつた。ところが敬子は「その為に却つて中心を失つて放浪」していたのだ。この作品は、〈束縛〉のないことは「愛」のないことと同義であることを言つたものであり、〈自由〉や〈解放〉の行く先に何があるのか、何のための〈自由〉〈解放〉なのかを問ひかけたもの。やはり、石川の思考の深化、内面化が窺える作品である。

第六節 『禁断』の〈解放〉

『禁断』は昭和七年七月「新早稲田文学」誌上に発表された四八枚の短編小説である。

題名の『禁断』は、『禁断』冒頭の「楽園に、犯すべからざる禁断の木の実がある様」から来ている。

『禁断』は人類の始祖であるアダムとイヴが住んでいた楽園をこの地上に建設することができるかどうかを問うた作品である。

以下、作品の展開にしたがって読んでみよう。

一

(一)

次の文章は『禁断』の冒頭である。

楽園に、犯すべからざる禁断の木の实がある様に、未婚の三人の、自由で朗らかで放埒な共同生活の中にも、犯すべからざる鉄則が、たつた一つあつた。——此の家の中、恋愛厳禁。と。

ここには「未婚の三人」の「自由で朗らかで放埒な共同生活」がある。「恋愛厳禁」という「鉄則」に貫かれた「自由で朗らかで放埒」な「未婚の三人」の生活がある。二人の男性と一人の女性の「三人」。二人の男性の一人は「売文業者」の羽田、一人は「小さな劇団の役者」の林、そして、女性は「ダンサー」の青子。

この「三人」が「面白半分につつた共同生活」、そして「始めは面白半分につつた掟」も「何時の間にか」、「一年以上」も続き、今では「抜けられぬ生活の罫になり始め」ている。

「共同生活」は「毎夜十二時」が来ると、売文と役者の二人は「ダンスホールから、踊り疲れて帰つて来る彼等の主婦」青子を駅まで迎えに行く。「三人」は「話し乍ら、笑ひ乍ら」、「肩を組んで、菓子を食べながら、歌をうたひながら」帰つて来る。この時が「彼等のバガボンドの生活の中の、断じて他の生活では味へない、至上の一刻」であつた。

(二)

今日も「心たのしく、文学論を、劇評を戦はしながら」青子を迎えに行く。この夜、青子は圭子を連れて来る。圭子は「今迄の下宿」で「喧嘩」してしまい、「二三日」置いてくれるよう頼む。こうして「三人」の「共同生活」は一時的に「四人」の「共同生活」になる。

(三)

「四人」の「共同生活」は、圭子の同居により変化していく。

「七日目の朝」、圭子は「『困るわわたし。忙しくつて。下宿を探す間が無くて。ね、

青子さん。兎に角蒲団と、着更へだけでも取り寄せるわね。』」と言ひ、「やがて或日、圭子の荷物」が運びこまれる。すると、圭子の「存在」が「はつきりと、家族の一人の落着き」を示し出した。

(四)

「或夜」、圭子は「『此の室、広くて良いな。青ちゃんの室、狭くて、二人寝るのは辛いわね。私、今日から此の室で寝るわ。ね、役者さん。あんたと枕を並べて眠らうよ。』」と言ひ出し、「其夜」圭子は「彼女の床を役者と並べて眠つた」のである。

「二十日以上も経つた或朝」、圭子は「何時に無く物静かに、歌も歌はず、話も少く、煙草を喫むさへも憂はし気に見えた」。一方、役者も「黙つて朝食を終へると黙つて新聞を読んだ」。こうした二人の態度の変化を見て、売文は「遂に、なる様になつた」と思う。

(五)

ところが、役者は「君は共同生活には適しない女だよ。俺達三人の生活は迎も楽しかつたんだ。君は俺達の生活を打ち壊したよ」。「第一、君は、此の共同生活の約束を知つてる筈だ。而も君は最初からその約束を破つてゐる。恋愛厳禁なんて、くだらない話みたいだが、此の生活を続ける為には必要なんだ。」と言ひ、さらに「『俺達はそれをやつて来たんだ。君には出来ないんだ。君が此の家から追放されるのは当り前だ。』」と言ひ。圭子は「『私は、どうしても、一緒に居たいの！』」と哀願するが、役者は「『いけない。俺はどこ迄も此の家庭を守る。』」と言ひ。

売文は「俺と青ちゃんとは此の家を出て行かう。君達二人で此処に住み給へ。」と言ひ、役者と圭子が一緒になることを認める。役者は次のように言う。

「なあ、売文。俺はね、俺達の家つてものを、もつと大事なものだと思ふんだ。圭さん一人に掻き廻されて、解散して了ふのは、惜しくて堪らないんだ。実を言へば、俺だつて、此の人を愛しなくはない。然し俺は此の生活の方にもつと大きな愛着を持つてゐるんだ。君だつて、青ちゃんだつて、さうぢやないか。俺達は、貧乏つたれで、碌な職業も持つて居ない癖に、何処の誰よりも楽しい家庭を持つてゐると思ふんだ。兄妹ともつかず夫婦ともつかず、他人に言はせれば怪しげなものだらうが、少なくとも僕には、過去のどんな生活よりも魅力があるんだ。解つたかい圭さん。だから、君が外から遊びに来るのは歓迎するよ。一晚位泊るつもりで来たつていゝさ。唯、此の屋根の下に住んで貰ひたくないんだ」。

「翌朝」、圭子は「元の下宿へ」帰って行った。

やがては、彼女（青子）も亦あの楽しい家庭から追放されるであらう！ 彼女は明らかに売文を愛して居た。然し、家庭の鉄則を厳格に守つて、縛られて、愛の表情を決して彼に示さないで来た。抑圧された愛情は、時に淋しく、時に涙含ましく、我にもあらず、売文の朝の寝顔に胸をとよもしたが、圭子が来れば、そして彼女が生活の鉄則を破つて役者と結べば、その時には青子も亦、売文への愛の表情を、全身的に示し得るであらう、と、心から佳子の同居を歓迎したのであつたが——。役者の心持は、尊い、立派であると思ふ。けれども、恋愛の尊さを踏み躪る、冷酷な心！ではないかしら？（私は！どうしたらいいだらう。）何時になつたら愛情を、彼に告げる事が出来るのか。

その夜、青子は売文に「わたし、あなたを愛して了つたのよ。」と告げ、売文は「出て行き給へ。圭さんと同じ事だ。」と言う。青子は「私、もう、何も要らないの。何も要らないから、いつ迄も私達の家庭を楽しくして置きたいと思ふのよ。林さんが圭さんに言つた事、そりやひどいと思つたけど、今、あなたの気持がはつきり解るわ。……私、もう、何も望まうと思はないの。今迄通りでいゝの。」と断言する。それは圭子が去つたあと、昔の生活に帰つたとき、青子の帰りを昔通り「二人」が待つていたからだ。青子は「あら！」と叫び、「思はず、どつと涙があふれて来た。二人は彼女の中に挟んで帰り始めた。青子は、此の二人の優しい心が、山の温泉の様に身に泌みた。永い間忘れてゐた以前の習慣が、今日から又元に還つた。あの頃の楽しい、心を慄はせる程楽しい夜の帰り途が、今日から、これから先ずつと、又繰り返されるのだ。それを思ふと涙が流れた」。

※

作品名の『禁断』は作品冒頭、「楽園に、犯すべからざる禁断の木の実がある」から採られている。人類の始祖アダムの妻のイヴが蛇に誘惑されて、禁断の木の実を食し、エデンの園を放逐されたように、『禁断』の中の圭子は「禁断」、つまり「恋愛厳禁」の「鉄則」を犯したが故に「共同生活」から放逐されてしまう。一方、青子は「恋愛」を抑えこみ、「鉄則」を守つたが故に「共同生活」を続けることができた。作者石川達三はこの二人の女性、青子と圭子を通して、「恋愛」にもとづく男女二人の結婚という形態ではなく、「恋愛」を「厳禁」した上に成立する男二人と女一人の「共同生活」が可能かどうかを問うたのである。結果的にはそうした「共同生活」が成立したのである。それは役者が「貧乏つたれで、碌な職業も持つて居ない癖に、何処の誰よりも楽しい家庭」と言っている。

しかもこの「楽しい家庭」は、役者が「恋愛厳禁なんて、くだらない話みたいだが、此の生活を続ける為には必要なんだ」と言ったのに対し、圭子が「でも、そんな事、出来ない事だと思ふわ」という批判をのり越えた上に営まれているのだ。同じように、青子も売文に対し、「わたし、あなたを愛して了つたのよ」という告白のあとで、売文の「愛の言葉」も、彼女自身の「愛の表現」も「何も要らない」世界である。つまり、「恋愛」をのり越えたところに営まれている「楽しい家庭」なのだ。

*

『禁断』は、二人の男性と一人の女性の共同生活を描いたもので、結婚を〈束縛〉ととらえ、〈自由〉を獲得するためには恋愛や結婚は有害なものとする考え方を設定し、そこで動く独身男女の心理を描いている。結局、第四の登場人物である女性がこの部屋に転がり込むことによって、恋愛感情で結ばれるひと組のカップルが生まれ、共同生活は崩壊してゆく。〈自由〉を獲得するためにルールを設ける（＝恋愛禁止という〈束縛〉を設ける）という矛盾を描き、さらには 人間の本性として、恋愛や結婚という〈束縛〉を望んでさえいるとのメッセージを石川は発信している。やはり、石川を「社会派」などと評価することは再考を要する。

第七節 『秋の日の男達』の〈解放〉

『秋の日の男達』は昭和七年一〇月「新早稲田文学」十一月号に発表された。作品は原稿用紙にして四〇枚弱、石川達三の初期作品としては比較的長い部類に入る。これまで『秋の日の男達』について論じられた文章はない。

以下、作品の展開に従って読んでみよう。

一

(一)

次は、『秋の日の男達』の冒頭近くの文章である。

元を訊せば、千草は俺の女であつた筈だ。

岡本と俺とは同じ撮影所の大部屋に入つて以来、俺達は無二の親交を結んだ。そし

て事毎に口喧嘩をした。調停役が女優の大部屋に居る千草だ。

登場人物は俺と岡本と千草の三人。「元を訊せば、千草は俺の女であつた筈だ」ということから、つまり、「元」は俺の「女」であつた千草が今では岡本の「女」になっているらしい。

『秋の日の男達』の主題は俺の「女」千草が岡本の「女」千草になっていく経過に潜んでいる。

(二)

俺はルンペンだ。千草も岡本もルンペンだ。そして俺のドン・ホセも亦ルンペンだ。俺達は俺達だけの小さな社会を作り、その中では無軌道即軌道の生活、脱線即ち正道の生活を続けてゐるのだ。何時の程よりかかうした生活になつて来た。それは今の世の俺達には最も妥当な生活態度なのかも知れないと俺は思ふ。

斯うした俺の生活に於て、妻を娶ると言ふ事は既に不合理である。けれども千草を愛した事もあつたのだ。

俺は「ルンペン」で「妻を娶ると言ふ事は既に不合理」だと思つている。しかし、それでも女性を愛したことがあつたのだ。

(三)

「千草を愛した」「事の起り」は千草がヒロインで俺がサラリーマン役の「小品を撮る時」、俺が「『どうだい。本当のラヴ・シーンみたいだね。』」と言つたところ、千草が「『うん。』」と答えたところから始まつた。再度、俺が「『面倒臭いから本当に恋してはうか。』」と言つたところ、「『うん。いゝわ。』」と答える。この二人の恋愛関係はこのように軽い感じで始まつたのだ。もつと言うなら、「『何だつて俺達は恋人になる必要があるんだい？』」と俺が言い、千草は「『恋人つて、了ひには結婚するものよ。』」と言ひ、さらに俺が「『君は俺と結婚したいのか。』」と問うと、「『したい様な、したくない様な。どつちでもいゝわ。』」と答える。俺も「『どつちでもいゝんだ。だから、

まあ、のんびりやる事にしやう。』」と言うが、千草は「『でも、あんまりのんびりやつては居られないわ。邪魔が入るわよ。』」と言う。俺が「『邪魔とは何者だい？』」と聞くと、千草は「『岡本さんさ。あの人連も私を誘惑してゐるんだから。』」と、俺の友人

の岡本の名を告げる。「『で、君は黙つて誘惑されるつもりかい？』」と問い、千草は「『そりや分からないわ。私だつて若い娘なんですからね。親切にされるとついほだされないと限らないわ。だからどうぞそのおつもりで——。』」と答え、俺、岡本のどちらにも決しかねている気持ちを披瀝する。この千草も恋愛に対する真剣さに少し欠けるところがある。

(四)

「翌日」、俺は岡本に、「貴様あ千草に色眼を使つてるな。」と言う。岡本は「『使つて悪いかい。』」と「逆襲」して来た。俺は「『悪いとも。あれあ俺の女だ。』」と言いつ放つ。「『冗談言ふな。俺あいつと何辺も散歩したんだぞ。』」と言いつ返す。そして、岡本は「『よし。今日から二人であいつを張らう。』」と言う。

俺は「どうしやう」と思案する。「千草は俺の方に傾いてゐる。(中略)俺が勝つて千草を取れば岡本は俺達から去つて行くだらう。俺が負ければ千草が去つて了ふ。女を取らうか友を取らうか。」と迷う。しかし、「千草を奪つて見せる」と決意し、「敢然として勇気が出た」のであつた。

(五)

「翌日」、俺が「『君あ図々しいな。どつちに気があるんだかはつきりさせろよ。』」と千草に迫つたところ、千草は「『わたしや野に咲くれんげ草よ。』」と言いつ、つづけて、「『早く取つた方が勝よ。』」と笑う。

要するに、俺達は三人とも遊んでゐるに過ぎなかつた。彼女自身、誰の女房になる気も無いらしく、岡本にしても今急に彼女を手に入れやうと言ふ気も無かつた。だから三つ巴になつて渦を巻き乍ら、結局は秘密を作つたり約束したりするのが面白かつたに過ぎない。(中略)それ故に心から拘はりの無い三角関係であつた。(中略)岡本にしても俺にしても、相手を裏切り、友人を失つて迄も此の遊戯から真実の恋愛を得やうとは考へ得られなかつたのである。千草にしても彼女の為に吾々二人を反目させる事は避けて居たに違ひない。

(六)

「秋が来た」。千草の表情は沈静を見せて来た。彼女は今自分の事を考へ始めたのだ」と俺は思う。「じつと、俺達二人を見守つてゐる様に思ふ。まじめに彼女の身を託すべき男を考へてゐる様」に俺には思われた。千草は「『わたしね、あんたと岡本さんとがね、いつ迄も今迄通りに仲の良い友達であつてほしいと思ふのよ。』」と言ひ、「俺達の何れかに決心を定めやうとしてゐる」らしく俺には思われた。

そして、「それから数日の後」、岡本が「『なあ、おい、五円借して呉れ。今日要るんだから。頼むよ。』」と俺に言つて来た。「何だか真面目腐つた顔つきであつたから俺は黙つて借してやつた」。その夜、銀座のシネマから「連れ立つて出て来た岡本と千草の後姿」を見てしまう。

彼は、俺が貸した金でランデ・ヴーをやつた訳だ。俺は飛んだ縁の下の力持ちになつた訳だ。然し、今更それに腹を立てる程の水臭い仲でも無かつた。唯欲を言へば、俺から金を借りた時に、『有難え、これで媾曳に行くんだ。』と白状してほしかつた。此の夏頃の岡本ならきつとさう言つたに違ひない。秋だから言はなかつた。季節が彼の心を孤独にしたのだと俺は思つた。

俺は千草と岡本の恋愛感情が深まっていることに気づかなかつた。「夏頃」の岡本なら「『有難え、これで媾曳に行くんだ。』」と言ふところ、今は言わない。俺はそれを千草と岡本の恋愛関係の深化ととらえず、「秋」のせいにしてしまつたのだ。

(七)

「翌朝」、俺は「不意に巡查の訪問」を受ける。岡本と千恵が「一緒に旅館へ入つてゐた所を臨検」に会い、日比谷警察に「留置」されたからである。警察は「調査命令」に従つて、俺のところへ来たのであつた。

巡查が帰つた後、俺は「呆然として玄關」に坐つてしまう。

裏切られて、見棄てられて、全く孤独に置き去られて、岡本の奴をぶん擲つてやり度かつた。千草の奴をひつぱりたいやりたかつた。何も、俺に内緒で、旅館なんかに入り込んで、警察に恥を晒さなくとも良さうなものだ。昨夜、シネマの帰りを行つたに違ひない。俺が貸した金で行つたに違ひない。貸さねばよかつたんだ。岡本の馬

鹿が千草を口説いて、交尾期の犬みたいになつらをして浅猿間しくも留置場で南京虫に

喰はれてゐるに違ひない。それを思ふと腹が立つて、淋しくて俺は泣いて了つた。早速日比谷くんだけり迄貰ひ下げに行つた。

警察に行つてみると、岡本は「二十九日の留置」で、千草の方は「誘惑されたゞけで悪い事は無い様だから今朝帰してやつた」という。

俺が家に帰つて見ると、千草が待つていた。「『何しに来たんだ!』」と「怒鳴」つた。千草は「岡本さんがね、警察から出されたらすぐにあんたのところへ行けつて言つた」からだと答える。

俺はそれを聞いて、次のように思う。

一切の処置を俺の手に残して留置場へ行つた。彼奴は俺から借金してうまゝと俺の女を盗んだが、而も一度事ある時になつて俺を裏切らなかつた。共犯の女、俺から盗んだ女を俺の手許に委せて、一切の処置を求めやうと言ふのだ。岡本！ 貴様あ世界一の馬鹿野郎だが、此の馬鹿を友達に持つた事を俺は嬉しく思ふ。

女を「盗」まれながらも、俺を「裏切らなかつた」岡本を俺は「嬉しく」思う。俺は「此の馬鹿を友達に持つた事」を「嬉しく思ふ」。

一方、千草は「『ね、私を憎まないでね、ね、わたし、そりや迷つたのよ。でもどうしても……』」と言ひ、俺は「『解つてる』」と言ひ、「千草ははつきりと岡本と結托した。弁解するな。今更憎みも怨もしない。唯、俺はやはり、ドン・ホセと共に放浪の魂を持続すると言ふだけだ。何でもない事なんだ。」とつぶやく。

俺の「淋しい日」が始まる。その中で、岡本が留置されている「二十九日」の間に、千草を「取り戻す」ことも「充分」できるが、「友愛を取るか恋愛を取るか」と自問自答し、「友愛を取る」ことにする。それは、「女と言ふものは、千草がどれ程の女であつても、要するにザラに有る女だ。そして、恋愛も亦吾々の生涯には無数にあるんだ。然るに親友となると、岡本のような馬鹿な奴でも、俺に取つては実にかへ替への無い男であり、是丈けに肝胆相照し得る男は一生一人が有るか無しかだ。一度事件が起つた時、俺に取つて頼みになるのは決して千草ではなく岡本だ。その証拠には岡本は、彼が留置場へ入るに際して殊更に恋仇の俺に向つて一切の善後策を委任して行つたではないか。千草は元來俺の女であつた筈だ。俺は愛する。が、彼女よりもより深い信愛を岡本に捧げる」からだつた。

※

『秋の日の男達』は、千草という一人の女性をめぐつての、「俺」と「岡本」との三角関係の話である。この中では放埒に遊んでいることが〈自由〉なのだとする考え方を男たちに言わせておいて、「妻を娶ると言ふ事は既に不合理である」とする。「岡本」と「千

草」が恋仲になったあと、「岡本」は留置場に入る。「岡本」は「千草」に対して「俺」に頼るようにと彼女を差し出すが、「俺」はその好意を受けず、最終的には「岡本」との「信愛」をとる。「束縛」と「解放」をテーマにし続けてきた石川が、恋愛と友情という二つの〈束縛〉の比重に照準を据えたのである。しかも、この時期の石川にとって、もはや〈束縛〉はネガティブなものではなくなっている。石川の内面化の至り着いた境地だといえよう。

第九章 同人雑誌「星座」への参加と第一回芥川賞受賞作品の誕生 ——『蒼氓』——

石川達三は、昭和八年、九年には作品をわずかしか発表していない。小林多喜二の受難など、社会運動に対する弾圧がもつとも激しかった時期である。その中で石川は、二年以上の充電期間を経て同人雑誌「星座」に参加した。これは、「新早稲田文学」からの分派ともいべき集団である。

『蒼氓』（第一部）は昭和一〇年四月、同人雑誌「星座」（星座社）創刊号に発表された。そして発表直後の九月には第一回芥川賞を受賞した。

刊行以来七〇余年、石川達三文学の代表作の一つとして今日なお多くの読者を勝ち得ている。

ただし、今日われわれが読んでいる『蒼氓』は昭和一〇年四月「星座」誌上に発表された『蒼氓』ではない。今日われわれが手にしている『蒼氓』は昭和一〇年四月「星座」誌上に発表された『蒼氓』にかなりの改変が施された『蒼氓』なのである。

改変が施された時期は『蒼氓』の伏字などが起こされた敗戦直後の昭和二年一二月、八雲書店から刊行された『石川達三選集』の『蒼氓』からである。つまり、『蒼氓』は昭和一〇年四月の「星座」誌上の『蒼氓』から敗戦を挟んだ昭和二年一二月の『石川達三選集』の『蒼氓』へと大きく変化したのだ。

今、昭和一〇年四月に発表された「星座」版『蒼氓』から昭和二年一二月の『石川達三選集』版『蒼氓』への改変のあとをたどりながら、改変前の『蒼氓』の主題が、改変後どう変化したかをあきらかにしてみたい。

第一節 戦前版と戦後版の相違点

(一)

ここではまず、戦前版『蒼氓』（「星座」昭和一〇年四月、星座社）と戦後版『蒼氓』（『石川達三選集』一 昭和二年一二月、八雲書店）を比較検討し、異同を明確にしたい。戦前版『蒼氓』には戦前刊行された『蒼氓』すべてを含め、戦後版『蒼氓』には戦後刊行された『蒼氓』すべてを含める。

戦前版『蒼氓』には文芸春秋社版、改造社版、新英社版、新潮社版などがある（これらの中には若干の異同がある）が、本質的な異同はない。戦後版も何種類か刊行されているがこちらには異同はない。したがって『蒼氓』のテキストを見る場合、戦前版は「星座」、戦後版は『石川達三選集』によって見るも、大きな間違いはない。

以下で、『蒼氓』の戦前版と戦後版の相違を明確にしておきたい。

3	2	1	伏字数	
57	53	11	頁	戦前版『蒼氓』 (「星座」昭和一〇年四月、星座社)
彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知つた。	収容所の食事と同じ様に、××××のお金で旅行する	『更句あ言はれねえべ。××××の御飯でねかよ!』	表現	

改変数		頁	表現	頁	表現	注																																																																																												
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	戦前版『蒼氓』 （『星座』昭和一〇年四月、星座社）	戦後版『蒼氓』 （『石川達三選集』1 昭和二年二月、八雲書店）																																																		
9	9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	戦前版『蒼氓』 （『星座』昭和一〇年四月、星座社）	戦後版『蒼氓』 （『石川達三選集』1 昭和二年二月、八雲書店）																																																		
妻の兄弟	妻の母	妻の父	家族八人	渡統費補助	うまい	社業賑盛	渡船費補助移民	妻	むつ	悪臭と、濡れた	「食堂パス」	そこでは当収容所	体格検査	午前十時黄色い	連座して辞表	ロンドンの軍縮会議	ぞろぞろと下りて	出して、鞆 <small>あむね</small> の切れた。大きな	眼を閉じた	ぎしぎしと置き	つぶやいて大きな	第一条件は、（	沈鬱な不安な気持ち	まる一年	お夏は	曲めて	いきれがむつと	それから人々の	しや	子供達にまで、	和らげられて、	手を入れながら、厳重な	永い永い苦闘	外国と言ふ	てその海の向ふには、外国がある	その向ふには海がぼやけてゐる。そして	ほつとして	子供達が泣きもしない。	しんとして	行くと荷物を	父は又へつと	『秋田縣でござえまし。』	『誰だね？』	鼻水	途惑ひして	ぬかるみ	ぬかるみ	煙る	妻の兄弟	妻の母	妻の父	家族八人	渡航補助	うまい	社業殷盛	渡航費補助移民	妻	むつ	悪臭と濡れた	食堂「パス」	そこで当収容所	身体検査	午前十時、黄色い	連座して、辞表	ロンドン軍縮会議	ぞろぞろ下りて	出して、鞆の切れた大きな	眼を閉じ、	ぎしぎし起き	つぶやいて、大きな	第一条件は（	沈鬱な気持	まる一年	お夏は、	歪めて	いきれがむつと	それらの人々の	しや	子供達にまで	和らげて、	手を入れながら頑丈な	永い苦闘	外国といふ	その向ふには、外国がある。	ほつとして	子供達は泣きもしない。	しんとして	行くと、荷物を	父は又へつと	「秋田でござえまし」	「誰だね？」	鼻	戸惑ひして	ぬかるみ	ぬかるみ	けぶる	『』は「」になつてゐる。以下同じ。『』から「」へ変わるとき〇（読点）がなくなる。以下同じ。	漢字と平仮名のちがいは、以下書き出さない。

98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
14	14	14	14	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	12	12	12	12	12	12	12	12	12	11	11	11	11	11	11	11	11	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	9	9	9	9	9	9	9
<p>効き目で、（ 六ヶ月 はッ 見給へ！ つくづく 毛むぢやら 二つの木の長椅子 ほつ なるのは、 やんだねは！ ふんとい トラホー眼で ンだどもしや、 湯澤だし？ 違つて、 一切をぬきにした 家財 への字に曲めて 無いからだ。 乳房が見える 合格したし、皆 麦原さんでも大泉さんでも 文句あ言はれねえべ。 ××××の御飯 しかめて、 困りますねえ、 行く時に孫市 なる事を （一行空） ないのだが、 帰す訳にも行かない。 農園までは もんだが。） をして、 何度も何度も 上つてたんへ。 しん ござさ 待ち呉れ待ちけれ！ 待ちけれ、お前行つたとて何もなん ね。 行かれねなくなりましたからなしや、 慄はせて、 時に、連れ 何とする？ 予備検査に医者 拭かうともせず に女房 スカート 組んで、 （一行空） ぼうと</p>																																																		
24	24	23	23	23	23	23	23	23	22	22	22	22	22	22	21	21	21	21	21	21	21	21	20	20	20	20	20	20	20	19	19	18	18	18	18	18	18	18	18	18	17	17	17	17	17	16	16	16	16	16
<p>効き目で、（ 六月 はッ これは？ 見給へ？ つくづく 毛むぢやら 二つの長椅子 ほつ なるのは、 やんだねは！ ふんとい トラホー眼 ンだどもしや、 湯澤だし 違つて 一切ぬきにした 家計 への字に歪めて 無いからだ 乳房が見える 合格したし皆 麦原さんも大泉さんも、 文句は言はれねえべ。 天拔陛下の御飯 しかめて 困りますねえ。 行く時に、孫市 なるのを （一行空なし） ないのだが 帰る訳にも行かない 農園までは、 もんだが） をして 何度も 上つてたんべ。 しん ござさ 待つてけれ待つてけれ！ 待つてけれ、お前行つたとて何ともな んね。 行かれねくなり ましたからなしや、 慄はせて 時に連れ 何とする 予備検査の 医者 拭かうとも せず、 女房 スカート 組んで、 （一行空なし） ぼうと</p>																																																		

148	147	146	145	144	143	142	141	140		139	138	137	136	135	134		133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99			
19	19	19	19	18	18	18	18	18		18	18	18	18	18	18		18	18	18	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	15	15	15	14	14	14	14	14	14			
言ふと大泉 ひいで	御飯だばたべね時 様にっましくしほらしくて	三浦さんが同室 甚句やら	訳すがね ヴェノスアイレス丸でなあ。 有りまへんわえ。 苦しい、 知つてはゐない、 十里、 数百数千町歩 起るのに知る人 此の事を 聞くばかりで言はゞ 知らずに日の出 東京市会議員の大疑獄 其の他に 選挙違反。 彼は身も心も 母国日本の末路を見る 彼は今日本に 逃れる おどおどとして 踏み出した時、見知らぬ 三階の室と言う室からは 四階までも あみだ 溜息をついた、 何と言ふあはたらしい 着物 見えなくなると 門馬勝治は、 悪い事すんもでねえなア。こわやこわ や。 んだなしや、 御小遣ひ サン・パウロ 間々には 余りに 又帰るつもりなのか帰らないつもりな のか。 来やう きつと、きつと 来やう 嫁入りたいとは 唯の一遍 かけた 賛成だ。 門馬さんの お母さん	言ふと、大泉 ひいで	御飯だばくはね時 やうに、っましく 三浦さんが、同室 甚句やら、 訳すがね ヴェノスアイレス丸でなあ、 有りませんねえ。 苦しい。 知つてはゐない。 十里。 数百千町歩 起るのに、知る人 これを 聞くばかりで、言はゞ 知らずに、日の出 東京市会議員大疑獄 其の次に 選挙違反、 身も心も 母国の終焉を見 彼は今は日本に 逃げる おどおどとして 踏み出したとき見知らぬ 三階の室からは 四階まで あみだ 溜息をついた。 何と言ふあわたらしい 荷物 見えなくなると、 門馬勝治は 悪い事すんもでねえなア。こはやこ はや。 んだなしや。 小遣ひ サン・パウロ 間々には、 余り 又帰るつもりなのか。 来よう きつときつと 来よう 嫁入りたいとは 唯一遍 かけた 賛成だ、 門馬さんの お母さん	31	31	31	31	31	31	31	30		30	30	30	30	30		29	29	29	29	29	29	29	29	28	28	28	28	28	28	28	27	27	27	27	27	27	26	26	26	26	25	25	25	25	24	24	24	24	24

200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	22	22	22	22	22	22	22	22	22	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	20	20	20	20	20	20	20	20	20	19	19	19	19
<p>姉しやん決心 やんだなあ 着いたら 思っていた、 斜に 婆さんが 恐ろしくて、 発熱で、 亀ノ子タワシ 勢揃ひする まづい レストオラン 踊りあ踊らんのですかな よう踊りませ。 こうもう 一緒くたンなつて 言ひますがなあ 勝田さん 唸りながら、 言ふ方が 暴露し 出東るか、ね。 それが一村当り何ぼになる ますかい。 移民に こりや 私あ 言ふものあ もんぢや思ふ べしや。 なしや バルブ 調節出来る事 却つく、 見やう 勝治と孫市も ことねは 似つかねか ンだな。 危なく引つばられる おつかねくて 検査がおつかねえ 馬鹿め！ 普段 覚えてるぞ。 行かねば お前何て言つた？ 引つばられツから 何かを叩きながら と言つたが何だ。 行きてくねえべ 胡坐をかいてみた片膝</p>																																																				
38	38	38	38	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	35	35	35	35	35	35	35	35	35	34	34	34	34	34	34	34	33	33	33	33	33	32	32	32	32	31		
<p>姉しやんの決心 やあだなあ 着いたら 思っていた。 横に 婆さんが、 恐ろしくて 発熱で 亀ノ子タハシ 勢揃ひをする まづい レストオラン 踊らんのですか。 よう踊りませぞ。 こうもう 一緒くたンなつて 言ひますがな。 勝田 唸りながら 言ふのが 暴露し、 出来るか、ね。 それが差当り何ぼになる ますかい、 移民にや こりやあ 私は ものは もんじやと思ふ べしや なしや ヴァルブ 調節すること 却つく 見よう 勝治も孫市と ことねは 似つかねが ンだな 危ねくとられる おつかねくて 兵隊がおつかねえ 馬鹿め！ 不断 覚えてるぞ。 行かねば お前何て言つた。 引つばられるから 何か叩きながら 言つたが何だ。 行きてくねべ 胡坐をかいて片膝</p>																																																				

252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	
28	28	28	27	27	27	27	27	27	27	27	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	25	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	23
聞えて来た	見せよう	おだやかに	言はれる位えなら	俺は	分らぬ	悩まされてゐるのを	雪が降つて	いや、いや	思つたのか	一緒に頭を	意味もなく	意味なく	反つた歯	はツはツはツ	三日目だし	畳んでいた	終へて	それは	はツはツはツ。	ポア・イノテ	朝の内から	頼りがなくて	はい、あなた	如何です？	ブラジル語講習が開かれた。	(一行空なし)	何ともなんねべや	見た	離れて了つたもの	まんで、	不安でもなくもなかつた	一年の間に、	さやうなら	よろしく	さやうなら	居て	居て	可愛そうでしから行かねば	姉しやん	用便に立つ	かまはず、	拍手や、	しん	ぶつぶつ	首筋あたり	枕の下に	起き上つて、	却つく	何が分つてだ	なりたくねつて、	てめえ	
44	44	44	44	44	43	43	43	43	43	42	42	42	42	42	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	39	39	39	39	39	38	38	38	38	38	38	38	38	38

段落

262 261	260	259 258	257	256	255 254 253
29 29	29	29 29	28	28	28 28 28
<p>雪のあとだからなあ 極まる</p>	<p>其の時毛布の下を潜つて小水の手が伸びて来た。それが彼女の手を探して固く握つて呉れた。(御免よ。)と囁くのを聞いた。男の手は彼女が今迄に一度も触れた事も無い程軟かい手であつた。それは労働を知らない都会の人の手であつた。彼女は何の自責の心も無しにその手を軽く握り返す事が出来た。</p>	<p>やはり彼女は不意を襲はれた 唯男性の暴力のまゝに奔弄されてゐるに過ぎなかつた。彼女は小水が自分から離れると、毛布を唇まで引き上げて、何事も無かつた様に安らかに眼を閉ぢた。まだあと四晩も眠らねばならない。けれども何の危険も思はず何の防禦をも考へはしなかつた。</p>	<p>えなかつた様に無関心であつた。 ベッドは片側に六台づゝ、畳の様に置き連ねてあつたから、小水に取つては避け難い誘惑であつたかも知れない。お夏と孫糸とは場所をかへて眠るべきであつた。小水はお夏とお常との間に挟まつてゐた。何故孫市は姉に窓際の安全なベッドを譲らなかつたか。然し此の順序は収容所官吏によつて無頓着に定められたものであつた。</p>	<p>小水は反つ歯を見せてわざとらしく微笑して見せた。お夏は顔を反けて弟を見た。彼は窓の方に向いて眠つてゐる様であつた。弟との間は五寸しかない。けれどもお夏は弟を呼び起しもしなければ小水に反抗する事もしなかつた。唯為すがまゝに為されてゐた。彼女は身を護る術を知らない女であつた。それは完全に従順な女の抵抗力をもたない性格であつた。小女は女が娼婦の様に無関心であるのに愕き、不安になつた。そして女の耳に口を寄せて、御免よ、と囁いた。女はまるで聞えなかつた様に無関心であつた。</p>	<p>眠りたい、と 其の夜、 それは羞かしい夢であつた。彼女は胸の上に堀川さんの胸の重みを感じた。そしてうつとりと意識が醒めて来た時に、それは堀川さんではなくて監督助手の小水君である事を知つた。彼女の顔の上には近視眼の眼鏡を外した小水の腫れぼつたく蒼白い顔が迫つてゐた。</p>
46 46	45	45 45	45	44	44 44 44
<p>雪のあとだからなしや 極まる</p>	<p>そのとき毛布の下からは小水の手が延びて来て彼女の手を握つた。 「御免よ……」と耳元でさゝやく声が出た。 彼女はたゞ眼を閉ぢてぢつとしてゐた。</p>	<p>やはり同じやうな事をされた 女といふものは男からいつでもさういふ扱ひを受けるものだと思つてゐた。 彼女は</p>	<p>寝床はこの部屋の両側に五つづつ敷き連ねてあつたのだから、罪はこのやうな部屋の設備に有つたかも知れない。孫市もまた不注意であつた。彼はその牀の位置を変へて、姉を窓際に眠らせようとした。彼女が寝込んでゐるやうにさへも見えた。彼が黙つて自分の牀に帰つてしまふと、お夏は彼に背を向け、毛布を唇まで引き上げてそのまゝ眠らうとするのであつた。</p>	<p>お夏はほとんど抵抗する術を知らないやうな娘であつた。彼女は助けを呼ぶこともせず、僅か二尺しか離れない牀に寝てゐる弟を呼び起さうともしなかつた。静かに顔をそむけて眼を閉ぢたまゝ、意志を失つた和やかさで横はつてゐるばかりであつた。</p>	<p>眠りたいと、 その夜 それは恥しい夢であつた。そして襟元に汗をかいてゐた。眼がさめたとき彼女は、小水助監督の眼鏡をはづした青白い顔が、すぐ眼のまへにぼんやりと浮いてゐるのを見た。それさへも夢の続きのやうであつた。</p>

415	414	413	412	411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397	396	395	394	393	392	391	390	389	388	387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365			
45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	43	43	43	43	43	43	43	43	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42
なし、	なし、	ついで行く	しや、俺の為にわざわざ	姉しやんさ	ばかりあ	しや、	ふとその真情に打たれて真実	言ふと	そればかりあ	これで又どつと笑	さんが言ふと	おかみさんが気があるらしいぞ。』と大泉	と麦原	なあ。……なあ	兄弟も何も無くて。	二人つきり	鰯の足を	うるせくて	早えね	唄ひ手	ンだな、	みだし	引いで	歌コ歌ふ	しや、	出し、	言はれつから	見れ、	返せつか	こしらへた	のに、二十五	どうも	笑はれたのに	合はねべ	孫市が	おしめえだ	(一行空)	おかしくて	困るが。……と言つた。	人は	文句がある	人は	分つてますよ、	その、	ですなあ。	かゝり、	行きたくても	頂く様にして押し返してから言つた。	一個條には、	なれ？そりやもう	無いです。		
70	70	70	70	70	70	70	69	69	69	69	69	69	69	69	69	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	67	67	67	67	66	66	66	66	66	66	66	66	66	65	65	65	65	65	65	65	65	
なし	なし、	ついで行く	しや、俺の為わざわざ	姉さんさ	ばかりあ	しや	ふとその真実	言ふと、	そればかりや	これでどつと笑	さんが言ふと、	おかみさんが気があるらしいぞ』大泉	麦原	なあ……。なあ	兄弟もなくて、	二人きり	鰯を	うるせくて	早えね	唄ひ手	ンだな、	いたし	引いて	唄コ唄ふ	しや	出し	言われつから	見れ、	返せつか	こしらへた	のに、二十五	どうにも	笑はれたのに。	合はね	孫市さんが	おしまえだ	(一行空なし)	をかしくて	困るが……。と言つた。	人は、	文句のある	人は、	分つて居ます。	その	ですよ。	かゝり、	行きたくも	頂くやうにしてから言つた。	一個條には	なれてそれはもう	無いです」		
段落																																																					

467	466	465	464	463	462	461	460	459	458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435	434	433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	
49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	47	47	47	47	47	47	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	45	45	45	45	45	45	45	45
見せずに、	言つてゐた。	涙	連れて	不意に、	御国を何百里	姉しやんは	弟の方	窓の外から	あつて、	どうしても	求め	感じれば感ずる程	歌声	思はずも	であつた。	廊下に	歌つてゐる	加はり、	そして	歌ふつてきかねんし	なし、	歌ふ心	歌ふべ	歌声が	まゝの	ながら、	ゐた。だが	なあそれあ。	孫市	耳下腺	持ち物	広庭	収容所生活	()	平和な大泉さんは軒	手紙の意味の	弟の為に。	破片に	保証人でも立てなしや、	可愛さう	俺あ借金してもなし、	ンだかも知んねなあ	一年でも無理、	それもなし、	撫でてやる	彼は	どきつと	しや	勝手だべし	なし、	なしや	
76	76	76	76	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	73	73	73	73	73	73	72	72	72	72	72	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	70	70	70	70	70	70		
見せずに	言つた。	涎	連れて、	不意に	御国は何百里	姉しやんは、	弟の方	窓の外から	あつて	どうしても、	求め、	感じれば感じるほど	唄声	思はず	である。	廊下へ	唄つてゐる	加り	そして、	唄ふつて、きかねんし	なし	唄ふ心	唄ふべ	唄が	まゝ	ながら	ゐたが、	な、それあ	孫一	耳下腺	持ち物	庭	収容生活	()	大泉さんは平和な軒	手紙の	弟の為に	破片に、	証人でも立てなしや、	可哀さう	俺さ借金してもなし	ンだかも知んなあ	一年でも無理	それもなし	撫でてやる	彼は、	どきつと	しや	勝手だべし	なし	なしや、	

519	518	517	516	515	514	513	512	511	510	509	508	507	506	505	504	503	502	501	500	499	498	497	496	495	494	493	492	491	490	489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479	478	477	476	475	474	473	472	471	470	469	468		
56	56	56	56	56	56	55	55	55	55	55	55	55	54	54	54	54	54	54	53	53	53	53	53	53	53	53	53	52	52	52	52	52	52	52	52	52	52	52	51	51	51	51	51	51	51	51	50	50	50	50	50	49	49
頭中に	息子	自分の持つテープ	第三の銅鑼	とお夏	ためらつて投げやう	合はせて	持たせた。けれども	下さあい	下さあい	落ちた。	投げた。北風	了はう。	横つ腹	此処	突堤に	してゐた。	杵がある。	企業移民	××××	来ない』	ハツチ蓋	幾列にも	階段	ある。	日本字	字の旗と黄と緑のブラジル共和国旗	冷たい	飄々と	共に、	しや、	ければ、	包を	ゴツと	二ノ宮	うはの空	僕あ	横切つて	新しい	死体との	五階建ての	次から次へと、幾台となく下りて行く。	走つて出て	室々から	忘れものは？無いか？	肺炎の子供は	訓辞とを	最後に、	然しその言葉は	者は皆一様に	歌つて	死ん身なつて働くからな、		
86	86	86	86	86	85	85	85	84	84	84	84	84	84	84	83	83	83	82	82	82	82	82	81	81	81	81	81	81	80	80	80	80	80	80	79	79	79	79	79	78		78	78	78	77	77	77	77	77	76	76		
頭一ぱいに	息子たち	自分のテープ	第三銅鑼	お夏	投げやう	合せて	持たせたけれども	下さい	下さい	落ちた。	投げた。手紙は北風	了はう。	横腹	そこ	突堤	した。	杵である。	企業民	天皇陛下	来ない。	ハツチの蓋	幾列も	降り口	あつた。	日本	字の旗の黄と緑のブラジル共和国旗	冷い	飄と	共に	しや	ければ	包みを	ごうツと	三ノ宮	うはの空	僕は	横切つて、	新しい	死体の	五階建	(なし)	走り出し、	室から	忘れものは、無いか？	子供は	訓辞を	最後に	しかし言葉は	者は一様に	唄つて	死に身になつて働くから、		

542	541	540	539	538	537	536	535	534	533	532		531	530	529	528	527	526	525	524	523	522	521	520			
58	58	58	58	57	57	57	57	57	57	57		57	57	57	57	57	57	56	56	56	56	56	56			
だだだだだッ	エンジン	腹立たしくて	人混み	居たべ？	ぼうと木壺	不意に、	僕は	監督さん	言った』	なし、	を、知った。もう掴まる事はない。	もう決して掴まる事はない。彼は今始	めて、自分が××を逃げてゐる事を知	つた。日本から逃げて行くのである事	を、知った。もう掴まる事はない。	なし、	言った』	監督さん	僕は	不意に、	ぼうと木壺	居たべ？	人混み	腹立たしくて	エンジン	だだだだだッ
89	89	89	88	88	88	88	88	88	88	88		88	88	87	87	87	87	87	87	87	86	86	86			
だだだだだッ	エンジン	腹立たしくて	人混	居たべ	木壺	不意に	僕は	監督さん、	言った。	なし	に行かなくて済むのだ。	もうこれをつかまることがはない。兵隊	やめた孫市	切端	次々に	だだだだッ	疍	ばかり	引裂かれて行く。	誰かが	を思ふ。	と思ふ。	わしは			

戦前版と戦後版のテキストの基本的な相違は以上である。戦前版から戦後版への五四二か所にもおよぶ改変は作者石川達三によって施されたものである。なぜならば、「星座」版『蒼氓』にはわずか三か所（「××××」、「×××××」、「×××××」の三か所。四文字の「×××××」、「×××××」の二か所は「天皇陛下」、二文字の「×××」は「徴兵」か「検査」が入るものと考えられる。なぜならば、「星座」版のこの伏字は『石川達三選集』版で起こされることなく、別の表現に取って代わっているからだ。したがって、推量するしかなく、断定はできない。）の伏字しかなかったからだ。したがって、作者石川達三が戦後版『蒼氓』を刊行する時、戦前版の三か所の伏字を起こせばよかった。ところが実際には五四二か所の改変が施されたのである。したがって、『蒼氓』は戦前版と戦後版の二種類の『蒼氓』があるとみてよい。

(二)

『蒼氓』には戦前版（「星座」版『蒼氓』）と戦後版（『石川達三選集』版『蒼氓』）の二種類のテキストがあることがわかった。昭和一〇年九月、第一回芥川賞を受賞したのは戦前版『蒼氓』だった。現在流布している『蒼氓』は芥川賞を受賞した『蒼氓』ではない。芥川賞を受賞した『蒼氓』に五四二か所の改変が施された『蒼氓』なのである。

五四二か所にもよる改変をどう評価するか。おそらく評価を決定づける最大の要素は移民船が日本を離れる時の孫市の「ほつと大きな吐息」、「心からの大きな吐息」をどうみるかにかかっているだろう。

「星座」版では次のようになっている。

万歳を叫びやめた時孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であった。もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知った。日本から逃げて行くのである事を知った。もう掴まる事はない。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。

このか所が『石川達三選集』版では次のようになっている。

万歳を叫びやめた孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であった。もうこれ確かまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。

つまり、「もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知った。日本から逃げて行くのである事を知った。もう掴まる事はない。」（「星座」）が

「もうこれでつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。」（『石川達三選集』）に改変されているのだ。

「星座」版では主人公である孫市が「今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知った。日本から逃げて行くのである事を知った。」という風に、ブラジル移民の目的が実は「××」から「逃げ」るためであり、「日本から逃げ」るためであること（つまり、ブラジル移民に隠されていた、潜在していた動機・目的）を、移民船が日本を離れるその瞬間に知るのである。孫市を根底から移民へとつき動かしていたものは「××」から「逃げ」ることであり、「日本から逃げ」ることだったのだ。それに対し、『石川達三選集』版では「もうこれで行かまるとはならない。兵隊に行かなくて済むのだ。」という風に書かれ、移民になったその結果として、「もうこれで行かまるとは」がなくなり、「兵隊に行かなくて済む」ことになったのである。つまり、ここには「つかまる」ことを避けるための移民、「兵隊」をまぬがれるための移民という能動的な動機・目的はうすい。したがって、「星座」版における孫市のブラジル移民の主たる動機・主たる目的は戦争忌避であり、祖国逃亡なのである。それに比し、『石川達三選集』版では厭戦的ではあるが、戦争忌避・祖国逃亡の姿勢はうすい。

『蒼氓』が第一回芥川賞を受賞したのが昭和一〇年九月。この昭和一〇年は文学史的には日本プロレタリア文化連盟（コップ）がうち続く大弾圧の下に解散を余儀なくされた翌年あたり、政治的には昭和六年における満州事変から昭和一二年における盧溝橋事件へとつき進むそのはざまにある。戦争への批判を烈しく弾圧し、第二次世界大戦へと向かう状況下に石川達三の『蒼氓』は書かれたのである。

しかも、この積極的厭戦思想は孫市にとって確固としたものなのだ。決して、移民になったその結果として、付随して生じたものではない。日本を離れるその時、「自分が××を逃げてゐる事を知った。日本から逃げて行くのである事を知った。もう掴まる事はない」という文は、同じ『蒼氓』の次の文と呼応する。

麦原さんが横から問ひかけた。

『佐藤さん検査終へだしるか？』

『まんだ。俺は今年。……危ねく引つぱられるとごでした。きつと合格だものなし

や。おつかねくて逃げで来た様で氣イ咎めでなしや。』

『逃げで来たべや。』と不意に義三が言った。それは変に憎々しげな調子であった。

『馬鹿あ！』孫市は言下に強く言った。『検査がおつかねえ様な俺だと思ふか。』

『口でだば何とでも言へつからな。』

『馬鹿あ！あんまり出鱈目言ふな。やられるぞ。』

けれど義三は屈しなかつた。普段から馬鹿扱ひにされてゐる腹いせでもする様に妙に真剣になつて突つかゝつて行つた。

『俺あ覚えてるぞ。お前何て言った？四月迄にブラジルさ行がねば引つぱられつから早く行くんだと言はねかつたか？』

『言った。それが何とした？』と孫市が言った。

向ひの室では三浦さんが何かを叩きながら良い声で八木節をうたひ出した。

……四角四面のやぐらの上でエ

音頭とるとは畏れながらア……

『と言つたが何だ。兵隊さ行けば二年待たねばなんねべ。ンだから早く行くんでねかよ。』

『ンだから兵隊さ行きてくねえべ。あんまり忠義でねえぞ！』

『何だ！』と孫市は胡坐をかいてゐた片膝をぐいと立てて身構へをした。『本気だな？本気だな？畜生！てめえは何だ？。第二乙でねか。第二乙が忠義か馬鹿！姉しやんさ聞いて見れ。……な姉しやん俺あ一遍でも兵隊さなりたくねつて言つた事あツか？』

お夏は恥かしさに頬を赤くして悲しげに弟を見上げると、やめれお前、と言つた。

『姉しやんさ聞かねでも分つてだ。』と義三は悠々として言つた。

『何が分つてだ？』と孫市は又向き直つた。

『お前はんまり忠義でねえ事がよ。』

『ようし。もう一遍言つて見れ！』

『あんまり忠義でねえよう。』

孫市は立ち上つてベッドの縁に足をかけた。一飛びに通路を跳び越して義三に跳りかゝらうとした。

『なあ姉しやん。』弟は変に改まつて言つた。『姉しやんの考へ聞がへてけれ。な、おれや本当に、あんまり忠義でねえか知んねえなあ。』

姉は急には答へなかつた。弟がまだあの事に悩まされてゐるのを不思議な様に思つた。(おれや女、だから良く分らねかも知んねども。)そして弟を気の毒に思つた。

それで弟は、姉も亦自分と同じ考へに迷うてゐるのだと思つた。すると忠義に対する悲壮な犠牲の感情に胸が熱くなつた。

『俺は忠義でねつて言はれる位えたら、ブラシル^{ブラジル}さ行がねつもりだ！』と弟はきつぱりと言つた。少なくとも姉にだけは自分の本当の立場を信じて貰ひたかつた。

お夏は永いこと黙つたまゝで歩いた。雪がだんだん数を増して来て、うつ向いた胸のあたりをかすめて散つて行つた。収容所の玄関に近づいた時になつて彼女はやつと口を切つて、おだやかに、愛情を罩めて言つた。

『義三さんの言ふ事だもの、あんまり気にすんな。』

それを聞くと弟は淋しくなつた。むしろ裏切られた様な孤独を感じた。姉には断乎

として他人の疑ひを晴らせと言つて貰ひたかつた。さうすれば自分は泣いてブラジル行きを抛棄して見せやうと思つてゐた。彼は宙ぶらりんな氣持のまゝで四階までの長い階段を上つた。

『姉しやんには心配ばかりかげでな、悪いかつたけんどな、御免してけれ。な。』と弟は続けて言つた。

『ンだもしや、門馬さん達何とするべ？』姉はやはり弟の方は見ずに言つた。

『何とするか俺あ知んね。兎に角行かれなくなる事あ確かだ。』と弟は憤然として言つた。

門馬兄弟が帰つて来ると孫市は早速二人を屋上へ引つぱつて行つた。そして自分は移民をやめて検査を受ける事にきめたから、と言つた。疑ひを晴らし得た事の喜びと復讐をする事の喜びとに誇らかにきつぱりと言つた。

二人きりになると勝治は不意に弟を突き飛ばした。

『見れ！お前要らね事喋舌るから。』

『要らね事でねえよ。検査逃げる者あ不忠でねかよ。』と弟はまだ言ひ張つた。兄はびしやりと横面を殴りつけた。

『逃げた訳でねつてば馬鹿！孫さん来たら謝まれ。えゝか？』

先づ孫市が一昨夜の口論から今度の決心を定める迄の経過を説明した。聞き辛い東北弁の説明を聞きながら小水は、此の青年が国家組織の重圧を馬鹿々々しい程忠実に苦しんでゐるのを珍らしいもの様に、又可愛相にも思つた。

『さう君考へ過ぎなくてもいゝですよ。ねえ、今年検査で移民に来てゐる者は君ばかりぢやないですよ。ねえ、誰が本気で検査を逃げたなんて思ふもんですか。』

『さうでせう君、君みたいな事を言つたら来年検査の者だつて疑へば疑へる訳でせう。そんな事を言つたら検査前の男は誰も移民に行かれなくなるよ。ね！さうでせう。ははゝゝゝ。』

『疑はれる位えだから俺あ行かね方が何ぼえゝか知んね。』と孫市はまだ憤々として言つた。

小水の巧妙な説得にも孫市は何度となく頑張つて押し問答を続けて行つたが、いつの間にか今日迄の二日間考へ通して来た自分の大問題が小水の話の聞いてゐる中にそれ程の大問題でもなかつた様に思はれ出した。すると相手の言葉に反対する氣勢も失

なつて、終ひには唯、はあ、はあ、と言つて聞いてゐた。そして最後には潔よく、はあ、分つたし！ときつぱりと言つた。

ここには「検査」に対し「おつかねくて逃げで来た様で氣イ咎めでなしや」という孫市がいる。義三に「逃げで来たべや」と言われ、「検査がおつかねえ様な俺だと思ふか」と言う孫市。さらに義三から「お前はあんまり忠義でねえ」と言われ、「義三に跳りかゝらう」とする孫市。そして、「忠義でねつて言はれる位えたら、ブラシルブラシルさ行がねつもりだ！」と言ひ放つが、小水助監督の「巧妙な説得」に従い、「分つたし！」と言ひ、「検査」、「忠義」の問題に一応の決着をつける。このことは、日本を離れる『蒼氓』最後の孫市の「自分が××を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。」ということと呼応関係にある。孫市は「検査」を恐れ、「忠義」ではなかつたのだ。日本を離れるその瞬間、戦争を忌避し、祖国を逃亡していく自分がわかつたのだ。「検査」を恐れない自分、「忠義」のためには移民を中止してもよいとまで言つた孫市は、実は「検査」を恐れ、「忠義」者ではなかつた。孫市は日本を離れるその瞬間に本当の自分の姿を現わしたのである。「検査」を受けける心配も、「忠義」を尽くさなくてもよい世界、つまり、日本を離れる船上の人だつたからである。

したがつて、『蒼氓』の最後の部分は戦後版の「万歳を叫びやめた孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であつた。もうこれでつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」は第一回芥川賞を受賞した戦前版「星座」の「万歳を叫びやめた時孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であつた。もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」でなければならぬのである。

こうした状況のなかに、「星座」版『蒼氓』の孫市の「もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。」という「安心」の意味は大きい。孫市は移民にことよせて、徴兵を忌避し、祖国を逃亡したのだ。『石川達三選集』版『蒼氓』の「もうこれでつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。」では、移民にことよせての祖国逃亡の意図は見えない。したがつて、昭和一〇年に書かれた『蒼氓』を昭和一〇年前後の時代状況の下においてみた場合、第一回芥川賞を受賞した戦前版『蒼氓』の歴史的・社会的意義は大きい。昭和一〇年、日本の文学が戦争に対し、なお批判的だつたことは高く評価されてよい。

次に注目したいのは孫市の姉お夏が小水助監督の性的「暴力」に「翻弄」される場面に加えた大幅な改変である。「星座」版では次のようになってゐる。

其の夜、お夏は夢を見た。それは羞かしい夢であつた。彼女は胸の上に堀川さんの胸の重みを感じた。そしてうつとりと意識が醒めて来た時に、それは堀川さんではなくて監督助手の小水君である事を知つた。彼女の顔の上には近視眼の眼鏡を外した小水の腫れぼつたく蒼白い顔が迫つてゐた。室の中は廊下の灯でほの明るく、ステイムがむんむんとあつかつた。大泉さんの軀が枕に近く聞えるばかりで、窓硝子に触れる粉雪がさらさらと深夜に白く降り積つてゐた。小水は反つ歯を見せてわざとらしく微笑して見せた。お夏は顔を反けて弟を見た。彼は窓の方に向いて眠つてゐる様であつた。弟との間は五寸しかない。けれどもお夏は弟を呼び起しもしなければ小水に反抗する事もしなかつた。唯為すがまゝに為されてゐた。彼女は身を護る術を知らない女であつた。それは完全に従順な女の抵抗力をもたない性格であつた。小水は女が娼婦の様に無関心であるのに愕き、不安になつた。そして女の耳に口を寄せて、御免よ、と囁いた。女はまるで聞えなかつた様に無関心であつた。

ベッドは片側に六台づゝ、畳の様に置き連ねてあつたから、小水に取つては避け難い誘惑であつたかも知れない。お夏と孫市とは場所をかへて眠るべきであつた。小水はお夏とお常との間に挟まつてゐた。何故孫市は姉に窓際の安全なベッドを譲らなかつたか。然し此の順序は收容所官吏によつて無頓着に定められたものであつた。

彼女に取つて是は最初の経験ではなかつた。彼女は、男と言ふものは皆此の小水の様子に女の不意を襲ふものだと思つてゐた。堀川さんもさうであつた。父が病気で死ぬ数日前、紡績の引けた後の監督室で、父の看病の為に明日の休暇を貰ひに行つた時に、やはり彼女は不意を襲はれたのであつた。その時にもお夏は抵抗し得ない娘であつた。却つてそれ以来堀川さんが好きになつて了つた、瘦せぎすで、細い程丈が高く、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが。彼女は決して淫蕩的な女ではなかつたが、貞操と言ふ事はまるで知らないものであつた。唯男性の暴力のまゝに奔弄されてゐるに過ぎなかつた。彼女は小水が自分から離れると、毛布を唇まで引き上げて、何事も無かつた様に安らかに眼を閉ぢた。まだあと四晩も眠らねばならない。けれども何の危険も思はず何の防禦をも考へはしなかつた。窓にさらさらと粉雪の音を聞きながら、郷里の雪の深さを思ひつゝ眠らうとした。其の時毛布の下を潜つて小水の手が伸びて来た。それが彼女の手を探して固く握つて呉れた。(御免よ。)と囁くのを聞いた。男の手は彼女が今迄に一度も触れた事も無い程軟かい手であつた。それは労働を知らない都会の人の手であつた。彼女は何の自責の心も無しにその手を軽く握り返す事が出来た。

「星座」版におけるこの部分が『石川達三選集』版では次のようになっている。

その夜、お夏は夢を見た。それは恥しい夢であつた。そして襟元に汗をかいてゐた。眼がさめたとき彼女は、小水助監督の眼鏡をはづした青白い顔が、すぐ眼のまへにぼ

んやりと浮いてゐるのを見た。それさへも夢の続きのやうであつた。部屋の中は廊下の灯でほの明るく、ステイムがむんむんと熱かつた。大泉さんの軀が枕に近く聞えるばかりで、窓硝子に触れる粉雪がさらさらと深夜に白く降り積つてゐた。

お夏はほとんど抵抗する術を知らないやうな娘であつた。彼女は助けを呼ぶこともせず、僅か二尺しか離れない牀に寝てゐる弟を呼び起さうともしなかつた。静かに顔をそむけて眼を閉ぢたまゝ、意志を失つた和やかさで横はつてゐるばかりであつた。

寢牀はこの部屋の両側に五つづつ敷き連ねであつたのだから、罪はこのやうな部屋の設備に有つたかも知れない。孫市もまた不注意であつたのだから、彼はその牀の位置を変へて、姉を窓際に眠らせてやるべきであつた。彼女は殆んど小水助監督を無視してゐるやうにさへも見えた。彼が黙つて自分の牀に帰つてしまふと、お夏は彼に背を向け、毛布を唇まで引き上げてそのまゝ眠らうとするのであつた。

彼女に取つて是は最初の経験ではなかつた。彼女は、男と言ふものは皆この小水のやうに、女の不意を襲ふものだと思つてゐた。堀川さんもさうであつた。父が病気で死ぬ数日前、紡績の退けた後の監督室で、父の看病の為に明日の休暇を貰ひに行つた時に、やはり同じやうな事をされたのであつた。その時にもお夏は抵抗し得ない娘であつた。瘦せぎすで、細い程丈が高くて、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが却つてそれ以来好きになつた。彼女は決して淫蕩な女ではなかつたが、貞操といふ事はまるで知らないものであつた。女といふものは男からいつでもさういふ扱ひを受けるものだと思つてゐた。彼女は窓にさらさらと粉雪の音を聞きながら、郷里の雪の深さを思ひつゝ眠らうとした。そのとき毛布の下からは小水の手が延びて来て彼女の手を握つた。

「御免よ……」と耳元でさゝやく声がした。

彼女はたゞ眼を閉ぢてぢつとしてゐた。

「星座」版も『石川達三選集』版も「その夜、お夏は夢を見た」から始まっている。ところが、終わりの部分は大きく違う。「星座」版では「彼女は何の自責の心も無しにその手を軽く握り返す事が出来た。」で終わり、『石川達三選集』版では「彼女はたゞ眼を閉ぢてぢつとしてゐた。」になっている。つまり、「星座」版では小水助監督のお夏に対する性的「暴力」にお夏が「その手を軽く握り返す」ことによつて、すべて許されてしまう。これに対し、『石川達三選集』版では「眼を閉ぢてぢつとしてゐた」とあり、小水助監督のお夏に対する性的「暴力」は許されていない。しかし、お夏は「男と言ふものは皆此の小水のように女の不意を襲ふものだと思つてゐた。堀川さんもさうであつた。父が病気で死ぬ数日前、紡績の引けた後の監督室で、父の看病の為に明日の休暇を貰ひに行つた時に、やはり彼女は不意を襲はれたのであつた。その時にもお夏は抵抗し得ない娘であつた。却つてそれ以来堀川さんが好きになつて了つた。」（「星座」という。こうしたお夏であつたことを思えば、小水助監督の性的「暴力」に「奔弄」されたお夏が「何の自責の心も

無しにその手を軽く握り返す事が出来た。」という方が自然の流れだ。

さらに、「星座」版では「羞かしい夢」の中で「胸の上に堀川さんの胸の重み」を感じたのち、「うつとりと意識が醒め」、「それは堀川さんではなくて監督助手の小水君である事を知った」のであった。『石川達三選集』版ではこの部分は「眼がさめたとき彼女は、小水助監督の眼鏡をはづした青白い顔が、すぐ眼のまへにぼんやりと浮いてゐるのを見た」となっている。

ここでも「星座」版の方が自然の動き（「夢」―「羞かしい夢」―「堀川さんの胸の重み」―「監督助手の小水君」への意識の流れ）のように思われる。

さらに、「星座」版では小水助監督について、「反つ歯を見せてわざとらしく微笑して見せた。」とか、「女が娼婦の様に無関心であるのに愕き、不安になった。そして女の耳に口を寄せて、御免よ、と囁いた。」というように、小水助監督のお夏への性的「暴力」の前後の心の変化がとらえられているが『石川達三選集』版では少しも書かれていない。

さらに、お夏が小水助監督の性的「暴力」に「奔弄」されている場面が「星座」版では「小水は反つ歯を見せてわざとらしく微笑して見せた。お夏は顔を反けて弟を見た。彼は窓の方に向けて眠つてゐる様であつた。弟の間は五寸しかない。けれどもお夏は弟を呼び起しもしなければ小水に反抗する事もしなかつた。唯為すがまゝに為されてゐた。彼女は身を護る術を知らない女であつた。それは完全に従順な女の抵抗力をもたない性格であつた」、「小水は女が娼婦の様に無関心であるのに愕き、不安になつた。そして女の耳に口を寄せて、御免よ、と囁いた。女はまるで聞えなかつた様に無関心であつた。」とあるが、『石川達三選集』版では「お夏はほとんど抵抗する術を知らないやうな娘であつた。彼女は助けを呼ぶこともせず、僅か二尺しか離れない牀に寝てゐる弟を呼び起さうともしなかつた。静かに顔をそむけて眼を閉ぢたまゝ、意志を失つた和やかさで横はつてゐるばかりであつた。」となっている。

つまり、「星座」版にあつた小水助監督のお夏への性的「暴力」の描写が『石川達三選集』版では欠落しているのである。

以上のような人物の描き方から見ても、第一回芥川賞を受賞した『蒼氓』が五四二か所の改変を施した戦後版『蒼氓』である『石川達三選集』版より優れている。

(三)

一の(一)、(二)では「星座」版『蒼氓』から『石川達三選集』版『蒼氓』への改変のあと、及び、その意義についてみてきた。

ここでは、一の(二)で比較検討したお夏が小水助監督の「暴力」に「奔弄」される場面と、移民船が日本を離れる時に起こる孫市の内面変化の二か所をとりあげて、各誌、各社改変のプロセス及び、改変の理由について考えてみたい。

「星座」版（昭和一〇年四月）

「彼女に取つて是は最初の経験ではなかつた。彼女は、男と言ふものは皆此の小水の様」

「父が病気で死ぬ数日前、紡績の引けた後の監督室で、父の看病の為に明日の休暇を貰ひに行つた時に、」

「却つてそれ以来堀川さんが好きになつて了つた、痩せぎすで、細い程丈が高くて、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが。」

文芸春秋社版（昭和一〇年九月）

「星座」版に同じ。

改造社版（昭和一〇年一〇月）

「彼女に取つてはこれは最初の経験ではなかつた。彼女は、男と言ふものは皆此の小水の様」

「父が病気で死ぬ数日前、紡績の引けた後の監督室で、父の看病のために明日の休暇を貰ひに行つた時に、」

「却つてそれ以来堀川さんが好きになつた。痩せ過ぎて、細い程丈が高くて、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが。」

新英社版（昭和一二年一月）

「彼女に取つてはこれは最初の経験ではなかつた。彼女は、男と言ふものは皆この小水の様」

「父が病気で死ぬ数日前、紡績の引けた後の監督室で、父の看病のために明日の休暇を貰ひに行つた時に、」

「却つてそれ以来堀川さんが好きになつた。痩せぎすで細い程丈が高くて、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが。」

新潮社版（昭和一四年八月）

「彼女に取つて是は最初の経験ではなかった。彼女は、男と言ふものは皆この小水の様だ」

「父が病気で死ぬ数日前、紡績の退けた後の監督室で、父の看病の為に明日の休暇を貰ひに行った時に」

「痩せぎすで、細い程丈が高く、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが却つてそれ以来好きになつた。」

戦前における『蒼氓』の改変は昭和一四年八月に刊行された新潮社版から大きく変わった。それまで「却つてそれ以来堀川さんが好きになつて了つた、痩せぎすで、細い程丈が高く、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが。」（「星座」）だったのが、「痩せぎすで、細い程丈が高く、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが却つてそれ以来好きになつた。」（新潮社）へと改変された。

しかも、戦後版『蒼氓』はこの新潮社版『蒼氓』を元にしてゐる。戦後版『石川達三選集』（八雲書店）では次のようになってゐる。

「彼女に取つて是は最初の経験ではなかった。彼女は、男と言ふものは皆この小水のやうに、」

「父が病気で死ぬ数日前、紡績の退けた後の監督室で、父の看病の為に明日の休暇を貰ひに行った時に、」

「痩せぎすで、細い程丈が高く、きりゝとした蒼白い顔の堀川さんが却つてそれ以来好きになつた。」

つまり、多少の漢字などの改変を不問にすれば、ほぼ新潮社版『蒼氓』と同じ表現をとつてゐるのだ。

次に、移民船が日本を離れる時に起こる孫市の内面変化についてみてみよう。

「星座」版（昭和一〇年四月）

「心からの大きな吐息であつた。もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」

文芸春秋社版（昭和一〇年一〇月）

「星座」版に同じ。

改造社版（昭和一〇年一〇月）

「心からの大きな吐息であつた。もう決して掴まる事はない。彼は今始めて自分が……を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」

新英社版（昭和一二年一月）

「心からの大きな吐息であつた。もう決して掴まる事はない。彼は今始めて自分が……を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」

新潮社版（昭和一四年八月）

「心からの大きな吐息であつた。（以下一行二十四字削除）彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」

戦前における『蒼氓』のこの部分における改変は句点を不問にすれば「星座」版・文芸春秋社版・改造社版・新英社版はほぼ同じで、新潮社版だけが大きく「二行二十四字削除」（六六字）ということになっている。これは「もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が……を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。」という部分を削除したものと考えられる。

戦前版におけるこの部分が戦後版である『石川達三選集』（八雲書店）では次のようになっている。

「心からの大きな吐息であつた。もうこれでつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」

「もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が……を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。」から「もうこれでつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。」への改変は戦後になつて施されたものと考えられる。

えられる。

お夏が小水助監督の「暴力」に「奔弄」される場面、および移民船が日本を離れる瞬間に起こる孫市の内面変化の二つの部分から、戦後の『蒼氓』、つまり、現在流布している『蒼氓』は第一回芥川賞を受賞した「星座」版ではなく、戦後、「星座」版にかなりの改変を施したものと断定してよいように思う。

(四)

ところで、伏字が三か所（『文句あ言はれねえべ。××××の御飯でねかよ！』、「收容所の食事と同じ様に、××××のお金で旅行する」、「彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知った。」）しかない、つまり完璧に近い「星座」版『蒼氓』があるにもかかわらず、五四二か所にもものぼる改変がなぜ施されたのか。

とりわけ積極的な厭戦思想「もう決して擱まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知った。日本から逃げて行くのである事を知った。もう擱まる事はない。」を消極的な厭戦思想「もうこれでつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。」に改変した理由を中心に考えてみたい。

まず、考えられることの一つは、『蒼氓』の主題における第一部と第二部『南海航路』、第三部『声なき民』との整合性である。『蒼氓』の主題について石川達三は「『蒼氓』解説」（「長篇文庫」昭和一四年三月、三笠書房）で次のように記している。

一九三〇年三月、北風に吹き寄せられる落葉のやうに、日本全国から移民たちが神戸へ集つて来た。移民收容所は落葉の吹きだまりのやうでもあつた。こゝで彼等は一週間の渡航準備期間をすごした。ブラジル知識、言葉の稽古、服装その他の買物、等々。すべて日本を永遠に去るための悲しい用意であつた。（中略）一千人ちかい大移民の

群は神戸埠頭でらぶらた丸に乗りこんだ。神戸の小学生たちが日の丸の小旗をうち振りながら海外発展の先駆者を万歳の声と共に見送つた。移民は万感を母国に残して涙にむせぶうちに船は出発した。

ここに石川達三の『蒼氓』観が悲しいまでに美しい言葉で語られている。

「一九三〇年三月、北風に吹き寄せられる落葉のやうに、日本全国」から「神戸へ集つて来た」移民は「日本を永遠に去るための悲しい用意」のため「一週間の渡航準備期間」を過ぎ、万感を母国に残して涙にむせぶうちに船は出発した」。ここには厭戦思想はない。

『経験的小説論』（『石川達三作品集』第二五巻、昭和四九年二月、新潮社）でも、次のように記している。「昭和五年から十年という時期は、日本の農村が大変に窮乏してい

た時期であった。政府は一人について僅か三百円程度の渡航費補助を支出することによって、窮乏にあえぐ農民たちをブラジルへ送った。ずいぶん安上りな農村対策であった。『蒼氓』はこれら農村出身の移民集団を描くことによって、政府の移民政策に一種の抗議をするような性格をもっていた。『蒼氓』の主題は「農村出身の移民集団を描くことによって、政府の移民政策に一種の抗議をする」ことであって、厭戦思想ではないのだ。

したがって、戦後伏字なしの『蒼氓』を刊行するさい、「農村出身の移民集団」を主軸に、第一部『蒼氓』、第二部『南海航路』、第三部『声なき民』の三部を貫いたのだろう。第一部『蒼氓』における主人公孫市が移民に名を借りた祖国逃亡、戦争忌避者では整合性がとれなかったのである。したがって、戦後第一部『蒼氓』を刊行する際、作品の一貫性・整合性の観点から第一部『蒼氓』がもっていた時代への批判（積極的な厭戦思想「万歳を叫びやめた時孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であった。もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知った。日本から逃げて行くのである事を知った。もう掴まる事はない。」「星座」）を、消極的な厭戦思想「万歳を叫びやめた孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であった。もうこれつかまることはない。兵隊に行かなくて済むのだ。彼はほつと安心して身のまわりを見廻した。」（『石川達三選集』八雲書店）に改変したのでろう。

あるいはそれは、後年の石川達三が『経験的小説論』で記しているように、第一部『蒼氓』に対する「拙劣」感から来ているのかも知れない。石川達三は次のように記している。

「蒼氓」は私の最も初期に完成した長編であり、意あまつて力の足りない作品となつた。受賞したのは第一部であるが、その第一部が最も拙劣であつたと私は思っている。作品が活字に生まれ、新聞雑誌に掲載され、あるいは単行本になつたとき、原稿用紙に書かれたものとは別の手ざわりが出てくる。いわば人に出された時の顔である。アトリエで描かれた絵が展覧会場にかけられると、別の絵のように見えてくる、あれと同じである。その手加減が私には解っていないかつた。同人雑誌の世界だけしか知らなかつたからである。

石川達三が戦後伏字のない『蒼氓』を刊行するさい、「最も拙劣」な『蒼氓』第一部に改変を施したとしても無理からぬことだろうと思う。かくして、第一回芥川賞を受賞した第一部『蒼氓』は戦後刊行された第一部『蒼氓』とはかなりの部分で異なる作品になつたのである。

第二節 依拠テキストに影響される『蒼氓』観

以上、二つの点から第一回芥川賞を受賞した「星座」版の『蒼氓』が戦後版『蒼氓』より優れていることを見て来た。

以下、論を進めるにあたっては同人雑誌「星座」に発表された『蒼氓』によることにする。

ところで、『蒼氓』はこれまでどのように読まれて来たのか。
まず、作者石川達三の『蒼氓』観から見てみよう。

一九三〇年三月、北風に吹き寄せられる落葉のやうに、日本全国から移民たちが神戸へ集つて来た。移民收容所は落葉の吹きだまりのやうでもあつた。こゝで彼等は一週間の渡航準備期間をすごした。ブラジル知識、言葉の稽古、服装その他の買物、等々。すべて日本を永遠に去るための悲しい用意であつた。(中略) 一千人ちかい大移民の群は神戸埠頭でらぶらた丸に乗りこんだ。神戸の小学生たちが日の丸の小旗をうち振りながら海外発展の先駆者を万歳の声と共に見送つた。移民は万感を母国に残して涙にむせぶうちに船は出発した。(「長篇文庫」昭和一四年六月、三笠書房)

第一部を発表当時、これは政府の移民政策への反抗であるといふ風な評を聞き、やゝ心外に思つてゐたが、最後まで読んだ人には作者の真意を正しく理解して貰へると思ふ。

作者は政府の方針を特に支持もしなかつたが反対もしなかつた。たゞ自己の眼をもつて大移住の真実を見たいと思つた。私は宣伝係ではないから真実を語りたいと考へただけである。私は移民たちにむかつてその計画を中止するやうに勧告した覚えはない。再渡航者の口を借りて肯定的な解釈を与へた筈である。しかしその肯定は決して裝飾に充ちた虚構の宣伝ではなく、あくまでも現実の姿を直視することから来た肯定でありたいと思つた。最後まで読了された人にはこの意味が了解されると思ふ。(『昭和名作選集』一七、昭和一四年八月、新潮社)

日本政府が大正末期から昭和の初頭にかけて、拓務省、海外興業株式会社、海外移住組合、大阪商船などの機構によつて、南米に移民の大群を送り出したといふことは、やがて起るべき満洲事変、満洲国建設、支那事変と太平洋戦争への前兆であつたと私は考へる。いたづらに多くの人口を擁し人口の増加に苦しんで、その解決の道を求めたのが古くはハワイ、北米への移住であり、降つては南米移民と満洲開拓とであつた。その意味から見れば「蒼氓」は日本の一番大きな苦悩と悲劇との一部分を描いたものであり、また日本人の悲劇でもあつた。この悲劇の道を通つて行けばやがて敗戦の運命に辿りつく。さう考へて見れば私には、今日の敗戦が十五年まへからわかつてゐたやうな気もするのである。神戸の移民收容所に全国から移民たちが集合した三月八日の朝受付を待つてゐるあひだに、群をはなれて小雨の降る崖の端にうづくまり、たゞ黙つて泣きつづけた私の姿を思ひ出す。理屈ではなしに、私には彼等移民たちの姿が

悲しくてたまらなかつた。国家と国民との対立をこの時ほど強く感じたことはなかつた。「蒼氓」は私の悲しみであり憤りである。そして悲しみと憤りの後に醸し出された私の愛情である。今でも私はこの作品を読み続けて第三部の終りになると、我ながら涙を押へ切れぬ。このやうな人間の運命と人間の悲劇とが「政治」といふものによつて導き出されたことを思へば、私は国家の政治といふものに巨大な恐怖をさへも感ずる。(『石川達三選集』昭和二二年一二月、八雲書店)

昭和五年から十年という時期は、日本の農村が大変に窮乏していた時期であつた。

政府は一人について僅か三百円程度の渡航費補助を支出することによつて、窮乏にあえぐ農民たちをブラジルへ送つた。ずいぶん安上りな農村対策であつた。「蒼氓」はこれら農村出身の移民集団を描くことによつて、政府の移民政策に一種の抗議をするやうな性格をもつていた。(『経験的小説論』、昭和四五年五月、文芸春秋)

作者石川達三が『蒼氓』について述べた文章はほぼ以上であるが、これらの文章に共通することは、「自己の眼をもつて大移住の真実を見たい」ということであつた。「自己の眼」が「見た」「大移住の真実」はどんなものであつたか。それは「一九三〇年三月、北風に吹き寄せられる落葉のやうに、日本全国から移民たちが神戸へ」集まり、神戸の「移民収容所は落葉の吹きだまりのやう」であつたという。

石川達三は「落葉の吹きだまり」に「日本の一番大きな苦悩と悲劇との一部分」をみた。『新・石川達三論』(昭和五四年一〇月、永田書房)の久保田正文は『蒼氓』について、次のように記している。

「蒼氓」は、じぶんの生れた郷土、故国を捨てて他国の未経験の農地と作業に赴かなくてはならぬ日本の農民たちの哀れに対する怒りがモチーフであつた。怒りは、農民たちをそのような窮状へ追い込んだ国家や政治へ向けられたものであつた。

内容はいまさら説明の必要もないかもしれぬが、ブラジル移民のことをあつかつているものである。昭和五年の春から秋にかけて作者は移民船に乗り込んでブラジルに渡つて、移民の様子をじつさいに見聞してきた。その時の経験をもとにして書かれたもので、第一部は移民団の乗船まで、第二部は航海の船中の移民たちの生活、第三部は上陸し、それぞれの移植先に配属され、彼らの困難なあきらめの生活がはじまるまでというかたちで描かれている。

久保田正文の『蒼氓』観は「ブラジル移民のことをあつかつている」とし、本質的に石川達三と同じ範疇とみてよからうと思う。

『蒼氓』に言及した研究者は他にもいるが、おおかたは「落葉の吹きだまり」としての「移民」ということで共通している。『蒼氓』が「落葉の吹きだまり」としての「移民」を描いたとする指摘は正鵠を得ている。

一方、こうしたおおかたの『蒼氓』観とは異質の『蒼氓』観が荒正人によって提出されている。

「蒼氓」の第一の特色は、移民という主題を取りあげた点にあると思う。（中略）戦後は、国籍離脱の自由を、憲法で認めている。だが、敗戦までは、血と土は決して分離できなかった。にもかかわらず、移民すれば、血と土は別々になり、やがて国籍も変更しなければならぬ。それを奨励しているのは、大日本帝国政府にほかならぬ。徴兵まえに、渡航すれば、兵役も免れることになる。移民は、血と土の裂け目を通じて、国家の本質を示唆している。（中略）

「蒼氓」は、神戸の国立海外移民收容所を舞台に、一九三〇年三月八日から一五日までの八日間を扱っている。——移民たちのなかに、秋田から来た佐藤夏、孫市という姉弟がいる。孫市は、春に徴兵検査があり、合格すれば、二年間は兵役に服さなければならぬ。門馬義三という、少し頭の悪い若者は、その点を追求する。（「逃げで来たべや」「あんまり忠義でねえぞ！」）。孫市は、その言葉に腹を立てる。自分がほんとうに忠義でない——そんなはずは決してない。だが、義三と喧嘩した時、部屋の者たちは誰も助けてくれなかった。みんなから疑われているのかもしれない。（「俺は忠義でねって言われるくれえたら、ブラジルさ行がねつもりだ！」）——孫市の躊躇は、移民たちの心理を象徴しているかと思う。かれらも、忠義の壁を突き破って、日本を棄てることはできぬ。本当なら、内地に踏みとどまって忠義に生きたい。だが、貧乏に押しだされて、移民の群れに投じたのである。忠義という視点から、貧しい農民たちの意識の深部を鋭く照らしだしている。（『石川達三集』『日本の文学』五六、昭和四一年三月、中央公論社）

荒正人は「『蒼氓』の第一の特色は、移民という主題を取りあげた点にある」とした上で、「移民は、血と土の裂け目を通じて、国家の本質を示唆」し、「忠義という視点から、貧しい農民たちの意識の深部を鋭く照らしだしている。」とする。

荒正人のこの『蒼氓』観は卓見であるが、「徴兵」についての考えには違和感を覚える。荒正人によれば「敗戦までは、血と土は決して分離できなかった」が、「移民」すれば「血と土は別々になり、やがて国籍も変更しなければならぬ。それを奨励しているのは、大日本帝国政府にほかならぬ。徴兵まえに、渡航すれば、兵役も免れることになる」ことから、「移民は、血と土の裂け目を通じて、国家の本質を示唆」することになるという。「徴兵」についての荒正人のこうしたとらえ方は理解できる。しかし、『蒼氓』の結末部、移民船

「らぶらた丸」が岸壁を離れるその瞬間、「孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であつた。もう決して掴まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知つた。日本から逃げて行くのである事を知つた。もう掴まる事はない。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。」という孫市をみる時、「徴兵」に対する見方は、荒正人とは違つた見方が必要のように思われる。つまり、孫市は移民になることによつて、徴兵をのがれ、祖国を逃亡したのである。この読みは第一回芥川賞を受賞した「星座」版『蒼氓』によつた時にだけできるのであり、戦後版『蒼氓』では不可能である。戦後版『蒼氓』では次のようになってゐる。

孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であつた。もうこれをつかまることがない。兵隊に行かなくて済むのだ。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。

ここには徴兵を忌避し、祖国を逃亡していく姿はない。移民になつたその結果として、「もうこれをつかまることがない。兵隊に行かなくて済むのだ。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した」のであつた。

荒正人は戦前版ではなく、戦後版『蒼氓』に依つたようである。荒正人が同じ文章の中で引用しているか所（「『俺は忠義でねつて言われるくれえだら、ブラジルさ行がねつてもりだ！』」は戦後版の文章だからである。戦前版ではこのか所は「『俺あ忠義でねつて言はれる位えだら、ブラジルさ行がねつてもりだ！』」だつた。つまり、戦前版では「俺あ」、「言はれる」であり、戦後版では「俺は」、「言われる」になっているのだ。

以下、孫市が徴兵を忌避し、祖国逃亡をはかる一点に焦点をあてて『蒼氓』を読んだらどうなるか。私なりに論じてみたい。

第三節 依拠テキストの相違による主題のぶれ

次の文章は、『蒼氓』の冒頭である。

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々と烟る春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れ時の様に暗い。

三ノ宮駅から山ノ手に向ふ赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。此の道を朝早くから幾台となく自動車が駆け上つて行く。それは殆んど絶え間も無く後から後からと続く行列である。此の道が丘に突き当つて行き詰つたところに黄色い無装飾の大き

なビルディングが建つてゐる。後に赤松の丘を負ひ、右手は贅沢な尖塔をもつたトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連なる此の丘の上の是が「国立海外移民収容所」である。

『蒼氓』は「一九三〇年三月八日」の「国立海外移民収容所」への入所から「三月一日」の出發までの八日間に及ぶ「移民」たちの物語である。

「国立海外移民収容所」には「移民一千名」が居る。そのうちの八家族と一人に焦点があてられている。焦点の第一は佐藤一家。焦点の第二は勝田一家。焦点の第三は大泉一家。焦点の第四は本倉一家。焦点の第五は黒川一家。焦点の第六は麦原一家。焦点の第七は三浦一家。焦点の第八は中津井一家。焦点の第九は堀内さん。

まず、焦点の第一である佐藤一家からみてゆこう。

佐藤一家は佐藤勝治とその妻夏、勝治の母門馬くらと勝治の弟門馬義三、それから妻夏の弟佐藤孫市の五大家族。孫市の「姉のお夏と勝治とは本当の夫婦ではない」。孫市は「友人の門馬勝治を婿にして形式だけ佐藤の籍に入れたのだ。さうして（満五十歳以下の夫婦及び其ノ家族ニシテ満十二歳以上ノ者）を以て家族を構成しなければ渡船費補助移民の條件に合はないからだ。門馬さんは婆さんと二人の息子、孫市は姉弟。此の二組が一緒になつて一家族と言ふ形式を臨時に作ったのだ。然し是は孫さんの智恵ではない。移民取扱海外興業会社の地方業務代理人山田さんが教へて呉れた術」だという。

「移民取扱海外興業会社の地方業務代理人山田さん」が教へて呉れた術」だとは言え、「国立海外移民収容所」所員に名を呼ばれた時、「叱られはせぬかとびくびく」する程、いわば強引に孫市は移民家族を構成した。

「門馬さんの婆さん」は「勝治も義三も甲斐性が無い」から「ブラジル三界迄行かねばならない」と考えている。それにしても、「勝治が佐藤の籍に入つた事」が気に入くない。「ブラジルさ着いたら直ぐに籍は戻す」と言つても、「門馬の婆さん」には「駄目」なのだ。頑迷な「門馬の婆さん」を説得し、「姉しやん」を、「犠牲」にしてまで、孫市は移民家族を構成したのだ。

弟に最後の承諾を与へた日、井戸端の暮れなずむ雪の中で、紡績から帰つて来た姉を弟は熱くなつて口説いたものであった。

『俺あ今日迄姉しやんさ唯の一遍も迷惑かげだ事ねえべ、な！一生の御願えだよ。その代り姉しやんは一年きりで帰るんだ。な！』

『門馬さん、何て言つてだ？』

『賛成だ。たゞ門馬んマさんの母さんがな、勝治さんを俺あ家の籍さ入れる事反対だと。

晩景に俺あ行つて話ついで来ツからな。その前に姉しやん決心聞かへでけれ。』

お夏は頬の赤い二十三の娘だった。去年の秋に父を失つた二人きりの姉弟である。弟は春になれば検査がある。それはもう合格に定つてゐる。すると二年は兵隊だ。だから四月迄にはブラジルへ出発しなければならぬ。お夏は冷えだ指を四本までも紅い口に啣へて温めた。

『ふんとに門馬さんさ嫁くだば、おんれや、やんだなあ』と姉は言った。

『大丈夫だつて何遍言はせるんだべなあ！名儀だけだ。ブラジルさ着いたら直ぐ籍返すんだよ。』

『ンだば、お前、えゝ様にしてくれ。』

彼女はやつとそれだけ言った。それが最後の決心であつた。姉思ひのやさしい弟の犠牲になつて、恋しい人を一年の間忘れてゐやうと思つたのだ。

孫市は「姉しやん」が「恋しい人」をあきらめ、「ふんとに門馬さんさ嫁くだば、おんれや、やんだなあ」と言うのを押し切つてまで「決心」を強いたのは「春になれば検査がある。それはもう合格に定つてゐる。すると二年は兵隊だ。だから四月迄にはブラジルへ出発しなければならぬ」からだつた。

「国立海外移民収容所」一日目の「飯」時、「自転車職工であつた門馬義三」が「『うまくねなあ。』』と言つた。それを聞いた孫市が「たしなめる様」に「『文句あ言はれねえべ。××××の御飯でねかよ！』』と言ふ。孫市の意識には「××××」が生きてゐる。三月九日、渡航にそなえて、孫市は労働服を買つた。そして労働服を着て、「『どうだ姉しやん、似つかねか？』』と聞く。「『兵隊の様だな。』』と義三が言う。麦原が「横から問ひかけた」。「『佐藤さん検査終へだしか？』』と。孫市は「『まんた。俺あ今年……危ねく引つぱられるとごでした。きつと合格だものなしや。おつかねくて逃げで来た様で氣イ咎めでなしや。』』と心境を吐露する。これを聞いていた隣の義三と孫市の間に次のような応酬があつた。

義三は「変に憎々しげな調子」で、「『逃げで来たべや。』』と「不意」に言つた。

『馬鹿あ！』孫市は言下に強く言つた。『検査がおつかねえ様な俺だと思ふか。』

『口でだば何とでも言へツからな。』

『馬鹿あ！あんまり出鱈目言ふな。やられるぞ。』

けれど義三は屈しなかつた。普段から馬鹿扱ひにされてゐる腹いせでもする様に妙に真剣になつて突つかゝつて行つた。

『俺あ覚えでるぞ。お前何て言つた？四月迄にブラジルさ行がねば引つぱられつから早く行くんだと言はねかつたか？』

『言った。それが何とした？』と孫市が言った。(中略)

『と言ったが何だ。兵隊さ行けば二年待たねばなんねべ。ンだから早く行くんでねかよ。』

『ンだから兵隊さ行きてくねえべ。あんまり忠義でねえぞ！』

『何だ！』と孫市は胡坐をかいてみた片膝をぐいと立てて身構へをした。『本気だな？本気だな！畜生！てめえは何だ？第二乙でねか。第二乙が忠義か馬鹿！姉しやんさ聞いて見れ。……な姉しやん俺あ一遍でも兵隊さなりたくねつて言つた事あツか？』お夏は恥かしさに頬を赤くして悲しげに弟を見上げると、やめれお前、と言つた。

『姉しやんさ聞かねでも分つてだ。』と義三は悠々として言つた。

『何が分つてだ？』と孫市は又向き直つた。

『お前はあんまり忠義でねえ事がよ。』

『ようし。もう一遍言つて見れ！』

『あんまり忠義でねえよう。』

孫市は立ち上つてベッドの縁に足をかけた。一飛びに通路を跳び越して義三に跳りかゝらうとした。其の時、劫つ、婆さんがむくむくと起き上つた。枕下に置いてある煙管をとるといきなり義三の首筋のあたりを二つ三つ続け様に擲りつけた。義三は飛び上つて壁の隅へ逃げると首筋を押へて、痛えなあ、と唸つた。

『此んの甲斐性無し！』と婆さんは一口言ふと、肩をゆすつてぶつぶつとつぶやきはじめた。是はひどく皮肉なやり方であつた。煙管は当然孫市を擲るべきものであつた。流石に孫市を始め室中全部が呆然として身じろぎもしなくなつた。殊にお夏は顔も上げられぬ様な思ひがして、まだ義三と睨みあつたまゝ呆れて突つ立つてゐる弟の労働服のズボンを引っぱつた。

義三に「検査」を「逃げで来たべや」と言われ、「忠義でねえよう」と言われた孫市は居丈高に反論し、「労働服を脱いで用便に出る時に調子の良い口笛を吹いて行つた」が、「然しそれは誰の耳にもわざとらしく聞えていたはしかつた」。孫市は「検査」を「逃げで来た」ことと、「忠義でねえ」ことを隠蔽するため、引かれ者の小唄のように、「調子の良い口笛を吹い」たのである。

その夜、孫市は「中々眠れさうになかつた」。孫市は、いろいろ「考へ」、次のような「決心」をする。

自分が本当に忠義でないかどうかを考へてゐた。自分では断じてさうは思はない。然し室中の者が疑つてゐるかも知れないと思つた。義三と喧嘩をした時に誰も俺に加勢して呉れなかつた。それが疑はれてゐる証拠だと思つた。すると頬に赫と血の上るのが感じられて、段々自信が無くなつて来た。自分が本当に卑怯者である様に心細くなつた。(中略) 姉に訊いて見ればはつきりするだらうと思つたのだ。姉に助けて貰

ひたかつたのだ。

『なあ姉しやん。』弟は変に改まつて言った。『姉しやんの考へ聞がへてけれ。な、おれや本当に、あんまり忠義でねえか知んねえなあ。』

姉は急には答へなかつた。弟がまだあの事に悩まされてゐるのを不思議な様に思つた。(おれや女だから良く分らねかも知んねども。)そして弟を気の毒に思つた。それで弟は、姉も亦自分と同じ考へに迷うてゐるのだと思つた。すると忠義に対する悲壮な犠牲の感情に胸が熱くなつた。

『俺あ忠義でねつて言はれる位えだら、ブラジルさ行がねつもりだ!』と弟はきつぱりと言つた。少なくとも姉にだけは自分の本当の立場を信じて貰ひたかつた。(中略)

『義三さんの言ふ事だもの、あんまり気にすんな。』

それを聞くと弟は淋しくなつた。むしろ裏切られた様な孤独を感じた。姉には断乎として他人の疑ひを晴らせと言つて貰ひたかつた。さうすれば自分は泣いてブラシル行きを抛棄して見せやうと思つてゐた。

『やつぱりな姉しやん、俺あこのまゝブラジルさ行く氣なれね。な、分るべ?何としてもな、俺あ何ほ辛え思ひしてもえゝからな、不忠だとばかりあ言はれ度くねんだ。姉しやんだつて、不忠の弟持ちたくねえべ?』

姉はやはり無関心な様子で輝く雪の崩れ込るのを眺めてゐた。答へは無かつた。

『俺あな、監督さんさ相談してな、移民をやめさせて貰ふべと思ふ。』と弟は低く言つた。

どうしても姉から確答を得られなかつた孫市は監督の方へ向かつていく。孫市は門馬兄弟を「屋上へ引つぱつて行つた」。「そして自分は移民をやめて検査を受ける事にきめたから、と言つた。疑ひを晴らし得た事の喜びと復讐をする事の喜びとに誇らかにきつぱりと言つた」。小水助監督に屋上に来てもらい、孫市は「実あ、一寸訳あつてなし、移民をやめべしと思つてなし。」と言う。「四人で輪を作ると先づ孫市が一昨夜の口論から今度の決心を定める迄の経過を説明した。聞き辛い東北弁の説明を聞きながら小水は、此の青年が国家組織の重圧を馬鹿々々しい程忠実に苦しんでゐるのを珍らしいものに、又可愛相にも思つた」。

小水助監督は「『そりや君い、考へ過ぎですよ。』」と言ひ、「彼(孫市)の様な理由(「検査」を「逃げる」こと)で移民をやめると言ふ事は小水の此の道の常識(つまり、「検査」を「逃げる」ための移民)から言へば成立しない」と考へている。それゆゑ、小水助監督は「『さう君考へ過ぎなくてもいゝですよ。ねえ、今年検査で移民に来てゐる者は君ばかりぢやないですよ。ねえ、誰が本気で検査を逃げたなんて思ふもんですか』」。孫市は「『本当に逃げたと思つてるんです。』」という。さらに小水助監督は言う「さう

でせう君、君みたいな事を言ったら来年検査の者だつて疑へば疑へる訳でせう。そんな事を言ったら検査前の男は誰も移民に行かなくなるよ。ね！さうでせう。ははゝゝゝ」。『疑はれる位えだから俺あ行かね方が何ぼえゝか知んね。』と孫市は答える。最後、小水助監督は「『ね、そりや君の意地だよ。男の意地だよ。ね、ははゝゝゝ。けどねその意地で以て早く成功してね、早く耕主ベロシになるんだよ。ねえ、さうぢやないですか。折角の海外発展の雄図をだよ、え？検査の為に失ふのは君、国家としても損失だよ君。さうでせう。』」と「説得」。孫市は最後に「潔よく、はあ、分つたし！ときつぱりと言つた」。「いつの間にか今日迄の二日間考へ通して来た自分の大問題が小水の話聞いてゐる中にそれ程の大問題でもなかつた様に思はれ出した」からである。

第三の銅鑼が鳴つた。午後四時。

突堤につながれてゐた太いロープが解かれた。船は自由になつた。スクルーが廻り始めた。(中略)理屈屋の勝田さんも両手をあげて幾度か万歳を叫んだ。その息子はもう声が涸れてゐた。頭中にまだ包帯をした堀内さんがよく動かない顎を動かして勝田さんに言つた。

『もうこれで日本へ帰らあでもええ思やあわしあのびのびしますわい。本当ぞな。どうも日本は、ずい息が詰る様など御見んせえ！』

隣りに居る孫市はちらりと此の包帯の男を見た。日本を嫌つてゐる男、怪しからぬ男と思ふ、と、不意に、検査を逃げて行く自分を思ふ、いや俺は決して逃げて行くのではないと思ふ、けれどもどうしても不忠な様に思はれて苦しくなつて来る。

孫市はこの時に及んでもなお逡巡している。「突堤につながれてゐた太いロープが解かれ」、「船は自由」になり、「スクルーが廻り始めた」この時でさえ、「検査を逃げて行く自分」を思い、「いや俺は決して逃げて行くのではない」と思いながらも、「どうしても不忠な様に思はれて苦しくなつて来る」のをどうしようもない。「何だ！もう動いてるのか！」と誰かゝ叫ぶ。すると、万歳が今では狂燥マヤの調子を帯びて来た。「船はもう二十間近くも離れてゐた」。

自分の叫ぶ万歳の悲痛な調子にふと気がついて大泉さんが叫びをやめた。すると隣の麦原さんも沈黙して、そつと眼頭を拭つた。そして次々と万歳の声がさびれ始めた。手の中には誰もがテープの切れ端を握つてゐる。

万歳を叫びやめた時孫市はほつと大きな吐息をついた。心からの大きな吐息であつた。もう決して擱まる事はない。彼は今始めて、自分が××を逃げてゐる事を知つた。

日本から逃げて行くのである事を知った。もう掴まる事はない。彼はほつと安心して身のまはりを見廻した。

「検査を逃げ」、「不忠」でないかと揺れていた孫市は、船が日本を離れた瞬間、「自分××を逃げてゐる事」を知り、「日本から逃げて行くのである事」を知ったのである。小水助監督の「常識」（「検査」をのがれるための移民）通りの人間孫市だったことになる。孫市は移民にことよせて戦争を忌避し、祖国を逃亡したのだ。

「一人の収容所員が和服にソフト帽の二人の男を案内」して来た。「刑事」である。「刑事」は「詐欺。拐帯。」の罪で九州熊本出身の中津井を「捕縄」した。「『日本を逃げる気でゐたべな。』と麦原さんが言ふと大泉さんは大きく首肯してから、『ンだなしや、ンだもしや、ブラジルさ行つたら真面目に働くつもりであつたかも知んねなあ。』と考へ言つた」。「『見逃してやつこども出来ねもんだか知んねなあ。』と孫市は眼をうるませて言つた」。中津井は「詐欺。拐帯。」故、移民に名をかりて、祖国逃亡をはかつたが失敗したのだ。

「五十がらみの無精髭を生やした」堀内は「再渡航」者で、「昨年十一月」帰国し、息子を「日本の小学校へ入れてやりてえ」と思い、「連れて戻つて親戚い預け」、ブラジルへ帰るところである。ブラジルを知っている堀内は移民の勝田との対話で、ブラジルと日本について次のように言う。

『働き居る者あ食へん事ありまへんわえ。日本と違うてなあ……日本ぢや働えても食へん言ふとりますけんう。』

『さうするとやつぱり日本よりあ良い訳ですなあ。』と勝田さんは膝をゆすつて悦んだ。

『さうですなあ、まあ、暢気なだけ、えゝでへうかなあ。』堀内さんは考へ考へ言つた。

労働が暢気なのだ、と勝田さんは思った。暢気に働いてゐれば食つて行ける、土地は肥沃だし気候は良いし物価は安い！是こそ地上の楽園である様に思った。然し堀内さんはさう言ふ意味で言つたのではなかつた。珈琲園の労働は日本の農業に劣らず苦しい、変化にも乏しい。移民達は誰一人本当のブラジルを知つてはゐない、空想だ。話に聞いたブラジルの良い所に日本の良い所だけを付け加へての空想だ。事実のブラジルは大変なところだ。僻遠の農村は此の世から隔離された別世界だ。隣りの部落迄は近くて三里遠ければ十里、そこにはラヂオは愚か新聞雑誌は愚か、郵便の配達さへも無い。百姓達は土間に自分で寝台を作つて住む。働くとき食ふと寝るより他にすること無い所だ。猛獣も居れば毒蛇も居れば鱷も居るが医者も居る部落は殆んど無い。そ

してマラリヤの絶えざる脅威がある。其の他名も知らず素性も知れぬ毒虫共が家の軒に住み土台の間に住んでゐる。そんな事は移民は誰も知りはしない。けれどもブラジルへ行つた移民達は一向に帰つて来やうとはしない。是等無数の迫害よりもつと恐ろしいものが日本にあるからだ。日本の農村の津々浦々迄も行き亘つた文明の脅威に比べれば猛獣毒虫の迫害はまだ何でもないので。日本の農村のどこに農村らしい貽蕩としたものがあらう。生活の絶えざる脅威と圧迫、絶えざる反抗と焦慮、不安と怒りと絶望とが有るばかりだ。ブラジルには数百数千町歩アルケルの大地主の簡素な邸を取り巻いて二十軒三十軒の淳朴な農奴にも似た農民の家がある。部落の百人百五十人は全部顔見知りで、他との交通が少ないから十日以上も知らない顔を見ない事もある。法律の有りや無しや、政府の有りや無しやにも無関心に、都では政権争奪の革命が五年毎十年毎に起るのに知る人も無く語る者も無い。野飼ひの牛は夕方になると沼地アレシヨから鳴きながら戻つて来るし、鶏ガリンニヤは裏のバナナの下で眠る。関心事は珈琲の稔りと子供の成長とだけである。桃花源の物語りにも似た悠々たる生活は、昨日と今日との間に何の区別も無く、昨年と一昨年との間に何の変化も無い。堀内さんは此の事を指してブラジルの方がいゝと言つたのであつた。彼は珈琲園に四年間働らいた。世界の事は愚か日本の事さへも年に一度か二度か風の便りに聞けばかりで言はゞ何一つ知らずに日の出から日没迄汗だくになつて働いた。今から思へばそれが楽しかつたのだ。彼が十一月に日本に帰つてからは、岡山県の山の中の弟の家にあつたのに、どれだけ多くの事を知らねばならなかつたか。東京市会議員の大疑獄に次いで藤田謙一の合同毛織事件と天岡直嘉の売勲事件。山梨半造が釜山取引所事件で起訴され小川平吉が私鉄疑獄で引つぱられた。其の他に樺太山林事件があり明政会事件もある。最近には現職文部大臣が収賄事件で辞任して今朝は起訴されてゐる。かうした政界財界の腐敗の一方には一月の金輸出解禁とそれに伴ふ消費節約のどさくさ、引き続きの各地生産業者の因懲。すると財閥の売国的ドル買事件と国民の憤激。一月二十一日には議会は解散された。二月二十日には総選挙。その繁雑さの後には選挙違反。それから工場のストライキと共産党事件の裁判と、次は軍縮会議だ。次々と起つて来る是等のめまぐるしい事件を日毎に知らされるだけでも彼は身も心もさむざむとする様に思ひ、母国日本の末路を見る様に悲しかつたマヤむしろ何も見ず何も知らないに限ると思つた。彼は今日日本に何の未練も無く、むしろ逃れる様な気持で出発の日を待つてゐるのであつた。

「日本の農村の津々浦々迄も行き亘つた文明の脅威」や「次々と起つて来る」「めまぐる

るしい事件」に「母国日本の末路」をみた堀内は「今日本に何の未練も無く、むしろ逃れる様な気持で出発の日を待つてゐる」のだ。

「検査」を忌避して日本を逃亡していく孫市、「詐欺。拐帯」による逮捕をまぬがれんがため、日本からの逃亡をくわだてた中津井、「ずど息が詰る様」な日本、「もうこれで日本へ帰らあでもええ思やあわしあのびのびしますわい」と言いながら再度日本を離れる堀内。三人三様だが、「落葉の吹き溜り」としての移民ではない。

「落葉の吹き溜り」としての移民ではない、という点では他に勝田がいる。

勝田は「企業移民」である。「物知り」で、移民会社に托して「五千円をブラジルに送つてある」のだ。「懷中に三千円を持つてゐる」。「これだけ財産が有つては渡統トウ費補助は貰へない」のだから、「自費で行くとすれば家族八人、二百円づゝで千六百円かゝる。そこで考へ出したのが自分の十六になる娘を親戚の青年の嫁に仕立てる事だ。相手の青年は検査前の青二才だから此の男を戸主にしてへば、戸主は無一文だから当然移民になれる」。

「信州の海外協会支部長をした事のある地主」勝田は、「『どうもかうよく考へて見ると言ふと日本の農業はその、何と言ふか、行き詰つとる！どうも私なんか人に土地を借マしてやらしとるのが、毎年毎年それが感じられる。而も年毎にどうもそれが切実にな、見えて来るんですな。是ぢやあ仕様が無いから一つ今の中に何とか新生面を切り開かにやならんと思つてなあ、そこでまあ今度ブラジルに土地を買ひましてな、アリアンサ植民地と言ふ所』だと言ひ、さらに、「『そりやあんた日本とは比べものにならん。気候はね、いつでも合服一枚で済む様なえゝ気候だし、土地と言へばもうその肥えて肥えて、桑がね、桑の苗がね、桑の苗がね、植ゑてまる一年で以て、かう！二寸からの直径になる。わしは一つ養蚕をうんとやるつもりですがね。珈琲はもう生産過剰で行き詰りましたな。将来は果樹及び養蚕、殊に養蚕はえゝですよ。現在では絹物は全部輸入ですからな、えゝ。』」と言ひながら、勝田は今、「アリアンサ植民地」に向かつて、日本を離れようとしているのだ。

「落葉の吹き溜り」ではない移民は以上の四通りであるが、次に「落葉の吹き溜り」としての移民を見てみよう。

「落葉の吹き溜り」としての移民には黒川、大泉、麦原、そして、三浦の四家族がいる。一人は熊本から来た黒川一家。

夫婦の間に十一を頭に九人の子がある。而もそれだけでは移民家族にならないので

親戚の十三になる女の子を入籍して連れて来た。都合十二人だ。最後の子供は生後三ヶ月でめる。規則には六ヶ月未満の嬰兒は許されないのだ。医者はこの子を見た時にはツとした。思はず、是は！と言った。

『君、ちよつと、見給へ！』と彼は隣りに居る医者と言った。『恐ろしい栄養不良だよ。』

此の子は蚕の様にぶよぶよで蒼白く透きとほる様な肌の下から静脈の網目がすつかり見えてゐた。凋びて皺の寄つた小さな顔、眠るでもなく醒めるでもなく唯ぐつたりとしてゐる表情。眼を開く力も無く声を立て、泣く事さへも出来ないのだ。『乳を飲むかい？』と医者は吃り乍ら訊いた。母親は両手に此の子を抱いたまゝぼんやりと窓の外の雨を眺めてゐて返事もしない。医者は父親をふりかへつた。大きな体格をした父は右の手の甲で鼻水をこすつてそれを左手で揉み消してゐる。その三人を囲んでうようよと九人の子供だ。その中の三人の女の子は頭に虱が霜の降つた程にたかつてゐて、中の一人は頭一杯の腫物で膿が流れて髪が固まつて悪臭を放つ中を虱が歩いてゐる。二人の医者は呆れて此の白痴の様な夫婦をつくづくと眺めた。是は人間であるか獣であるか。そして毛むぢや、熊の様に逞しい本能の姿をまざまざと見た様に慄然として顔を見合はした。(郷里の予備検査の医者は何をしてゐたんだらう?) そして兎も角も後廻しときめた。

体格検査で後廻しになつた黒川一家は合格ときまつた。どう考へても不合格に違ひないのだが、所持金がたつた二十円では九州迄帰す訳にも行かない。これで親子十二人が地球の果迄行かうと言ふのだ。移民になつて了へばブラジルの農園までは旅費も食費も要らないからいゝ様なものの、不合格にしたら始末に困る。トラホームでないのを幸ひに医者は合格の印を捺して了つた。(ブラジルへ棄てにやる様なもんだが。)と考へて彼は苦笑した。

ここには、「郷里の医者」、及び「国立海外移民收容所」の「医者」のいいかげんさもさることながら、日本の移民が移民ではなく、棄民、つまり、「ブラジルへ棄てにやる」移民であることの実態が描き出されている。

一人は、秋田県田沢出身の大泉進之助。女房と二人の子供(「十三と五つ」)、合計四人の家族。「国立海外移民收容所」に到着した大泉は「故郷の山河を思ひ出す」。

故郷には傾いた家と、麦の生え揃つた上を雪が降り埋めてゐる幾段幾畝の畑と、そして永い永い苦闘の思ひ出がある。然し、家も売つた畑も売つた。家財残らず人手に渡して了つた。父と祖父と曾祖父と、三つで死んだ子供と、四基の墓に思ひつきりの供物を捧げてお別れをして来たではないか。

ブラジルさ行くからには俺あ、死んだ気なつて働らぐつもりだ。

大泉は思いを「故郷」に残し、ブラジルへ夢を託す百姓である。

一人は、青森出身の麦原。妻と「トラ、ホー、眼」の娘と長男の四人。「『どうせ日本に居だとして、何ともなんねで、飢え死ぬもんなら……なしや!』」と言い、「『誰もな、楽に食べられる者だら、移民にあなんね。なあ。』」と言う。

最後の一人は、会津若松出身の三浦。「同室の人達に酒をふるまつて米山甚句やらさん、時雨やらを歌」う朗らかな人。

他に本倉一家がいるが、「戸主」が「トラホーム」だったため「体格検査」で「不合格」になり、「妻と五人の子供達」を連れて、「国立海外移民収容所」を出たので、ここでは割愛した。

以上、「落葉の吹き溜り」としての移民四家族に共通するのは「誰もかれもが日本の生活に絶望して、更生の地を求めて流れて行かうとする、共同の悲哀を胸に抱いて」いた事であり、「貧乏と苦闘とに疲れた後の少しく捨鉢な色を帯びた、それだけに向ふ見ずな希望」をもっていたことである。

以上、全移民「九百五十三人」のうちの八家族について見て来た。移民八家族の代表格は門馬一家。門馬一家の代表格は孫市。孫市は移民に名を借りた徴兵忌避者・祖国逃亡者だったことは前述した。孫市の徴兵忌避・祖国逃亡への意志には強靱なものがある。「渡船費補助移民の条件」（「満五十歳以下ノ夫婦及び其ノ家族ニシテ満十二歳以上ノ者」を充たすため、「門馬さんは婆さんと二人の息子、孫市は姉弟。此の二組が一緒になつて一家族と言ふ形式」を作った。この「形式」は「孫さんの智恵」ではなく、「移民取扱海外興業会社の地方業務代理人山田さんが教へて呉れた術」である。「一家族と言ふ形式」を作るにあたり、門馬勝治を佐藤夏の「婿」にする際、孫市は「井戸端の暮れなずむ雪の中で、紡績から帰つて来た姉を弟は熱くなつて口説いた（「『俺あ今日迄姉しやんさ唯の一遍も迷惑かげだ事ねえべ、な! 一生の御願えだよ。その代り姉しやんは一年きりで帰るんだ。な!』」）のである。姉夏は「『ンだば、お前、えゝ様にしてけれ。』」と言い、「最後の決心」をした。「姉思ひのやさしい弟の犠牲になつて、恋しい人を一年の間忘れてゐやうと思つた」。孫市は「『俺あ今度ばかりあ姉しやんさ何ぼか泣かした。な、姉しやん。俺あな、姉を犠牲にしてブラジルさ行くんす。ンだしべ! 姉しやんはもうお嫁入りする年でなしや、俺の為にわざわざいで行く訳なものなし。俺あ姉しやんさ誓つてなし、一年たつたらきつと姉しやんを連れて戻つて、えゝ婿さん探してやツからつてなしや!』」と言う。

孫市の移民に名をかりた徴兵忌避・祖国逃亡への意志は、姉に偽装結婚と、相思相愛の恋人との別離を強いるほど強烈だったのだ。

したがって、『蒼氓』の主題は移民に名を借りた徴兵忌避・祖国逃亡にあつたことは動かない。

『蒼氓』は徴兵忌避・祖国逃亡を主軸にしながら、そのまわりに、「落葉の吹き溜り」としてのさまざまな移民たちの姿を配し、移民の実像を描き出したのだ。

もちろん描き出したのは移民像が中心だが、それと同時に、移民事業にたずさわる移民取扱海外興業会社、その背景にある日本国などの反移民性・棄民性の実態をも描き出している。

移民取扱海外興業会社は「移民募集ポスターの宣伝文」で「海外雄飛の先駆者、無限の沃土の開拓者」を高らかに謳いあげるが、移民先であるブラジルの実態については何も知らせていない。移民達は「誰一人本当のブラジルを知ってはゐない」。移民たちは「話に聞いたブラジルの良い所に日本の良い所だけを付け加へての空想」を抱いているだけだ。実際のブラジルは次のようなものであった。

珈琲園の労働は日本の農業に劣らず苦しい、変化にも乏しい。(中略) 事実のブラジルは大変なところだ。僻遠の農村は此の世から隔離された別世界だ。隣りの部落迄は近くて三里遠ければ十里、そこにはラヂオは愚か新聞雑誌は愚か、郵便の配達さへも無い。百姓達は土間に自分で寝台カマを作つて住む。働くと食ふと寝るより他にすることも無い所だ。猛獣も居れば毒蛇も居れば鱷も居るが医者カマの居る部落は殆んど無い。そしてマラリヤの絶えざる脅威がある。其他名も知らず素性も知れぬ毒虫共が家の軒に住み土台の間に住んでゐる。そんな事は移民は誰も知りほしくない。

ブラジルには数百数千町歩アルケルの大地主の簡素な邸を取り巻いて二十軒三十軒の淳朴な農奴にも似た農民の家がある。部落の百人百五十人は全部顔見知りで、他との交通が少ないから十日以上も知らない顔を見ない事もある。法律の有りや無しや、政府の有りや無しやにも無関心に、都では政権争奪の革命が五年毎十年毎に起るのに知る人も無く語る者も無い。野飼ひの牛は夕方になると沼地ブレシヨから鳴きながら戻つて来るし

鶏ガリニヤは裏のバナナの下で眠る。関心事は珈琲の稔りと子供の成長とだけである。桃花源の物語りにも似た悠々たる生活は、昨日と今日との間に何の区別も無く、昨年と一昨年との間に何の変化も無い。

移民取扱海外興業会社から派遣された村松移民輸送監督は、「移民雑誌社」の「移民監督助手」小水から「ヴェノス丸」の「事件を若し誰かに訊かれたら何と返事したら宣いでせうねえ」と問われた時、「『なにあに、何とか胡魔化しておくさ。あれは風説であつたと言ふんだよ。』」という。

其の事件と言ふのは二ヶ月程度前に出発したヴェノス・アイレス丸がケイブ・タウンに寄港した時の事であつた。恰度帰航中のマニラ丸がブラジルから入港して、乗つてゐた帰国途中の移民がヴェノス丸に遊びに行つたのである。そしてサン・パウロ洲では労働賃銀が低下した為に邦人移民は食つて行けなくなつた、吾々もそれ故に帰国するのだと言ふ話をした。移民達はそれを聞くと、元来漠然とした希望をあてにして渡航する者ばかりの事とてたちまち希望を失つて了ひ、時一時と不安が募り、翌朝船がリオ・デ・ジャネイロに向つて大西洋横断の航路に上つた頃には船中大評詔が開かれ、遂に全移民一千名が大挙して船を日本に戻せと船長に要求したと言ふ事件であつた。

さらに小水助手は就任したその夜お夏に対し「不倫な行為」をした。医者については前に指摘した。

したがつて、『蒼氓』の主題は、移民に名をかり徴兵忌避・祖国逃亡を図つた孫市を軸に、そのまわりにタイプの異なる移民像、及び移民取扱海外興業会社、日本国などの反移民性・棄民性などを描いたところにあつたと見ることが出来る。かかる意味において、『蒼氓』は反戦的な作品ではないが、厭戦的な小説なのである。

昭和六年満州事変、昭和一二年日中戦争、そして昭和一六年第二次世界大戦へと続く侵略戦争の歴史の下で、昭和一〇年、厭戦文学『蒼氓』が書かれたということは高く評価されてよい。

*

以上のように、戦後版で読めば、ブラジル移民集団の姿を描いた作品（昭和恐慌による農村の疲弊）ということになり、戦前版で読めば、徴兵忌避、祖国逃亡のニュアンスが強いということになる。

しかし、いずれにしても石川のまなざしは社会批判、国家体制への反発には向いていない。その中で翻弄される卑小な存在である国民のほうにむいている。そのことが、『蒼氓』というタイトルに現れている。

第一〇章 初期石川達三（作家史）の再構築

——その振れ幅をめぐって——

第一章から第九章まで、石川達三の初期の作品を、時系列に沿って分析してきた。従来石川達三は「社会派」としての評価が定まっていた。たしかに、戦争文学や移民文学に注目すれば、そのような評価に落ち着くだろう。しかし一方で、石川には家庭や夫婦のありようを描いた作品も多くみられる。石川の全体像を総合的に把握するためには、「社会派」という評価は不十分なのではあるまいか。

この第一〇章は、本論文の総括の章と位置づけ、石川の社会に向けるまなざしと、個をみつけないくしむまなざしとが矛盾することなく同居していることを説明しようとするものである。

一

次の文章は石川達三が己の文学について語ったものである。

昭和五年から十年という時期は、日本の農村が大変に窮乏していた時期であった。政府は一人について僅か三百円程度の渡航費補助を支出することによつて、窮乏にあえぐ農民たちをブラジルへ送った。ずいぶん安上りな農村対策であった。「蒼氓」はこれら農村出身の移民集団を描くことによつて、政府の移民政策に一種の抗議をするような性格をもっていた。そして最初に世間で認められた私の作品が「蒼氓」であったということは、いささか象徴的でもあった。権力に対する庶民的な抵抗という姿勢は、ほとんど私の作家としての全生涯を通じて変らなかつた。世間の人々は知っておりながら黙っているような事、或いはそういうものとしてあきらめているような事を、私は黙って居られなくなつて抗議しようとする。したがって私は常に野党的であり庶民的であつた。私は少しばかり（臍曲り）であり、（文句たれ）であつた。しかしそれにはそれなりに、（この方が正しいんだ）という自分流の理窟があつた。それが言いたいから、その為に小説を書く、というような傾向があつた。だから私の小説は手短であつて目的ではないと言われれば、私は納得するより仕方がなかつた。二十二三歳のころ、「抵抗の文学」という本を読んで、ひどく感銘したことがあつた。筆者の名は思い出せないが、プーシキンの「青銅の騎士」などを例に引いて、権力への抵抗こそ文学の一つの要素であるというようなことが書いてあつた。それによつて私は自分の作家としての心の窓が開かれたような気がしたものだつた。私はその時から、（けしかけられ）ていたのかも知れなかつた。（『経験的小説論』昭和四五年五月、文芸春秋）

石川達三によれば、「二十三歳のころ」、「『抵抗の文学』という本を読んで、ひどく感銘」を受けたという。そして、「権力への抵抗こそ文学の一つの要素」であることを知ったという。それによって、「自分の作家としての心の窓が開かれたような気がしたものだ」と、文学への開眼の歓びを力強く書いています。

「権力に対する庶民的な抵抗という姿勢は、ほとんど私の作家としての全生涯を通じて変らなかった」といい、その出発にあったのが『蒼氓』であり、それは「いささか象徴的でもあった」と記す。

私は小説を書く前に、何を目的に書くかということを考えずにいられない。何のために書くのか。何が言いたいのか。書くことの社会的な意義がはっきりしなくては、作品に着手できない。これは私の癖である。作家としては邪道であるかも知れない。目的がはっきりし、書くことの意義を強く感じたときに、私の意欲は燃えあがる。その意義なるものは、勝手気ままで、終始一貫している訳ではない。戦争中には自由のために書くこうしたり、戦後になってからはあまりに野放図になった自由への反省を求めするために書くこうしたりした。時代の流れが私を刺戟し、刺戟に反応して私は創作意欲をおこす。したがって私の書くこうとする事はしばしば、時代の風潮にさからって行くこうとするようになる。抵抗の文学と言えば立派にきこえるが、要するにいささか臍曲りである。「生きてゐる兵隊」で筆禍を受けたのはむしろ私の宿命的なつまずきであった。しかし私は後悔はしなかった。処罰を受けても、やはり私にとっては書かなくてはならない作品であったし、書いたことに満足感があつた。エミール・ゾラにとってドレフュス事件は、書かなくてはならない宿命的な作品であつただろうし、その為英国に亡命するようなことになっても、後悔はなかつただろうと思う。私はゾラという作家にいろいろと共鳴するものを感じていた。（『経験的小説論』）

ここでもまた、石川達三は、己の文学を「抵抗の文学」という。「抵抗の文学」とは、石川達三流に表現すれば、それは「庶民的な抵抗」であり、「抗議」であり、「野党的であり」、「臍曲り」であり、そして、「（文句たれ）」であることを言う。石川達三のこの思想（姿勢）は、固定された思想（姿勢）ではなく、時と場合によって、情況によって変化する。つまり「勝手気ままで、終始一貫している訳ではない」（「戦争中には自由のために書くこうしたり、戦後になってからはあまりに野放図になった自由への反省を求めするために書くこうしたりした」）のである。ここに、石川達三が作品の改変を繰り返した秘密がある。石川達三の思想（姿勢）にはバランス感覚が働いていたのだ。いわば、まわりの情景にあわせて色を変えるカメレオンのようなものである。

次の文章は、高梁における石川家の社会的位置をあらわしたものである。

私は学校でも町の人たちからも、（先生の子）と呼ばれた。秋田でも東京でも、一度も聞いたことの無い呼び方であった。それほど高梁という町は小さくて、住民がすべて顔見知りであった。この町では、最高の名誉を与えられているのが県立中学の校長であり、その次が私立女学校の校長と小学校の校長であった。それから町長と警察署長と郵便局長であった。中学校の先生たちは町では最高の知識階級であり、信望の最も厚い人たちであった。（「私ひとりの私」）

石川達三の父祐助は高梁中学校の英語教師であった。「中学校の先生たちは町では最高の知識階級であり、信望の最も厚い人たちであった」。こうした家に育った石川達三が、なぜ後年、社会派（抵抗）作家といわれるほどの批判的精神を育んだのか。石川達三に決定的な影響を与えた高梁を中心に見てみたい。

(一)

石川自身が「学校の友達のあいだで、私の渾名は五右衛門と呼ばれた」と述懐しているように、石川達三が小学校において、苗字が石川と言うことからつけられた「渾名」が「石川五右衛門」であった。

五右衛門が豊臣時代の太盗であって、太閤の寢室に忍び込んで千鳥の香炉を盗んだとか、釜茹でにされた時に息子を頭の上にし上げて、（……世にぬすびとの種は尽きまじ）という辞世の歌を読んだとかいう伝説を知ったのは、ずっと後のことだった。少なくとも五右衛門という私の渾名は、私にとってあまり不名誉ではないように思われた。更に五右衛門が権力者の所有を奪って貧民に施した一種の義賊であると聞いているから、少しばかり五右衛門を誇りに思った。私はこの盗賊を悪人ではないと感じていた。その当時の社会に対する彼の反抗の精神と実行力と、そして悲劇的な、しかし壮烈な最期が、私の共感をそそった。五右衛門は私の先祖ではないが、その頃少年たちの間で流行していた英雄ナポレオンよりは、石川五右衛門の方が私には身近な人間のように感じられた。（「私ひとりの私」）

石川達三は「五右衛門が権力者の所有を奪って貧民に施した一種の義賊であると聞いてからは、少しばかり五右衛門を誇りに思った。私はこの盗賊を悪人ではないと感じていた。

その当時の社会に対する彼の反抗の精神と実行力と、そして悲劇的な、しかし壮烈な最期が、私の共感をそそった」。石川達三が「五右衛門」と渾名で呼ばれ出したのは石川達三が高梁小学校転入間もない一年生、八歳だった。八歳の幼い石川達三は、「権力者の所有を奪って貧民に施した一種の義賊」石川五右衛門を「誇り」に思い、石川五右衛門の「反抗の精神と実行力」、そして「悲劇的な、しかし壮烈な最期」に「共感」を覚え、「身近な人間のように感じ」たという。この時石川達三は、この社会に、「貧民」と「権力者」の二つの階層のあることを理解していた。そして、「反抗の精神と実行力」とをもって、「権力者」の「所有」を奪い取り、「貧民」に「施」すことを、「義」とみた。

(二)

高梁小学校における特筆すべきことの二つは、「(社会の不正)というもの」に「直面」し、「憤り」の心を育てたことである。

私は二年から卒業の時まで、学年成績はいつも一番であったが、級長にして貰えなくて、ずっと副級長であった。級長は柳井という二番か三番の子であったが、柳井の父はこの町の県立中学校の校長であった。校長の息子を級長にしたのは、受持の教師のはからいか、又は小学校校長の配慮であったに違いない。私はその事に不満だった。他のクラスではみな、一番の子供が級長になって、肩から白い編み紐をかけていた。私だけが一番であったのに緑色の副級長の紐しか貰えなかった。家で、母がその事の不当を口にしたことがあったが、父は何も言わなかった。クラスの生徒たちはみな私校の先生たちが、(長いものには巻かれる)という諺を、現実に教えていたような具合だった。むしろ可哀相なのは私よりも、故なくして級長にさせられた柳井の方であったかも知れない。私は不満ではあったが黙って耐えていた。或いは、(社会の不正)というものに私が直面した最初の経験であったかも知れない。その不正は五年間つづいた。私は五年のあいだそれに耐えていた。不正に対する憤りは内攻して、正しい処置を要求する私の正義感を培ってくれたかも知れなかった。(「私ひとりの私」)

「二年から卒業の時まで、学年成績はいつも一番であった」石川達三は、「級長にして貰えなくて、ずっと副級長であった」。「級長は柳井という二番か三番の子であったが、柳井の父はこの町の県立中学校の校長であった」。「他のクラスではみな、一番の子供が級長になって、肩から白い編み紐をかけていた。私だけが一番であったのに緑色の副級長の紐しか貰えなかった」。「まるで学校の先生たちが、(長いものには巻かれる)という諺を、現実に教えていたような具合だった」。「私は不満ではあったが黙って耐えていた。或いは、(社会の不正)というものに私が直面した最初の経験であったかも知れない。そ

の不正は五年間つづいた。私は五年のあいだそれに耐えていた。不正に対する憤りは内攻して、正しい処置を要求する私の正義感を培ってくれたかも知れなかった」。石川達三のこの「正義感」は、石川達三が「高梁の町で知れわたった程の優等生だった」（「私ひとりの私」）からなおさらのことだったと思われる。そのうえ「長男と次男とは優等生であった」（「私ひとりの私」）から、石川達三の「緑色」の「紐」はいっそう屈辱的だったのだろう。

(三)

ここまでは「社会派」たる石川像につながってゆくものと考えてよい。権力や体制に抵抗してゆこうとする石川の面目躍如たる青少年期を送っていたのである。ところが一方で、これ以降は、弱者に対するいつくしみや個に対するまなざしが窺えるエピソードを紹介する。

高梁におけるその三は「菊村」家での生活である。

当主菊村定吉氏は町でも人望の高い商人で、年の暮にはひそかに貧民に餅米を配ったりしているという話だった。醤油の醸造業をやりながら、片手間に質屋をも経営していた。質物を入れる土蔵が四棟、小作人が持つて来る米俵を入れて置く米倉が一棟。三棟になった大きな醤油倉、それに母屋と、離れの客座敷。物置き小舎が一棟という大きな構えだった。物置き小舎の二階に六畳の小座敷があつて、そこが私と菊村との勉強部屋になっていた。

細い格子のはまった店の土間に、醤油の大甕が置いてあつた。山から炭や薪や野菜を売りに来た男たちが、一升徳利や五升樽を持つて醤油を買いに来た。夜になると質草を風呂敷に包んだ町の小母さんの姿がたびたび見られた。質草の着物や帯を店の間にひろげて、客と主人とがひそひそと値段をさめる相談をしているのを、私はたびたび見た。次の間の箆笥のひき出しには、紙札のついた質草の懐中時計や腕時計がぎっしり詰っていた。質物のはいった倉の中の整理を手伝ったこともあつた。これらの質草の山は、そのままに庶民の貧しさの象徴でもあつた。紙に包まれた着物や帯の一つ一つに、質入れた人たちの歎きがこもっているようであつた。（「私ひとりの私」）

「当主菊村定吉氏は町でも人望の高い商人で、年の暮にはひそかに貧民に餅米を配ったりしているという話だった」と、石川達三は記しているが、こうしたこともあつて、大正七年に起きた米騒動時、菊楽家は何らの被害も受けなかったという。石川達三は、石川五右衛門の所業とも重なる、あるいは、キリスト教の教えの実践ともみられる人物を「菊村定吉氏」に見ていた。一方、「菊村定吉氏」は「片手間に質屋をも経営していた。質物を入れる土蔵が四棟」もあつた。「夜になると質草を風呂敷に包んだ町の小母さんの姿がた

びたび見られた」。これらの質草の山は、そのままに庶民の貧しさの象徴でもあった。紙に包まれた着物や帯の一つ一つに、質入れた人たちの歎きがこもっているようであった」と、石川達三は言う。つまり、石川達三は「質草を風呂敷に包んだ町の小母さんの姿」に、「庶民の貧しさ」を見、「紙に包まれた着物や帯の一つ一つに」、「質入れた人たちの歎き」を見ていたのだ。

(四)

高梁の生活で特筆すべきことの四は、石川達三、一一歳のときから、「私たちは母にすすめられて、教会の日曜学校に通った。私は遂に一度も信仰にはいったことは無かったが、教会に親しみ、キリスト教に関するいろいろな知識を得た」（「私ひとりの私」）石川達三が、たとえ「信仰にはいったことは無かった」とはいえ、キリスト教によって、「貧民」の側に立つ石川達三が形成されたことは想像に難くない。

(五)

高梁の生活で特筆すべき最後の一つは、石川達三が「菊村氏の書棚からトルストイの（復活）の完訳を見つけ出して通読し」、それが「文学に開眼する一つのきっかけになった」（「私ひとりの私」）ということである。さらに、「文学」への「開眼」を決定的にしたのは賀川豊彦の『死線を越えて』に遭遇したことである。これも、弱者へのいつくしみの心情を石川に植えつけた重要な経験である。

もう一つは賀川豊彦の（死線を越えて）だった。この本はその当時のベスト・セラ―で、日本中に多くの読者を持った、その頃としては異常な本であった。内容は異常であったが、（復活）よりは私にとって何倍も身近なものに感じられた。私が社会主義的な思想や行動に触れたのは、この本が最初だった。ひとりのキリスト教徒が、その信仰によって神戸の貧民窟に身を投じ、あらゆる苦難を超えて貧民の救済に当らうとする、闘いの文学であり信仰の文学でもあった。ヒューニズムという言葉を私はまだ知らなかったが、この本によって私は一種のヒューニズムの実体に触れた思いがした。私は英雄豪傑の立志成功伝に動かされたことは一度もなかったが、この賀川豊彦の体験から生まれた作品には強く動かされた。いわゆる世間の成功者の伝記などよりも、私はこの作品の主人公の美しい犠牲と努力との生き方に心打たれた。（「私ひとりの私」）

石川達三は「ひとりのキリスト教徒が、その信仰によって神戸の貧民窟に身を投じ、あらゆる苦難を越えて貧民の救済に当らうとする」ことに感動した。「主人公の美しい犠牲

と努力との生き方に心打たれたのであった」。ここに、石川達三がこれまでに歩んで来た、石川五右衛門に対する親近感、「社会の不正」に対する「憤り」、「年の暮にはひそかに貧民に餅米を配ったりしている」「菊村定吉氏」に接していたこと、そして、継母せいによるキリスト教への導きなどが文学と融合したのである。したがって、『死線を越えて』との遭遇は石川達三にとって、文学面における飛躍への大きな転機だった。

三

石川達三の初期文学論、昭和三年の「文芸雑論」（「ミカド評論」）、「芸術の変遷―主として小説滅亡論について―」（「ミカド評論」）、「階級・芸術・其他の雑感」（「ミカド評論」）、そして「人間衰亡論序説」（「ミカド評論」）について論じてみたい。

「文芸雑論」で石川達三は、「現下の文壇」を「百鬼夜行の姿」だといひ、石川達三側からする「文壇」観を披瀝。さらに次のように敷衍する。「ブル文学者の抬頭と見られた者がプロ文学を突然提唱するかと思えば××芸術家連盟が解散だ。誰が何々党にはいった等々々」といふ。「今の所謂プロ文学作品が、勿論過渡期の作品として多少許すべきではあらうが随分面白くない物ばかりだと思ふ。余りに目的意識が強くなって文芸々術的ロマンティックもサンテイマントも無い無味乾燥した物、即ち少しも芸術的面白さ、魅力、味、を持たない物ばかりになった。まるで思想論文を読んで居る様なものだ。いくら芸術至上主義時代が過ぎたからと言つても論文と文芸が一致する所迄時代が飛躍したらうとも思はれない。ロマンティックとかサンテイマントとかは文芸々術の一つの構成要素ではあるまいか、それとも近時の文芸は『芸術』の従来への定義にはまらない新芸術なのか」と批判。

プロレタリア文学を揶揄している文体ではあるが、新しくおこってきたプロレタリア文学への関心、興味は大変大きい。

「芸術の変遷」では「芸術は変遷する」と言い切る。つまり、石川達三は「芸術の永遠性と言ふものを（今更此の語を持ち出す事さへも陳腐かもしれぬが）信じない。即ち芸術が時代と共にどんどん滅亡していく。それと共に新しい芸術が興つて来るに違いない」と、言い、新しい文芸の出現、つまり、もつとも新しく興つてきたばかりのプロレタリア文学の出現に期待を示した。

「階級・芸術・其他の雑感」では、次のように言っている。

私は、階級芸術なる言葉に疑を持つ。

芸術と言ふものは、その生れた階級以外の人にとっては何等関係のないものであらうかを疑ふ。芸術と言ふものゝ勢力範囲はそれ程に狭いものであるかを疑ふ。（だが、私は芸術を過度に尊重して居るつもりは無い）真に立派なブルジョア芸術がプロレタリアに取つて何の感興をも惹き得ないであらうか。ブルジョアと言ひプロレタリ

アと言ふ此の二つの階級の人々はそれ程迄に、似ても似つかぬ動物であらうか。同じ人間の部類ではないのか。

立派な農民芸術と言ふべき長塚節氏作「土」が、知識階級乃至有産階級に、何等の感動をも與へ得ないであらうか。

私は、階級芸術と言ふ截然たる區別をどこにおくかを疑ふ。芸術は時と所とを問はずして永遠であり普通^マ妥当性を持つとは言はない然し、さうした傾向は十分にある。

即ち、永遠性にやゝ近いもの、普通^マ妥当性にやゝ近いものを持つとは言ひ得る。吾々が万葉を愛読し、外国芸術をも愛する事が出来る様に――」。

石川達三は、ここで、「階級芸術なる言葉に疑を持つ。芸術と言ふものは、その生れた階級以外の人を取つては何等関係のないものであらうかを疑ふ。芸術と言ふものゝ勢力範圍はそれ程に狭いものであるかを疑ふ。(だが、私は芸術を過度に尊重して居るつもりは無い)真に立派なブルジョア芸術がプロレタリアに取つて何の感興をも惹き得ないであらうか。ブルジョアと言ひプロレタリアと言ふ此の二つの階級の人々はそれ程迄に、似ても似つかぬ動物であらうか」と疑問を提起し、「立派な農民芸術と言ふべき長塚節氏作『土』が、知識階級乃至有産階級に、何等の感動をも與へ得ないであらうか」として、「階級芸術」の狭隘さに疑問を呈した。芸術は「永遠性であり普通^マ妥当性にやゝ近いものを持つ」ているからだという。

最後の「人間衰亡論序説」では、次のように記している。

文芸方面に於てかゝる傾向を少しく観察して見やう。今日迄の文芸、劇等に飽きたのは一般大衆でなくて中流知識階級者である。其の中で最も轉換を要求して居るのは、作家其者である。プロレタリア文芸の發展を希望して居るのはプロレタリアではなくして作家である。作家が、自分の行き詰った所から一進展する方角をプロレタリア文学と言ふ形式に求めて居るものであつて、若し彼により良き文芸が與へられたら彼は即座にプロレタリア文芸を投げ棄てるであらう事は些かの疑ひをも入れない。

ここで石川達三は、「プロレタリア文芸の發展を希望して居るのはプロレタリアではなくして作家である。作家が、自分の行き詰った所から一進展する方角をプロレタリア文学と言ふ形式に求めて居る」にすぎず「若し彼により良き文芸が與へられたら彼は即座にプロレタリア文芸を投げ棄てるであらう」と言っている。

ここに取り上げた石川達三の四編の論文は、昭和三年三月から一一月にかけて書かれた。

作家石川達三の出発期にあたる。「大阪朝日新聞」の懸賞小説に当選したのが昭和二年。その当選金二〇〇円で早稲田大学に入学するも、学費が続かず一年で中退し、昭和三年五月「国民時論」社に入社した。

四編の論文の共通点はプロレタリア文学への関心の高さである。四編の論文とも、プロレタリア文学に対する石川達三側からする批判である。しかし、この批判は、既成作家・既成文壇の否定のうえに立っての批判である。

出発期の石川達三はプロレタリア文学に対し、批判的な姿勢を貫いていたが、大正一四年七月、「文芸戦線」誌上に発表された青野季吉の「『調べた』芸術」（「現実を意力的に、尋求的に『調べて』行く行き方、それから来た思想なりがいまの文壇を救ふ一つの大きな道ではないかと思ふ。反抗意識とか、反逆意識とかいふものも、その間から自然に生れて来たものが、いちばん根柢のある、落付いたものであつて、この方にしても単なる印象をつゞり合せながら生れて来たものは、自分がそれと気付く前に、他がその根のないことに気付いてしまふに違ひない。少し言ひ方はをかしいが、これを一口で言ふと『調べた』芸術が欲しいのである。『調べる』といふ中には、いろんな行き方がある。科学的な調査といふやうな方法も、もちろんその中にふくまれる。」）に対し、その創作手法の根柢をなすものとして、肯定した。石川達三が、いつ、青野季吉の「『調べた』芸術」を読んだかは、不明だが、昭和一六年七月の「自作について」（『新日本文学全集』第二〇巻、改造社）によれば、つぎのようであった。

一ころ、「調べた文学」と言ふ言葉である種の作品が軽蔑的に分類されたことがあつた。しかし私は反対である。逆説的な言ひ方をすれば、素材について十分に調べるだけの熱情があつてはじめて作品は書かれるのだ。勿論借りものの知識で作品を胡摩化すことは不純であるが、調べることによつて借りものでない確かな見解が生ずる、この点を重要に思はなければならぬ。要は作家の節操と芸術意識との問題である。私は今後も大いに調べて書きたいと思つてゐる。

引用文における「調べた文学」は青野季吉の「『調べた』芸術」のことである。

昭和一六年八月二五日付けの都新聞「大波小波」欄の「『調べた文学』賛成——岩倉政治君へ——」でも、次のようにいつている。

「調べた文学といふ肩書きは作品に取つて恥辱以外のものではない。その点では岩倉君の説に賛成する。しかし調べること自体が作品の恥ではない。要は調べ方であり作家の態度の問題である。

作者一個の美しき幻影を描くことによつて文学は満足するものではない。作者が自己の経験や思想やを過信して、机上に創作された人生の眞実などといふものに、文学は満足させられるものでもあるまい。社会に生起し、生起しつつある事実を私は畏れ

る。これらの事実は吾々の貧弱な頭脳を驚倒させるに足る真実を新しく次々と示してくれる。これらの真実から眼を瞑つて自分の小さな頭から絞り出した小さな真実などに信頼しては居られない。作家はどれほど調べても調べ過ぎるといふ事はない。勿論調べる事それ自身が文学ではない。創作活動はその後に始まる筈だ。戦争と平和の作者がその為に一図書館を成す程の資料を集めたといふ挿話に私は敬意を表する。

なまなかに中途半端な調べ方をして、その素材に対して作者がいゝ加減な批判や解剖を行ひ、したり顔を見せるからこそ調べた文学は低俗なるものになるので、真に調べた文学を書かうとならば作者は徹底的に虚心に、己を虚しくしてかゝるべきだ。それはリアリズムの大道であり且つ大ロマン文学への正道だと私は解する。自己に執着し自己の創作などを主張してゐるうちは大文学は生れ得べくもないと私は思ふ。

ここでも石川達三は、「作家はどれほど調べても調べ過ぎるといふ事はない。勿論調べる事それ自身が文学ではない」。真に調べた文学を書かうとならば作者は徹底的に虚心に、己を虚しくしてかゝるべきだ。それはリアリズムの大道であり且つ大ロマン文学への正道だと私は解する」と、言っている。

昭和四五年五月、文芸春秋から出版された『経験的小説論』でも、次のように言っている。

私は（調べた小説）に於て、あまりにも事実にとらわれてしまつて、単なる記録を書いているに過ぎないのではないか、という疑問に苦しんだが、私小説作家たちはその作品が、自分の創作というよりも、（自分の生活の単なる記録に過ぎないかも知れない……）という苦悩を感じたことは無かつたであらうか。

いわゆる社会派の小説を（調べた小説）と言うのならば、私小説的な作品群は（調べない小説）という言い方もできるかも知れない。

フローベルは「ボワリー夫人は私だ」という有名な言葉を吐いているが、この小説は完全な客観小説である。作品のなかに於ける作家の存在は、小説の形式によつてきまることではなくて、作家の性根がどれだけ深く作品の中に注ぎ込まれたか、ということによつて定まるものであるうと思われる。したがつて、調べた小説という評言は、そのままでは作品を軽蔑する意味にはなり得ない。私はむしろ、作家たるものは時間をかけ足を使い、調べられるだけ調べて作品を書くことが、彼の良心であらうと思う。但し、調べさえすればいいというものではない。その調べた資料をどれだけ自分のものに消化してしまうかという所に問題がある。

「私小説的な作品群」を「（調べない小説）」として一蹴したうえで、「社会派的小説

(調べた小説)」「こそが、作家の「良心」、つまり、「作家たるものは時間をかけ足を使い、調べられるだけ調べて作品を書く」、それが作家の「良心」なのだという。ただし、「調べさえすればいいというものではない。その調べた資料をどれだけ自分のものに消化してしまおうか」が問題なのだ、注意を喚起する。「『ボワリー夫人は私だ』」と言ったフローベルとして、石川達三は中央文壇(昭和六年六月、「新早稲田文学」の同人となる)へと発表の舞台を移していった。

*

石川達三の生長期には、高梁の菊楽家での原体験などヒューマニズムへの傾斜がみられた。賀川豊彦『死線を越えて』の影響もある。批判精神(疑う目)を有するはずの石川が「社会派」に成りきれなかったのは(「人民を領導する社会運動家として立たなかったのは)、そのような個々の人間への慈しみや憐れみの心情がまさっていたからではないかと考えられる。そこに宿命論(日本的ゾライズム)も覆いかぶさってきたものと理解される。杉山栄(早稲田出身)、早稲田大学、同人「新早稲田文学」に接触しながらも最後までプロレタリア文学と距離を置き、「社会派」になりえなかったのは、そのような事情があるものとみられる。その振れ幅を生きた興味深い作家として、石川達三は再評価できる。このような石川の歩みは、一見すると〈転向〉や〈変節〉にも見えるが、幼少期からヒューマニズムに傾斜していた面があったり、言論統制の厳しくなる以前からプロレタリア文学に懐疑的である面を見せていたりするので、そのような評価は当たらないだろう。石川の〈束縛〉〈解放〉論が内面化していったのは石川ひとりの問題ではなく、当時の文壇の一般的な風潮であったのかもしれないが、ゾラの影響を受けて閉塞感に苛まれブラジルへ渡航したり、大弾圧の時代である昭和八年、九年に筆を執れなかったりしたところに、石川の文筆にたいする真摯な姿勢も窺える。世情に迎合して軽々と〈変節〉できるような人物ではなかったということだろう。

以上のように、この学位論文でわたくしは、初期石川達三の作品を数多く発掘したことにより、未解明の部分明らかにしたり、「社会派」の評価を大きく変更したりするなど、石川文学の再構築を行った。

結 語

今、『石川達三研究』の筆を置くにあたり、つくづく思うことは、石川達三が父祐助、母うんの強い影響下で育ったということである。

石川達三は父祐助によって、「事ごとに先ず疑ってみる性質の人間」になった。石川達三はそれゆえ、キリスト教の洗礼を受けず、プロレタリア文学の潮流にも与しなかった。ひとり、近代人として、主体性を確立し、時代に対峙した。

「角館小町と言われたほどの美人」母うんは、石川達三にたくさんの「民話」を話してくれた。石川達三は、その「民話」を通して、「古い伝統をもった日本人の詩魂を、ゆたかにそなえ持った一人の野人」、「東北地方の深い雪に埋もれて、名もなく朽ち果てた詩人」と、深い根つこのところで、繋がった。石川達三は、まぎれもなく雪深い秋田の作家だったのだ。

秋田を離れた石川達三は、小学校、中学校のほとんどを高梁で過ごした。小京都高梁は、いろいろな面で石川達三を大きく成長させた。

その一つが、クリスチャンである継母せいの導きにより、キリスト教に接したことである。

その二は、石川達三が「社会の不正」に初めて直面したことである。それは最も「社会の不正」とは無縁であるはずの小学校であった。首席でありながら、級長にしてもらえなかった石川達三は、そうした「社会の不正」に五年間黙って耐えていた。「不正に対する憤り」が「正しい処置を要求する私の正義感を培ってくれた」と言っている。

その三は、高梁で醸造業のほか、質屋も経営していた菊楽家に一年間寄宿し、そこで質屋に通ってくる「貧民」を見たことである。なお、菊楽家の主人は「年の暮にはひそかに貧民に餅米を配ったりしている」。これは賀川豊彦の『死線を越えて』への感動に直結している。

その四は、石川達三がある日、「菊村の書棚」から賀川豊彦の『死線を越えて』を見つけ出し、大きな感動を覚えたことである。石川達三の『死線を越えて』への感動は、それまでの石川達三の諸々の経験の収斂であった。石川達三はここをひとつの区切りとして新しい世界へ飛躍する。

『死線を越えて』に感動した石川達三は、後年青野季吉の「『調べた』芸術」に接し、創作の手法を確立した。「疑う」ことから出発した石川達三にとって「『調べた』芸術」は同一のカテゴリであり、容易に受容できるプロレタリア文学理論であった。

社会派作家石川達三はこうして誕生し、「抵抗」の作家として、中央文壇で活躍することになったが、厳しい言論統制の中であからさまに「抵抗」できなくなったとき、石川の「抵抗」は内面化し、あたかも高梁・岡山時代の青年期に回帰するような側面を見せたのである。このように石川像を理解してこそ、その「振れ幅」が合理的なものとして諒解し

うるのである。

最後になったが、鹿児島国際大学短期大学部を停年退職するその三月に、この博士学位論文を提出できたことは喜びに堪えない。短期大学の前身である鹿児島短期大学教養学科時代からの先輩、同僚を含めて多くの方々にお世話になった。この場を借りて、篤く御礼申し上げたい。

資
料
編

資料1 『旅行記 屋島懷古』 (『ミカド』大四七号、大正二年七月二十五日、関西中学校丙申会)

資料2 『短歌』 (『ミカド』大四七号、大正二年七月二十五日、関西中学校丙申会)

資料3 「有終」(第一五号)

資料4 「有終」(第一六号)

資料5 「有終」(第一七号)

資料6 「有終」(第一九号)

資料7 「有終」(第二〇号)

資料8 『淋しかったイエスの死』(『山陽新報』昭和二年一月二十四日、三十一日)

資料9 『彼の出京』 (『山陽新報』昭和二年三月一日、二日、三日、六日、七日、一八日、二〇日、二四日、二五日の夕刊に都合九回連載)

資料10 『放たれたる犬』(『山陽新報』昭和三年二月二七日)

資料11 『小品 春日』(『山陽新報』昭和三年四月二〇日)

資料12 『昏瞑』 (『山陽新報』昭和四年四月一〇日、十一日、十二日、一六日、一七日、一八日、二三日、二五日、二六日、二八日、五月一日、二日、七日、八日、九日の夕刊に都合一六回連載)

資料 1

『旅行記 屋島懷古』

(「ミカド」第四七号、大正二年七月一五日、関西中学校丙申会)

△旅行記

屋島懷古

第五学年は組 石川達三

屋島山は眼前に峙てり。密林の間なる急坂を、杖に倚りて左折右曲りて攀づ。古雅なる籠ありて、たくましき山男二人、旅客を乗せて終日こゝを上下せるを見る。

流汗淋漓として滴り、落ちては路上の岩塊をうるほす。此日曇天、梢風あり、登山には最も好都合なりき。

醉客数人、坂を下るあり。漫々として相語り、相笑つて行く。山嶺、一古刹あり、屋島寺是也。石蹬を踏みて堂前に至り、瞑目して坐るに源平の昔を懷ふに、松柏は、さながらに昔を話らざるも、泉水は動て若武者の姿を写さんとせり。

一憩、直に北に向ひて平坦なる道を行く。思ふに此の道は当島の棟上を走れるなり。路は概ね林間に在り其の窮する所断涯千仞、直下に青藍の湾を見、左に塩田、右に緑の麦畑あり。又、遠く内海を点綴せる島嶼を望むに、風景絶佳、思はず三歎の声を発す。

その名も床しき談古嶺は此処なり。茶亭に坐して、左顧するに、内海の漣は追つて足下の嶮崖に碎け、茶亭より投ずるかはらはけは、片々として荒磯の岸辺に落つ。

嗚呼旌旗破れて幾星霜、老松は徒に惨風に咽び、古刹は徒に朽つ。緑苔の蒸せる奇巖は勇將の叱咤せし所溪谷の清流は若武者が槍を洗ひし所、旗さし物の塵きに夕日を蔽ひたりし其の盛は——その喊声は——今は唯波の音のみ遊子の心を悲しましむ。波うち際に馬さし入れし壇の浦、那須の与一が鏑矢の、響きに応じたる哄の声は今、唯、枯れすゝきの戦きの音にのみ残れり。白雲飛ぶ空を写せる浦の漣を眺むるに、懷古の涙自ら湧き、巖上に踞して冥想すれば、勇士の風丰眼前に髣髴たり。嗚呼英雄の魂魄今將た如何に、永に怨む凄風の当時の旗幟を翻さざるを。

道を逆に取りて山を下らんとする頃より、次第に雨気を催し、路半ばにして滴一滴、落ち来つて旅衣をぬらせり。

さらば屋島よ——吾が一日の杖引きし名所よ——昔の音を蔵せる老松よ高峰よ——又逢ふ日迄、そのまゝに、変る事なく吾を待て——

さらば屋島よ——一日の我を、源平の昔に、誘ひ行きし古戦場よ——吾がある日、汝を訪れて、熱き涙を流せし事を、雨につけ、風につけつゝ、思ひ起せ——

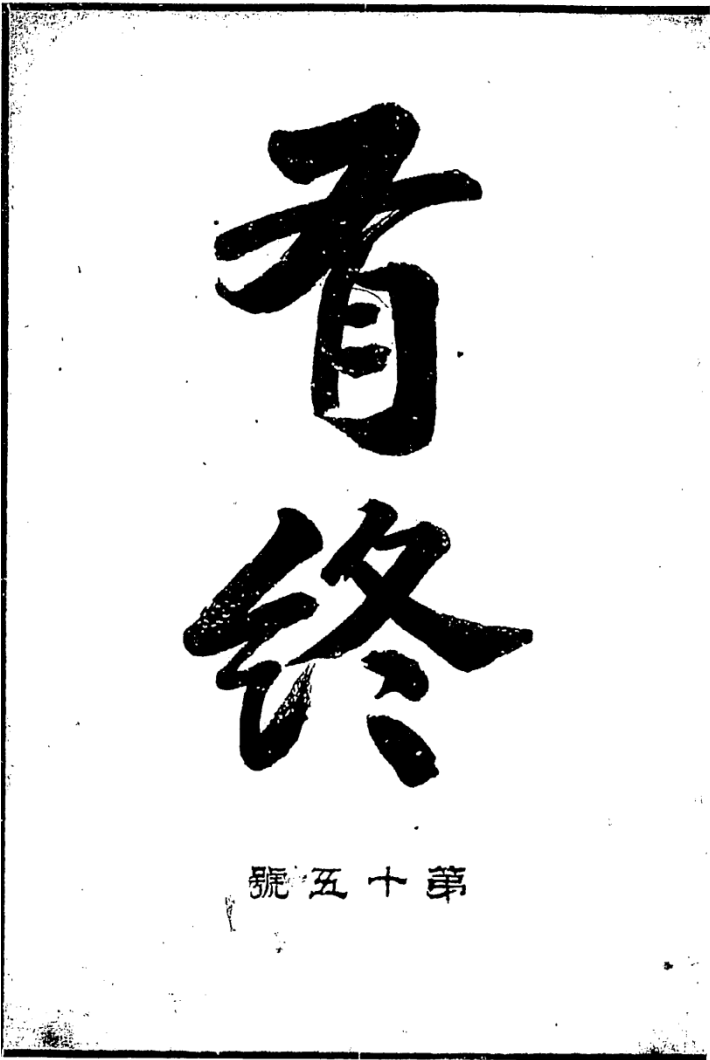
山路を下りて、顧望すれば、暗雲山頂を罩めて、暖風嘯然、然も一枝ゆるがず、一鳥啼かず、古戦場の雨、いとも静かに、吾が面を打ちぬ——。

△短歌

五、は 石川達三

清流に佇む夕うたかたの一つを乗せて走る冬の水
松並木に風吹き止みて此の夕下りの船の灯は赤きかも
赤き灯の水に映え行く下り舟笠着た月に影もうつらず
一片のしほりを抱く我が室に沈丁花咲きて夕に香る
文机の片付けをせば先づ年君と拾ひし銀杏ありき
ともし火のかげに憩へば灯は恋しきものと今日思ひけり
竹を迂る雪の音してしな竹は起き上るらし小窓の外に
運命よ温き母の懐にねむれぬ子なり我が運命は
何故にかくも吹きまく今日の風枯れぬ落葉の土地を蔽へる
黄色なる膿だくだくと流れ出づる外科医のメスの光る愉快さ
渚吹く風、松並木、波頭、波の小島に居まさん君は
荒れ狂ひ猛る雲間の裂け行きて紫の光雲をまつろう
外つ国の船の灯火岬をばめぐりて行きぬ暴風の夜
大川にそひて流るゝ流れ星、流れはつきぬ水の色かも
星合の空貫きて流れ星、神秘の夜の恐怖の光

付 「関中卒業生」、「関中縁故者」、「関中に関心を有する諸君」と「学校」を「結び」つける「強靱なるベルト」としての「ミカド評論」誌上に、『新たな風景』（「われらの若き作家集（創作三篇掲載いろは順）」、昭和三年五月、ミカド評論社）がある。



有終第十五號目次

第一部		第二部		第三部		第四部	
英文 (翻譯)	特別會員 石川祐助	特別會園 栗城 三六	秋季談話會記事	會友關 盛雪 四	情調序調	特別會員 稻本陽州 壹	談話部委員 二〇〇
幾何學問題の分類法に就て	同 山田勝夫	第五學年 平松賢美 四	秋季武術會記事	和紀遊詩	同 神谷鶴巢 壹	學術部委員 二〇三	
男兒の意氣地	同 友高田大治	同 下村秀男 二〇	數學競爭試驗受賞者	漢詩	同 高松忠享 英	同 一〇五	
生存競争の實例	同 平松賢美 二〇	同 高松忠享 二〇	第十四回卒業生	デー川の水車番(翻譯)	同 內田英男 五	同 一〇八	
運動並に談話會成就の希望	同 高松忠享 二〇	同 高木益郎 三	明治四十三年度有終會收支決算報告	セントヘレナの殘月	同 同 同	同 一〇七	
牛岳梁川に就て	同 高木益郎 三	同 葛西熊次郎 四	同 四十四年度有終會收支決算報告	吉野高野旅日記	同 同 同	同 一〇六	
		同 難波琢實 四		臺灣嘉義廳大觀誌	同 同 同		
		同 葛西熊次郎 四		卒業生通信	同 同 同		
		同 西尾令治 四			同 同 同		
		同 中山諭一 五			同 同 同		
		同 東義雄 五			同 同 同		
		同 西雅雄 五			同 同 同		
		同 內田英雄 五			同 同 同		
		第五學年 同 五			同 同 同		
		非常識論			同 同 同		
		鑿劍與庭球軌優論			同 同 同		
		滑稽植物問答			同 同 同		
		濱寺の一夜			同 同 同		
		立志			同 同 同		
		シアンヌダルクの幼時			同 同 同		
		吾が亡き母			同 同 同		
		自ら信せよ			同 同 同		
		青史餘篇			同 同 同		
		思出のまゝ			同 同 同		



An Autumn Day.

Y. ISHIKAWA.

Through the drizzly night, in a room of a shabby inn, I dozed all the time, feeling sad and lonely and being unable to go to sleep. Day dawned, however, fine and pleasant. White flaky clouds were floating away towards the mountains.

When I had half done with a breakfast, not at all pleasing to the palate, a maid brought me the bill and told me that the first down train would soon start. After dispatching the meal, and after getting my things ready in a great hurry, I took a *jiniwaka* to the station, which I reached about ten minutes before time. I bought a ticket, passed out to the platform, crossed over the bridge, and seated myself in a car with a sense of relief.

There were only four or five persons in the car, each sitting in a corner with his lips closed as if petrified. A student, for I took him to be one, about 24 years old, sat nearest me. I thought I had seen him somewhere; and turning it in my mind, I recalled that he was the youth whom I met with in that inn the night before. He looked at me, too, and gave me a faint smile. But each looked the other way without greeting.

As is the case with a solitary traveller, I wanted company very much, and intended to talk to him the next time we should come face to face. Judging from his gloomy features, he was not inclined to speak. And he

1

11

seemed somewhat stubborn. So we kept very still, each anxious to accost the other at the first opportunity.

Meanwhile, there bustled in a few more. The train began to move on. Having nothing to do I was looking out of the window, when I perceived that some one had moved to the seat next me. It was the student! "Excuse me," said he, "you stopped at the K—Inn, didn't you?" "Yes," I replied; "and I know I met you there; but thinking it impolite to speak to you abruptly, I hesitated to do so."

He answered me only with a smile, and for a few minutes we were both silent. "You are alone and I am alone," he resumed; "it is a cheerless thing to have no company on the journey." "True! I feel unpleasant," I rejoined; "by the way, where are you going?" "To Ishi-no-maki," answered he in an undertone, which was expressive of some deep sadness and agony of heart.

"Is Ishi-no-maki your native town?" I asked. "Yes, and I am going home to my parents." "Have you, then, been forced by illness to go home?" His answer was simply "No." I asked if his parent was ill, and he replied also in the negative. As he seemed unwilling to be interrogated any further, I ceased to be inquisitive and held my tongue.

After a while he said in his turn; "I think you are a Tokyonian. Where are you going?" I frankly told him that I was going to see a friend of mine at Sendai and next to visit Matsushima. He nodded his head several times, and said; "Yours is a very pleasant trip! I myself am a native of Ishi-no-maki, as I have told you,—the nearest place to Matsushima,—and it is about ten years since I was there with my father. It was at this time of the year, and I cherish the memory of it always in my mind."

"It seems to me," I remarked, "that a native does not appreciate a place very near his own town." "That is probably the case with everybody. But I visited Kinkwa-san two or three times. It is quite a remarkable hill. If you have time in your trip, I hope you will go round there." And having described its scenery briefly, he

added, "Gentlemen from the metropolis would think it a fairy land. There are few who do not know Matsushima, because its fame has been world-wide from of old : but having few visitors, Kinkwa-san has not yet been introduced to the public. Though not equal to the former, I am sure it is worth visiting."

I was enchanted by his story, and made up my mind to visit the hill if I should have time to spare. The story was ended, silence ensued for some time, and the train passed two stations without stopping. When it drew near the Hara Station, he looked at me and said, "Please tell me, if I am not rude, what business are you engaged in." "Nothing in particular," I replied; "I waste time idly all the year round." "Is that possible?" said he with a sneer; "I know it is rude of me to ask your station in life, but would you be so good as to tell me if you have no objection? Meeting with each other on our way, we have had a friendly talk;— we must have had some relation in our previous existence." "You are right there," I responded, "but, to speak the plain truth, I am a man of no particular business. I sometimes try to draw pictures and write poems merely as a diversion. I am still a hanger-on of my parents. I have not been in good health of late, so I thought a journey would do me good." "So you are travelling from place to place for recreation, aren't you? How enviable your lot is! And drawing pictures and writing poems! All very good, indeed!"

I got vexed, thinking that this remark contained something of irony. "Well," added he, "such a trip as yours is full of interest, isn't it? It is not within my reach, however much I may long for it." "It is your turn now to confess," I demanded unceremoniously. "My life is not so interesting as yours," he pleaded; "I should rather not tell about it." "You are selfish," I retorted, "to keep it a secret, when you have heard all my story."

At this he looked puzzled and smiled slightly, saying, "That is very true, but mine is not of any account." "Then I will not urge you," said I, rather passionately; "it is not modest to be impudent, you know," and I took a half-read book out of my portfolio, and was poring over it. But I was too much interested in my new

¶

§

acquaintance, and I now and then turned a stealthy look upon him, who, with his arms folded and his eyes cast downward, wore the expression of indescribable sadness.

Something may have been distressing him; and to divert his mind from it, he may have talked to me. Why was he going home, when his parent was not ill and much less was he? I sympathized with him in his sad condition, of which he forbore to tell me. My vexations were all gone. "Have you been long in Tokyo?" I asked. He kept muttering something which I could not make out at all.

"Well," resumed I, "I shall not bother you any more." "Why, sir?" said he restlessly; "you are angry with me, aren't you?" "No, not I," replied I; "you are not inclined to talk. As I perceive, if I am right, your journeying home is not a pleasant one, I am sorry to extort from you a sad story. But, if you will, I shall willingly listen to you."

Thereupon he nodded with a look of joy. "Ah, you know me well," said he; "I cannot bear to tell my sad story. If there is any who sympathizes with me, I may as well relate it to him out of my bleeding heart. Sympathy without hearing me is all the more thankful." And he laughed for the first time, as if the chill of his heart had been gradually melting away. "As they say," added he, "man is a very weak thing; he is overpowered by a trifling misfortune which he ought to have endured with spirit. Some others judge him to be in a sad lot from his melancholy features." "And we may say," said I, "that he is the most honest sort of man, who has no false pride." "He has appeared before the world with his face unmasked, hasn't he? Life is indeed a nuisance; we know not what will become of us to-morrow, and we are drifting into chaos and unknown peril." "The luckiest of us can ride on the high waves and secure the 'Island of Success.'"

"O yes. I have had this thought come to me while looking at the grasses; small and unknown as they are, they bloom once in a year, in spring or autumn. But how about men? Will the time come when

them bears flowers in life, however small they may be?"

"I have been thinking of that, too," said I, much excited at his words. "But God may bless us more than the plants. We must, therefore, do our best, hoping to bear flowers some time in our life." "That is the way we may live hopeful and happy." And he smiled a gloomy smile.

Half past twelve found us at Iwanuma. As I alighted from the car, he put his head out of a window and said, "Please take care of your health." "Thank you, and I shall see you again some other day," said I; "call on me when you happen to come up to Tokyo." Looking eagerly at the card I handed him, he lowered his head and said not a word.

I can never forget the scene and the emotion of that moment.

The Wild Geese flying across the Sky.

K. YAMADA.

A New Year was come again, so Ichiman and Hakowo became nine and seven years old respectively. One evening, Hakawo asked his mother suddenly, playing on her lap:

"Where is my father, mamma—nay, where is his spirit? I wish to go and worship it. Please take me there at once." By the innocent words the mother was reminded of the past sorrow which had long been out of her mind, and wept sadly as if her heart were broken.

"Mr. Soga is your father, my boy....." She might have prevailed upon her son to believe her, but her

卍

大正二年二月十九日印刷
大正二年二月二十五日發行

(非賣品)

編輯兼發行者

楢崎眞一郎

岡山縣上房郡高梁町大字荒神町二十四番地

印刷者 江田長太郎

岡山縣上房郡高梁町大字中間町六十二番地

岡山縣立高梁中學校

發行所 有終會事務所

岡山縣上房郡高梁町大字下町二十三番地

印刷所 莊活版所

有終第十六號目次

仙波師團長講話(乃木將軍に就て)	◎第一部	友	下村秀男	二六	北米より	會	藤井澄人	二
特待生論	◎第二部	友	難波慎三郎	二七	一高はどんな處だらう?	同	岡崎應介	三
五年間の中學	會	友	進 暢	二八	早稻田通信	會	早稻田有終俱樂部	吉
五ヶ年間の中學生活	同	友	田尾貫一	二九	支那大陸	友	森澤器五郎	四
冒險思想の養成を論ず	第五學年	友	藤井準一郎	三〇	卒業生通信	會	森澤器五郎	五
青年	同	友	東 義 雄	三一	◎第四部	同	同	六
秋風の賦	同	友	高橋勇之亮	三二	秋季大運動會餘興「臥牛新聞」	同	同	七
僕のものき旅行	同	友	西 雅 雄	三三	對矢中庭球試合	同	運動部委員	八
小鳥の足跡	第四學年	友	高木益郎	三四	秋季武術會記事	同	談話部委員	九
片々録	同	友	笹野 正 一	三五	談話部報	同	談話部委員	一〇
仙波中將の講話を聽きて	第三學年	友	池田 正 夫	三六	本年度特待生	同	同	一一
仙波師團長の講話を聽きて	同	友	黒川鶴太郎	三七	數學競争試驗受賞者	同	同	一二
山中鹿之助	同	友	平松 運 平	三八	有終會役員	同	同	一三
秋と修養	同	友	神谷 鶴 巢	三九	明治四十五、大正元年度有終會收支決算報告	同	同	一四
方谷橋	同	友	西 三 三	四〇	寄贈雜誌	同	同	一五
詩	特別會員	友	西 三 三	四一	卒業生名簿	同	同	一六
◎第三部	編輯室	友	西 三 三	四二	◎英文欄	同	同	一七
特別會員	西 三 三	友	西 三 三	四三	英文	同	同	一八
編輯室	西 三 三	友	西 三 三	四四	特別會員	同	同	一九
西 三 三	西 三 三	友	西 三 三	四五	第五學年	同	同	二〇
西 三 三	西 三 三	友	西 三 三	四六	常見規夫	同	同	二一
西 三 三	西 三 三	友	西 三 三	四七	山本集	同	同	二二

our national flowers. When he held the boughs in his hand, he was
rely filled with an unbounded joy at the thought that he could touch the
perial flowers with his own hand. And we ought to thank him heartily
r entertaining such a joyful feeling. As it was, those proud and
mpudent fellows depreciated and blasphemed the Imperial and national
ower, and hurt our ally's pure, sincere sympathy for our natinality.
oreover, they treated the old man in a very vile manner and forced him
o reduce the price by half. How pitiable it was to see the poor wretch
ho, in those cool evenings of the expiring autumn, staggering under the
ad of flowers with his bare legs and feet, was going round the streets
ltering hoarse cries to earn some scanty daily livelihood; and who,
linking the gentleman to be a noble guest of our allied nation, sold the
owers at a specially low price! How disgusting those would-be smart
udents looked, as they strutted away with their heads raised trium-
phantly as if proud of their profound attainments in the language of our
reat ally!

The Boyhood of Mori Motonari.

N. Minami.

Mori Motonari was colled Matsuhisa in his boyhood. Unlike other
boys, he was very clever and manly. The following stories which
am going to tell you show that he was above the common run from
childhood.

One day his nurse, with the little lord in her arms, was crossing
the brook. Unfortunately, about half way in a stream, the nurse took a false
step, and slipped him down into the water by mistake. The poor nurse
was very much frightened, and feared that she might be punished by her
lord for having injured her little charge.

有終第十七號目次

接觸より結合へ	▲第一部	第五學年	西 雅 雄	一	卒業生通信	▲第四部	運動部委員	九
修養論	同	高木益郎	三	庭球部報	▲英文欄	同	談話部委員	九
教 句	▲第二部	特別會員	西原柳雨	三	▲英文欄	同	談話部委員	九
僕の登つた富士山	同	會 友	難波琢實	三	特別會員	同	談話部委員	九
偶感漫語	同	第五學年	丸山左京	三	第五學年	同	談話部委員	九
活動論	同	同	森崎詔治	三	特別會員	同	談話部委員	九
秋の小品	同	同	永井 浩	三	特別會員	同	談話部委員	九
豈奮起せざるべけんや	同	第四學年	藤野良平	三	特別會員	同	談話部委員	九
岡本氏の講演を聴きて	同	同	黒川鶴太郎	三	特別會員	同	談話部委員	九
岡本氏の演説を耳にして	同	同	笹 埜 一 正	三	特別會員	同	談話部委員	九
近 什	同	同	料 治 武 雄	三	特別會員	同	談話部委員	九
方谷橋通方谷林	同	同	福 田 梁 水	三	特別會員	同	談話部委員	九
▲第三部	同	同	編 輯 室	三	特別會員	同	談話部委員	九
卒業生諸君に御相談	同	同	森 壽 五 郎	三	特別會員	同	談話部委員	九
三高より	同	同	進 暢	三	特別會員	同	談話部委員	九
東亞同文書院志望の方々	同	同	同 幹 事	三	特別會員	同	談話部委員	九
早稻田有終俱樂部通信	同	同	同 幹 事	三	特別會員	同	談話部委員	九

ENGLISH COLUMN.

CONTENTS:—

- 1. A Reminiscence. Y. Ishikawa.
- 2. Books. S. Murashima.
- 3. Anecdotes of Heroes. M. Takagi.
- 4. Sunday. K. Nagai.

A REMINISCENCE.

Y. Ishikawa.
Composed in 1905.

I Remember that, when a boy of 13 or 14, I visited the hot springs at Shiobara one summer with my uncle and aunt. Situated at some distance from the metropolis, Shiobara is a place of fine landscapes and refreshing breezes.

One day I went alone afishing to a mountain stream called the Hoki River. I had selected a spot in the upper course of the stream frequented by few, where a large rock projected over the clear deap water. Sitting down in a bollow behind the rock, I threw the line into the stream. There, in the bosom of the crystaline water, crowds of fish, whose name I did not know, would now come to the bait and then disperse in every direction. My basket was as empty as at first, but I was wholly absorbed by those fish which seemed full of fun, until it grew late in the afternoon, and then along the path on the bank a lady and a gentleman came walking towards me at a slow pace. The gentleman led the way. He was a corpulent man with mustaches, about forty years old, wore a *yukata* showing the mark of

down to the edge of the bank, when all at once there arose an exclamation, "O! O! O! something hurts me!" My rod, at this time, was bended and shook violently, as though a big whale had had its bite. An enormous fish called the "Gentleman with mustaches" had doubtless been at the hook! Uttering all the while wild shrieks not quite becoming his dignity, he tried very hard to stand on the bottom; but as the water at that spot was too deep, he sank down and sent up bubbles to the surface.

He struggled up to the rock utterly confused, pulled the hook from his arm, and with his face as red as fire, though he had come out of cool water, roared at me; "You impudent, mischievous, villainous rascal!" He snatched my precious rod, broke it in two, and threw it away mercilessly. Tears stood in my eye, so quite dumb-founded was I at the violence. A sweet and fascinating voice was heard behind me; "You are unjust, and not he!" With a lovely smile on her lips, and greeting me with a nod, the lady eyed the slight wound on the left arm of the gentleman, and said contemptuously; "O, this is a great big fish, isn't this? You heedlessly swam up to the place where he was so intent on fishing. You have, therefore, been punished by heaven. I would never mind such a little cut as that."

Accepting the reproach with good grace, he said; "Ah, served me right, did it? Ha! ha! ha!" and his anger was gone at once. Then he hurried away from me. He did so, I imagined, not only because he was softened by the beauty's words, but because he perceived that I was not a country rustic whom he had taken me for and recalled

the Fusenro Hotel, and girded a crape belt loosely round his copious loins. He was a high official or a rich merchant in Tokyo, in which position he took great pride. A fair blooming beauty, nearly twenty yeas of age, followed after him. When they drew near my fishing-place, the mustached gentleman paused and patted the fair lady on the shoulder, saying; "Oh, very fine scenery, isn't it? The walk has made me warm. What do you say to our going in swimming? It may be more refreshing than bathing in a hot spring."

The lady shook her head with a faint smile. "Don't want to! That can't be helped. See me swim, then. I'm a pretty good swimmer, you know." No sooner had he said this, than he took off his clothes and plunged into the water with a big splash. The watery mirror was broken to pieces, and sprays and bubbles were seen on the surface.

The fish were all scared away. Thus disturbed, I was moved to anger; but I could not rebuke him, having no right to fish there. Being at a loss what to do, I kept very still with the rod in my hand and the line in the water as a moment before. Apparently he did not notice me in my elevated seat, and swam about as if nobody were near him, now and then calling out; "Plung in, will you? It's very refreshing. Don't be afraid, for I'm with you. I'll show you how to swim." "No, thank you; I need not learn," the lady replied each time she was invited. As she had thus answered for the third or fourth time, she lifted her eyes and noticed me sitting behind the rock.

She looked astonished, and as if going to dissuade the swimmer from laying waste my fishing-place, the graceful figure was gliding

the rock, I was abstractedly watching the fish come and go, her smiling face appeared vividly before me, her sweet lips moving as if going to speak something to me. One is not likely to feel any amorous passion at my age, so I was struck, I think, by some other charming power than that. This meditation led to the thought of my departed sister whom I loved and still love dearly. "Ah, I would that she were living!" thought I; "what a pleasure the world would be then! But it is no use longing for a departed one. Were such a beauty as that lady to be my new sister, what a joy it would be to me!" The more I meditated about it, the more confused became the feelings in my heart. I felt the scenery itself was a source of sadness.

Suddenly a voice was heard from behind; "Young Master!" What a charming voice it was! A warm and soft hand touched me lightly on the shoulder. I turned around in surprise, and lo! there stood that beautiful lady I had been thinking about till the very moment. I could hardly trust my own eyes. "O, my sister!" said I, taking hold of her hand without any consideration; but soon I blushed and let go my hold, for I thought it impolite to ladies. Today she wore black flowing hair and was attired in a *yukata* of gay figures and colours, from the collar of which her snow-white dainty neck peeped out and struck me with admiration. She smiled significantly, and clasped me in her delicate arms.

"Young Master," said she, "are you alone again? Have you had many bites?" I did not know why I was called "Young Master," but I knew she was addressing me more familiarly than at the first time when I was called "my boy." I felt both bashful and joyful. "How

at last that it was not dignified to stand there naked and be growling at a boy. Turning his back upon me he was wiping his big body.

The lady was still by my side, casting a pitiful look on me, and said softly; "Are you angry, my boy? This is indeed a rude sort of treatment. Even I should be angry. If I had known that you were fishing there, I would have dissuaded him from disturbing you. Will you please pardon him for my sake?" I was far from being angry. I felt at once joyful and surprised, for it was the first time in my life that I was ever accosted by a beautiful woman. I nodded silently, showing her that I was not angry any more. "Are you from Tokyo, too?" She resumed in a friendly tone, "How fine the view is from this place! Do you come here every day?" "Almost every day." I replied with difficulty. "Ah, do you? I am very fond of fishing, too." By this time the gentleman had already put on his dress, and called out, "Ko-kin! I say, Miss Ko-kin! It's getting awful cold, so let's go home."

* * * *

The next day I went again to that same place, and threw the line into the water. Fish crowded around the bait as on the bay before, and the landscape was as fine as ever; but I could not, I knew not why, be so pleasant as on the previous day. I fancied I heard that beautiful lady's sweet voice borne on the breeze. I gazed at the spot where she had been standing, and felt the pressure of an endearing feeling. With a heavy head and heart I went back to my hotel.

I went to the place on a third day, but I found it more pleasant than fish to recollect the lady's tender words. As, sitting alone on

and the fish at the bottom seemed to welcome the beauty. The lady was amusing herself with the clear water for some time, and then coming after me, said; "Don't get away from me, for you are my tutor. Please take my hand in yours and teach me."

With her slender hand stretched out, she clung to mine, and swam about now to the right and then to the left, her black hair scattered and floated on the water, and it seemed as if she were a charming mermaid frolicing in the lake. My soul had fled out of me, and I was left at her disposal. When she had led me to where the water reached her breast, she suddenly tore from me and was going to dive into the blue depths. Greatly astounded, I exclaimed, "O, good gracious!" and tried to catch her by the hand, when she clasped me in her arm and swam quite at ease to the shallow. Her lovely white breast appeared above the water, and she was combing back her dripping hairs, saying with a smile, "How joyful it has been!"

When the sun was low in the west I started home together with the lady. The mountain air was very calm, and the murmur of the stream seemed to envy our friendliness. "Young Master," said she, "will you please call me 'sister' again?" "My sister!" "Yes, dear." "My dear sister!" "Well, darling." The chirps of cicadas were heard from somewhere, as a warning that the sun was going to set. As if struck with emotion, she clasped my hand very tightly in hers. O, what a soft hand it was! and as smooth as warm silk! I felt my whole body tremble. "You—" said I boldly, "you are my sister forever!" "Ah! How I wish I were!" "Why not?" I demanded; "My departed sister was as kind as you are. I am extremely glad in the thought

—7—

does the mustached gentleman do?" I asked, rather diffidently. "A telegram came from Tokyo, and he left in a hurry just for today early in the morning. I have been left alone and there is no one to disturb me. So I am come to play with you. Do you hate to play with me, woman as I am?" Not a bit of it. But I kept in silence, not daring to answer her. She put her arm round my neck, and with the other hand she took up my rod lying on the rock. "Just lend me your rod," said she; "I'll try to fish." And she threw the line into the water. Fish came and went as usual, but it was hard work for her to wait for a bite. "Here the fish are so cunning," she cried impatiently; "I am quite tired of fishing. Do you fish here every day? Have you ever gone in here swimming?" "I swim sometimes." "Do you? How pleasant it would be to swim in such clear water! Will you show me how to swim?" "You ladies to dare to swim!" I ejaculated, rounding my eyes in surprise; "But didn't you say the other day that you did not like swimming?" "O, you did hear me say that? O, ho! Ho, ho! Yes, I don't like to have a man with mustaches swim with me; but if you were to swim with me, I would even willingly drown."

I was entirely bewildered. In the meantime, she began to unwind her rustling sash and to put off her gay dress. And behold! there was a dainty white mass of pure silvery snow in human form! "Come, let us go in together," said she, drawing very close to me. I undressed myself as if in a dream, — I was neither conscious that I did it for myself nor she helped me to do it. We first looked at each other, and then went into the water. Ripples were widening in a circle farther and farther, the shadows of the two were shaking and scattering,

—6—

not to me. Queer-shaped and beautiful rocks, the Nodate Rock and the Goblin Rock, were very pleasing to the eye — but not to me. Unconsciously I was standing on the Kansei Bridge and looking down at the stream swift as an arrow. There came suddenly from behind two jinrikisha hurrying apparently to the station. They came up to the bridge, the former containing the brown-faced mustached gentleman smoking a cigar with ostentation, and the latter my dear beautiful lady who had her hair dressed fashionably. She gave me a look from under her dome-like silk parasol. It was far more eloquent than a thousand words, — that look which expressed the deepest emotion. I looked after her absent-mindedly. After the vehicles had advanced nearly half a cho, she turned to cast a hasty look once more at me and to bid me hearty farewell. I could dimly discern her fair countenance. At last they were covered by the mist and faded away towards the foot of the mountain.

O, My sister! My sister! I wondered whether I could again see her or not in the present life, — that beautiful lady whom I wished so ardently to be my real sister. Stars had begun to wink and twinkle in the evening sky, and there were painful tears standing in my eyes.

Books.

S. Murashima.

Perhaps no other things have so many different faces, in all colors, stamping their own names upon them yet do not express their precious thoughts unless we open their hearts, as books.

They are true, steadfast friends. They will never forsake us in poverty

—9—

that I've got another sister." "How very happy should I be, too," she rejoined, "to have such a kind and pretty brother as you. But you are a young gentleman of blood, while I —" "And what are you?" he interrupted. "What do you think I am?" "You are the missis of that gentleman with mustaches, aren't you?" "Ho, ho! Do I seem so?" said she with a gloomy smile; "Let us stop having such a talk. We've had such a good time, today, that I can never forget."

We were by this time at the entrance of the street, where a bridge crosses over the mountain stream. Far beyond, the lamp-lights in the third story rooms of Fusenro Hotel were seen flickering through the foliage of the woods. She let go my hand from hers, and said; "Young Master, though our ages are different from each other, still you are a male and I a female. So we must now separate, for fear we should be suspiciously rumoured by others. Ho, ho, ho!"

* * * *

That night I dreamed of her several times. I heard her call "Young Master! Young Master!" and I looked around with a visionary eye, but saw nobody in the room. The next day I went to my haunt earlier than usual, but I sought her all day in vain. I expected to see her the following day, and sat patiently on the rock all the day, but all to no effect. With a depressed heart I plodded along to my hotel. I passed the Fusenro on my way, but I could not even catch a glimpse of the innermost room where she was living. It occurred to me that if I was wandering on the street I might see her by chance. So my soulless body moved toward Fukuwata where visitors used to stroll. The soft breeze of the summer afternoon was very refreshing, — but

—8—

ENGLISH COLUMN.

CONTENTS,—

- 1, Odds and Ends. Y. Ishikawa.
2, On Learning's Sea. S. Murashima.
3, A Leaf from My Diary. H. Yokota, 5th yr.
T. Takemoto, ditto.
K. Yanagi, ditto.
S. Tokunaga, ditto.
T. Shoho, ditto.
T. Kisoda, ditto.
H. Mikami, ditto.

Odds and Ends.

Y. Ishikawa.

I. Tie Me Up, Too.

A man went to a sake-store, and saw a drunken fellow tied up to the tree just in front of the store. Thinking it strange, he asked the shop-keeper why he had done this. The latter replied that it was because the fellow had spoken ill of his sake. Then the new-comer said, "Is that the reason? What an impudent fellow! But will you let me have a taste of your sake, for I am something of a judge of liquors." The keeper handed him at once a cupful of the sake. No sooner had he tasted of it than he made a wry face, spit it out, threw the cup down, and exclaimed, "Tie me up, too."

有終第十九號目次
支那研究 第一節
支那人と其の教訓
支那の文化
支那の宗教
支那の藝術
支那の科學
支那の政治
支那の經濟
支那の社會
支那の歴史
支那の地理
支那の自然
支那の人文
支那の風俗
支那の習慣
支那の法律
支那の文學
支那の藝術
支那の科學
支那の政治
支那の經濟
支那の社會
支那の歴史
支那の地理
支那の自然
支那の人文
支那の風俗
支那の習慣
支那の法律
支那の文學

IV. Returning a Call.

Once two neighbors, on a New Year's eve, had a difference between them. Early next morning, one of them went to the other's house and wrote the word "Scoundrel" on the door. On seeing this, the latter called at once on the former, whom he found to be absent. The servant said that if he had anything to say to his master he might say it to him. "Nothing particular," replied the neighbor, "this morning your master made a New Year's call and left his name at my door, so I have come only to return his kind call."

V. A Good Sportsman.

Two sportsmen, Suzuki and Tanaka, who were given not a little to boasting of their skill, went one day on a shooting excursion. Shortly after separating in the woods, Suzuki heard Tanaka's gun go off. So he went to see what his friend had shot.

"Halloo, Tanaka! what have you shot?" shouted the other who found his friend loading his gun.

"It's none of your business. Go along over the hill."

Being a little surprised at this surly reply, Suzuki looked around and perceived a hen running toward a certain farm-house.

"I say, Tanaka, did you shoot at that hen?"

"Never mind whether I did or not."

"What on earth made you shoot at the hen?"

"Why I took it for a pheasant."

"Well, did you hit it?"

"No, I missed it."

"How did you miss it?"

— 3 —

II. A Coward.

A certain poor man, finding himself in utterly hopeless circumstances, made up his mind to commit suicide rather than starve to death. But having neither a dagger nor a pistol, he thought of drowning himself, and went to a bridge which spanned a rapid stream. On looking at the water with the view of selecting the spot in which to plunge, he found that jagged rocks stood on every side. "I won't drown myself," said he, after thinking for a while, "for there are so many rocks in the stream. It would be painful if I were dashed against one of them."

III. A Second Shiba Onkō.

Once there was a man who owned a costly Korean jar. He had bought it for a hundred *ryo*. It was his habit to show it proudly to every one who called on him. One day some friends of his having called, he brought out the jar as usual. It contained some cakes, of which he begged his guests to help themselves. One of the guests put his hand into the costly jar, but, to his great surprise, he found he was unable to get it out. Several times he tried to get out his hand, but all to no purpose. Then another guest said, "It is related how Shiba Onko, when a child, saved his friend's life by breaking a big jar full of water, into which the poor boy had fallen. Let us now do the same with this jar." And without another word he seized a pair of tongs lying at hand and broke it to pieces at a blow. Now the man was found grasping a handful of cakes. No wonder that he had been unable to get out his hand!

— 2 —

"Well, I wasn't quite sure it wasn't a hen."

"You are a pretty sportsman to shoot at a hen, taking it for a pheasant, and to miss it into the bargain."

"I shot at it just so as to hit it if it was a pheasant, and to miss it if it was a hen."

學の海

學の海に漕ぎ出でて、
われらは中學一年生。
うれし、うれし、何となく、
ゆくてはいつこ。
いつこかゆくて。
水天一碧、彼岸は遠し。
いでやためさん、腕の力。
日本男兒の氣性にて、
なに到られぬ事がある。
風はいかにつよくとも、
波はいかにあらくとも。

On Learning's Sea.

With oars just dipped in Learning's Sea,
Boys of the First Year Class are we:
Happy and free; happy and free
Where is our goal? Our goal is where?
Where sea and sky meet in the air;
The shore we seek is far away;
That will but test our strength, we say.

- greater than it is. — Turk.
25. 日光を見ぬ中結構と言ふな See Naples and die. — Ital.
26. 憎まれ子世に憚る A bad thing never dies.
27. 骨折損の草臥儲け Much ado about nothing.
28. 蛇に噛まれて朽繩に怖づ A burnt child dreads the fire.
羹に懲りて膾を吹く A scalded cat dreads cold water.
— Ital.
29. 遠き親類より近い他人 A near neighbour is better than a distant cousin. — Ital.
30. 鳥なき里の蝙蝠 In the kingdom of the blind, the one-eyed man is king.
31. 燈臺下暗し At the foot of the candle, it is dark.
— Pers.
32. 十で神童十五で才子二十過ぎれば只の人 A man at five may be a fool at fifteen.
33. 毒を喰はひ血まで All or nothing.
34. 問ふは一代の恥。問はぬは未代の恥 He who is afraid of asking is ashamed of learning. — Dan.
35. 所變れば品變る Every country has its cus-tom.—Sp.
36. 治に居て亂を忘れず In prosperity think of adversity. — Dut.
37. 長者の萬燈より貧家の一燈 He who gives little gives from his heart; he who gives much gives from his wealth. — Turk.
38. 律義者の子澤山 Children are poor men's riches,
39. 盗人の晝寝も嘗がある A fox sleeps, but counts hens in his dreams. — Rus.
40. 岡目八目 Lookers-on see more than players.
41. 女の髪の毛には大象をも繫 Beauty draws more than oxen.
8. 一將功成萬骨枯 evil its good.
The many must labour for the one.
— Byron!
9. 命と細引は長い程よい Life is sweet.
10. 因果は廻る車の輪 Nothing is certain in this world; the wheel of fortune is forever in motion. — Petrarch.
11. 待隴望蜀 Appetite comes (grows) with eating.
— Fr.
12. 六十の手習 It is never too late to learn.
13. 論より證據 A good example is the best sermon.
14. 論語讀みの論語知らず A mere scholar, a mere ass.
15. 馬鹿につける藥なし He who is born a fool is never cured.
16. 馬鹿と鉄は使ひやう Praise a fool, and you may make him useful. — Dan.
17. 馬鹿な子程可愛い The greater the dunce, the dearer he is to his parents.
18. 花一時大盛り All that's fair must fade. — Ital.
19. 花より團子 A single fact is worth a ship-load of ornaments.
20. 腹の皮が張れば目の皮が弛む When the belly is full, the bones would be at rest.
21. 腹も身のうち He that eats till he is sick fast till he is well.
22. 播州へ行つて淨瑠璃語るな Never limp before the lame. — Fr.
23. 二兎を逐ふ者は一兎を得ず Between two stools (one) falls to the ground.
24. 逃がした魚は大きい Every fish that escapes, appears

60. 樂は苦の種 苦は樂の種 At the bottom of patience is heaven.
 61. 氏より育ち Birth is much, but breeding is more.
 62. 嘘も方便 A necessary lie is harmless. — Ger.
 63. 井の中の蛙 大海を知らず He who is in hell knows not what heaven is. — Ital.
 64. 親はなくとも子は育つ Nature is a good mother.
 65. 負うた子に教へられて 淺瀬を渡る A fool may give a wise man counsel.
 66. 思ひ立つ日を吉日とせよ Defer not till to-morrow what may be done to-day.
 67. 口と禪とは固く緊めよ Few words are best.
 68. 勸學院の雀は蒙求を啼る (門前の小僧習はね經をよむ) the primer. The sparrows near a school sing.
 69. 暗やみの耻を明るみへ出す To wash one's dirty linen in public.
 70. 腐つても鯛 An old eagle is better than a young sparrow.
 71. 柳に雪折れなし In yielding is strength.
 72. 羊頭を懸けて 狗肉を售る To cry up wine, and sell vinegar.
 73. 時かぬ種子は生えぬ As a man soweth, so shall he reap.
 74. 負けるが勝 He that returns good for evil obtains the victory.
 75. 待てば甘露の日和あり It is a long lane that has no turning.
 76. 喧嘩兩成敗 When two men quarrels, both are in the wrong. — Dut.
 77. 轉ばぬ先の杖 A stitch in time saves nine.
 78. 子を持つて知る親の思 He knows not what love is that has not children.
 79. 五十歩百歩 A miss is as good as a mile.
 80. 榮耀に餅の皮をむく Vetches seen bitter to the fullcopped pigeon. — Ital.

— 11 —

- かる
 42. 我物と思へば 輕し傘の雪 A burthen of one's choice is not felt.
 43. 渡る世間に 鬼はない There is kindness to be found everywhere.
 44. 笑ふ門には 福來る Fortune comes in by a merry gate.
 45. 勝つて 兎の緒を締めよ He conquers twice who conquers himself in victory.
 46. 高木風に 嫉まる A big head has a big ache.
 47. 巧言令色 鮮矣仁 He who gives fair words feeds you with empty spoon.
 48. 隠すより 現はるはなし A secret fire is discovered by the smoke.
 49. 勝てば 官軍負くれば 賊 Success makes a fool wise.
 50. 大は小を 兼ねる Better there should be too much than too little.
 51. 鷹は 餓えても 徳は 摘まず Prefer loss to unjust gain.
 52. 旅は 道連れ 世は 情 An agreeable companion on the road is as good as a coach.
 53. 短氣は 損氣 A hasty man never wants woe.
 54. 總領の 甚六 The younger brother has the more wit.
 55. 月夜に 提灯 To carry a lantern in midday — Fr.
 56. 猫に 小判 A blind man will not thank you for a looking-glass.
 Don't throw pearls before the swine.
 57. 念には 念を入れよ Hear twice before you speak once.
 58. 無くて 七癖 Every man has his weak side.
 59. 泣面と 蜂が 螫す Flying from the bull he fell into the river. — Sp.

— 10 —

- | | |
|-------------------|---|
| 81. 悪事千里 | Bad news has wings. |
| 82. 朝起三文の徳あり | Early birds pick up the worms. |
| 83. 案じるより産むが易い | An attempt is sometimes easier than expected. |
| 84. 才子多病佳人薄命 | Heaven gives its favourites early death. |
| 85. 木に竹を縫ぐ | To sew the fox's skin to the lions. |
| 86. 狂人に双物 | Don't give a word to a child. |
| 87. 勇將の下に弱卒なし | As is the king, so is the people.—Sp. |
| 88. 身から出た鎌 | An ill life, an ill end. |
| 89. 三つ子の魂百まで | As the boy, so the man. |
| 90. 盤根錯節に會ひて利器を知る | The good seaman is known in bad weather. |
| 91. 自慢高慢馬鹿の内 | Self-praise is no recommendation. |
| 92. 釋迦にも經の讀み違い | A good swimmer is not safe against drowning.—Fr. |
| 93. 釋迦に説法 | Don't teach fishes to swim.—Er. |
| 94. 蛇の道は蛇 | One devil knows another.
Set a thief to catch a thief. |
| 95. 四百四病より貧の苦 | The sick man sleeps when the debtor cannot.—Ital. |
| 96. 人は一代名は末代 | A man dies, his name remains. |
| 97. 人を見く法を説け | One man's meat is another man's poison. |
| 98. 人の噂も七十五日 | A wonder lasts but nine days. |
| 99. 人の振り見て我が振り直せ | By other's faults wise men correct their own. |
| 100. 急いでは事を仕損する | Draw not your bow until your arrow is fixed. |

淋しかったイエスの死

「上」

イエスの禁慾の生活は随分と長いものだった。然し、それは今日迄のイエスに取っては決して苦痛ではなかった。そして自分から反省して見ても、又他から見ても彼は布教に奉仕し没頭して居たと思はれた。彼はそれに付ては云ふべからざる満足を感じずる事が出来るのだった。

だが、彼が自分の最後が近づいた事を感じてから後は——それはつい数日前に知つたに過ぎないけれども——彼の慾情は次第に不満を感じ始めた。今迄の様な禁慾生活を続ける事への憧憬とも云ふべき希望が片つぱしから崩れ始めた。迫つて来る死と云ふ物を前にすると、彼の考へ方は妙な風にグラつき始めた。彼は前よりも一層考へ深くなった。自己の為て来た道、布教の為に犠牲にされた彼の一生それが彼に取ては、名誉心を満足させるに十分な物ではあつたけれども、然しその満足の反面には己にあまりにも不忠実であり、人間らしい所のほとんど無かつた事がともすれば彼の眉をひそめさせようかすると彼を淋しくした。

迫り来る死——それを見つめて居ると彼には妙な慾望が起つて来るのだつた。全く今迄の彼とは正反対な——彼は今迄はほとんどそれを意識しなかつたけれども、彼の肉体はガツガツに飢えて居た牢獄に繋がれた人々が、恐ろしい程の肉慾を感じる様に、自由を奪はれた、と云ふよりも、今迄はイエス自らが奪ひ、今は直面せる死によつて奪はれた現在の彼には、抑へに抑へられて居た肉慾が興つて来て、ともすると彼の全身を唯一途な肉慾に胴ぶるひさせるのだつた。

入日が真赤に白壁に照りつけた彼は無意識で立ち上ると前の花園の方へ歩いていった。

そこでは、マリヤ、マグダリーナがたくさんの花の為に倒れかゝつて居る矢車草に水をやって居た。

「ずゝ分よく咲きましたわ先生——」

マリヤは水をやるのを止めて一輪摘みとるとイエスの方へ差し出した。彼は物も言はずにそれを受け取つた。

マリヤは又一寸水をやって居たが急にふり向いて言つた。

「そんなに私を御覧になつちや嫌ですわ先生、私、何にも悪い事なんか為らないんですもの。」

「いや、さうぢやないんだ、さうぢやない、私はね——」

さう言ひ乍ら彼は女を見つめたまゝで進んで行つた。

「駄目です、いえ、先生駄目ですそんな風になさつちや……あなたは……」

女は花の畝の間をぬけてついと向ふ側へまはつた。そして男との間に矢車草の一と叢をさしはさんで立つた女は真剣な、然し優しい笑をうかべてすかす様に言った。

「私——よく解つて居るんです——でも、あなたはそんな風になさつちやいけませんわ——。」

「いや、そんな事ぢやないんだ、唯、私は、一寸言つて置き度い事が有るんだ、あなたに。」男は云ひ乍ら花の群の上から女の手を取らうとした。女はつと身を引いた。

「お静かに——静かになさいね、私よく解つてるんです。あなたはもつと静かになさらなくちやいけませんわ。私——悪い様にはしませんから——」

男は、女の去つた後の花園に目を光らせて立つて居た。そして手さぐりで花を取つては滅茶滅茶にむしつた。

「マリヤ、マグダリーナ……マリヤ」

突然男は一輪を引きむしるとか花と一緒に自分の胸をグツとつ、んで息を詰めた。と、全身の力が失せた様にグツタリと手を下げてホロリと花を落した。

が、余りにも残酷に彼は急に現実マに引きもどされた恰もさうするつもりであつたかの様に台所で何かを取落したすさまじい音がしたので——

彼は元のイエスになつてゆつくりと歩き出した。

「あれは——あれは淫売婦だつた——。」

自分をたしなめる様にさう言つて見たが、彼の情慾はまだ胸のあたりでむづむづして居た。うつむいて歩いて行く彼の瞳の中を□□の幹かんらんが一本つゝ通り過ぎた。彼はいつの間にかそこ迄来て居た。

「死にたくない——。」

スーツと彼の目の前に大きな幹が迫つた。彼は、ギクリとして吾に返つた。と、人の足音が間近に聞えた。

中年の、茶褐色の濃い髭が顔の半面をかくした、頑強さうな男だつた。イスカリオテのユダ——それがこの男だ。

彼は、イエスの前の方を少しはなれて、急ぎ足で帰る所である。

恐怖、怒、軽蔑、無念、錯雑した感情がイエスの瞳の中でギラギラと白熱した。思はず二三歩ふみ出した。

「仕事はみんなすんだか！」

足音はヒタと止つた。木立の中が殺気をたゝへて静まると、イエスの声のみが細い尖つた反響を長く響かせて林の奥にかすれて行つた。

「は——はい、何の仕事ですか。」

「お前の仕事はすんだかと言ふんだ！」
ユダは図太く落付きはじめた。

「はい、もう祝ひ日の買物はすっかり終わりました。」

イエスの手の中で小枝が折れた^{ママ}ズカズカと五六歩、彼はユダの顔前に追った。と、スルリと男は木の幹をまはった。着物が木の間をツツつと^{ママ}こつて男は木立をはづれた所迄のめる様に走った。

ふり返ると夕焼けは大方消えて梢のみがうす赤かった。木の下はかすかに暗くて、イエスの白い着物がニソフの様に動きまはった。

「マリヤーマリヤー死にたくないんだ、私は死にたくないんだマリヤー——。」

彼は小太い^{かんらん}□□の幹に両手でしつかりと抱き附いて、その疎い木の皮に頬をすりつけて泣いて居た——。

◇ ◇

「ぢや先生はこの窓際に坐つてもらひませうよ。」

マリヤは姉のマルタにさう言ひ乍らテールブル掛けをひろげた。マルタは椅子を数へて居た。

「えゝ、今日は暑いから窓際の方がいゝでせうね。」

さう云つてマルタは椅子を窓の下に据ゑて暗くなつて行く外を見た。

「何だらうユダが——あんなにあわてゝ走つて来るよ。」

「え？ユダ？」

マリヤはユダと聞いて窓へ急いだ。マルタはそのまゝ台所へ出て行つた。

「どうしたのユダ！え？」

マリヤの声が暗がりの中に真一文字に走つた。と、扉がキーツと軋つて目を見開いたユダが戸口に立つた。

「どうしたのユダ！」女が近づいた。

台所からマルタが言つた。

「買物は皆すんだの？」

「どうしたの？買物はすんだかつて——。」

「ううん、買物ぢやない。」

「買物ぢやなかつたの姉さん！どうしたのユダ？え？」

「買物ぢやないんだ。一寸町へ行つたんだ。」

「町へ？そして？そして？」

ユダは戸口を細く開けて外を見た。夕焼の名残が西の空でどす黒くなつて行つた。木立の中はもう何も見えなかつた。

ユダは吃とふり向くと、矢庭に女を引きよせた。女はそれには無関心だつた。

「俺が好きだと言つたなお前は！」

「えゝ、だげど、どうしたの？」

「マリヤ、一寸来て呉れない？」 マルタが台所から叫んだ。

「えゝ、唯今。ねえ早く、どうしたの？」

「先生は俺をきらつてるんだ！」

「先生が？なぜ先生がきらふの？」

「マリヤ、俺は——もう俺は行つて了はう。」

「先生と別れて？え？私とも？」

「マリヤ、早くよ、待つてるんだから。」

「えゝ、一寸……先生に何かしたの？」

「俺と一緒にいかう。な、一緒に、な——。」

「何だかちつとも解りやしない、どうしたつて云ふのさあ。」

「……」

「私あたしかにあなたが好きよ。だからつて先生に嫌はれる訳はないわ。」

「妬いてるんだ。」と言つてユダは手の甲で額の汗をなすつた。

「何してるのよ、マリヤ！早くよ！」

「えゝ。何なの——さうかしら。だつて——先生らしくないのねえ。」

「……。」

「早く来なきや駄目よ焼け過ぎるから——。」

「はいはい——ぢや一寸待つといてね。直来るから。そしてゆつくり聞かなきや、何も分りやしないわ。」

女はさう云ひ乍らセセコましくテーブルとユダの間をすり抜けて台所へ立つて行つた。

男は戸口に目を光らせて立つて居たが、急に窓へ行つて夕闇の中をすかして木立の方を見つめた。室の真中にテーブル掛けのみが白かつた。

「あらあらこんなになつてまあ。」

マリヤの仰山な驚きの声が軽々と此の室へ流れ込んで来た。ユダはじつと室の中を見まはした。

「独りで行つて了はう——あれや矢張り淫売婦なんだ。やつは俺にさへも——。」

テーブルに肘を突いて彼は頭をかゝへた。

腰の金袋が重さうにぶらりぶらりと揺れてゐた。

「下」

「先生を敵に売る？誰だらう！」

食卓に並んだ弟子達は腹を見すかされる様な不安に皆堅くなつて居た。食器と金具とのみが空しく安つぽくきらついた。

イエスは静かに立ち上つた。瞳が気味悪い程充血して居た。

「ユダ！お前は仕事を皆して了ふがいゝ。」

厳かな明瞭な声が反射して灯のまはりに波紋を描いた。

やがて一同の目がユダとその金袋とを扉の外に追ひ出すときつとイエスの顔に返つて来た。彼はじつと順々に皆の顔を眺めた。

突然、彼の眼はタジタジとなつたが、漸く一ヶ所にじつとふみ止つた。

マリヤ、マグダリナ！その瞳が憂へて、うるんで、歎いてゐる。イエスの罪を責めるやうだ。背後に控へた死、それがもたらす異常なる静寂、それすらも此の瞳の光にカツと掻き乱されて了つたのだ。

彼の蒼白な頬を蔽うた髭が灯を反射させ乍らかすかに震へた。

強て静かに彼は扉を開いた。戸の軋る音が不安な沈黙の空気の中にはにかみ乍ら反響した。軒下をはなれると、彼の着物が夜の雪の様に真白に光つた。白雲の間を走る明月が丁度中天に昇つて居る。

彼は独りで居たかつた。□^{かんらん}櫬の木立の中に唯一人坐して居たかつた。そして此の混乱した心を静めたかつた。

黒い幹の間をイエスは足音を忍んで奥へ奥へと歩いた。

サ……と木の葉に音がした。と、ポツンと鋭い反響を呼び起して夜露が落ちた。

ほとほとと足音が近づいた。彼は立ち止つて後の人を想像した。

「先生——」

マリヤだ。彼は動かなかつた。足音はそつと彼の横に寄り添うた。

「先生——」

「……」

「……」

「あなたはユダを愛して居る。あなたも一緒に行つたらどうだ。」

重い声がぐつとマリヤを取りかこんだ。ギリと女は言葉がつまつた。然し彼女は落付いて居た。

「いゝえ先生、おそばを離れて行く所は御座いませんわ。けど——ユダはほんとにそんな事を仕たんでせうか。」

「——。」

「ねえ先生？」

「——。」

「でも、エホバは私達を救つて下さいますわ、きつと！私達はもう永い事道をひろめる事をして来ました。そして神様は私達の為た事を嬉^{ママ}んで下さいますもの、えゝ先生、私達にはきつと幸福が来るに違ひ有りませんわ。いと高き所には栄光神にあれ地には穏やか——」

「マリヤ！」

「え？」

ぐいと彼は両手に力を置めた。彼の童貞は彼の胸に、腹に、頭に、ぐらぐらと煮え上つた。

真白い、若い、弾力に充ちた肉が声も立て得ずに彼の胸にぶつかった。

「あ、先生、いえ——。」

「マリヤ！マリヤ！マリヤ！」

チラチラと月光が木の葉を洩れて彼等の顔に照つた。

「あ、いえ、いえ——」

柔らかい肉塊がずるりとイエスの手を逃れると裾がひらと乱れた。幹を間に挟んで二つの白衣がぐるぐると廻つた。

「いえ、いけません、なぜそんな、先生！」

「マリヤ、お前が——うう……私は。」

二つの荒い吐息が真青になつて幹に吹き付けた。

「先生、なぜそんな事を、あなたはいつも、いつもそんな。」

「な、何をしたつてかまふものか、人間は人、人間は、人間らしくさへあれば、それで

——それでいゝんだ、それで、マリヤ！」

「いえ、あなたは神になる人です、その人がそんな。」

「神？馬、馬鹿な、神が作った人間が、その人間が、神にならうとするのは、神、神に背くんだ、私は、人間は、人、人間でいゝんだ、マリヤ、いや、マリヤ——」

彼はさつと幹をまはつて女の手を捕へた。肉塊が再び彼の腕にまつはらうとした。女の叫びが彼の耳を貫いた。

「私をまた淫売婦になさるんですか！」

水晶の様な鋭いその切先が男の胸を真一文字の切り下げた。突如、現実の己が姿がイエスの頭に明瞭に閃いた。兩人は同時にたぢたちと退つて目を見張つた。

男はがつくりと頭を垂れた。月光がその肩をいたましくも照した。切石の様な沈黙がいつ迄も動かなかった。

やがて女がそつと近よつた。

「先生、御免なさいね。」

男は動かなかった。

「先生」

「——」

イエスの頬を涙が月光を宿してすーつと沁り落ちた。やせた、蒼白なその頬がピリピリと痙攣した。

「先生、御免なさいね、」

女は涙声であつた。

青く澄んだ空の白くかすんだ銀河を横切つてすばらしく長い尾を引いた流星が、何等かの凶兆を秘めて流れた。

◇ ◇
イエスが捕へられた事を聞いた時、マリヤは総てが解つた様な気がした。彼女自身でも気付かないで居た。然しユダとの間は唯のたはむれに過ぎなかつた。そして本当はイエスを恋して居た事を此の朝になつてはじめて気がついたのだつた。あの神祕をひめた蒼白い痩せぎすな頬が彼女の頭に一杯につまつて居る様に思はれた。あの落着いた眼差しがまだ彼女の上に注がれて居る様に思はれた。

「お前等の中罪のない者が先ず此の女に石を投げるがいゝ」と言つたイエスの凜とした声が聞える様だつた。

「あゝあんなにも私を愛して下さつたのに——」
考へに沈んで彼女はそつと頭を振つた。

悔いが、思慕の情が、悲しみがいつしか女の胸に一ぱいにつまつて居た。すると、先夜の木立の中の事がたまらなくなつかしい思ひ出となつて浮んで来るのだつた。

やがてマリヤは跪いた。が何と言つて良いのか分らなかつた。

「いと高き所には栄光神にあれ、地には穩か、人は恵みあれ——」

恋の侘しさと失恋の悲しみとを一緒に封じ込んだ涙に、彼女の眼はボーツとかすんで行つた——。

◇ ◇
□□山の上にはもう十字架が立つて居た。

山は美しい夜明けである。

町々は今その安らかな眠りから覚めやうとして居る。霧は海原の様に平野を蔽うて、その底にある人家はゆるやかな煙を上げて居る。

何事もなかつたかの様に、又、何事も有り得ない様な平和の朝である。

空は雲が一面に蔽ひかぶさつて、やがて細い雨が音もなく此の平野に降るかと思はれた。

赤土のざらざらした此の□□山は蜜雲を肩に支へて平野の一角に静まり立つてゐる。その

麓をケデロンの小川が流れて居る。その岸には美しいゲツセマネの原がひろがつて居る。

だが、此の静寂は麓の方から次第に破られて来た。群衆がざわめき乍ら昇つて来る。その足下に赤土がざくりざくりとふみ砕かれた。

木の湿りの抜けない生々しい新木の十字架が群衆を従へて上つて来た。イエスの弱い肩は

此の十字架の下で娘の様にあへいでゐた。環の様に作られた□の冠がぐさとその真白い顔に食ひ込んでゐた。

颯！と皮の鞭が耳元で唸つた。然し、も早力の失せた眼は動かなかつた。唇がピクリと痙攣したのみである。

どんと十字架が後から押された。ばた、とイエスはのめつた。群衆が山の静寂を粉々に砕

いてざわめき立った。

彼の両手はだらりと垂れて静脈が気味悪く鬱血してゐた。太い縄が、恰もイエスが十字架と一緒に生れて来たかの様に離さじとしがみ付いてゐた。露になつた胸の肉が縄にすれて真赤にただれてゐた。

町はまだ平和である。霧はまだ晴れやらぬ。そして雲は群衆の頭上で疾風の様に走つた。鞭が唸る。群衆は叫ぶ。山のみは不自然にも動かなかつた。

よるよるとよるめいてイエスは立ち止つた。鞭が再び鳴つた。彼は動かなかつた。群衆の叫びが又上つた。

グイと背中が押されると、彼は赤土の中に手を突込んでベツタリと倒れた。十字架がその上から押へつた。鬨の聲が上つた。鞭は三度彼の肉を打つた。彼は動かなかつた。

突如、天空を蔽ひ尽した雲の一角が破れると見るや、稲妻の如き日の光が颯とイエスの蒼白な頬を打つた。と、すつくと立ち上つた彼は、胸を張り、雙の拳を開いて山の中腹に突つ立つた。その頬は見る見る紅潮し、熱し、その瞳は永遠の希望を秘めて真直に太陽を見つめた。

捕吏は鞭を上げたまゝで、群衆は拳を握つたまゝで、ギクリとした。

額がさつと動いた。真紅の唇が突如ひらめいた――

「おゝ神よ！」

赤土の□□山は永久にその声の反響を伝へた。然し、彼は再び叫ばなかつた。(終り)

(「山陽新報」昭和二年三月一日、一二日、一三日、一六日、一七日、一八日、二〇日、二四日、二五日の夕刊に都合九回連載)

彼の出京

「一」

荷車は重さうに砂利を噛んでガラガラと門口を離れた。これで家の中はすっかり空になったのだ。彼はたまらない哀愁を覚えるのだつた。ぐつたりと倒れて了ひたい様な力ない身体をもて余し乍らも自棄になつてギンギシと最後の行李に細引をかけた。

がらんとした家の中が気味悪く灰色に埃つぼくて、今にも奥の方から異様なものが出て来さうな気がした。赤く日に焼けた畳に簞子のあとが真四角に青かった。蚊帳の釣手が忘れられた様にぶら下つて居る。黄色い壁に押ピンが光つてゐる。

彼は縁に坐つて敷島に火をつけた。誰も居ない室の中に煙がゆつくりと伸びて行つた。電燈の傘が埃をかぶつたまゝ動かかなかつた。

秋にははいつたがまだ涼しい程ではなかつた。庭の木で蟬がやかましく鳴き立てた。四坪ばかりの菜園に茄子とトマトの枝がコンがらがつて、水不足で枯れかゝつて居た。栄養不良の小さな玉蜀黍が枯れた葉の間からうす赤い髭を出して居た。その頂きの雄花に赤とんぼがとまらうとしてねらつて居た。

うまくもない煙車を庭にすてゝ吸がらから上る細い煙をじつと見て居た。そのあたりは真白に乾いた土の中にどつしりと落着いた庭石のまはりを埋めて一面に松葉牡丹がさいて居た唯真紅に――。

沓脱石のそばに汚い灰がやゝ湿つて塊つて居た。妻が行つたのが三日前――今日で四日目だ。四日前に妻が子供のたれたうんこに灰をかけたのだ。その横に、その時に落したらしい妻のセルロイドのピンが落ちて居る。彼は庭に下りて、ピンを拾つて埃を払つた。

ふと見ると縁の下に、紐をつけて穿かせた時のまゝの子供の小さな草履が裏向きにころんで居る。

(泣いてるんぢやないかなあの子は――。)

彼はピンの又指を入れてピンをクルクルとまはした。ピンは指を外れて松葉牡丹の中に落ちた。彼はホツと吐息した。

それからずつと庭を見まはした。松の枝に物干竿をかけるのに結びつけた紐が妻を思ひ出させた。彼の今着て居る着物を竿にかけて、裾の滴を切り乍ら哀しさうな様子をして居た。

「何年もかゝるんでせう――」

妻は顔を反けて言つたのだ。

「何がさ？」彼は椽マの柱にもたれて、やがて彼が乗り出すべき文壇を考へて居た。

「向ふで——私が行く迄だと——。」

あきらめた様に彼女は裏の方へ歩いて居た。

「いゝや、そんなにはかゝらんさ、二年もかゝれば——」

慰めたかつたが駄目だつた。一脈の哀愁が来た。けれども、此の決心を断行しつゝある彼には一つの気軽さと希望とがあつた。

彼が大学を卒業してからもうほゞ四年になるのだが、その間、彼は田舎の中学教師として生計を立て、かたはら文芸の研究を為しとげやうとしたのだつた。けれども、一度田舎へ引込んで了ふと、生活の安易さが彼に何も考へさせなくなつて了つた。

けれども奥底にひそんである文芸への志はともすると彼の安易な心をいら立たせるのだつた。それに耐へかねて勉強に志したのが今度の事になつたのである。文壇には知人も居る。上京すれば何とかならなくはあるまい、さうした、言はゞ漠然たる前途であつた。それ丈に妻にも言ひ出し悪かつたのだつた。

けれども友人からのすゝめもあり、一寸した謀反気も手伝つて、妻と子は一時郷里の親元へあづけておいて、二三年後に引取る事、上京して郊外の兄の許に一時身をよせる事、に計画を立てた。

そして妻に全部をうちあけた時に、妻はやはり退嬰を主張したのだつた。人から尊敬されて納まつて居る田舎教師で彼女には満足だつたのだ。

「二」

月のいゝ夜だつた。岐阜提灯をつけて縁に坐つた彼と妻とは、言葉少なに黙して居た。

松葉牡丹がすつかり花卉を納めて、おしろい花が、庭に迄さした火影に、いつの間にか青白く咲いて居た。どこかで、ギーツと一と声つきり気味悪く蟬がないた。

「ねましたの？」

妻はそつと夫の膝の上の子供をのぞいた。そして静かに話しはじめた。

「小説だつたら家に居ても書けるでせうに——。」

妻はおしろい花を見て居た。

「なんにも私には分りませんけど——」

彼は何と言つていゝか分らなかつた。子供の寝顔から目を上げると、おしろい花が美しくかつた。二人ともじつと花を見て居た。そして同じ事をいつ迄も考へて居た。

「長くかゝるんでせうね——。」

彼はその暗い提灯に青く照されて居る妻の横顔をみやつた。妻は人さし指でそつと目頭にとまつた涙をなでた。まだじつと花をみつめて居た。

「二年もかゝれば——何とかなるだらう」

感傷に引き込まれて行つた。

長い沈黙だつた。湯上りの妻の髪がまだ濡れて黒く塊つて居るのを彼は悩ましい気持ちで

見て居た。

「あさつて荷物を出せば——私は二十八日になるのねえ——。」
夫は何も云へなかつた。

ポロポロと涙が妻の頬を走つた。深い、うめく様な言葉だつた。

「あゝ私も東京へ行つて見たいなあ一度も行つた事がないもの！」

妻の幻想がぱつと消えた、ゴトン——と屋根の上で音がしたのだと直に、ゴロゴロと底響きがして屋根をころげる音がした。突差に『梯だ』と思つた。幹を離れてポトンと落ちたのは、家の横手から屋根の上へ伸びた柿の青い実だつた。松葉牡丹の中で青柿は穴があればはいり度い様に見えた。此の青柿が彼の思ひ出の糸を無慈悲に切つて了つたのだ。

彼は吐息して庭を歩きまはつた。使つて居ない古井戸の蓋を取つてのぞいて見たり、雁来紅の真紅な葉をむしつて見たりした。

ジャボンと横の小溝に蛙が飛び込んだ。彼はそつと近よつて見た^マそして、頭の上の無花果が、此の三四日妻が取らなくなつたのでよく熟したのが大分あるのを見つけた。手近なのをもぎとると、切口からねばり気のある白い汁がしみ出て来た。スーツと肉^マをむくと、ぬるぬるとしたうす紫色の果実の肌が冷たさうに現はれて来た。そつと一口噛んで見た。甘味と、プツンと歯にこたへる小粒な種とが小気味よかつた彼は無花果の大好きな妻を思つた。行水のあとで浴衣を着て子供を抱いて、

「お父さん、水をまくといゝんですがねえ。」

等と言ひ乍ら庭に出て来て無花果の熟したのをまぶしさうな目付きで探す妻を思つた。

彼は今一つ取つて皮をむいた。ぬるりと沁つてどす黒い小溝の中へもぐつた。又一つ取つてゆつくりと皮をむいた。哀愁が又やつて来た。が、それを口に入れると甘味と共に哀愁は消えた。もう喰べたくはなかつたが彼はまだ木の上を見て居た。

がらがらと車の止る音がして、車夫が庭へまはつて来た。彼は、長い呆然とした追想から引き起されてどぎまぎした。そして今一度今迄の彼等の寝室へはいつて行つた。夫はそこに妻の臭ひを求めたかつた。が、六畳の室はがらんどどうで天井があまりにも黒かつた。障子の破れた紙が物凄い迄に静まり返つた此の室の中に向つてヒラヒラと動いて居た。蠅が畳を心細さうに歩いてゐた。彼は此の寝室の襖を、これを最後として永久に閉ぢるかの様にそつと締めて縁を下りた。

(泣いてるんぢやないかしらあの子は——。)

車の上で妙にそののみが思はれた。

田舎の町が目をそばだてゝ彼を見送つて居る様に思はれた。

去る者の哀愁が来た。けれどもその陰に、不安ではあるけれども希望があつた。以前に久しく住んだあの帝都の地、それが今の彼の心におとなしやかな話をしかける様だつた。

富士の裾野にさしかゝつて漸く長い汽車の旅の夜が明けて行つた。横雲の淡紫色が次第に赤らんで行くのを彼は晴々しい持気^{ママ}で眺めた。こんなに美しい朝を見るのは彼が大学を卒業して帰る時以来の事だつた。

彼は食堂車に落着いてゆつくりと熱い味噌汁をすゝつた。

一人つきりの俺だ——彼は愉快だつた^{ママ}久しぶりに週^{ママ}困^{ママ}のくびきからすつかり脱し去つた彼は身体中に学生の血が復活するのを感じた。

頂上に雪を残した富士が窓の外をじりじりと動いて行つた。山北——。コーヒーの中に角砂糖をツイと沈めた。コップの中がぶわぶわと乱れた。その底の一抹の苦味を彼は微笑し乍ら呑み込んだ。総ては希望だつた。

だが、まだ朝もやが去りかねて居る或る踏切りを颯と通り過ぎる時に、色の褪せた緑の四角な旗をもつて踏切の横木の前に立つた番人は、子供を背負つた若い女だつた。ギクンと彼は柔い大きなもので打たれた気がした。

「東京が見たいと言つたつけが——。」

緑の四角な小旗と妻とがコーヒーの中でごちやごちやと混つて了つたので、彼はコップを唇にあてたまゝ長いことためらつた。

「田舎は早いからもう起きるんだらう——。」

すると、起き上ると直にむづかる子供と、あやし乍ら模様のはげた着物を着せる妻の悩ましい寝乱れ髪とがギツチリと眼にくつゝいて離れなくなつた。やけになつてコップを呑み乾した。淡い後悔が喉にそつと泌みて行つた——。

残暑の烈しい午後の日が真上から照りつけて居る蒼茫たる馬場の草原は蒸す様にほてつて、それに添うた道を車で通る夜の身边にもどんよりとした草のいきれがムツと迫つて来るのだつた。

兄の家は縁から馬場が見える様な所にあつた。

車から下りると彼はしばらく感慨深く此の馬場を見渡した。もう四五年にもなる、秋の月を賞して此の草原を夜中迄ぶらついた事もあつたが——。

「よう、唯今——。」

縁に坐つて居た兄にさう云ひ乍ら彼はさゝやかな木の門をはいつた。

嫂が台所から飛んで出た。

井戸水で身体をふいたり浴衣にきかへたりしてから改めて彼は縁に坐つて見た。馬場があまりに青かつた。

軽い旅の疲れが背骨のあたりにぼんやりと感じられた。何かしら侘しい、そぐわない気持ちの彼だつた。

兄は嫂と二人きりで此の目黒在にずみ分と貧しい暮しをして居た^マむしろ今迄の彼の方が生活には豊だった。

随分面白くなさうだ——彼は才はあり乍ら不遇な兄にひそかに同情の念をもつて遠くから考へて居た。

然し今見る彼等は、様子こそは貧しげだが、丈夫さうに愉快さうだった。同情をもつて見て居た彼の目にはあまりに彼等は快活だった。冗談口を叩いたり、大声でふざけて見たり嫂が何かの事で一寸兄の膝を捻つたりすると大業に

「いたツ此の野郎——」

等と言つてワハワハと笑つた。彼には、さうした快活な様子が、貧しさを忘れる為の努力の様に見えて、却て深刻な侘しさがこみ上げて、一緒になつて笑へなかつた。そして□^マ

「おい、花をやらう、え、おい」

等と言ひ乍ら古い花札を出して昼の日中に遊ぼうとする様子等は、兄の不遇でぶらぶらして居る事を余計に明らかにさまに見るやうで悲しかった。

× ×

二時間ばかりも昼寝して起きると兄も嫂も勝手な方に向いて眠つて居た。日陰がずつと遠のいて縁から見える馬場の半面は冷え冷えと黒くて、他の半面は夕焼で真赤に燃えてゐた。流石に秋に入つたらしい夕風が吹いた。彼は敷島に火をつけて呆んやりして居た。兄の寝顔がだらしなく少し口を聞けて居た。かすかな息が蝸の絶え間毎に聞きとれるのだつた。

「四」

嫂がその足元にねてゐた。襟が白粉で汚れてゐるのが貧しげだった。電燈の下を五六匹の蠅が輪を書いてゐた。時々スツと迂る様に外れると、又元へ戻つて、何かを期待して居るかの様に静々と輪を書いてゐた。

兄がどすんと足を伸した。何故か驚いて彼は煙車を吸つた。大急ぎで——。火が消えてゐた。仕方なしにくるりと外を向いた。

大きな寝息が聞えた。兄は又寝入つた様子だった。

と、直に嫂が起き上つて『あゝ——』と言つてあたりを見廻した。彼は後向きのまゝで無闇に煙草を吸つた。

「もう何時？」

シヤガレた声で物憂い様に言つた。

『さつき六時うちましたよ。』何気なく、然し何故か後めたい様な気がした。

「おゝ大変大変——」

木枕を^マポいと押入れに投げ込んで彼女は台所へはいつた。そしてマツチを磨つた。瓦斯の燃える音が急に家中に何かしら忙し気な空気の波をよび起した。

「あなた——あなた、起きて頂戴な——。」

「——」

「あなた、晩方ですよ、早く御掃除して下さい。」

「よし。」と兄が勢ひのない、然し怒った声でねたまゝ叫んだ。そして又直に眼を閉じた。彼はいらいらした気持ちで無性に次の煙草を吹かした。

「あなた、困るわねえ水もないんですから！」

兄は返事をしなかった。

彼は下駄をつゝかけて外へ出た。そこは馬場の続きの荒れた草原で、立木が十本ばかりも群つてゐた。蝸が鳴いて居た。涼しい風が吹いてゐた。足下に淡紫の小さな雑草の花が群れてゐた。ふと見ると蟬の抜け殻が軽々と草の上に支へられてゐた。

感傷が湧き出して来た。そして妻をしみじみと思ひ出して見た。彼は草をしいて坐つた。汽車の疲れがまだ残つてゐる様に頭が呆つと痛んだ。

とんとんと煙花の上る音がした。縁日でもあるのか。その音にさそはれて彼は遠く西の空を見た。褪せた色の、赤い横雲が、馬場を横切つて向ふの地平線に見えてゐた。そして、まだうす白い夕空を背景にして、東面はもう日が陰つた富士が真黒く浮き出て居た。今朝見た富士だ。

栗色の馬に乗つた白服の人が馬場をまはつて居た。小さく見えるその姿は、木棚や草叢のかげに見えたりかくれたりした。遠くで砧でも叩いて居る様に、足音がトロツトロツと聞きたれた。

× ×

「散歩して来る。」と言ひ残して、夕食がすむと直に兄の家を出た。

浅草へ行つて見やう——さう思つた。目当はなかつたが、唯賑やかな所へ行つて見たかつた。(文字潰れて起せず)む■(文字潰れて起せず)ぼれ勝な此の五六日の心を誤魔化す為に、何処かしら賑やかな所へ行つて我を忘れたかつたのだ。

馬場から町通りへ出ると、並んだ店々がげげばいしい装飾をつるして提灯をつけて居た。

腹の皮に響く様な太鼓と、脳を刺す様な■(文字潰れて起せず)とが妙なコントラストを作つて聞えた。その方へ

彼は自然に近づいて行つた。おびたゞしい人だつた。アセチレンが燃えてゐる屋台店で飴を売つてゐる男の顔は真赤に汗ばんで光つて居た。飴が、今にも動き出しさうにそはそはと箱の中にくろんでゐた。

兎に角おびたゞしい人だつた。が、彼はまだ妙にこだはつた気持で人波にもまれて居た。まるで夜の潮の中に居る様に、真黒な流動物が彼を社の中へやんわりと押し込んだ。

何を見てもつまらなかつた。ちつとも面白くはなかつた。けれども、全く自己と言ふものがないかうした一群中の一人になつて、全く平等な人間に扱はれて押し返し押し戻され乍ら、何かしら悩んでゐる自己に、わけもなしに或る優越を感じて居た。

一つ二つの階段を四方から寄つてたかつて押し上げられたり、昼は裁縫の稽古に行くだらう様な娘の一群が手をつないでやつて来て間を抜けやうとする彼を挟み打ちにしてどぎまぎさせたり、そして太鼓はどろりどろりと鳴つてアセチレンがヂヂツと燃えた。皆が飴をしやぶつて居た。皆が汗の出る程金を握つて店から店へと物色して歩いた。

「五」

然し、見上げた空は真暗で静かだった。杉の梢がかすかに火をうけて赤黒くざわついた。どうした拍子か、ポイと群衆から投げ出された。ふと吾に返つてあたりを見廻した。社殿の裏手だった。燈火が十分にとどかないので、あたりの木立の間は可也暗かつたけれども、臙乍らも様子は見分けられた。

こゝには来た事がある——ふとさう思つた。すると、過去と言ふ蓋が急にポコリと開いて、何もかもが一度に目の前にガバツとはね出された。

と、苦いとも甘いともつかぬ曲んだ微笑が斜に彼の唇をかすめた。

(栄子に逢つたんだ——)

と同時に、

(さうだ、どうして居るかなあ)。と思つて見た。

× ×

夜も九時頃だったらしい。十月の初のように覚えて居る。どこかで友達と可也飲んでの帰りだった。初秋の夜によくある、あの、俄にポツリと来て直にざあつと降り出す奴にぶつかつて。少し酔も醒めた気持で逃げ場を探したあげく、丁度近くにあつた此の社で一寸待つつもりだった。

所が来て見ると、拝殿の横手に、丁度御手洗の上の小さい電燈の光をさけた所に、——たしか自分では廿一だと言つて居たが——女が立つてゐた。よくは見えなかつたが、厚化粧をして、淡紅色に水色の派手な縦縞の着物と、馬鹿気て大きく結つた髪に刺した大形のピンと、太つたからだとが彼女の職業を明らかにして居た。

女が居るのは分つたが、と言つて此の雨に又出て行く気は出なかつた。で、御手洗の所の小さい屋根で我慢しやうかのためらつて居た。すると、

「今晚は——」と女が言つた。

「今晚は——」

襟首に落ちた軒滴の様に、愛嬌がある様でも冷たい云ひ方だった今更御手洗のそばで我慢するのも却つて妙になつて、同じ拝殿の屋根の下へはいつた。

『急に來ましたねえ——。』女はすらすらと言つた。彼は一寸気味が悪かつた。

しばらく黙つて居た。こゝつと云ふ雨の音が大地を叩き続けた。白いしぶきが霧の様ななつて雨の中を悠々と立ち迷つて居た。御手洗の手拭が水気を含んでひたひたとひらめいた。

「随分おしばらくね。」雨の大粒がぴちぴちと跳ねる砂をすかし見乍ら女がつぶやく様に言つた。

「え？」

女は彼の気味悪さには無頓着だった。

「ご存じでせう私を？」

はつと感った。

「知りませんよ。」哀つぽかった。

「さう？」そして一寸ためらつてから、

「私存じてますわ。」

「え？」十分に押され気味だった。

そして二人ともしばらく黙つた。雨が一寸弱くなつて又直に勢を増した。気がつくつと酔がほとんど醒めて了つてゐた。

ある嫌気が出て来て、もう少し雨が弱くなつたら出かけようと思つて居た。と、女がまた話かけた。

「私、御目にかゝつた事がありますわ。」

「どこですか？」

「ほゝゝゝ。」と、女はむしろ華やかに笑つた。然しその声は凄味を帯びて社殿の中に反響した。何かしら冷たいものが脇の下を掠めた様に彼は思つた。

「お名前も存じて居ますわ——。」

「——？」

それは一脈の安心だった。然し益々気味悪かつた。女はそんな事には無関心な様に

「君なきやすたれはせぬものを——今ぢや流浪の旅のそら——。」と小声で歌ひ出した。

彼は、全く黙殺された自分の黒い洋服姿を見出した。

たまらなくなつて逃げ出さうとした。然し女は平気で歌つた。

「ほのかにほのかに恋しくうて——熱い涙が——」

（今だ！）さう思つた。で、皆歌ひ終らぬ中に、

「さよなら。」と言ひすてゝ一二歩雨の中へ歩み出した。

「六」

「あら、もう少しお待ちなさいよもう晴れますわ——。」如何にもすらすらと一と息にまくし立てゝ、女は軒から外へ手をさしのべて空を見上げた。白い手首が闇の中に浮んで消えた。

「いえ、おそくなると何んですから！」

そして彼は今一歩進んだ。

「待つて頂戴、私も行くわ。」

ためらひもせず軒下を出て、彼の方へ近づき乍ら、又「ほのかにほのかに——。」と歌つた。

雨は幸ひに次第に止んで来た。二人は並んで電車道の方へゆるい坂を上つて行つた。女は始終何か歌を唄つて居た。

雨が降つたので大抵の家は戸を下して居た。どこかで時計が十時をうつた。彼は始終黙つ

て居た。どこで此の女に会つたらうか、そればかりを考へて居た。そして街燈の下に来た時にそつと、女の顔をはつきりと見やうと企てたり等した。

「あら、私こつちよ」

不意に言はれて彼は立ち止つた。

「寄つて行かない？」一寸ほゞゑんだ様だつた。

「おそいから止ませう。」

「いゝぢやないの、ついそこよ。」

「いやあ——」彼はためらつた。

「御存じでせう、あすこよ。」

指したのは暗い道だつた。が、一軒だけ、赤々と灯のついたカフェの裝飾電燈があつた。

「いや、又こんどにします。」

「さう！ぢや明日いらつしやいね、さよなら。」

女は案外あつさりと言つて、水たまりを避け乍ら歩き出した。彼も反対の方へ歩いて行つた。

「いつそ二人はしらぬうかうに——

放れ小島でえ——。」

女は歌つて居た。その歌声に、何故か引きつけられて彼は耳を澄して歩いた。

後から考へて見ると、そのカフェには四五人の友人と一緒に一度行つた事があつた。それを思ひ出すと、彼は妙に行つて見たくなつた。そして、思ひ切つて四五日後に行つて見た。

それが栄子だつた。

其後彼は随分度々そこへ出入りした。卒業迄のほゞ半年ばかりの間、二三日目位にはきつと紅茶のみに行つたものだつた。

何の事もなくて三月が来て了つた。そして就職の方が定つて、明日は郷里へ帰らうと云ふ晩に、妙な別離の情が起つて来て又栄子に逢ひに行つた。

硝子戸を押して入ると栄子が独りテーブルにもたれて夕刊を読んで居たが、

「あら、もう来ないのかと思つたわ。」と言つた。そして彼が何も言はないでかすかに唇を曲めた間にまた続けた。

「知つてんのよ私、明日帰るんでせう？」

「誰が言つたい？」

彼は坐り乍ら言つた。

「さうでせう、明日帰るんでせう？」

「誰がそんな事をしゃべつたい？」

「そんな事どうでもいゝわ、ね、さうでせう？」

「さうだよ。」かすかに哀れ気な女の様子に引ずられて彼もいつ迄も笑つて居られなかつた。

女は黙つて奥へ行くとやがて紅茶のコップをもつて来て彼の前に置いた。

「誰がそんな事を言ったんだ？」

「え？あのね——」

そのまゝ二人は黙り込んで了つた。角砂糖をのせたまゝのさじを彼はそつと紅茶にひたした。長い沈黙だつた。硝子戸の外を靴の音が通りすぎて行つた。

「遂々お別れだわね——。」

彼はじつと紅茶から上る湯気を見て居たが、その声にさそはれてふと目を上げると、女も湯気を呆然と見て居た。

「淋しいかい？」

彼はコツプを持ち上げた。

「は……」女は急に笑つた。うつろに、然し華やかに——。（しまつた）彼は突嗟に思つた。

「あなた一人が男ぢやあるまいし——。」

「いひひ……淋しいくせに——」強ひて彼はなじる様に争つた。

「お気の毒さま、代りはもうちやんと雇つてあんのよう——。」

「何の代りだい？」

「あんたの代りよ。」女は顎をつき出した。

「なあんだ、淋しいんなら淋しいつて言へよ、変な事を言つたつて見えすいてるぢやないか。」

苦々しく彼は言ひ放つた。急に此の女が癩にさわつた。擲りたくなつた。

「七」

二人とも押し黙つた。女はテーブルにもたれかゝつてマッチの軸を細くむしつて居た。

一時毎につまらなきが昂じて来た。何の為にこゝへ来たのか分らなくなつた。

ふいと立ち上ると彼は物も言はずに硝子戸を押しした。

「あら、おかへんなるの？」

彼は裝飾電燈をくゞつて外へ出た。灰色の余寒の風がストーブで暖まつた彼の頬を刺した。

「明日御帰んなるの？」女が店の前へ立つて後から言つた。

「あゝ。」彼は歩いて居た。

× ×

太鼓はまだどろりどろりと鳴つて居た。

拝殿の裏には良い風が来るので群衆にもまれて蒸された彼も漸く涼しい気持になつた。ひとりでに彼はほゝゑまれた。

（行つて見やうかな——。）

社殿を抜け出し乍らつぶやいた。

（だが、もう居ないだらう。）さうは考へたが、ビールでも飲んでほしいと思つて、彼は栄子の事を考へ乍ら少しづゝ人波のうすい方へ外れて行つた。

町角を曲つて、もう無くなつたかなと思つた裝飾電燈がやはり前の通りに輝いてゐるのを

見ると、一時、航海の後の母国の様な、帰るべき所へ帰った様な気になった。硝子戸は押し開いて、真白いカーテンが入り口で靡いて居た。それを頭でついと押し分けて、彼は三和土の上に立った。真新しく変つて居る調理台、それが一番先に目についた。と、その他の物は皆、あまりにも古ぼつたく見えた。

祭りの騒ぎでか、誰も居なかつた。テーブルの上に乱雑に新聞が投げられてあつた。その横手の壁で扇風機が唸つて居た。物足りない寂寞である。

「今晚は——。」

がたりと椅子を引き出して腰かけた。ビール会社の華美なポスターが幾枚も並んで居た。誰が出て来るか——それに或る期待をもち乍ら彼はポスターを呆然りと見て居た。

忙しい足音が奥から聞えて、間のカーテンがひらりと分れると、その間から栄子がふいと顔を出した。

「いらつしやいませ何をさし上げます——。」

女は機械的に言つた。彼は後向きになつてまだポスターを見て居た。然しその声をはつきりと聞き分ける事が出来た。

然もふり返らずに彼は言つた。

「紅茶。」

「紅茶お一つ！」女はそのまゝノレンをぐどつた。

栄子がまだ居た——それがより大きな期待のよるこびを彼に与へた。どう變つて居るか自分を覚えて居るかどうか。それが異常な興味だつた。

然し、忘れて居ればいゝに——と、さうも思つた。

「お待ち遠さま——お祭りで大変でございましたでせう？」

「あゝ」彼は紅茶を前に置いて、テーブルの向ふ側に坐つた女の容貌を帽子のひさしで目から遮つて、ひそかな楽しみを偷んだ。

そして一口呑み込んだ。

しばらくためらつた。そして、急につと頭を上げた。

「おや？」突嗟にさう思つた。うすぎたなく汚れた繻帯が女の左眼をボツタリと蔽うて居る。

最初に浴せやうとしたほゝゑみがギユツと口元で消えて了つた。

女はたしかに栄子である。だが、彼の期待したのは、こんなうす汚ない栄子ではなかつた。むしろ軽薄な浮気な所はあつても小綺麗な栄子だつた。

「どうしたの君？」

それが一脈のなつかしみの表現だつた。

ぼんやり何か考へて居た女は、ふとその繻帯した顔を上げた。一寸はづかしさうに微笑んで見せた。

「有難う御座あます。何でもありませんの。」

忘れて居るな——彼はさう思つた。然し今更昔の事を思ひ出させやうと言ふ気持にもなれな

かった。

「八」

苦い紅茶が薄気味悪く喉を流れた。
敷島を出して彼はテーブルの上で叩いた。
と、女はチツと隣寸をすった。それすらも彼にはある反感が感ぜられた。

彼は此処に来た事をくやんだ。こんな栄子を見る為に、わざわざ幻滅を感じる為に出かける必要がどこにあつたらう。

ぐつと一息にコツプを呑み干して立ち上った。

「有難うございます。」女も立った。

そして、祭りの夜を見る為か、彼について外に出た。

厭気が十分にあつた。けれども彼は唯立ち去るのが何となく不満だった。

彼は女と並んで店先の裝飾電燈の下に立ち止った。

「夜分はもう涼しうございますわね。」

女が言った。彼はそれに答へないで、

「君、栄子って言ふんだらう？」と言った。女はふり返った。

「あら、よく御存じですわね。」

「四年ばかり前に此処へよく来た××つて言ふ学生がね、今東京に来てゐるよ。」

「××さん？」

女がつぶやいた。その声をききすて、彼はぶらぶらと歩き出した。

「あゝ××つて言ふんだ。」

「——？」

女が後から何か言ふだらうと思つた。然し女は、彼が十間ばかりも行つて了つても、何も言はないで店先に立つて居た。

彼は何とはなしにガツかりした心で、暗い道を歩いて行つた。

× ×

帰ると兄達はもう寝支度をして居た。

「どこへ行つた？」と兄が言った。

「お祭りを見てそれからコーヒーを呑んで来た。」

「お祭りも大したもんぢやないな——」

「——」

「何が面白いんだか分らなくなつたよあんなものは——」

彼はかすかに兄をあはれんだ。

「たまにはいゝもんだよ、自分の存在を忘れて居られる丈けでも——。」

「もう蚊帳をつらなくてもいゝでせう。」と嫂が言った。

「さうだなあ。いゝだらう——人混みの中へはいつて自分の存在を忘れられる人間は幸福だよ。」

彼は黙つて煙草をすつた。屈托した生活の中にみじめに押へつけりられて居乍らも、自分で超越を感じて居る様な昔乍らの兄がなつかしくもあり淋しくもあつた。

「××新聞の話はまだきまらない？」

兄は明らかにその話にふれられ度くない様だつた。

「もう少し待てつて言つた。」

「今日行つて見たの？」

「うん、生意気だよ。三時間以上も待たしておいて——」

「今迄の方へずつと行つてれば良かったのにねえ——」

嫂がまだ未練らしく言つた。

兄は厭な顔をして黙つて居た。彼は何故かぐつたりして、どたりと床にもぐつた。

「ほんとうになぜ向ふを止めたんですの？」

嫂はしつこくそれを言つた。

「止めたいからさ。」

「だつて後もきめないで止める人があるもんですか。」

「あんな所に長く居られるかい。」

「それでお金がちつともはいらなくてもいゝの？」

「——」

「困るのは私だけぢやありませんか、辛抱氣がないからいけないですよあなたは——。」

「——。」

「ねえさうでせう。」

「物質的な奴だなあ貴様あ！」

苦々しく兄は言ひ放つた。

「だつて——」

「だつて何だ——」

「——。」

兄はどすんと床にはいつた。

「いつ迄もくどくどと愚痴を言ふのは止せ。みつともないぞ。」

「だつてちつとも私の苦勞なんか考へて下さらないんですものを——。」

嫂は甘える様な涙声で言つた。

「九」

彼はどすんと寝返りをうつて彼等の方に背を向けた。ほのかに妻が恋しかつた。身体のみはりが妙にうそ寒い様に思はれてならなかつた。

嫂が鼻をすゝり上げた。

息づまる様な沈黙だつた。

かちツと兄がスイツチを捻ると室の中は冷たく静まつた。硝子窓の下半分が青く光つて居た。月が上つたのだ。

彼はいつ迄もねつかれなかった。妻が恋しくなつて来た。悔が静かに彼を責めて行つた。彼は目を開いて、次第に下に這つて行く窓の月光を見て居た。遠くで時計が鳴つた。

ゴーツと馬場を渡る風の音がした。窓にうつつて居る柿の枝がゆれはじめた。風が出たのだ。

蚊が、耳のあたりをしきりに唸り乍ら飛んで居た。

長い沈黙だった。月光が段々下に下りて行つた。

「あなた——」

涙声で嫂がさゝやいた。

「うん？」

彼はハツとした。

「ねられませんわ。」

「なぜ。」

「蚊帳をつりませう。」

「あゝ。」

嫂は鼻をすゝり上げた。そして立ち上つて押入れを開けると、ホツと、吐息した。

蚊帳のサラサラとすれる音がした。チリンと釣手の環のかち合ふ音がした。

彼の目頭がジーツとうるほうて来た。何故かは分らなかつた。一人の兄と一人の弟、その妙に怪しい運命が、細雨の中をたゆたひ乍ら動いて行く白い煙の様にしみじみと泣きたかつたのだ。

× ×

翌朝、彼は早く起きて、馬場のはづれの荒地にはいつて行つた。露をおいた草は冷たかつた。初秋の朝は心ゆく迄晴れて清々しかつた。

彼は草の露をふみ乍ら、考へ込んで歩きまはつた。風がかすかに冷たかつた。

牛乳車がガラガラとやかましく通つて行つた。彼は腹立たしくなつて、道からずつと奥の方へ歩いて行つた。

ふと、無花果の皮が落ちて居るのを見附けた。見上げると、半ば熟した実が五つ六つ見られた。広い葉の間から見える空が青かつた。

彼は一つもいだ。切口から白いねばっこい汁が泌み出て来た。

皮をむいた。淡紫色の肌が冷たさうに怪しかつた。

「あの家は空家だ。よく実つて居るだらう。」

彼はしばらくその紫色の肌を見つめて居た。悔がうそ寒く身にしみて来た。

どこかで朝の汽笛が鳴つた。木立の上を、昨夜の名残の風が亘つた。

× ×

午後、彼は妻に宛てた手紙をもつて出た。

そして、それをポストに入れてから、当もなく町を歩いて行つた。日が暖かく照つて居た。

麦藁帽子のふちがしつとりと汗ばんで来た。

ふと、社の前へ来た。昨夜来た社だった。祭の後の乱雑な境内を風がぐるぐると廻つては紙屑をまき上げたり等して居た。

黒々と高い杉の梢で百舌鳥が鳴いて居た。

細い路をうねくねと、彼は馬場の方へ歩き出した。

彼はトタン塀に添うて路を曲つた。そして、丁度反対の方へ行く女とすれ違つた。

彼はふり返つた。栄子だった。

まだ繃帯に片目を包んだ彼女は、彼には気づかない様子で通りすぎた。

彼も直に歩き出した。

彼は少しも栄子に執着を感じはしなかつた。そしてあの手紙を受け取る時の妻を想像した。生垣の間にはさまれた細い路には、初秋の日が生々と輝いて居た。(をはり)

放たれたる犬

彼は法律に依つて保護されて居ない、故に法律に依つて縛られて居ない一匹の野犬であつた。野犬であるからには親も分らなければ産れた場所も分らなかつた。

唯彼は或日、それは雪の積つた風の寒い日であつたが、郊外のある家の庭に、食物を探しにはいつて捕へられたのである。そして彼はそこで飼はれる事になつた。

彼は何歳であるか分らないが、唯立派に生長した、大形の雄犬であつた。彼は野獣の獯猛さと野獣の賢さと野獣の健康とを持つて居た。彼は嘗て思ふが儘に山野を馳つて腹を満たして居た。落葉の上、叢の陰に眠つた。その彼が捕へられたのである。

主人は会社員である。妻は四十がらみである。子供は、下女は、等々がごたごたとして居た。此の家の庭で、彼は雪の日に捕へられたのである。細引で首から胸迄縛りあげて、扱縁の柱につながれた。

野の食物から考へれば決してよりうまではないけれども、食物を探す事も要らないし、唯反抗さへしなければいゝので、少しの間は彼に取つて此の家は住み良いに違ひなかつた。

主人は彼の頭を暇つぶしに叩いては、支配者的法悦に浸つた。常に上役に圧迫されて居る者は機会ある毎に他の者を圧迫したいものである。

妻は遠くから眺めては毛が汚いの、目が恐ろしいのと文句をつけて居た。

かうして彼は其後一ヶ月半と言ふものつながれて居たのである。

彼は或日、自分の庭に駆け込んで来た犬を見た。それは自分よりはやゝ小形な美しい犬であつた。

当然彼は猛然として飛びかゝるべき所だつた。だが、彼が繋がれて居なかつたにしても彼は恐らく飛びかゝりはしなかつたであらう。彼は立ち上る事にも吠える事にも興味も気力も感じなかつた。かの犬は、彼の形の大きさに押されてか、低くうなつたのみで出て行つてつた。だが彼の心は乱れて来た。

——自分は林の王だつた。自分は自分の天地を自由に走り、食物を捕へて居た。今自分はさうした何等の労働をも要しない。だが今日の自分の態度は何だ！自分の力は、昔林を駆け廻つた自分の力は今衰へやうとして居るんだ！

その時だつた。下女が彼に呉れる飯を皿に入れて持つて来た。彼は綱の許す限り近よつたと、下女が叫んだ。

『お待ち！待つといで！』

いつも言はれる此の言葉が、其の日に限つて彼の頭にびんと響いた。で彼は黙つて縁の下にもぐつて了つた。すると下女が又呼んだ。腹がへつては仕方がないから彼は又縁の下から

這ひ出して食べやうとした。と下女が再び叫んだ。

『御待ち！おまちつたら！』

そして彼の頭を一つ叩いた。

——わん！

何と言ふ久しぶりに彼は腹の底から怒りに燃えて叫んだ事か！下女は皿を投げすて、台所にかけて込むと、

『まあ奥様あの犬は私に——え、口惜しい！畜生！今晚はもう御飯をやらないから！』と言った。

彼の土の上の飯を見乍ら考へた。一体自分はこんな所で何をして居るんだ。飢ゑる事は無いだらう。だがそれだけで自分は満足出来るだらうか。どこに生活の面白さがある。どこに生き甲斐がある。自分の力は、齒は、足は、そして此の大きな体は、此処に居て一体何の役目を果して居るんだ！

すると彼の目には嘗て走つた林が浮んで来た。嘗て眠つた草陰が浮んで来た。美しい小川が流れて居た。幅四五尺の川には清水が流れて居て、いつでも喉をうるほす事が出来た。

林には鳥が居た。兎が居た。木の下には厚い苔が蒸して居て、木の葉を洩れる日光を浴びて一眠りするのには恰好の場所だった。天氣の良い日には毎日の午後をそこで暮して居た。林の外れの岡には季節毎に花が咲いて居た。

さうだ、あの小川の向ふに狐が居るのを見つけた時、疾風の様に小川を躍り越えると忽ち前足であの黄色い横腹を押へつけて、噛み締めた顎の間で首の骨ががくと折れた。

自分は一体此処で何の為の惰眠を貧るんだ！自分は生れた時からもう自分で働いて自分で食ふべき野の獣だったではないか！此処は自分の住むべき所ではない！

彼は立ち上らうとした。然し、何と言ふ足のだるい事か！何と言ふ氣力のない事か！

彼は再び地に腹這つて考へる事にした。

そして彼は又、結局かうして居る方がいゝのかも知れないとも考へた。

かうして数日が過ぎた。彼は一日中退屈して居た。時折遠い林の木陰が目の前にちらついていた。

彼は縛られた柱のまはりぐるぐると何回となく廻つた。そしてふと、柱の根本にもぐらもちか鼠かの穴があるのを発見した。

彼は穴の前に半日坐つて出て来る何物かを待った。だが何物も出て来もせず、そして彼の生活にも何の変化もなかった。

で彼はぢつと坐つた切りで考へ込んだ。春の日が暖かに照つて居た。目の前の自分の汚ない皿がきらきらと光つてまぶしかつた。彼は林の小川が日に輝いて居た事を考へて居た。

それにしても自分の生活は此のまゝで終るのか、さうした淋しさがふと胸に迫つて来た。此の黒褐の毛の中にうごめいて居る活動力をどうしたらいいのか。それが彼には分らなかつた。

力あり勇氣あり健康なる者に取つて、その力を外界に向つて出す事の出来ない生活を与える事は天理に反く。

天理は兎もあれ自己の意志に反く。

この位苦しく悩ましい生活は有り得ない。彼は綱を一ぱいに引張つて足を踏ん張つて見た。綱がきーきーと音がして切れるのかと思つた。

——あゝ活躍！野の生活！自分は元来野の獣なんだ！闘ひつゝ生きる者なんだ！

その夕方、主人が会社から帰つて来ると、妙ににこにこしながら彼に近づいて、ステツキの先でコツコツと彼の頭を叩いた、彼は憤然として縁の下に潜つた。

『おい。出て来い。』

主人は綱を手ぐつて彼を縁の下から引き出した。が彼は再び縁の下に這ひ込んだ、これで四五回続いた。

『こいつしぶとい奴だ！』主人はステツキでいやと言ふ程彼の頭を叩いた。

彼は野の獣である。保護即ち束縛たる法律の手を放れた野の獣である。

憤激は彼の胸を打ち彼の四肢は勇躍した。

『わん！』

腹の底から彼は吠えて飛びかゝつた。

綱はぶつりと切れて彼は野に放たれた。

ステツキを振り上げた男の手首に彼は勇躍して噛みついた。鋭い人の叫びと犬の叫びと。

忽ち彼は身を翻して生垣を躍り越えたと野の道を一目散に走つた。

ふり返ると、西の林に、赤々と夕日が燃えて居た。

——今こそ自分の力を振ふべき時が来た！自分は野の獣だ！あゝ天地の広さよ、野の美しさよ！今こそ俺は俺の力を信ずる！

彼は首を上げて西に落つる夕日を望み、扱故郷の林へと一散に走つたのである。

——一九二八、二一、一九——

小品 春日

子供連れの女客が帰ると夫婦二人丈けの家の中は急にがらんとした。細君が暇に委せて磨き上げた縁に桜草の花が満開だった。鉢の影が長く縁に伸びて居るのも如何にも春の夕方らしい気持であった。

菓子盆に盛った栗饅頭をつまみ乍ら夫はぼつとりと口を利いた。

「あの子は幾つだ？」

「五つでせう。」妻はその五つの子供がこぼした菓子の餡を丹念に拾ひ乍ら答へた。

「いゝ子だねえ。」

「えゝ。」

妻は黙然として長火鉢に手をかざし乍ら、夕食の献立を考へ始めた。夫は敷島に火をつけた。桜草の影が縁から障子に這ひ上る。

「お前子供が欲しくないか？」夫はやゝ淋しさうである。

「えゝ、さうね。」妻は献立に気を取られて気のない返事をする。

「どうなんだ。欲しいのか欲しくないのか。」

彼は冗談の様に笑を含んで居るが内心非常に熱心であった。

「えゝ——。」と細君はやはり煮え切らなかつた。「それより小鰻があるんですけど焼きませうかフライにしませうか。」

「俺あ近頃になつてしみみ子供が欲しくなつたね。」と夫は迷懐めいて来た。細君の耳にははいらぬ。

「ねえあなた、フライ？」

「うん。どつちでもいゝ——お前子供が欲しくないのか？」

細君は火鉢から立ちかけて答へた。

「さうね。欲しくもあり欲しくもなし——」

妻が台所へ行つて了ふと夫は茶の間にぼつねんと坐つて煙草をそろそろと鼻から吐き出しては庭の方を見るときもなしに見て居る。桜草の影がどンドン障子を這ひ上つて来る。日の光が刻々に弱くなつて行く。台所では瓦斯に火がついてゴーツと言ふ音が夕方らしいあはたゞしい空気を漲らせる。

彼は退屈になつて縁迄出て見た。去年の暮に産れた雄犬を貰つて飼つて居るのが近頃めつきり毛色が良くなつたと彼はしみみく見た。春になるとかうもなるのかと思つていた。

ふと、花の香ひがした。淡紫色の小さな花をつけた灌木が庭の片隅にあつた。沈丁花である。彼はホーシヤ（犬の名）の頭を撫で乍ら春の空気を花の香りと一緒にしみじみと呼吸し

た。

夕食の卓に坐つて夫は又言ひ出した。

「お前ほんとに子供が欲しくないかい？」

「さうね、欲しくもないわ。」

「分らないね。どうなんだ。」

「だつて——」と妻は恥しうにした。「いくら欲しくたつて駄目なんですもの。」

「だからさ、病院に行つて見て貰つたら良いぢやないか。」

「だつて——嫌なんですよ。」

「それぢやいけないよ。我俣だよ。子供が欲しけりやその位の事は——」

「あたし子供なんか欲しくないわ。」妻は恥しげに片頬笑んだ。

「あんな事を言つて——少しは女らしく子供位産めよ。」

「はは……」と細君は笑ひ出した。

「そんな事言つて無理だわ。私の身体ぢやもう産れる事なんて無いわ。」

「なぜさ。」と夫は真面目である。

「だつて——もう五年も六年も生まれなきや一生子は産めないにきまつてるわ」

「そんな事定つちや居ないよ。だから病院へ行つて見て貰へつて言ふんだよ。」

「いや。病院へ行く位なら離縁された方がいい位よ。」と言つて妻は小さく笑つたが、ふ

と物淋しい涙が沁んだ。

「今更泣いたつて仕様が無いけど——」と夫はやゝしんみりとした。

「見てもらつてその上で駄目なら諦めるけど——」

「でもね、産婦人科病院で嫌なのよ、そりや——」妻は鯨のフライがぼーつと霞んで食べにくいのであちこち突つきまはし乍ら夫の同情を求めた。

「仕方がないねえ。」夫は妻の弱々しい首すじをじつと眺め乍ら、美しいなあと思つた。それから茶をすゝり乍ら、美しき姿は持ち乍らその美しさは一代限り、死ねば胤迄尽きやう

とは無情ない無情ない運命——と言ふロミオとジュリエットの台白を思ひ出して、ふと暗然とした。

翌朝、夫は新聞を読んで居た。妻は朝食の片づけ物を終つて髪を結つて居た。春の朝日は縁から室の中迄射し込んで、火鉢の鉄瓶の沸る音迄長閑だつた。

その時、ふと床の下から異様な鳴き声が聞えた。赤ん坊の声に似た、か弱くして妙にたどたどしい長く尾を引く声だつた。

「おや。」と夫は新聞から顔を上げた。ホーシヤは去年の暮生れた計りで、まだ交尾期は早過ぎると思つた。何れにしても雄犬だから安心だと考へて又新聞に向つたが、鳴声は中々止まなかつた。

「何だ。」夫は縁迄行つて見た。すると縁の下からホーシヤが飛び出して、その茶色な身

体をくねらせる様にして彼の足を舐め初めた。

然し縁の下の鳴声は依然として続いた。夫はそつと縁から下をのぞき込んだ。そこには黒や斑の四五匹の生れた計りの小犬がクーンと鼻を鳴らして居た。

「おいおい、来て御覧。」

「何？」と妻は結びかけた髪を押へ乍ら出て来た。

「のぞいて御覧。ほら！」

「まあ！ホーシヤの子でせうか。」

「さあ。何にしても呆れたもんだね。」

「まあ！」と妻はどこ迄も驚いた様な声である。「もう親になつたのかしら。」

「他所の犬がホーシヤに子供を押しつけて行つたんだらう。大変だね。」

「大変ね。」と妻は言つて又鏡に向つた。夫はしばらく犬の子を見て居てから火鉢の前へ引返した。その中に犬の鳴声が止んだ。沈黙が長く続いて、妻は髪を結び終り夫は新聞を読み終つて煙草に取りかかった。

やがて妻も火鉢に来て茶を入れた。二人とも黙つて縁の桜草の茎が静かに揺れるのを見つゝ居た。

「おや。沈丁花の香ひがこゝ迄するね。ね。ほら。」と夫は嬉しさうに言つた。すると妻は漸く話の口火を見つけた様に言ひ出した。

「あたし——行つて見やうかと思ふの。」そして又恥し気に微笑んだ。

「う？どこへ。」夫は分らない。

「病院——」妻は火箸で灰に線を引き出す。

夫はにやりと微笑む。

「どうしたんだ。」

「子供が欲しくなつたの——」そして妻は「ははは……」と空虚に笑つた。

「何だ今更——その位なら早く行けば良いのに、世話ばかり焼かしてさ。」

「だつてそりやあなた、女の身にもなつて御覧なさいよ。婦人科病院なんて嫌な所よ。」

「さうだらうとも。離縁されるよりもね。」

「いやそんな事言つちや。」と妻は立ち上つた。夫はその後を目で追ひ乍ら、

「何でもいゝから早く行つといでよ。」と言つて茶碗の中へ微笑を注ぎ込む様にして茶を飲んだ。

「えゝ行くわ。今何時？」妻は次の室からむしろはずんだ声で言つた。

「十時半。」

「午前がいゝかしら午後が良いかしら。」

「朝の中だね。午後は又忙しくなるよ。」

「でも帰りに買物をして来れば恰度いゝと思ふのよ。」

「いゝや朝がいゝ。買物なんかどうだつていい。」

「随分せつちちなね。」

「あゝ。何、だつて早い方がいゝ。」

「あゝ嫌だなあ、あんな所へ行くの——。」

「それそれ、それだから早く行けつて言ふんだよ。」

「いゝわよ。行くから。もう黙つてゝ頂戴よいらいらしちやふから——。」

夫は微み乍ら又火鉢の中にかゞみ込んで灰に字を書き初めた。春の日が桜草の上に暖かく照つて居た。ふと、一陣の和やかな風につれて花の香が室の中へ流れ込んで来た。

「あら、ほんと。こゝ迄沈了花の香がしますわね。」妻が隣の室から言つた。

「うん。」夫はやがて産れるであらう子供の為に、男の名と女の名を一つづゝ考へて居た。

——一九二八——三——廿九——

(「山陽新報」昭和四年四月一〇日、一一日、一二日、一六日、一七日、一八日、二一日、二三日、二五日、二六日、二八日、五月一日、二日、七日、八日、九日の夕刊に都合一六回連載)

昏瞑

「一」

此の五六日はほんたうに暖かだった。今度こそは春が来たんだ、さう皆が思った。あんなにも積つて居た雪はぐんぐん融けて行つたし、刃物の様な北風もびつたりと止んで了つて居た。十一月の中旬からずつと続いて来た長い瞑い冬が漸く去つたのだ。そして、これからはもう一日毎に春になつて行くんだ、さう思はれた。桐島にはもう芽の出さうなやはらかさが漂つたし、池の畔では氷がぴんぴんと割れる音がして居た。

「さあ、到々春だ！」仙助が、商売物の大根が案外に冷たくないのに驚いて年甲斐もなく歓声を上げたのも昨日の朝だった。

だが、もう飽きあきしたあの薄墨色の空が又やつて来て、六々日の光もさ々ない今日の天気は、此の四五日が暖かだった丈け、それ丈け陰気に思はれた。家を出る時に

「今日はずつと寒くなりますよ。」と妻が元氣のない声をかけたので首巻き丈けはして来たけれども、今仙助が荷車を引き乍ら通つて居る小川の岸は、どう思つても冬だった。

小川の水はもう氷つても居ないし、その向ふに遠く開けて居る田圃にしても、どうにか生々した土の色になつて来た。然し、田を越えて向ふに静まり返つて居る岡も岡に沈まうとして時々弱々しい光を投げる入日も、決して春の姿ではなかつた。

とは云へ、もう春が近いと云ふ考へが町の人達皆にあると見えて仙助が曳いて廻つた野菜物の売れ方も何とはなしに元氣だった。そして今日は車一杯につんだ物を殆ど皆売り尽して居るので、帰りの車は軽かつた。然し彼は元氣がなかつた。小さなそのくせがつしりした、首の短い彼の様子は、妙に元氣がない様に見えた。四十過ぎた彼の頬に疎に伸びた髭は、余計に彼を見すばらしくした。

娘が流行感冒にかゝつた。それが心配で彼は暗い顔をして居るのかも知れなかつた。此の冬の寒い間中此の地方に流行した風邪の残りが突然彼の家にやつて来た。と言つても、彼が今朝家を出る時に

「おい夏子、風邪声だなあ。」

と彼が声をかけたら

「えゝ、寝やうかと思つてるんだけど……」

等と答へた位の事だったが、それでも子煩協の彼には心配だった。彼が車を曳き出さうとし

た時には流石に頭が重いと見えて

「お母さん、寝床を敷いてよう」と云ふ、もう十七にもなるのに甘えた様な声が聞えた。

「それ位なら始から起きなきあいぢあないか。」妻が面倒臭さうに言つた。彼は今一度土間へ引返して

「今そんな事を言つたつて仕方がないぢやないか——暖かくして寝てろよ。」と云ひ置いて外へ出た。

それが彼には気にかゝつて仕方が無かつた。妻が非常にいらいらした性で、子供の世話も碌にしてやらないから病人の方では随分不自由だらう等と考へて居ると早く帰つてやり度い気で一杯だつた。

「二」

その上今日は彼の話相手が無かつた。いつもなら車の後押しをし乍ら色々と父の手助けをするしつかり者の三郎がいゝ話相手なのだが、三郎の方に一寸した用事があつたので今日は仙助は、その小さな、がつしりした手で唯一人で車を曳いて居た。三郎さへ居れば仙助は決してこんな暗い気持になる筈ではなかつた。彼はたつた此の間高等小学を卒業した許りだが仙助に取つては実に頼もしい息子だつた。彼に似て体は小さかつたけれども、力も相当にあつたし学校も優等だつた。それで居て正直で、はきはきして、仙助に取つては片腕と頼む事が出来た。長男はもう二十歳にもなるのだが高等小学を卒業する時分から気が変になつて行つた。修は、母親に似て躰は大きかつたし、長男らしい穏和な所もあつたので、一時は仙助もこれからは少しは樂が出来るかとも思つたのだが、もう半年もたつたら卒業と云ふ時になつてから原因はよくは解らないが、撃剣に凝つてあまり頭を叩かれた為だつたのか、それとも何か先天的なものだつたか、段々気が変になつて行つた。その癖、身体は丈夫で、人並以上に食べもして居たが、此処一年ばかり前からは段々身体の自由が利かなくなつて、暗い室の隅に坐つた切りで、殆ど一口も物を言はずに、唯眼を光らせて居るのだつた。食べさせて置きさへすればいゝのだから、修は別に手のかゝると云ふ程の事もなかつたがそれでも修の存在は彼の一家を全く暗くして居た。夏子と三郎と、それに仙助に妻の四人が平和な夕餉の膳に向ふ時でさへも、室の隅に坐つたきりで、目を光らせ乍らもぐもぐと独りで食べて居る修を見ると、どうしても明るい気持で笑ふ事は出来なかつた。

修がさうした風になつてから後は、彼等に取つてはほんたうに長い闇だつた。仙助は町内での物知りで、よく手紙の代筆を頼まれたり、祭りに招かれたり、橋を架けかへるので寄附金を集めてまはつて呉れと頼まれる等で、町内での正直者でもあり多少の人望ももつて居たが、修があんな風になつてからは、人中へ出るのも肩身の狭い思ひだつた。時折何かの会合で一本も呑めば直酔ふくせに好きな酒を御馳走になつて帰つて来て、もう皆が寝て居る室の電燈を点けると、室の隅に厳然と坐つて彼を凝視する、何かしら怨みを含んだ様な光を放つ修の両眼を見つけて慄然とする事もあつた。その時以来仙助は夜を嫌ふ様にさへなつた。自分の子である修の眼を見る事が彼には恐ろしかつたのだ。殊に夜それを見るのが恐ろしかつたのだ。ある時はそれは猫の様に光つた。ある時は蛇の様に光つた。

仙助の一家に取つて、修の存在は何と云ふ大きな暗黒であつたのか、そして又何と云ふ大きな恐怖であつたのか、其暗黒、その恐怖はずゐ分と長い間ではなかつたか。然し仙助はよくそれに耐えへて来た。彼は、その小さい身体に一ぱいにある、しつかりした氣象キョウでもつて、三郎を相手に働き乍ら、夏子と三郎との愛に引かされて生きて来た。彼はまだ四十を越して少ししかたない。然し、五十過に見える程ふけた様子をして居た。頬髭に白毛があるのに気がついたのも去年の秋だつた。

「三」

岡の木立の向ふに弱々しい日の光が沈んで了ふと、急に黄昏がやつて来た。仙助は汚れた手袋の上からしんと泌みて来る冷たさを両手に感じた。彼は極端に黙り込んで、店の並んだ明るい町へ下りる坂をがらりと車に押される様にして下りた。そして酒屋の前を通りかゝると。

「やあ仙さん、御精が出ますなあ」

と店の中から声をかけられた。彼は一寸ふり返つて

「今日は。また寒うなりましたなあ。」

と言つたきりで又うつ向いて車を曳いた。

帰りついた時はもうあたりは大抵夜だつた。彼は、うす暗い電燈の光をすゝけた障子の向ふに見つけると、車を置きつ放して土間にはいつた。そして出合頭に三郎をつかまへると、「車を中へ入れといへ呉れ。」と言つた。

「へい。」三郎は元気に答へて直に外へ出て行つた。彼は入れ違ひに室へはいつて見ると、夏子は仏壇の下の方に小さく隅へ寄つて寝て居た。そして、彼女と反対の隅に修が坐つて相変わらず彼睨アヤんだ。彼は修を尻目にかけて夏子の枕下へ行つた。物も言はずに娘の額に手をあてゝしばらく考へた。

「少し熱い様だな」

「大丈夫よ。」と娘は夜着の中につぶやいた。然しその声は弱々しかつた。

「薬を飲んだか？」

「いゝえ。」夏子はすなほに答へた。

彼は台所で仕事をして居る妻をふり返つて言つた。

「へプリン丸はまだあつたか？」

「どうですか、見て下さい。」

「お前も風邪声だなあ。」と仙助は心配さうに言つた。妻は答へなかつた。三郎が車を土間へ引き入れる音がして居た。彼は仏壇の脇の抽出しを開けて薬を探したが見つからなかつた。それから財布の中をかき廻し乍ら、

「三郎、へプリン丸を買つて来て呉れ。」と言つて、又夏子の額に触つて見た。

「大丈夫よ。」と娘は繰り返した。然し、暗い電燈の下に淋しさうに寝て居る娘の頭は、髪が乱れて、塵をかぶつて、力なく頼りなく見えた。

「御飯はたべられるか？」

娘はめたらつた。彼は淋しくなつて妻に言った。

「夏子は何かたべたか？」

「お昼一ぜんきり。」と妻が言った。

彼は煙管を出してブスブスと吹いて見た。それから目を上げてうす暗い電燈をじつと見つめた。修の鋭い眼光が彼の頬にあるのを感じ乍ら彼はぼんやりと煙管をいじくつて居た。と、急に心配になつて、壁にかけてあつた自分の着物を取つて夏子の上にかけてやつたと愈彼は淋しくなつて来た。修の眼の近くに居るのが堪へられなくなつて彼は裏へ手を洗ひに行つた。此の小さな町はもうすっかり真暗だつた。果しなく黒い町の空に、大通りにある仁丹の広告燈のみが虚しく光つたり消えたりして居るのが見えた。武骨な仙助の手と胸とは、何物かに祈りたい様な気持になつて行つた。彼の家に一ぱい立ち罩めて居る大きな暗黒の中にあへいで居る彼自身を今しみじみと、考へて見たくなつたのだ。

「四」

翌朝も仙助は車を曳いて町に出た。然し夏子が今朝も高い熱で苦しんで居るのが気懸りだつたので早く商売をしまつて、帰り道にある医者の家へ立ち寄つた。

車を門の前に停めておいて、厚子を着たままの彼は医者 of 玄関にぼつかりと立つた。

「娘が感冒の様なんですが、往診の時に御寄り下さいませんか。」彼は首巻きを外し乍らさも困つたらしく言つた。

「熱が有りますか？」医者は白い上つ張りを着て、聴診器のゴムをいじくり乍ら無愛想に尋ねた。

「それが少し高い様なんでして……昨晚へプリン丸を吞ませましたけどどうも……。」

「御食事は？」

「昨日の昼一寸食べましたきりであとはもう何にも——。」

「はあさうですか——」と言つて医者は考へて居たが

「ぢやあ行つて見ませう、三時頃に。」と云ひ置いて診察室の方へ向き直つた。

「えゝ、何分御願ひします。」仙助は少しほつとして後姿におじぎをしてから首まきをまいた。石炭酸か何かの医院らしい臭ひが何かしら大きな黒い不安を彼に与へた。

仙助は車の梶棒に手をかけ乍ら此の町通りをずつと見渡した。何と云ふ訳もなしに医者 of 門を出る自分が省みられたのだ。町は灰色な午後の静けさの中に退屈さうに見えた。昨日迄の寒さは無かつたが、薄日が時々雲にかくれると、その度毎にぞくつと首をすくめる様な日だつた。白つぼく乾いた町と家々と空と、さうした慰めのない風景の中を、彼は又がらがらと野菜車を曳いた。四つ五つ並べた木箱の中には蜜柑とか馬鈴薯とか青菜とか積んであつ

て、それ等の上に無雑作に筵を一枚引かけた車を彼は馴れた手つきで曳いた。彼はもう二十年近くもこの商売をやつて来た。彼が裸一貫で此の町へ来てからの事を考へれば、近頃の彼は一と頃よりは余程裕な暮しも出来る様になつて来たのだ。彼が現在の妻を娶り、修が生れ、その直翌年に女の児が生れた頃は彼も貧のどん底であつた。

「なあに、直るさ、この位の風邪に——。」

彼の家が見え出した時に、彼は元氣よく自分に向つてつぶやいて見た。然し、此の冬の間を通して流行感冒でやられた人数は、此の小さな町にしては案外に少なくなかつた。それを思ふとあまり気休めめいた事は云へなかつた。その上夏子は弱い方でよく病気になるので、そんな事も亦彼の心配をたかぶらせるのだつた。

矢田さんが仙助の家へ訪れたのは、かれこれ夕方だつた。仙助は医者が夏子の脈をはかつて熱をはかつたりするのを、不安な気持でじつと見て居た。医者は最後に娘の胸をひろげさせて打診をはじめた。彼ははつとした。遂々伸び仕度も終らうとする頃になつた自分の娘の胸を、無雑作に引き開けて、その膨らんで来た乳房と、裕かに白く脂の乗つて来た肩や胸や脇腹やを、何でもない様にコツコツと叩いて行く医者の様子に、ある淡い怒りと不安とを感じた。

「見て貰はなくともよかつた。高が少々の風邪なんだもの——。」彼は淡い後悔すらも覚えるのだつた。それで、

「おい、お手洗をもつておいで、三郎。」と言つた。強制された様に、又逃れた様に、医者は診察を止めた。夏子は赤くなつた胸をかき合せた。仙助はそつと娘の上に蒲団をかけて四隅を軽く押へつけた。妙な安心があつた。

大丈夫だとは思つた。然し、医者か靴を穿いて居る所へよつて行つて小声で彼は尋ねて見た。

「如何でせうか？」

「五」

「昨日から肺炎になつて居ますね。」

矢田さんは事もなげに言つた。彼はぎくりとして次を待つた。待ち切れなくなつて、

「はあ。」と言つて見た。

「室を閉め切つて、暖かくして、湿布をしなさい。それから湯氣を立て、——。」

「はあ。」とも一度仙助は言つた。

「大丈夫でせうか？」

石田イシダさんは、落着いて居るのか言ひ悪いのか中々返事をしなかつた。

「どうでせうか先生？」彼はもう一度さう言はずには居られなかつた。

「え、——此処二三日は余程大事にしないと——危い病気ですからなあ。」

彼は此の医者が怨めしかつた。妙に落着き払つた様子が頼り無かつた。医者を妻に委せて置いて彼は夏子の方へ引かへした。急に彼は憎悪にかられてずかずかと室の隅へ突進した。

そこには厳然と坐つた修の眼光が刀の様に彼を鋭く睨んで居る。

「ちえつ」と烈しく舌打ちして彼は娘の顔をのぞいた。

「何か喰べたくないか？」何と云つていゝか分らないので彼はそんな事を言つた。娘は残酷にもそつと頭を振つたきりだつた。仙助は取り着く鳥を失つて呆然と立つた。

医者が帰つて行く足音がした。

仙助は何をしていゝのか解らなくなつて、何を考へていゝのかも解らなくなつて、よろめく様な力ない足取りで裏庭の方へ行つて見た。牛蒡や青菜等がつみ重ねであつた。彼が暇々に作つた万年青や蘭の小さな鉢があつた。だが彼は何を見ていゝのかも解らなかつた。

「肺炎——肺炎——」

彼は井戸端でせつせと大根の白い水々した肌にたわしをかけて居る三郎の後にじつと立つて居た。

「三郎——」

「え？」驚いた様に三郎は立ち上つた。

「姉さんは肺炎になつたよ。」

「肺——炎に？」

仙助はぐるりと後を向いた。そして、ぐんぐん暮れて行く空を仰いだ。黒い紫色の雲が西の空から伸びて居た。そして東の空に低く一抹の紅味があつた。大きな空だつた。大きな大きな空だつた。そして彼はその空の下にいつ迄も黙つて立つて居た。

× ×

翌日彼は商売を休んだ、そして夏子の側に着ききツて看病した。

「夏子、卵をゆでゝやらうか？」

「いゝえ。」喘ぐ様に娘は言つた。

「ぢやあお粥にしやうか？」

彼女は黙つて小さく首を振つた蒲団に半ば埋もれた様になつて居る娘の病んだ頭をじつ

と見て居ると、仙助は一刻毎に不安になつて来た。昨日は一日何も喰べないし昨日も極く少し喰べた切りだ。

「あゝさうだ、牛乳なら飲むだらう？」

勢づいて彼は言つた。が、夏子は相変らず一寸身動きした丈けだつた。

彼は真赤に火をおこしてある火鉢にもつと炭をくべた。そして湯を沸らせて、真白な湯気が室の煤けた天井に充ちて行くのを黙つて見た居た。それから娘の額に手をあてゝ見た。熱く、汗ばんで居る額に二三本の乱れ毛がべつたりと喰つ着いて居た。その乱れた髪をそつと掻き上げてやつた。彼は突然たまらない程の愛を感じた。此の病んだ、弱々しい、そして漸く処女らしい淋しさの見える様になつて来た娘を、じつと胸に擁いて親らしい愛撫を与へてやり度かつた。何かしら身内の熱くなつて来るのを感じた。魂の奥底から湧いて来る本当の愛であるのか、情熱であるのか、涙ぐましい様な興奮を彼は感じた。彼は娘の額にじつと掌

を当てゝ居た。気味悪い熱をじつと考へて居た。何故か息苦しい様な気がした。

「六」

「夏子？」彼はそつと名を呼んで見た。娘は答へなかつた。長い間彼は黙つて居た。井戸の方で、妻が水をくむ音がした。

「夏子？」

「ええ？」娘は蒲団の中でうめいた。

「苦しくないか？」

「胸が痛いんだげど——」遠慮さうに夏子が答へた。

「あ さうだ、湿布を更へような。」

仙助は不器用な手でそつと紐を繕いて、濡れた手拭を娘の胸から外した。若い、弾力に充ちた胸が熱をもつて喘いで居た。

「大丈夫だ決して——。」仙助はそれを見るとなぜか心強い気がした。

急に、彼は後に、濁つた、と切れと切れな「えへえへ……えへえへ……」と云ふ笑声を聞いた。ぎよつとしてふり返つた。修だ！

うす暗い隅に坐つて居る彼が、ゆるくたまらなさうに身を揺つて弱い微かな声ではあるが満悦さうな微笑で顔を曲めて居るんだ。

冷たい、恐ろしく静かで単調な地下の世界から来る笑ひ、それだ。仙助は真黒なふわふわとした冷たい物が身に迫るのを感じた。そしてその黒い物の中にぼつさりと伏せられて了ふのを感じた。

「えへえへ——」

冷たいふるへが彼の全身を通り過ぎた。彼は突嗟に十八年前に死んだ娘の幻影を眼前に見た。

「修！止める、止める！」

「えへえへ——」彼はゆつとりと身をゆすつた。彼は夏子の広げたまゝの胸に見入つて居るのだ。

「修！」と彼は叫んだ。胸がつぶれる様だつた。彼の小さな頑丈な身体は急に立ち上つた。そして修をどんと突き飛ばした。彼は居丈高にその前に突立つた。然し、倒れた修は彼には頓着なしに、高い熱で苦しんで居る夏子を見てえへえへ——と笑つて居た。

が、突然夏子をふり向いて、此のさわぎを省見る元氣もなく苦しんで居る彼女の乱れた頭を見つけた。

「夏子——」彼は急に彼女の枕下にべつたりと坐つた。

「夏子、しつかりして呉れよ。お前と三郎きりなんだから、俺が可愛いのはお前と三郎きりなんだから。」

その言葉が夏子に通じやうと聞えまいと、そんな事はどうでも良かった。唯、彼はその言

葉によつて彼自身を昏瞑の中から救ひ出したかったのだ。今迄通りに、此の二人の子供に対する愛に引づられて、そこに一脈の希望をつないで生きて行きたかったのだ。彼は云ひ終ると父親らしい愛情が興つて来て身ぶるひするのを感じた。彼の目は何物かを希求する様に輝いて居た。彼は幸福だと思はうとした。彼は明るみを見ようとした。唇は何か云はうとして震へて居た。眼が濡れて居た。

「唯今帰りました。」障子の外で、医者へ薬を取りに行つた三郎の声が出た。もつと前に歸つたけれども、中の様子に気を兼ねて外に立つて居た様だつた。仙助は吾に返つてあたりを見た。修はむくむくと身体を起さうとして居た。

「あゝ御苦労。」彼は小さな声で湿布の手拭を熱い湯で絞り乍ら言つた。

「七」

それから仙助は裏庭へ出て行つた。彼は積み重ねてある野菜に水をかけたり、牛蒡をしをれない様に土に生けたりした後で、万年青の小鉢を日当りへ出して並べた。いゝ天気だつた。二三目前の様な春が来たと思はれる朗かな青空が高く澄み切つて居た。彼はその暖かい日光を背中一杯に受けて、万年青の鉢の前にじつと立つて居た彼の小さな身体はどこことなく淋しげだつた。

「直る、きつとよくなる」さう思つた。

三郎が彼の方へやつて来て、同じ様に植木鉢を見て居た。

「こつちの又芽が出ますなあ」彼はそつと身をかがめて、刺の生えた凡々とした万年青の下をのぞいて見た。

「うむ。今年はいつ花が出るぞきつと」彼も一緒にのぞいた。

「ダリヤはいつ植ゑるんです？」

「さあ、もう少しだな」

「あれは酒屋で貰つたんでせう？」

「うむ」

「去年あすこのはいゝ花でしたなあ。」

「紅の濃い奴だらう？」

「えゝ、それから紅と白の混つた——」

仙助は長閑な気持になつて行つた。そして台所でせつせつと昼食の用意をする妻の音をきき乍ら、

「大丈夫だ。直るさ」と思つた。

× ×

午後になつて医者 came。

「どうでせうか」彼は尋ねて見た。

「えゝどうも——余り安心出来ませんなあ」

医者は頼りない事を言った。

「心臓があまり丈夫でない様ですから——」

「はあ」と仙助は答へた。そして医者の方へ込んだ様な様子を相談する様に見やった。医者は靴を開けて小さな薬瓶を出して、薬の分量を見やうとしてそれを目にかざした。彼は全然医者に委せ切る気になれなかつた。

「注射して置ませう」彼は云つた。

「はあ」彼は何の意見もなかつた。医者にされる様にするより外何とも出来なかつた。

医者は注射器に、その薬をしつかりと吸ひ込ませてから、目盛を見る様に日にかざして見た。仙助は、弱り切つて眼を閉ぢて居る娘の顔をぬすみ見た。

台所で湯のたぎる音がして居た。三郎が裏庭で木を割つて居る音が聞えた。仙助は夏子の苦しげな息づかひと、その度にびくびくと動く小鼻のあたりの弱々しい微動を見つめて居た。火鉢にかけて金盥からもうもうと白い湯気が立ち昇つて居た。

医者は自信ありげな手付きで一吋注射器をすかし見た。それから夏子の左腕を無雑作にまくり上げて、白い肌をちよいちよいつまんで見た。仙助は身内の熱くなるのを感じた。身体中がとけて行く様に思つた。

遂々医者は一寸つまみ上げた夏子の腕の肌に光つた針をぐいと突きさした。ぴくりと腕が痙攣した。そして娘は少し頭を動かした。医者はかまはずに注射器を押した。液が次第に彼女の中に押し込まれて行くのを、仙助は不安な気持ちで見て居た。自分のたつた一人の娘が何かしら不純になつて行く様な気がした。彼女の身体の中に、彼女以外の何物かゞはひり込んで行つたのだ。仙助は後悔を感じた。

「痛くないか？」彼は云つた。

「いゝえ、さう痛いもんぢやありません。」医者が代つて彼に答へた。

「さうですか。」と答へては見たが彼は娘の口から、此の医者の言を裏切る言葉がきこえた。かつた。そしてたへられない程に苦しむ夏子に強い強い愛とあはれみとを感じ度かつたのだ。

「八」

医者は道具を片づけて立ち上つた。

「大丈夫でせうか」。唯さう言つて見た。

「えゝ。今晚あたりが大切ですなあ——」。

そして土間へ下りて靴をかゝへ乍ら、

「あまり苦しい様でしたら御使ひをよこして下さい来て見ますから」。と言つた。

医者が帰つて行くと直に、彼は火鉢に炭をつぎ足した。そして、黙つて病人の枕下に坐つて夏子の顔をじつと見て居た。死んだ娘の事が又記憶に蘇つて来た。

「夏子——」彼は呼んで見た。それは親らしい愛情のたまらない程の興奮の静かな奔りであるのだ。娘の名が与へる響きを心行く迄味はひ度かつたのだ。そしてこれ迄に育てゝ来た彼自身の苦勞を満足に似た気持ちで考へ起して見たかつたのだ。彼はその小さな身体をしつかりと火鉢の側に据ゑて、じつと娘の顔に見入り乍ら煙管を指先でくるくると廻した。それは

彼の考へ込んだ時にいつもする癖だ。

「三郎！」彼は首だけ後向きにして言った。

「手が空いたら又薬をもらひに行つて呉れ」。

「はい」。と三郎の声が出た。

「もうないんですか？」妻が台所から驚いた様に言った。

「いゝや、薬を変へるさうだから——」。

返事が無かつた。彼は大分伸びた頬髭をざらりと撫でゝ見た。

× ×

其の夜、仙助は遂々眠らなかつた。昼の仕事に疲れた妻を先に寝せて了つてから、彼は火鉢に炭をつぎ足し乍ら夜通し起きて居た。

十一時を過ぎると、ぐつたりと疲れた夏子がかすかな寢息を立て始めた。その度毎に娘の肩がかすかに動くのが見て居る仙助には不安だつた。

煤け切つて真黒になつた六角時計がコチンコチンと耳につく音をたてた。火にかけてある金盥からは湯気もやもやと上つて居た。仙助はそこに坐り込んで煙管をいぢくつて居た。

夏子の側には妻がぐつたりと眠つて居た。妻は仙助よりはずつと大きい女で小肥りのした様子だつた。枕で根のゆるんだ日本髪がだらしく見えた。寝る室と言つては此の八畳丈けなので、三郎もその横に眠つて居た。

そして、隅つこの簞子にもたれて、修がぐつたりとして居た。その冷たさうな手や汚れ切つた着物を見て居ると、仙助はたまらなく修をあはれむ気持になつた。それで、彼はそつと立上つてうすい座蒲団を膝の上にかけてやつた。彼は暗黒を感じた。もう決して治るとは思はれない修の姿は、親の身になつて考へる仙助にとってはあまりにも無慘だつた。

彼は火鉢の側にもどつた。夏子がうなされた様なうめき声をたてた。苦しさうに曲めた顔を彼はうす暗い電燈の下でじつとみつめた。急に緊張した気持になつた。

「夏子——」。低く呼んでみた。

「うん——」。うめく様な声で答へたが直に又眠つたらしかつた。仙助はわけもなしに歎息した。

突然彼の耳に鋭い音が聞えた。遠くで鶏が鳴いたので。静まり返つた此の小さな町の真暗な夜の空に、神秘的な長い尾を引いて気味悪い声で鶏が鳴いたので。彼は頭を垂れてじつとその声を聞いた。ぞくぞくと襟首が寒い様に思はれた。時計の音が鋭く耳についた。彼は驚いた様に修をふり返つた。彼はやはり簞笥にもたれかゝつて何物をも忘れて了つた様な平和に見えた。仙助は暗い恐れを感じた。彼は十何年もかゝつて築き上げられた昏瞑を感じた。彼がいくら働いても、いくら憔悴しても遂に突破し得ない堅い大きな昏瞑が彼を全く閉して居るのを感じた。彼は今迄その暗黒と戦つて来た。たとひ彼の戦ひが唯消極的な保守的なにえ切らない物であつたにしても、彼は今日迄誰にも頼らずに此の家族を世間の荒寥の中から防いで来た。然し今、彼は遂に戦ふべき勇気を失つたのだ。此の堅い大きな暗黒は、彼の小さな身体と弱い力とで打ち破るにはあまりに大きく堅く、そして暗かつた。彼は身動きもせず

に坐つてそれに苦しみ続けた。彼はほとんど二十年ぶりで自分自身をあはれんで歎息した。そして暗い電燈を見上げた。彼の目は光つて濡れて居た。

「九」

夜が明けた。麗らかな春が此の町の上に遂々やつて来たのだ。美しい朝だった。輝きに充ちた太陽が威勢よく雲を破つて昇つた。仙助の一家をその下に憩はせて居る茅屋には、眩い程の日光が障子に当つて来た。総てが長い眠りから起き上る日だ。絶大な恵みとうるほひとを持つた春がやつて来たのだ。

然し、此の美しい朝は仙助の娘にとっては最後の朝だった。そして此の麗らかな日光は彼女の臨終を照す光であつた。

最後の苦悶が遂々やつて来た。若さと希望とに充ちて居るべき彼女の肉体は、今死の苦痛に降伏の叫びを上げて居るのだ。

臨終がやつて来た。厳粛な死がやつて来た。仙助は彼女の枕下に興奮して困惑して坐つて居た。彼は自分の娘に対して何も言ふ事は無かつた。生きる事が最早望まれない夏子に取つて、彼は最早何等慰むべき言葉も知らなければ、夏子から聞くべき事も無かつた。

十八年——彼はそれをのみじつと考へて見た。彼が生れたばかりの夏子を抱いて縁日へ散歩に行つた頃の事を思ひ出した。その夏子が今彼の前に居る。そして明日は居なくなるのだ。彼は何の感じも無しに医者をする事を見て居た。たつた一時間でも生きさせ様として注射の用意をする医者を、彼は呆然として見て居た。最後の迫る居る娘の手に、その白い肌には同情もなくブスリと針を刺した。彼女の身体に残つて居る最後の意識がびくりと痙攣したのみであつた。妻と三郎と医者とが夏子の顔をじつと見て居た。仙助は娘の顔を無感覚に見て居た。悲しい時なんだ臨終が来たんだ、ぼんやりとそれを意識したのみだった。彼の背中には障子を透して暖かい春の日が照つて居た。金盥の湯がチーツと鳴つて居た。

「駄目です」 医者の低い嘆息が聞えた。

「駄目か！」 突然仙助はさう思つた。そして夏子の顔を見た。彼女はかすかに目を開いて居た。然しもう顔は堅苦しくて無表情だった。乱れた髪が白い額にべつたりくつついて居た。

「おい、夏子、夏子！」 彼は胸が迫つた。

「夏子——」 妻が悲しさうな尻上りな調子で言つた。

彼は急にたまらなくなつた。彼は蒲団の上から娘の肩を握んで揺つて見た。娘の顔は少しぐらぐらと揺れた切りだった。ぼろぼろと大きな涙が落ちて来た。彼はもう冷えかゝつて居る娘の手を無意識でつかんだ。そして力をこめてぎゅつと握つた。

「夏子——」 彼は手を握つて見た。然しもう夏子の手は握り返しもしないで重く垂れたきりだった。

「いやもう——もう駄目です」 医者がすかすか様に言つた。仙助は眩暈を感じた。眼の前がぐらりぐらりと覆る様に思へた。そしてじつと頭を垂れて居た。その小さな背中に、斜に春の光が当つて居た。

「お気の毒です。」 医者が言つたもう用もないのに金盥の湯がチーンと音をたてゝ居た。

「十」

長い長い夢が、悲しい夢が今醒めた様に仙助は思つた。修——死んだ娘——夏子——三郎。彼は四人の子供を順々に考へて見た。そして彼の結婚して以来の二十何年を他人の事の様に思ひ出して見た。それから自分の目の前に冷たくなつて居る夏子の額に蔽うた白い布切に目をやつた。枕下にあつた薬瓶はもう隅の方へ押しやつてあつて、その代りに線香が静かに煙を出して居た睡眠不足の彼の目の前を子供達の幻影が通つて居た□彼は自分を呪つた。憫んだ。貧乏からどうしても抜け得ないで□その為に二人の子供迄も失つて了つたとも云へる自分を、子供達に対して済まなく思つた。二十年近くも八百屋商売の貧しさに埋もれて、眞暗な生活に自分の家族を沈めて来た自己に悲しい責任を感じた。夏子はいゝ子だつた。彼にとつてはたつた一人の娘ではあつたし、亡くなつた娘の代りの様にも思へたし、そして此の意気地ない父親にもよく事へて呉れたのだ。

彼は近処の人々の無意味な挨拶や悔みに答へるのが嫌になつて、又、何をしていゝのか解らなくなつて、いつもの様に裏の小庭に出て見た。そして又万年青や隅の小鉢を日当りに出して眺めて居た。鉢の土が黒々と湿気をもつて来た様に思はれた。そして蘭の葉が二三目前よりはずつと元氣よくなつた様に見えた。

彼はそこに踞つて、踏み堅めた黒い土を見つめた。土は、長閑な暖かな光に照されて、十分に水分と弾力とをもつて黒かつた。生気があふれて居た。そして土の中に混つて居る雲母か何かゞ小さく白く輝いて居た。もやもやと陽炎が彼の顔を撫でるのを感じた。彼は背に一杯の光をうけて万年青の鉢についた白い乾いた土を見た。そして家の中の話声にきき耳を立てて居た。

庭の隅に穿き古した下駄がすてであつた。彼はそれを足でついと引くり返して鼻緒を見た。夏子の下駄だつた。それから白い湯気が上つて居た。彼はコツリとそれを蹴つた。くるりとまはつて又鼻緒を見せて起き返つた。仙助はも一度それを蹴つた。大きな吐息が胸につかへて居た。

「お父さん。」 三郎だつた。

「葬式は明日の何時にしませうかつて。」

「寺へ行つて聞いて見なけりやならんな。」

「あゝ向ふできめるんですか。寺へ行つて見ませうか。」

「あゝ。急がなくてもいゝが——。」

彼がさう言つて了つても三郎は何もせずじつと一つ所を見て居た。仙助は何を見て居るのかと思つてふり返つた。夏子の下駄が生きて居るかの様に水蒸気を上げて居た。

「残念でしたなあ——。」

「——。」

大きな空が限り無く青かった。隣の町通りから聞えて来る荷車や機械や等の騒音が暖かい日光に蒸されてぼつと丸くふくらんで響いて来た。

× ×

どうしてもあきらめられないと思つた彼の心にもいつの間にかあきらめが来た。ゆらゆらと静かに燃えて居る蠟燭を見つめ乍ら彼と妻と三郎とは言葉少く坐つて居た。

「でもまあ苦しみが少なくて良かった。」

彼は煙管をいつもの様にくるくると廻し乍らそんなあきらめを言つて了つた。

「たつた四日やそこいらのわづらひで——。」

妻は線香をつけかへて言つた。外には冷たい夜が来て居た。

仙助は又一つふえる墓標を想像して居た。せめてもう五六年は生きさせたかつた。短くとも廿三四位迄は丈夫で居て、人並に嫁入りもさせてやりたかつた。慾を言へば自分の末期を見てもらひ度かつた。然し、まだ此の世の真実の苦しさも汚れをも知らないで安らかに極楽に行つた事だらうとも思はれて、満足とも悲哀ともつかない様な歎息を洩した。

「十一」

「何月生れだつた？」彼は妻に聞いて見た。

「十一月。十二日か廿二日かでした。」

「何年かなあ。」彼は指を折つて見た。

「酉ですよ。」三郎が答へた。

「酉か——。」

彼の歎息を聞いて妻が云つた。

「酉がなぜいけないんです？」

「人相見はなあ——当るも当らんも信用はおけないけど——酉年は貧乏だと。」

妻は答へないで、ちらと夏子の顔の布に目を投げた。淡い光の中に布切は真白に冷たかつた。

夜が更けるにつれて空腹になつて来たので妻は貰ひ物の菓子等を出して来た。

「修、お前もおたべ。」妻は相変らず室の隅でうつらうつらして居る修に言つた。

「さうだ。お前も生きてる中に喰べて置くさなあ。」冗談ともつかずに仙助は歎いた。

「でもまあ——」妻はそつと夏子の顔の布切れを取つて見た。無表情に、然しある犯し難い美しくしさを持って死人の顔は蠟燭の灯影でゆらゆらと揺れた。仙助は冷静にそれを見て居た。押へ切れない程の淋しさが湧いて来た。彼を取巻く暗黒の中を雄々しくも戦つて来たのは唯ひたすらな子供達への愛の為ではなかつたか。そして自分は子供達を信じ、そこに生き甲斐があると思つて居たのではなかつたかだが、彼があれ程に頼りに思つて居た親子と云ふ犯し難い。縁すらも、今はもう何の力でも慰めでもありはしない。彼は遂々その娘との間に何のつながりもなくなつて了つたのだ。仙助は、自分の手の中を離れて、自由に、行手も定めず

に遠く遠く去つて行く娘を見なれない物でも見る様に眺めやつた。

彼は次第に独り切りになつて行く自己を考へて見た。夏子はまだ彼からは刻々遠い所に行きつゝあるのだ。そして一層濃くなつた昏瞑の中に、彼はその妻と三郎と共に残されたのだ。妻が、三郎が、果して仙助に取つて何等かの生き甲斐を与へて呉れ、そして彼の死水をとつて呉れ得るだらうか。夏子と彼等との間にどれだけの違ひが有り得やうか。

彼は今一度娘の顔の布を取つて見た。彼の目をじつと見る娘の黒い瞳はもうない。彼に言葉をかけて唇ももうない。そして、その父親に対して余りにも冷淡である厳肅な或物が全く彼女を取り巻いて居るのだ。彼は全然失はれた娘との縁をはつきりと感じた。そして今一度以前の關係を取りもどしたかつた。仙助はそつと乱れた髪を撫で、見た。鼻孔にしみ出て居るうち赤い物をそつと拭つてやつた。然し彼は夏子との距離は次第に遠くはなれるのみだつた。より明らかに娘の死を認むる以外の何物でもなかつた。「十万億土」と南海寺の僧が言つたのを思ひ出した。「去る長日日に疎し」と本町の角の醬油屋の旦那が彼に言つたのを思ひ出した。前に死んだ娘等は今も追ひつかない程遠くへ行つて了つたのを彼は明瞭りと感じた。

彼は夏子の顔にそつと布切を蔽ふた。どんと遠くへ突き退けられる様に思つた。自分が今迄尽して来た娘への努力等は何の力もないもので、死と云ふ大きな不可抗力によつてがつきりと間を隔てられた気がした。

「お金を少し引き出して置かないと——三郎昨日朝の中に局へ行つてお呉れ。」妻がつぶやく様に言つた。

「あゝそれから——向ふへ行くのは何時にします？」妻が言つた。

「お骨か？」

「えゝ矢張り本家の墓地でせう。」

「北海道も久しぶりぢなあ。十五六年になるからなあ。」

「明御日直に行けば——向ふに二日も居ればいゝでせう。」

彼は、津軽の海をへだてゝ向ふの故郷を思ひ起した。函館から少し奥へはいつた湯の川の町を思ひ起した。ゆるやかな斜面に日光を一ぱいに受けたあの町の美しさを懐しんだ。遠く函館湾がかすんで見え、そして野生の鈴蘭が甘い香りを漂はして居る故郷の町を思ひ出した。そしてその寺にある両親の墓、妹の墓、亡くなつた娘の墓を考へた。そしてあの町に静かに雪に埋もれ温泉の湯気にかくれて住んで居る兄一家を思つて見た。

「十二」

夜の冷氣から逃れた様に此の朝は暖かだつた。力強い日光が小川の水にも畠にも、畠の向ふの岡にも輝いて居た。夏子が寝付いた日に仙助が車を曳いて通つた時と比べれば驚く程春らしい朝が来て居た。川岸にもう雑草の芽が出て居た。畠からは陽炎がむくむくと上つて居

た。

仙助はその小さな淋しい身体に首巻きをまきつけて、手を懐に入れてコツコツと弾力のあ
る道を歩いた。三郎が小さな甕をもつてついて行つた。

「あゝ咲きましたよお父さん。」

「え？どれ、あゝ此処のは毎年早い様だな。」

「でも紅梅は実が駄目なんでせう？」

「八重は成らないもんだ。」

彼等は生垣から道に出て居る梅の一枝が可也咲いて居るのを立ち停つて眺めた。冷た過ぎ
る梅の香りが侘しく彼等の胸を打つた。

彼等はたつた二人きりで火葬場へ骨上げに行つた。大きな松の真暗に茂つた森を背中に負
うた火葬場は、此の輝かしい朝ですらもある冷たさを感じるのだった。年取つた隠亡が出て
来て、無雑作に鉄の扉を開けて白くなつてぼろぼろに砕けた夏子の骨を出して見せた。三郎
は思ひ切つた様に骨壺の蓋を取つた。

仙助は、隠亡から渡された長い箸をもつて呆然と立つて居た。此の白い、力のない骨を丁
寧に拾つて此の甕に納めるのが、仙助が父親として尽してやる夏子への最後の愛であるのだ。
もう今日から以後彼は全然その娘とはかけ離れた存在であつて、その二人の間には以前に関
係があつたと云ふ以外にはもう何のかゝはりも無くなるのだ。

「これです、喉仏です。」と隠亡が云つた。彼は長い箸でそつとそれをつまんで甕の中
に入れた。日光が、白い灰の上に暖かさうに照つて居た。

「よく燃えるもんだなあ。」誰に云ふともなく三郎が云つた。

「えゝ珍らしくよく焼けて居ます此の方は肥つておいでだつたでせう？」

「いやさうでもないが——」仙助は膝関節の円い骨を見て居た。

「お若いんでせう？」

「十七だからなあ。」

「ほう、それあ残念でしたなあ。」

さう言はれると急に、仙助は身のまはりが真暗になる様に思つた。逢ふ人毎に云ふ慰め
言葉の数々よりも、此の年老いた未知の隠亡が彼に云ふ言葉が彼には胸を刺される思ひがあ
つた。彼は丁寧の一つ一つ拾つた。その小さい背中に、いたいたしくも暖かい日が光つて居
た。壺が一ぱいになつたので彼は止めやうとした。然しそれ切りで彼と娘との縁が永久に絶
たれる様に思はれて、今一度かゞんで一つの骨を拾つた。

「えゝそれでいゝでせう。」隠亡が言つた。

二人は残りの骨を隠亡に心ならずも委せて火葬場を出た。何もかもがすんで了つたのを二

人(一)文字潰れて起(せす)■(二)文字潰れて起(せす)じて居た。慰め得ない侘しさ■(三)文字潰れて起(せす)■(四)文字潰れて起(せす)たに遂々終つたと云ふぐつたりとした落着きがあつ

た。春だつた。火葬場を取りかこむ畠にも田にも小川にも、若々しい弾力に充ちた生気があ

つた。風も暖かい。空も晴れ切つて居る。悩みも苦しみも悲しみも、すべてを乗り越えて若さに充ちた春が来たのだ。大地の底から湧いて来て、緑の芽と紫の花とを地上に作る時が来たのだ。此のひろびろとした耕地に暖かさと恵みとの溢れる様な春が動いて居た。そしてその耕地の中をうねつて居る細い道を、仙助と四郎とはその小さな身体を日光に輝かせ乍ら、夏子の骨を抱いて帰つて行つた。

「十三」

「もうたんぼぼが咲くよ。」仙助は三郎を顧みて言つた。

彼等が帰りつくと妻は直に骨壺の蓋を取つて見た。

「お、お、お前も遂々——。」妻は前掛の端をくはえた唇をふるふると震はせて泣いた。

「よく燃えたさうだ。」云つてはならない言葉を仙助は遂々云つて了つた。そしてその言葉によつて彼自身が苦しめられるのだつた。

「修、夏子だよ、これが——。」妻は骨壺を修の前へ出して見せた。仙助はその様を見るにたへなかつた。これ以上の幽鬱^{マイ}を味はひこれ以上の暗黒の中に入る事は彼には忍び得ない事だつた。

仙助は支度をして家を出た。青森の連絡船の出る所迄は三里ばかりも歩かなければならぬ。そして函館へつくのは夕方になる。それから湯の川の兄の家へついて、明日は向ふの寺で埋葬しなければならぬ。先に亡くなつた娘の墓の隣りに夏子の墓標を建てねばならぬ。三郎が姉の骨を持つて父を船着場迄見送りに行つた。

何もかもが終つた。二人は別々にそれを感じて居た。歎きや悲しみや淋しさや、さうしたものが次第に彼等から遠ざかつて行くのを感じた。そして静かな静かな平和がやつて来る様に思はれた。もう決して夏子が重態だつた時の様な混雑も昏瞑も来る事はないのだ。そして、何事も起らない、唯其の日其の日を同じ生活を繰り返して行く慍念な静けさのみが長い長い未来の余韻である様に思はれた。さうして、夏子の死に依つて負うた傷は次第に苦しさを減じ、癒やされて行つた。逝つた者との縁がそれだけ遠くなつたのだ。然しそれは許さるべきものであるのかも知れない。と云ふのは、夏子にはもう今後何の変化も有りはしないし、残つた者の上にも、亦長い平和が来るであらうからには、彼等の間には何の関りも無くてもいいのである。

彼等が波止場についたのは正午近い頃だつた。三郎は棧橋で父の船を見送つて帰つて行つた。そして仙助はたったひとり、甲板にしよんぼりと娘の骨を抱いて立つた春の真昼である。波は穏かにうねつて居る。そして波のうねりに反射する日は船のまはりから、離れて来た本土の岸迄を宮殿の床の様に輝かせた。仙助はいつ迄も甲板に立つて、離れ行く本土と、近づいて来る北海道と、そして限り無く青い海原の輝きを眺めて居た。長い間押へられて居た力が彼の小さな身体の中で伸び上つて来る様だつた。重苦しい家庭に全く埋め尽されて居た彼の覇気が、彼の持つ若さの名残りが、麗かな春の真昼の光の中に強く蘇つて来るのを感じた。

彼は歌ひ度くなつた。思ふ様に両手を伸して歌ひ度くなつた。さう思つて見れば何と云ふ長い間彼は歌を忘れて居た事か。歌とは何だ？それは生活のよろこびの象徴である。彼はそんなに長い間生きて居る事を楽しいと思ひ得なかつたのだ。今彼は北海道へ渡る船の甲板に立つて、死んだ娘の骨を抱いて生活のよろこびを歌ひ度くなつたのだ。彼の行かうとして居る北海道には、故郷の寺には、生れて直に亡くなつた娘の墓がある。彼の家庭には、世の暗黒の中に端然として坐つて居る修が居る。そして彼の苦勞を求めて居る。貧しい生計が立てられて居る。そして彼は一昨日娘を失つた。その娘の骨を彼は今抱いて立つて居る。然しそれ等が何だ。自分で自分の周囲を暗黒だと思ひ、その暗黒の中にいつ迄も身を沈めて居る必要がどこにあらう。明るみを求めるがいゝではないか。総ての周囲の軛を脱して雄々しく強く立ち上るがいゝではないか。

「十四」

もうこれ以上自ら苦しみを求めて身を亡す必要がどこに有らう。それよりはむしろ彼は歌ひ度かつた。その小さな身体を船の欄に寄せて、彼の血潮の中に残つて居る若さの最後の一滴に火を注いで、過去の暗黒の総てを忘れつくして未来の幸福の為に歌ひ度かつた。春の真昼である。近づいて来る北海道にも緑の若芽が出ようとして居る。遠ざかつて来た本土にも緑の芽が萌えて来た。海も緑である。そして万物はゆつたりと此の春に於ける営みを享樂しつゝとめて居るのだ。万物が起き上がる時なんだ。暗黒も悲哀も、苦痛も絶望もさうした総ての障害を乗り越えて雄々しくも立ち上がるべき春が来たのだ。そして彼も亦、二十年に亘る長い暗黒の生活から開放されて若き日の歌を思ひ出さうとするのだ。歌の文句は覚えて居た。然しそれを口に出して歌ふ元気が、どうしても出て来なかつた。

仙助は甲板の船具に腰を下して次第に近づいて見えて来る函館の半島から立待崎あたり
の長閑な景色を眺めた。青い海は、次第に傾いて行く午後の日光に輝いて見えた。津軽から
下北半島の大間崎のあたりが次第に霞んで美しく見えた。一切が大きな質朴な絵の様だつ
た。

彼は声を出して大きく欠伸をした。そして「春の海日ねもすのたりたり哉か——。」と、

つぶやいて、眩い波の輝きに顔をしかめ乍ら何と云ふ訳もなしに微笑んだそれから腰から煙
管を抜き出していつもする様にくるくるといじくつて居た。

× ×

次の朝、夏子は湯川の町の寺に埋葬された。曇つた日だつた。仙助は兄達と一緒に、うそ
寒いがらんとした寺の本堂に坐つて居た。読み上げる経の閑寂な哀昔アキや頼り無げにうすれて
行く鐘の反響に仙助は吾にもなく身震ひを覺えた今更イマらしく自分が娘を失つた身である事
を考へて見た。妙にそぐはない悲しみを感じた。それは強制された様な感情だつた。然し又
他の一面では、死んだ娘に対してすらも尚消えないで居る父親としての愛着を感じた。彼は

身体がたまらなくだるかった。或は子に対する愛情がだるい様に感じられるのかも分らなかつた。彼は腕に注射される夏子を思つた。ふるつと痙攣する夏子の髪の毛の乱れた頭を思ひ出した。熱の為に充血した瞳が何かしら彼に訴へるのを見た。

「苦しいかい？」と彼は言つた。

「もう少しだからな、我慢するんだよ。な、静かに寝ておいで、二三日もたつたら起きられるからな——。」

すると夏子は顔をしかめて、唇を小さく痙攣させて歯をくひしばつた。

「どうしたんだどうしたんだ、え？苦しいのかい？え？我慢するんだよ、な——。」

夏子は眼を開いて、心配に惑つて居る父の顔を目の前に見た。そして、しほらしくも父を安心させようとして、苦しい微笑をして見せた。然しそのか弱い、白山茶花の様な微笑みは父親の心を愛情で惑乱させた丈だけだつた。彼は突然娘を胸に抱き締めた。

「夏子！」彼は夢の様に叫んだ。

「夏子！しつかりするんだよ、な、しつかり——。」

すると娘は彼の手の中でぐつたりと首を垂れて居た。その真青な頬から一抹の紅味がぐんぐんうすれて行つた。

「十五」

「夏子、夏子、おい！」彼は娘の頬に自分の頬をびつたりと押しあて、強くゆすぶつた。すると、夏子は彼の肩を強く掴んで、と切れと切れな声で「お父さん」と言つた。

夏子は急に強く彼の肩をゆすつた。彼はふと吾に返つた。兄が彼の肩をゆすり乍ら言つて居た。

「おい、お経がすんだから焼香しておいで。」

彼は眼を大きく開いた。然し何も見えなかつた。彼は無理に立ち上つた。ふらふらと倒れさうだつた。偶然に手にさわつた太い柱につかまつて、仙助は大きな荒い息を吐いた。

葬式がすんでから彼は寺の後の岡に上つて見た。そこからは故郷の町が一目に見えた。雲の流れるに従つて照つたり曇つたりする日だつた。遠くかすんで見える津軽の海はどうかすると刃物の様にきらりと光る事があつた。松倉川の流れがゆつたりと見られた。そのあたりに集まつた人家から外れて次第に海に近づいて行くにつれて川は鈍い光を反射して居た。川口のあたりから、安森、大森汀、白浜から、ずつと半島の端の立待崎あたり迄が灰色にかすんで見えると云えば見える位に望まれた。

此のあたりはもう鈴蘭が生える頃だつた。あの厚ぼつたい濃緑色の葉と、しなやかな茎と、小さな花の群と、そして甘い香り、それは仙助にとつては懐しい故郷の思ひ出であつた。彼はそのあたりをぶらぶらと歩いて見た。此の前の娘の葬式に来た時からいくらも變つては居なかつた。

彼は完全に独りきりだつた。最早亡くなつた娘達に対してあれ程の情熱を感じる機会もあるまいし又彼も敢てその機を望みもしなかつた。唯彼は一個の彼であるに過ぎなかつた。誰の子でもなく誰の親でもない彼だつた。たつた一人で此の世に生きて居る彼だつた。修がど

んなに妙な状態になつて居やうと、どんなに彼の家庭について他人がとやかく云はうと、そんな事はどうでもよかつた。そんな事に係る事は何の必要もないのだつた。妻がどうならうと修がどうならうと、そんな事はどうでもよかつた。そんな事は小さな事に過ぎない。それに係りあつて居たとて何にもならないと彼は考へて居た。それよりは彼は、故郷の山に生えた鈴蘭を愛したり、自分の見すばらしい庭にある万年青や蘭等を日向に出してじつと見とれて居たかつた。だが、さう考へ乍ら彼は淋しかつた。彼が頼りに思ふものは何一つとして有りはしないのだ。夏子すらも彼より先に死んで了つたではないか。彼は三郎丈けは立派に彼の老後を見て呉れる様に思つた。然し夏子と三郎とどれ丈けの違ひが有らう。津軽の海は薄日の下にかすかに光つて居るではないか。彼は煙草入れを腰から取り出す丈けの元氣も無かつた。夏子の幻影に苦んでから、殊に頭痛がする様で氣持すらも悪かつた。

彼は完全にひとりだつた。そしてその独りを享樂し度い様にさへ思つた。妻子が苦しんで居る家へ歸つて行つたとてそれが何にならう。暗黒を求めて家庭に歸る必要がどこにあらう。彼は小石をひろつて見た。それから木立の間をすかして、下に見える夏子の白木の墓標を見た。その隣に朽ちて見る影もない先に死んだ娘の墓標を見た。彼は小石を見た。それから遠くへ目をやつた。海がかすんで居た。彼は足下に目を落した。

「十六」

然し彼はやはり元の家族に歸つて行つた。さうするより外道は無かつた。あんなに大きな騒動だつた夏子の死が、北海道での葬式でどうにか形がついて了ふと、仙助にはもう何をする力も無かつた。青森の波止場から三里の道を歩いて歸る丈けでも今の彼には大きな仕事だつた。それも、行きの船の中では彼はあんなにも元氣だつたが、帰りにはとてもそんな元氣は無かつた。葬式の日以来妙に頭は痛んだし風邪氣らしい氣もして居た。

彼の町へはいつてからも、仙助は、何故か此の町を始めて見る様な氣がした。そして、裏通りの彼の家の前に立つて見ると、彼の家はあまりに暗かつた。まだ日は高いのだが、碌々日光も射し込まないので、急に土間に入った彼は一寸目先が見えなかつた。

「あゝ、早う御座ぬましたなあ。」三郎が障子を開けて出て来た。妻が居なかつた。

「お母さんはどこへ行つた？」

「買物です。もう御歸りでせう。」

仙助は妙にがらんとした室の中を立つたまま見廻した。なぜ夏子が居ないんだらうと思つた。彼の心は無意識の中に、歸つたら夏子にも逢へると思つて居たのだ。

彼は裏の井戸で手足を洗はうとした。修が裏へ出る障子の所へ坐つて居た。真黒い塊の様な修だつた。

「おい、おどき！」思はずも鋭かつた。修はうつらうつらして居た。

「どけつたら！」彼の失望した小さな強い手は自棄な一撃を喰はした。彼は心臓が激しく轟くのを感じた。目がまはる様だつた。も一度足を上げて蹴つておいて彼は裏庭へ出て行つた。赤々と、夕方の日が照つて居た。家の中とは何と云ふ違つた世界なのか。彼は空地に生けてある牛蒡や青菜等の生々した様子を見た。それから井戸の脇の小さな梅が五六輪咲いて

居るのを見た。

あれは何だ、あの船の中の事は――。彼はそれを思つて居た。帰つて見れば矢張り元の家だつた。元の真暗な生活だつた。そして今度の暗さは、夏子の去つた後の一層濃い闇なのであつた。むしろ帰つて来なければよかつたのだ。徒に腹立たしい氣になつたり、苦しんだり悲しんだりし乍ら、こんな無価値な家庭の犠牲になつて居る必要がどこにあらう。然し彼は又考へた。結局是が与へられた運命なんだ。泣き乍らもがき乍ら逃れられない此の昏暝、是が与へられた運命なんだ――。

彼は万年青と蘭とを日向に出してその前に踞つた。青く、元気に、それ等はやはりそれ等の運命の一鎖を甘受しつゝあつた。今は春である。彼等が根を張り葉を繁らせ花を開くべき春であつた。そして秋が来れば彼等はすなほに秋の運命を甘受するのだ。

いゝんだ。此のまゝでいゝんだ彼はさう考へた。此のまゝでいゝではないか。吾々に与へられた運命を甘んじて受けるがいゝんだ。負ふべき物は潔く負はねばならないんだ。吾々にはいつかは又立ち上るべき時も来るだらう。それ迄はゆつくりと待つがいゝ。たとひ永久に来ないとしても、それをどうする事も出来はしない。そして、それが運命と云ふものなんだ――。

――一九二七、二、八――